



# 即刻開悟の鍵 3

The Supreme Master Ching Hai

(スプリームマスター チンハイ)

# 即刻開悟の鍵 3

スプリームマスター チンハイ



目次

|                           |     |
|---------------------------|-----|
| スプリームマスター チンハイのプロフィール 愛の道 | 5   |
| 1 陰陽が平均してこそ仏陀である          | 11  |
| 2 臨終の状況                   | 73  |
| 3 黒白神通力                   | 125 |
| 4 蛇の虫                     | 187 |
| 5 魔の仕事を確認する               | 231 |

6

「道」を得た真のマスターの磁場の吸引力は無限である

265

印心―観音法門

.....

305

出版物の紹介

.....

309

私たちへの連絡方法

.....

315

## スプリームマスター チンハイのプロフィール…愛の道

スプリームマスター チンハイは、世界的に有名な靈性の指導者であり、芸術家、慈善家であります。彼女の愛の心はあらゆる文化と人種の壁を越えて、世界中の隅々まで届いています。マスターはオウラック（ベトナム）の中部に生まれ、青年期にはヨーロッパに留学し、そこで赤十字に勤務しました。その間、彼女は世界の至る所に、苦難に満ちていることを目の当たりにしました。それで苦難からの救済方法を探し出す決意をし、これが人生の目標となりました。当時スプリームマスター チンハイはドイツ人の医師と結婚していて、幸福な家庭生活を送っていました。別れることは彼らにとって極めて困難な選択でしたが、彼女は最後には、夫の祝福のもと夢を求めて旅立ちました。スプリームマスター チンハイは求道の旅を始め、靈性の開悟を追い求め、最後にヒマラヤで悟りを開いたマスターから、内面の光と音を観るメディテーション法門を伝授されました。これは後に彼女が伝授している「観音法門」です。彼女はある期間、修行に精進し、完全に悟りを開きました。

一九八〇年代に、スプリームマスター チンハイ インターナショナルアソシエーションが発

足されました。そのアソシエーションの主旨はマスターの教理です。そして人々の真摯な要望により、スプリームマスター チンハイは「観音法門」を伝授し、人々に自分の内面の偉大な本質を見付けだすよう、励ましてきました。後にアメリカ、ヨーロッパ、アジア、オーストラリア、アフリカの五大洲と国連の招聘に応じ、現地に赴き講演をしました。

スプリームマスター チンハイは慈悲にあふれ、貧困弱者に力を尽くして援助しています。彼女の慈善活動は世界のあらゆる境界を越え、世界各地の貧しい人々や、苦しい状況にある老人、受刑者、心身障害者、ホームレス、アメリカの退役軍人たちにまで及んでいます。地球温暖化により、さまざまな危機を誘発している現在、スプリームマスター チンハイは数百万ドルを寄贈して、人道的援助を行うと同時に、インターナショナルアソシエーションのメンバーが世界各地に赴き、被災者を助けるよう指示し、数えきれない人々を助けてきました。その他、スプリームマスター チンハイの愛は、地球上の貴重な友である動物や生態環境にまで及んでいます。彼女の慈悲深い愛は、世界の多くの人々を感動させ、人々に無私の愛の手本を示しました。マスターはまた、絵画、ランプのデザイン、ファッションデザイン、ジュエリーデザインなどの芸術創作活動を通して得た収益を、助けを必要とする神の子たちのために使っています。

近年、スプリームマスター チンハイは三部作を出版しました。「バード イン マイライフ」「ドッグ イン マイライフ」「気高い野生動物」この三部作はいずれも国際的にベストセラーに

なり、さまざまな言語に翻訳されました。これらの本はマスターが霊的なコミュニケーションと洞察力をもって、人類の友である動物たちの情感と考えを記録したもので、動物たちの高貴な精神と無私の愛を表したものです。

また道徳を広め、人々に見習うよう励ますために、スプリームマスター チンハイは二〇〇六年三月に「輝く世界の指導者賞」を設け、後にまた、「輝く世界の英雄賞」「輝く世界の愛情賞」「輝く世界の誠実賞」「輝く世界の発明家賞」などを設けました。これらの賞の受賞者は個人もいれば、国家や団体も含まれています。彼らは世界に手本を示し、平和と美しい地球の持続的発展のために大きな貢献をしました。たとえば、スロバニア共和国の第二代大統領ヤネス・ドルノウシエク博士、アメリカの第四五代副大統領アル・ゴア（国連気候変動に関する政府間パネルと共同で二〇〇七年ノーベル平和賞を受賞）、国連気候変動に関する政府間パネル議長、インドのエネルギー研究所の所長のラージェンドラ・パチャウリー博士（二〇一〇年に

UN-HABITAT 都市スピーチ賞を受賞）、NASAゴダード宇宙科学研究所主任研究員ジェームス・ハンセン博士（二〇〇九年にロスビー研究賞を受賞）、イギリスの有名な霊長類学者ジェーン・グドール博士です。

スプリームマスター チンハイも「輝く世界の英雄賞」「輝く世界の知性賞」を人類のよき友である動物たちに授与しました。もって動物たちが危険を顧みず、他の命を助けだした無私で



健全な行動を称え、動物たちの愛に満ちた勇氣と聡明さと思いやりの精神を称えました。

スプリームマスター チンハイは靈的な面だけでなく、物質面でも世界に多大な貢献をしています。彼女自身はいかなる報いも求めていませんが、世界各国の政府や非営利団体は彼女の献身的な奉仕を称えて多くの賞を授与しました。たとえば、二〇〇六年グシ平和賞、二〇〇六年第二七回テリー賞銀賞、二〇〇二年ロサンゼルス・ミュージック・ウィーク表彰状、一九九四年世界精神指導者賞、一九九四年世界市民人道主義者賞などです。この他にアメリカ政府の官僚から、二月二二日と一〇月二五日をチンハイデーと定められました。今でも彼女はこの世界を助けるために全力を尽くしています。数多くの世界のリーダーたちと民衆は、彼女に対し感謝しています。

スプリームマスター チンハイは環境保全の先駆者としても有名です。彼女は智慧と勇氣をもって、気候温暖化問題に対し、警告を發しました。実際、彼女は二十数年前から、すでに環境保全を呼びかけています。彼女が「もう一つの生き方」、「SOS地球温暖化を阻止しよう」という活動を地球規模で展開し、地球温暖化阻止国際会議にも出席し、ゲストとして、基調報告を行い、人々に現在世界的に頻繁に起きている、災害の根本的な原因と解決の道を示しました。それはつまり、慈悲深い、ビーガンライフスタイルです。現在、人々によく知られている「ベジタリアン」になって、平和な世界を創る」これはスプリームマスター チンハイが發案したスロ

ーガンです。

食生活が気候に大きな影響をもたらしていることから、人々に慈悲に満ちた、持続可能なライフスタイルを提供するため、ビーガンレストラン「リビングハット」はスプリームマスターチンハイの呼びかけに応じて大きく発展しています。これらのレストランは大人気を集め、世界各地にチェーン店があり、安くて美味しく、しかも栄養バランスのとれた、様々なビーガン料理を提供しています。人々に健康的な食生活を勧め、最も有効な温暖化阻止の道を示しています。それにより、この地球と住んでいる人々、そして生きとし生けるもの、私たちの子孫を保護し、地球温暖化よってもたらされる、絶滅的な危機を免れるよう最善を尽くしています。

この時代において、スプリームマスターチンハイは献身的に奉仕し、苦勞をいとわず、世界の人々を助け、大事な地球のために、光り輝く未来を切り開いています。

## メッセージ

靈性の師であり、芸術作家でもあるスプリームマスター チンハイは、内面の美を表現することとを、こよなく愛しています。そういうわけで、彼女はベトナムを「オウラック」、台湾を「フオルモサ」と呼んでいるのです。オウラックはベトナムの古称で「幸福」を意味し、また、フオルモサの名はその島と人々の美をより完全に表しています。マスターはこれらの名称を使うことで、その土地と住人の靈性を上昇させ、福報をもたらすと感じているのです。

## ビーガンのライフスタイル

スプリームマスター チンハイは講義の中で菜食について言及しています。二〇一〇年からは「ビーガン食生活」を人類の理想的なライフスタイルとして力強く、熱心に、強く推進していきます。これも博愛の精神によるもので、ビーガン生活は動物たちが受けている大きな苦しみをなくし、人々が病気による苦しみから免れるためでもあります。また二〇一〇年四月十四日からビーガン食生活を印心の条件の一つに定めています。（ビーガンとは全く動物性成分も含まれていない食べ物のことを指します。つまり乳製品、魚、鶏と卵（受精卵、未受精卵を含む）などです）



## 陰陽が平均していてこそ仏陀である

一九八七年十月一日 フォルモサ・台北無量光座禪センターにおいて

私はみなさんに観音法門の修行をやめたほうがいいと言いつけたいところなんです。なぜなら、観音法門を修行すると、人が私たちを怒っても、私たちはその人を怒りはしないからです。これでは不公平になるではありませんか。(笑い) たとえ人が私たちのお金を取ったとしても、私たちは喜んでそれを相手にあげます。なぜなら、私たちにとってお金はあってもなくても同じだからです。意味がわかりますか。修行すると、私たちはおそらく夫や妻に対して何とも感じなくなるでしょうし、友人に対しても同様です。食事さえ味を感じなくなるし、何かを飲んでも味を感じなくなります。これでは修行しても何の良いことがあるのでしょうか。

ですから、私は観音法門を修行しないほうがいいと思います。なぜなら、修行すると名利は気にならないし、金儲けは足りればいいのであって、心は多くを貪らず、多くても少なくとも構わないのです。以前はたくさんのお金が欲しかったのですが、今はどうでもよいのです。あ

れば使いますが、なくても構いません。修行してからは、みんなが肉を食べても、私たちは菜食をするので、他人に褒だと思われてしまいます。もしみんなが菜食したら、肉屋さんはみな失業してしまうではありませんか。そうなったら私たちに「慈悲心」がないということになるのではありませんか。(笑い)

みなさんは観音法門を修行すると良いと言っていますが、私は良くないと思います。修行すると、おそらく私のようになってしまって、人に質問されても答えられないかもしれません。先ほど、誰かが私に「仏教とは何か知っていますか」と聞きましたが、私は「わかりません」と答えました。するとまた「観音法門とは何ですか」と聞くのです。私は何も答えられませんでした。ある時、一人のお坊さんが私に下座に座るように言いました。彼は私に「あなたが言えないのであれば、禪師ではないということだから、下座に座ってもらいます」と言うのです。私も下座に移ろうと思いましたが、なぜなら、彼が言っていることは正しいからです。しかし、私は本当に大変疲れていましたので、下座に移らずそのまま座って動きませんでした。

観音法門を修行すると、のろまな人のようになってしまって、みんなに何を言われようと構わなくなりません。弁論することもできないし、争いたくもありません。これでは何の良いところがあるのでしょうか。観音法門をまだ修行していない時は「禅とは何か。菩提を得たらどんな状況なのか。仏陀になったら、または菩薩になったらどんなふうなのか」などと議論した

りしましたが、観音法門を修行してからはしだいに話すことが面倒になり、しかも何も話せなくなるのです。なぜなら、真実の状況は凡人の言葉では表現しようがなく、話せば話すほど真理から遠ざかるように感じるからです。以上の理由から私は観音法門を修行することは良くないと言っています。

以前、私はとてもよく食べました。しかし、今はしだいに少食になり、何も食べたくないのです。これでは観音法門を修行して何がよいと言っているのでしょうか。この娑婆世界ではみんなが食べて飲んで遊んで楽しんでいます。違いますか。しかし、修行した後はたとえ遊びに行っても楽しく感じません。遊びが嫌いなわけではなく、遊んでもいいのですが、以前のように遊びを追い求めることはありません。おいしい物を食べる時はおいしいと言いますが、以前のようにむさぼって食べたりはしません。

修行すればするほど一般の人と違うようになるようです。私を見ればわかるように、いつも何か話したいと思えますが何も話せません。たとえ話したとしても、いつも人と相反することばかりです。これは観音法門を修行したせいです。ですから、みなさんは「観音法門を修行したらどうなりますか」と聞かないでください。何も良いことはありません。

他の法門を修行すると神通力を得られます。例えば、ちよつとしたパワーで病気を治療するとか、仏陀を拝んだり、山のお寺を参拝したり、困った時には仏陀を思い、自分を慰めること

もありません。また、逆境に置かれたり、病気になったりした時には、観音菩薩に助けを求めたりしました。しかし、観音法門を修行すると、誰かに助けてもらいたいと思わなくなりです。また、助けてもらえる仏陀もいなくなってしまいます。いわゆる今まで助けてくれると思っていた仏陀はいなくなったのです。観音法門を修行するとあらゆる名利や世界、貪・瞋・痴（貪り・怒り・愚かさ）はみななくなってしまう。甚だしい場合は仏陀もなくなってしまう。これでは修行して何が良いと言うのでしょうか。これで万一孤独に陥ったらどうしましょう。観音菩薩も仏陀ありません。どう生きたらいいのでしょうか。夫や妻も私たちにとっては何の未練もなくなくなり、名利も魅力を失い、食べる物も選んだりしません。以前はあれこれおいしい物を選んだりしましたが、今は何を食べても構わないので、有る物は何でも食べます。以前は車も流行の車に乗り、飛行機も一流の飛行機を選んで乗りましたが、今はこれらの物は気にしなくなりました。

観音法門を修行すればするほど、以前の習慣がなくなり、たくさん修行するとみななくなってしまう。そして「空」さえもなくなってしまう。観音法門を修行する前はみんなと「空」の道理について議論したり、「禪」を表すマルを描いては、自分つまり「私」は禪の修行者であることを表したりしました。あの埔里（プーリ）の「大修行者」のように「あなたは何を修行していますか」と私が聞いたら、一言も言わずにただマルを描くのです。

観音法門を修行するとこのようなことができません。いわゆる「空」でさえ修行することができます。そして「禪」を表す最高の表記すら描くことができます。これでは修行しても何がいいと言うのでしょうか。(一人の弟子を指して)帰って「禪」を修行すべきです。そうすればマルが描けるようになりますよ。私について修行しても何もありません。すべてどぶに捨ててしまつて使えませし、またどう使つたらいいのかもわかりません。意味がわかりますか。ですから、修行を積み積むほど、頭が悪くなります。最高の禪でさえどう表したらよいかわからないからです。例えば、誰かが私のところに来て「禪の修行をするとすぐに仏陀になれる」と言つても私は相手にしません。なぜなら、私には仏陀すらないからです。意味がわかりますか。

ですから、私はみなさんに観音法門の修行をしない方がいいと警告したいのです。家に帰つて仏陀を拜んでください。そうすれば困つた時だけ仏陀と対話し、仏陀に助けを求め、たくさんの事を祈ることができます。そして病気の時にも観音菩薩の大慈悲の水を賜り、病気が早く治りますようにと祈ることができます。また観音菩薩の前で「もし私の病気が治つたら、願わくは、私は……」というふうに願をかけられます。しかし、観音法門を修行すると、そういうことはみななくなります。観音菩薩もいません。いかなる世俗の智慧もありません。それではどうすればいいのでしょうか。



ですから、先ほどみなさんが私に「観音法門とは何ですか」と質問した時、私は本当に答えられませんでした。みなさんをだますつもりはありません。信じてもらえますか。時には少し賢くなって答えることもあります。普段は答えられません。どう答えたらいいのかわからないのです。講義に招かれても、いつも当日何を話したらいいのかわかりません。他の「智慧」のある僧侶たちは講義の仕方をよく知っています。初めはこの事を言って、次にはあの事を言うてというふうに、事前に要綱を作成し用意しておくのです。そして一番目の話が終ったら第二番、第三番、第四番……と話していきます。

しかし、私は非常に不器用でこのようなことさえもできません。やろうとしてもやり方がわからないのです。少しでも智慧のある僧侶は一部の経典を初めから終わりまで講義できます。彼らにはたくさん資料があつて参考にできるので。しかし、私にはそのようなこともできません。もし、私に経典の話をして欲しいと言うのであれば、私は居眠りをしてしまうかもしれません。そういう場合は仏陀ばかりでなく、私までもいなくなってしまうでしょう。

ドイツにいた頃、私も時々経典を読みました。なぜなら、そのお寺ではもつぱら経典を読んでいたからです。ですから、私も毎日みんなと一緒にお経を読まなければなりませんでした。お経を読むのも悪くありません。とても響きがいいですから。しかし、ちよつとつかりする意識はそこから離れてしまいます。そういう時は誰もお経を読んでいません。意味がわかり

ますか。

読経はとても疲れる仕事です。注意力を集中して初めて読めるのです。さもないと、主人がいないのに誰が読むというのでしょうか。私は読経している人にとっても感心します。修行すればするほど、彼らに感心します。普段私は読経は良くないとか、読経は役に立たない、仏陀を拝むのも役立たないと言っています。今は違うことを言っているわけです。みなさん、面倒でしょうが今日の話を書き留めて一冊の本にまとめてください。これはとても大事なことです。

読経はとても良いことです。なぜなら必ず注意力を集中しなければならぬからです。「ハイレベル」であつて初めて読経できるのです。私は今「レベル」がないので、読経することもできません。あんなにたくさんの経典を見ることができません。なぜなら経典を見ているとみんなとつくにわかっているような感じがして、退屈してしまうからです。みなさんが何かに退屈した場合、眠くなりませんか。例えば、私は今、講義をしています。もし聞いてもわからない人がいたら、退屈で居眠りをするでしょう。わかりますか。

一部の私の弟子たちは、私の講義を聞いて退屈になった場合、座禅をします。しばらく往生して西方に行き、阿弥陀仏に会って、しばらくしてまた戻って来るのです。阿弥陀仏に会えるということはまあ結構なレベルであると言つてよいでしょう。ただ多くの修行者たちは仏陀や菩薩に会ったら、すぐに法を広めに出かけます。もし仏陀に会つても、謙虚な心がなければす

ぐに自分は偉いと思うのです。話によれば、例えば一部の人たちは菩薩に一回会っただけで、観音菩薩がある物や法器を自分に授けるのを見て、自分は大僧侶である思い込むのです。

実際、仏陀に一回や二回会ったことは大したことではありません。私のつたない観点から言えば、それは本当に大したことではありません。修行していい人でも観音菩薩を見ることがあります。一部の人たちは修行したことも、菜食したことも、仏陀を拝んだこともないし、宗教のことも何も知りませんが、印心の時すぐに仏陀や菩薩を見ることができません。

仏陀や菩薩が見えたことは初歩の体験にすぎません。大したことではありません。私はみんなに、たとえ仏陀に会って、物を授けてくれたとしても受け取らないようにと教えています。例えば、仏陀や菩薩、あるいは誰かが現れて私たちに何かを授けたとしても、私たちは受け取ってはいけません。万一私たちに授記（じゅき：修行後、将来達するレベルを約束すること）しようとしても、受け取ってはいけません。たとえそれが観音様であっても例外ではありません。それを受け取るとそこにとどまり、相手の奴隷となつて相手にだけ仕えることになつて、自分は観音様にはなれません。

一部の人はある程度修行を積むと、ある境界（きょうがい）にまで行くことができます。例えば、天国に行つて仙桃を食べて、自分はもう偉いと思うのです。実際、宇宙にはたくさんの境界があり、どこに行こうと構いません。とても簡単なことです。しかし、これはまだ行ける

境界があるということです。しかし、ある人はもう行ける境界（きょうがい）がないのです。どんな所もみな彼のものです。彼はどこにでも存在します。彼は一部の人のように、今日西方に行つて阿弥陀仏に会い、明日は観音菩薩に会いに行くようなことはしません。本当に修行の高い人は境界の区別などありません。彼らはどこにでも存在します。意味がわかりますか。

観音菩薩はすなわち彼であり、阿弥陀仏も彼であり、釈迦も彼であり、薬師琉璃光王仏も彼であり、毘盧遮那仏（びるしやなぶつ）もまた彼であります。毘盧遮那仏や阿弥陀仏が彼のために灌頂し、授記したわけではありません。彼自身阿弥陀仏であり、毘盧遮那仏です。わかりますか。彼はどこにでも存在します。そうなるのと彼は本当の賢者でありながら、まるで愚か者のように見えてしまうのです。なぜなら、彼には言いたいこともなく、行ける境界もなく、仏陀もありません。彼を救える人はいません。病気になる時は病気になる、頭が痛くなつたら頭痛がし、死ぬ時は死にます。彼を救う人も、彼の病気を治す薬もありません。彼の病気がどこにあるのかを検査できる医者もいません。

修行をよくやっていると見える人は仏陀や菩薩を見ることがあります。先ほど私が述べたように、ある期間修行を積むとある境界に上り、そこである仏陀や大聖人に会うことがあります。

宇宙のあるところには大勢の聖人や大修行者たちが集まって法会を行っています。もし数千年修行を積んだある大修行者がそこに行つた場合、大勢の聖人たちに歓迎されます。「某大師の

光臨を歓迎する」と書いてあり、二、三年後には何々教祖または有名な大師になると授記されると、これを聞いて彼は心の中で非常に喜び、自分には使命があると思ひ込み、帰ってから法を広め、衆生を救わなければならないと思うのです。

ですから、私は印心の時はつきりとみなさんに「それは大した体験ではなく、あるレベルにすぎないもので、それを越えなければならない。さもなければ、私たちはそこにとどまってしまう」と教えるのです。なぜなら、彼にはまだ「私」が衆生を救うという意識があるからです。まだ仏陀がいる、無明な衆生がいるといううちは最高のレベルではありません。

最高のレベルでは陰もなく、陽もありません。しかし、私たちは大抵の場合、陰が強すぎるか、陽が強すぎるのです。道家の太極図は半分が黒地でその真ん中に白い点があり、もう半分は白地でその真ん中に黒い点が印されています。それは陰と陽のことを説明しています。私たちの多くは陰が多く、陽が少ないのです。時には完全に陰となり陽はありません。しかし、人によつては陽が強すぎて陰はほとんどありません。

陰とは何でしょう。陽とは何でしょう。例えば、私たちはある有名な大師が大好きだとします。あまりにも好きなので、どんなことでもみな彼のためにして、非常に熱心に喜んで仕えます。こういう場合、私たちは陽です。しかし万一、次の日にその大師が私たちを厳しく叱ると、私たちは、自分は何の間違いもしていない、大師が間違つて自分たちを責めていると思うので

す。そこで悩んだり怒ったり、離れる決意をしたりします。そういう時は陰と言います。意味がわかりますか。

陰と陽、陽と陰は代わる代わるやって来たり、去ったりして、私たちを狂わせてしまうのです。私たち凡人はこの陰陽に影響されることが多いので、自主性を保ちようがないのです。陰になりたい時は反対に陽になり、陽になりたい時はかえって陰になります。しかし、仏陀や菩薩は陰陽が平均していません。わかりますか。

一部の禅師たちはマルを書くのを好みます。自分たちには陰も陽もないことを示すのです。しかし、少しつつこんで質問するとすぐに腹を立てるのです。先ほどのあの埔里（プーリ）の「大師」と同じように。私たちは陰陽を超越すべきです。それでこそ仏陀や菩薩です。意味がわかりますか。あのいわゆる禅師たちは人にマルを書いて見せるのが好きなようで、それでは道家より高いことを示します。彼らは観音菩薩を見たり、たくさんのお神あるいは過去の師を拜んだり、道徳的な行いをしたり、またはこの陰陽をコントロールしたりすることは、みなまだ陰陽の範囲の中にあると思っただけです。彼らは「私には陰陽はありません。私はすでにそれを超越しています」と言うでしょう。

このような言い方は間違っただけではありません。しかしみなさんに言っておきますが、仏陀や菩薩は陰もあれば陽もあります。彼らはそれを超越していません。陰陽の中にいながら、陰もなけ

れば陽もありません。わかりますか。陰陽を全部捨てたわけではありません。もしそれをみな捨てたとして何になるのでしょうか。全部捨ててしまったとしたら、どうしてこの体があるのでしょう。どうやって衆生を救うのでしょうか。衆生によつては、陰を必要とするものもあれば陽を必要とするものもあります。ですから、完全に陰陽を捨てるわけにはいきません。意味がわかりますか。

私には陰陽両方ともあります。もしほかに必要なものがあれば、それをもつけ加えることができます。ですから、私がここに来て甘い話ばかりしているとは思わなくてください。それはみなさんの考え方が甘いのです。それでは衆生を救うことができません。陰と陽両方を備えてこそ完璧で、衆生を救うことができるのです。

なぜ陰陽をみな備えなければならぬのでしょうか。それは人によつては叱る必要があるからです。例えば、ある子どもは優しい言葉で説明すればすぐに理解し、話を一回聞いただけですぐにやってくれますが、ある子どもは叱らなければなりません。それで初めてやるのです。わかりますか。そうだとしたら陰陽が必要ではありませんか。私たちのような凡人でさえ、子どもを教育するのに陰陽を併用しなければならぬのです。ましてや人に三界を越えることを教えるのに、陰陽を使わないでどうやってできるのでしょうか。

この陰陽は宇宙に存在するもので、私たちに利用されるためにあるのです。さもなければ、

存在しません。わかりますか。この世界において役に立たない物はありません。良くないという物も何一つありません。ただ私たちがそれらの使い方を知らないために、役に立たなくなったり、良くない物になったりするのはです。例えばある毒草があり、医者はその毒があることを知りながら、やはり持って帰って、他のものと混ぜ合わせて栄養剤として、人間の病気を治します。また、良い薬草であっても使い過ぎると毒薬になってしまいます。違いますか。

ですから、陰が多すぎても少なすぎてもよくありません。私たちは陰を備えると同時に陽も備えなければなりません。そして随時それを使用してこそ良いことです。陰陽を全部捨てるべきではありません。捨ててしまったら空虚になって、少しの感情もありません。もしそうなったらどうしたらよいのでしょうか。どうやって衆生の心に同情を寄せるのでしょうか。修行してからみな「空」になってしまつて、人がつらい目に遭つても何とも感じないようでは、そのような修行はいけません。あなたには何事もなくても、彼にとっては大変なことなのです。ですから、彼を思いやらなければなりません。さもなければ、仏陀になる必要も衆生を救う必要もありません。ましてや経典の話などする必要がありません。これではこの世界にとどまつて何をするのでしよう。わかりますか。

といつても、この世界もそう悪くはありません。どこの世界にしよう構いません。地獄にさえ行けるのですから、なぜこの娑婆世界にとどまることのできないのですか。この世界はこ



んなにも美しく、いろんな種類の衆生がいて、それぞれみな表情も異なり、男女もみな違いがあります。二人の女性、あるいは二人の男性でも比べて見るとみな異なります。とても面白いことです。私たちは毎日人に会い、おしゃべりをして時間をつぶし、山河を眺めたりしています。多くのことがあってみな実に面白いのです。ですから、この世界は決してつまらないものではなく、結構なものです。

宇宙には必ず一人の造物主がいます。なぜなら、すべてのものはみな誰かが造り出したからこそ存在できるのです。ですから、これらのものを造り出す専門の工場があるはずです。私たちはこのような素晴らしい体とこの世界を持っています。どうして誰も造った人がいないなんていえますか。その人というのはおそらく一種のエネルギーでしょう。私たち自身の心であるかもしれません。私たちにはまだよくわかっていませんが、この宇宙全体を造っている何かが必要存在するに違いありません。この世界はこんなにも美しく、いろんな種類の衆生がいて、樹木や石、花や草があります。これはきつと造物主のパワーが造り出したに違いありません。しかも数百億年かけて初めて造り出すことができたものです。わかりますか。

このパワー、言いかえればその人は仕事が非常に多忙で、また非常に努力しています。その人はたくさんの智慧と想像力を使ってはじめてこのような美しい世界を造り出すことができたのです。私たちはこれを楽しみましょう。たとえば自分では何もしなくても私たちは楽しむこと

ができます。例えば、私たちは毎日人に会い、山河を眺めてもお金がかかりません。この世界に何の悪いところがあるといえるのでしょうか。

もし、よくないと思うのであれば、それは私たち自身の心がよくないからです。良いものを悪く見ているのです。それでこの世界がこんなに素晴らしいのにもかかわらず、私たちはこれを破壊し尽くしています。思うままに木を切り倒し、郊外に行つて山登りをして、野外で食事をした後はビニール袋や空き缶などを捨てるので、そこは次第にゴミ捨て場になってしまうのです。これらはみな私たち自身がしたことであつて、この世界が悪いのではなくありません。

この世界がよくないのはみな人間のせいです。違いますか。本来は何事もなかったのですが、一人の人間が腹を立てて相手を殺してしまい、その結果よくなってしまったのです。先ほどまで美しかった人間が死体となつてどんどん黒くなり、血を流して横たわっています。目は吊り上がり、昨日まで美しく魅力的でみんなが好きだった目が今は無表情になつてしまいました。これはみな人間によつて金木水火土のシステムが破壊されたために醜くなり始めたのです。たとえ老人でもきちんとしている人がいます。例えば、パーマをかけるとか、クリームをつけるなどして、自分という「小宇宙」がきれいに見えるようにしています。また結婚する老人もいます。これはその人がまだ格好いいということです。その人は服を着る時、鏡の前を行つたり来たりして、納得がいくまで見て、初めて出かけるのです。

ですから、この世界はとても面白いのです。決して悪くありません。良くないとしても、それも人間自身が造り出したのです。例えば、一人の人間がへまをすると他の人が恨みに思います。違いますか。一人の人がある人の奥さんを殺し、その奥さんが恐ろしい死体となったとします。その奥さんのご主人は当然相手を恨むでしょう。「昨日まであんなに美しかった妻が、今日はこんなに変わり果ててしまつて」と思うのです。恨みの心が生じて、相手を殺してしまいます。相手の肉親はこれに納得がいかず、ご主人を殺してしまいます。ご主人側の肉親もまた相手の人を殺します。このように殺し合いをしているから、恨みは永遠に断つことができせん。

恨みの原因はみな一人か二人の人間から始まつたものです。彼らがこの世界を破壊したために、この世界は悪くなつてしまいました。例えば、ある人は陰が多すぎてよく腹を立てていると、私たちは彼を嫌つて彼と争い、彼を殺してしまうのです。世界はその時から乱れ始めます。わかりますか。

普通の人は陰気な人が好きではありません。私たちはみな陽気な方を好みます。ですから、人が笑っているのを見るのが好きです。先ほど私と会つたあの人は、陰の方に偏つていましたので、「陽」をつけ加えた方がいいのではと助言しました。彼が嫌いなわけではありません。好きだからこそ彼を助けてあげたのです。しかし、一般の人は好きでない人に対してはすぐに害

を加え、甚だしいときは殺したいと思うのです。わかりますか。一般の人は、色の黒い人に対して少しの白で染めて、バランスがとれるようにしてあげるのではなく、完全に消してしまおうとするのです。相手を助けて内面を改善させてあげようとは思わないのです。

例えば、自分の着ている服の汚れが目立っているのに、私たち自身非常に怠けていて我慢が足りないのです、その服を全部燃やしてしまうのと同じです。本来なら洗濯すれば使えるはずのもので、万一全部がきれいに洗えないようなら、他の色で染めて別のきれいな服に変えてしまおうとか、汚れている部分に二、三の大きな花模様を描き入れ、創意に富んだ花の衣服にすることができはるはずで。

しかし、私たちは大抵自分の想像力を使うのではなく、反対に大きな破壊力を使うのです。自分が嫌いな人に対してはすぐに抹殺しようとしています。すると私たちのこのようなやり方に不満を持っている人は、私たちに對しトラブルを起こします。これらすべては、私たち自身の見方が正しくないからです。

私たちから見て良くないと思う人でも、ある人はとても好きなのです。例えば、ある奥さんがいて、その人は人に嫌な感じを与える人で、彼女を好きな人は誰もいません。しかし、意外なことに彼女のご主人は非常に彼女を敬愛しています。ですから、私たちには他人を殺害する権利はありません。自分が嫌いだからといって相手に「あなたはなんでこんな奥さんで我慢で

きるのですか。私があなただの代わりに殺してあげましょうか」なんて言っただけじゃない。本当に殺したら、ご主人はもちろん悲しむし、あなたを仇打ちに来るでしょう。その時点から世界は思うようにならなくなるのです。

私たちが非常に朗らかな気持ちでいるのであれば、すべてがとてすてきに見えてきます。たとえすてきでないものであっても、すてきに見えるのです。なぜなら、すてきでないものも、それは私たちと無関係だからです。わかりますか。そうなる世界は乱れません。私たちは観音法門を修行すると非常に明るく、自在で、何も気にならなくなります。何でも構わないのです。

では、なぜ何でもすてきで完璧に見えるのでしょうか。それは宇宙の造物主の巨大なパワーは、陰を造り出すと同時に陽も造り出すからです。これらは彼の権力であり、彼が好んでやることです。ですから、たとえ私たちが嫌いな人でも、その人を自由にさせなければなりません。なぜなら、陰も陽も造物主のパワーから造り出されたものだからです。わかりますか。例えば、人形劇の場合、一人の人が後で幾つかの人形を操っています。どの人形がどんな踊りを踊ろうと、みな後の人が操るのであって、この人形が凶悪であったり、あの人形が善良であったりするわけではありません。みな後ろの監督が操っているからです。

映画も同じです。スターや俳優たちは私たちと同じように普通の人です。違いますか。私は

映画に出演したことがあります。ですから、よく知っています。私はたいしてきれいではなく、小柄で細いのですが、彼らに化粧されると、私は自分でも見違えるほどに、まるで女王のように変身しました。このように別の服に着替えて別の化粧をすると、私たちはジーンズを着ている時のように走り回ることはできません。その時、私はまだ観音法門を修行していませんでした。

化粧した後は自分が別人になってしまったような感じでした。これはあの監督が私をきれいに変身させ、私を大勢の美しい人たちと一緒に踊らせたからです。その時、私たちはみんな化粧して上品なお嬢さんや王女になり、王子や高官たちと宴会をしたのです。そのような場合は、たとえ監督の指示を受けなくても、自分で演じ方がわかります。なぜなら、その時の雰囲気は普段と異なるからです。わかりますか。みんな美しく上品なので、私も自然にそうなるのです。

ある人はいきなり凶悪な人になります。それもお化粧のせいです。化粧する時顔に黒い仮面をつけ、恐い服を着るだけで恐ろしい感じになります。ですから、舞台の上では普通の人が化粧すると、みなそれぞれ違ってきます。例えば、あなたの友人が俳優になったとして、古代の服装をし、長いひげをつけ、顔には白や黒をたくさん塗っていたら、あなたは彼のことが見分けがつかないのではないのでしょうか。そのときは悪党の役を演じているからです。

この世界も同じです。陰であろうと陽であろうと、みな造物主のしたことです。良い人も造

物主がそのようにしたのであり、悪い人もやはり造物主がそうしたのです。わかりますか。自分の役を演じ終え、劇の服を脱ぎ、化粧を落とすと普通の人間に戻るのです。意味がわかりますか。

ですから、私たちは過度に陰が好きになったり、陽が好きになったりしないことです。といっても、私たちはまだそういうことのできるころまでいっていません。観音法門を修行すると陰陽をコントロールすることができません。そうやって初めて陰陽を使うことができるのであって、陰陽に使われるものではありません。現在私たちはみな陰陽に使われています。「陰」になると、とても凶暴になり、腹を立てたりして我慢できません。そして「陽」になるととてもうれしく、または楽しくなります。

この陰と陽はすべて自らやって来たのであって、私たちが招いたから来たわけではありません。私たちは陰と陽をポケットに入れて、陰が必要な時は陰を、そして陽が必要な時は陽を取り出して使い、使いたいだけ使えるというわけではありません。お金の使い方と同じで、ある人はお金持ちでありながら、お金に縛られているために一銭も使いません。みんな銀行に預けたり、あるいは地下に埋めて土の神に見張りをしてもらったりして、自分でも使わず、父母にもあげません。

私たちも同じです。私たちが陰陽を使わなければ、陰陽に使われます。わかりますか。です

から、私たちは自分をコントロールできません。怒る時は気が狂うぐらい怒り、人を愛する時  
も気が狂うほど愛します。一人の女性を深く愛した場合、気が狂ってしまうほど愛するのです。  
なぜなら、その人の喜怒哀楽に左右されるからです。

観音法門を修行するとまだ喜怒哀楽はありますが、私たちはそれをコントロールできます。  
修行すればするほど制御力が強くなります。例えば、二〇%制御から三〇%、五〇%、六〇%  
制御などというように、これは私たちの修行の程度によって決まります。修行を積むほど制御  
力のパーセンテージが上がります。私たちが完全にコントロールすることができた時が仏陀に  
なった時です。

仏陀になることは大したこともありません。神秘的なこと、達成できないことでもありま  
せん。なぜなら、私たちにはすでに陰陽が備っているからです。わかりますか。外へ行って買  
ってきて使うというものではありません。私たちの内面には何でも揃っています。陰もあれば  
陽もあります。それを使うことさえできれば大変素晴らしいことです。

さて、ひとつ普通の例えを話して、みなさんに理解していただきたいと思えます。例えば、  
時にはおとうさんやおかあさんは、決して本気で怒っているのではないのですが、子どもが甘  
いものを食べ過ぎていたりのをみると、歯が痛くなるのが心配で、必ず子どもを叱ります。ある  
いは外で遊び過ぎて宿題をしなかった場合は、怒ったふりをして、家に帰らせ、腹ばいにさせ



てお尻をたたくのです。お尻は肉が厚いので、たたいても大丈夫な場所であることを知ってたたくのです。けがをすることはなく、ただ少し痛くなるだけです。

これは決して子どもをむやみにたたいているのでもなく、怒っているのでもありません。本当に怒ってむやみにたたいたのだとしたら、コントロールできずに、子どもを見るなりたたいたはずです。本気で怒っているのではないので、場所を決めてたたくのです。またどこをたたけばあまり痛くなく、けがをしないのかを考慮に入れているのです。毎日子どもに甘い話ばかりして、溺愛したら、かえって親の言うことを聞きません。ですから、時には硬い方法で対処しなければなりません。硬いというのは硬い頭の「硬い」という意味ですが、陰陽の中の陰とも言えます。わかりますか。

仏陀や菩薩も同じです。陰陽を全部捨てるべきではありません。仏陀や菩薩はすべてを備えています。なぜなら、衆生がたくさんいて、それぞれ異なるプレゼントを必要とするからです。もし仏陀や菩薩に何もなかったら、何を売り物にしたらいいのでしょうか。ですから、陰陽を全部捨てるべきではありません。例えば、一人の裕福な人がいて、家にはすべてが揃っていて、何でも買って来て使うことができますが、彼は大きな市場を開いたとします。何でも売っています。彼がそれらのものを必要だからではありません。彼はすでに十分に裕福で、自分は何も必要としません。もし何か必要なものがあれば、人に買ってきてもらうことができます。彼は

人々の便宜を図るためにその市場を開いたのです。

同じように、仏陀や菩薩は衆生から離れることはできません。仏陀の心とは衆生の心です。菩提は煩惱で、煩惱は菩提です。ただ仏陀や菩薩は煩惱を菩提に変えます。わかりますか。もしみなさんがそのような人間になりたいと願うのであれば、観音法門の修行をお勧めします。

今、私は観音法門を修行すると良くない点をみなさんにすべて話したつもりですが、ご自分で選択していただきたいと思います。なぜなら、観音法門を修行すると何も良いことはありません。福德も神通力もありません。たとえあつたとしても使えません。修行が上達していくためには神通力を使つてはいけません。観音法門を修行する人は神通力で人の病気を治すことさえ許されません。何もないのです。

これでも修行したい人はいますか。どれぐらいですか。(ある人が答える…家族のことを片付けてから修行に来ます) 私はみなさんに、決して家庭や子どもと別れたり、子どもの世話をしたりしないようにとは言っています。本当に頭の悪い衆生ですね。みな修行などやめなさい。みなさんはまだ悟っていません。仏陀や菩薩さえ人を変えることも、人に影響を与えることもできないのですから、どうしてみなさんが人に影響を与えることができるのでしょうか。人はそれぞれ自分の因果があり、それぞれ自分の路を歩くのです。意味がわかりますか。

釈迦は最も慈悲深く最も善良な人です。しかし、それでも彼のいとこのデーヴァダッタは釈

迦を殺そうとしました。ですから、あなたはどうかやって自分の子どもに影響を与えるのでしょうか。我執がこんなにも強いようではどうやって観音法門を修行するのでしょうか。もしあまりたくさんの方を考えるようでしたら、修行しない方がよいでしょう。

あなたが何も考えず完全にマスターを信じ、マスターに言われた通りするようになったら、その時に来てください。意味がわかりますか。今はまだ執着心が強過ぎ、我執もまだ強く、それをなくすことができないのです。世間のことはずっと気になって、世間がマスターより大事で、子どものことがマスターあるいは解脱することより大事なら、修行しない方がよいでしょう。たとえ今あなたが修行したいとしても、私は受け入れません。このような人を弟子にしたら、私に迷惑ばかりかけるでしょう。

ですから、昨日私はみなさんに草刈りをやめさせました。なぜなら、私たちの山は誰でも行って草刈りをしてよいところではありません。印心した人だけが行けるのです。長い間菜食をし、身・口・意（行動・言葉・考え）がきれいで、そしてよく修行している人だけが行けるのです。印心した弟子でも自分勝手に私に会いに来たり、供養したいからといって勝手に供養しに来たりすることはいけません。もし供養したいのであれば、毎日何時間座禅し、観音を何時間しているのか、進歩があるかどうかを必ずはっきり説明しなければなりません。

印心していない人でも私に会う時は同じです。私はざつくばらんすぎます。ですから、みな

さんは来たい時に来て、見たい時に見て、習いたい時は習い、やめたい時はやめるのです。みなさんはまだ印心してなく、講義の時だけ来るのですから、しばらく受け入れたものといっているの、比較的ゆるやかにしているのです。私の弟子に対してはかなり厳しいです。もしあなたがまだ子どものことを考えて、後で修行したいと思うのであれば、何も考えなくて結構です。修行する必要ありません。帰ってよく子どもの世話をした方がいいでしょう。

私たちは過去の世々代々において、すでにたくさんの子どもを世話してきました。来世もう一度来る時にもまた多勢の世話をする子どもがいるでしょう。甚だしいときは今よりもっと多いかもしれません。世話する子どもがいらないのではないかと心配する必要はありません。マスターに出会えないのではないかと心配する方が正しいことです。

子どもは世々代々いつもいます。大変多くの私たちの仇（かたき）が、そこで私たちの子どもになるうとして待ち構えているのです。そして私たちにお金や時間、私たちの身体的な気力を使って世話させるのです。私たちが借りたすべての因果を取り戻すまで離れません。もしかしたら非常に早く私たちを離れて行くかもしれません。四才とか六才あるいは十才で離れて行くことがあります。そうなると私たちは非常に悲しみ泣きます。自分の子どもが行ってしまったと思うのです。本当は私たちは喜んで「私の仇は行ってしまった。これでだいぶ自由になった。こんなに早くこのカルマを清算できたことを、仏陀や菩薩に感謝します」と言わなければ

なりません。

しかし、この世界はすべてが本末転倒しています。私たちは最も大事な事を大事ではないと思ひ、最も大事でないことをかえって大事にします。それで私たちは夫や妻、子どもを最も大事なものと思うのです。それらを軽んじるべきだとは言いません。やはり彼らをよく世話しなければなりません。なぜなら、過去世において私たちは彼らに借りがあるからです。今はそれを喜んで返さなければなりません。精算するのを後悔したり、悩んだりしてはいけません。意味がわかりますか。ただ彼らは私たちの究極の目的ではありません。それらを究極の目的とするのは本末転倒であり、間違いなのです。

ですから、私たちは世々代々輪廻して、彼らの靴下やパンツを洗い、お金を稼いで、彼らを食べさせているのです。ずっと今でもなお喜んでこれらのことに未練を持っているのは、この道理がわかっていないからです。わからないということとは「無明」であり、わかれば「仏陀」です。これは非常に区別しやすいことです。

仏陀と衆生とはほぼ同じです。こちらへひっくり返すと仏陀であり、そちらへひっくり返すと衆生です。衆生も、もともとは仏陀なのです。ただ自分が仏陀であることを知らないだけです。ちようど、王子が小さいときは自分が王子だということがわかりませんが、大きくなって初めてわかるようなものです。わかりますか。

どうしてそんなに笑うのですか。来世にまたやって来てパンツなど洗いたくないということですね。みなさんよく注意してみるとわかると思いますが、人生はまるでラバのようです。自分の面倒を見るだけでもこんなに疲れているのに、その上、妻や息子や娘まで世話しなければならぬのです。ラバと同じように、自分で草を探して食べなければならぬ以外に、たくさんの人間が彼にくれるものを背負い、重い負担に耐え忍ばなければならぬのです。牛や馬も同じです。あんなにも大きく重い車を引かなければならぬのです。意味がわかりますか。

この話を聞いてわかった人で、私が話している道理が好きな人は残ってください。前は私は気軽に印心してあげましたが、今は少し厳しくしなければなりません。なぜかという、多くの人は君子のように約束を守りません。彼らはここに来て法を学ぶのではなく、法を盗むのです。法を学ぶ時は私に一生菜食すると約束しますが、家に帰っては肉を食べるのです。これはいけないことです。重いカルマを造って解脱できません。

私はもう自由で寛容すぎることはしません。今は彼らに願をかけてもらいます。昔地藏菩薩があのような願をかけたのと同じようにしてもらいます。こうして初めて彼らも大切にするでしょう。聞くところによると、ある宗教は弟子たちに願をかけるよう要求するそうです。例えば、これから世々代々離れませんか、誓いを立てて願をかけさせるのです。私はそんなにたくさんのものを要求しません。現世だけでもう十分です。どうして世々代々離れないことを

要求するのでしょうか。現世だけ離れなければいいのです。以後は上の世界に行って二度と戻って来ないことです。マスターにいつまでも一緒に縛られる必要はありません。ですから、世々代々離れないなど言ってはいけません。みなさんは早く離れるほどよいのです。早くマスターになり、自在になりなさい。私に世々代々縛られることはありません。たとえみなさんがそうしたくても、私は嫌です。

人に縛られることはとてもつらいことです。弟子に縛られることはなおさらつらいのです。なぜかと言うと、彼らのカルマがみな私のところにやって来るのです。時には私は選択して受け取らないカルマもあります。しかし、彼らがあんなにも苦しんでいるのを見るのが忍びなく、代わりに受け取ってあげるのです。意味がわかりますか。ですから、弟子に縛られることは本当に嫌なことなのです。

私たち大多数の人は意志がとても弱いのです。これも習いたいあれも習いたいと思うのですが、それを完全にマスターするまで続けることができません。例えば、以前は医者になって患者を苦痛から助けてあげたいと思いましたが、一年か二年勉強しただけで大変だと感じるのです。そこで心の中で「彼らが病気になるのは彼ら自身のこと、なんで私がこんなに苦勞しなければならぬのだろう」と思うのです。そういう時、彼のレベルは永久にそこにとどまってしまう。

修行をする人も同じです。印心を受けることはとても簡単です。マスターを探し当てさえすれば印心できます。悟りを開くこともとても簡単なことです。マスターを見つけてさえすればできるのです。しかし、問題は私たちが引き続き悟りを開いていくことができず、その開いた「悟り」にカビがつき、毎日その手入れをしないことです。これこそが一番難しい事です。

守るべき戒律もないがしろにし、今日マスターに印心を受けたくなったからといって慌しくやっけて来て、自分は必ず菜食し、これは問題ないと保証しておきながら、家に帰って奥さんが菜食を作ってくれないとすぐに口実をつけて肉を食べるのです。私たちの意志が強ければ、奥さんは私たちの事に強く干渉したりしないでしょう。父母も干渉しないでしょう。なぜなら、私たちは人間は話をする事ができるからです。言葉というものはあまり力はないかもしれませんが、意志疎通の道具にできます。私たちは相手を尊敬し、優しく、かつ確信をもって彼らと話し、討論できます。今日話をして、相手が受け入れなかったら、明日また話するのです。

孝行するということは、親に毒薬を渡されたら、決してそれを飲むということではありません。また父母が肉を食べるように強制したら、すぐに私の指示を忘れてそれを食べるといふことではありません。実際、みなさんが肉を食べることは、私とは関係のないことです。しかし、多くの衆生たちはあなたが仏陀になって救ってくれるのを待っているのです。多くの豚や牛、鶏やアヒルは、あなたが肉を食べることをやめるのを待ちわび、少しでも長く生かして欲しい



と思うのです。人類がみな菜食すれば、多くの動物たちはきっと喜び、歌ったり踊ったりして、私たちが好きになるでしょう。そして私たちがどこに行っても、彼らは私たちに近付き、私たちになつくでしょう。わかりますか。これが観音法門を修行する人の「無畏を施す」ということです。衆生に恐怖心を感じさせないことです。

「無畏を施す」とはどういうことでしょうか。それは衆生に「無畏」を布施するということです。「無畏」とはこわくないと言う意味です。私たちは無畏を施して衆生を安心させるのです。そして彼らに「もう心配いりませんよ。今日から私はみなさんを食べたりしませんからね。長生きしてね」と慰めなければなりません。もし私たちが長寿を全うしたいと思いつながら、一方では、衆生を殺して食べても構わないと思うのであれば、これは因果の法則に違反するものではありませんか。そのような因を作るので、果があるのです。私たちが短命の因を作っているのであれば、どうして長寿の果があるのでしょうか。

不老長寿でいたければ観音法門を修行すべきです。もちろん肉体が長生するということではありません。なぜなら、この肉体は大したものではないからです。私たちは肉体以外にもっと美しく自在で、追い求めるに値するもう一つの体があるからです。その体こそ私たちが慈しみ、大切にするに値するもので、それこそ不老長寿でいることができるのです。この肉体は服と同じで、時間がたつと必ず脱がなければなりません。この服を脱いでこそ、私たちは真の自由にな

なることができるのです。ですから、この肉体に愛着することはありません。

例えば、犯人がいたとします。彼は何十年も鎖に縛られ、あるいは首かせをかけられています。何十年の間、彼はすっかりこれに慣れてしまい、誰かが彼に「あなたはもう自由になりました。もう帰ってもいいですよ。今すぐこの首かせをはずしますからね」と言うと、その犯人はかえって、きつと違和感を覚えると思います。そして「もう何十年もたつたから、私は慣れました。今、突然この首かせがなくなったら、私はどうしたらいいのでしょうか」というふう

に思うのです。

また長い間とても暗い部屋に閉じ込められていた犯人は、外に出て太陽の光を浴びると、一日か二日間、目が見えません。ですから、あまり長い間、閉じ込められていた犯人に対しては、彼に自由を与える前に、まずどこかに一定の期間住んでもらって外の生活に慣れてから、そこを離れるようにしなければなりません。違いますか。なぜなら、彼は小さな家での生活に慣れてしまつて、外の複雑で、大きな空間には恐怖を感じるのです。私は決してふざけているわけではありません。これは心理的な問題で簡単なことではありません。

同じように、みなさんは印心を受けることも、悟りを開くことも問題ありません。私がいれば悟りを開くことができます。問題はみなさんが自在な状況に慣れるかどうかです。ある人はずいぶん前に自由になったにもかかわらず、まだ自分が犯人だと思つて、いまだに自分は自由

の身であることが信じられないのです。そして相変わらず恐怖心や劣等感を持ち、人が自分に親切にしても、彼はそれを不親切だと思ったり、あるいは自分を見下していると思ったりするのです。

昨日、私は一人の犯人と会いました。彼はこう言うのです。彼は以前たくさんの殺生をしたので、もともと無期懲役の判決を受けたのですが、後に監獄で修行を始めて、現在はずで自由の身になっています。しかし、彼はまだみんなが彼のことをよく思っていないと思込んでいて、みんなが彼を犯人扱いしていると思込んでいるのです。

実際、彼自身の心はまったく開かれてなく、非常に恐れていて、卑屈になっているからです。社会全体が彼を排斥し、決して彼をよく思っていないというわけではありません。彼には奥さんと子どもが一人いて、奥さんは彼のことがまだ好きです。好きでなかったら、どうして彼と結婚して子どもを生んだりしますか。彼にはまだ友達もいて、いつも彼を食事に連れて行ったり、彼が病気になった時、友達が見舞いに来て一緒にいてくれます。どうして彼を愛していないなどと言えるのですか。それでも、彼自身の心は自分を許すことができないのです。

同様に、悟りを開くことは問題ではありません。問題はみなさんが、私に印心を受けてから、直ちに自分の無明の荷物を捨てることができるか、毎日それを首に掛けていないでいられるか、ということですか。わかりますか。私が、あなたは今日悟りを開いたと言います。口で言うだけ

でなく、みなさん自身も悟りを開いた体験をしますし、直ちに証明が得られます。

しかし、おそらくあなたは信じないでしょう。帰ってからまだ毎日無明の荷物を抱えて、それを枕にして眠り、印心の時の開悟の状況を忘れてしまい、自分に仏性があることも忘れてしまふのです。それを磨くことをしないでただでなく、カビを生やしてしまうのです。毎日無明の荷物を磨いているばかりで、修行を続けようとも、この宝石を大切にしようとも、それを捕まえておこうとも、きれいに洗おうともせず、隅っこに放り出してしまつて、反対に毎日石ころと遊んでいるのです。

みなさんは知っていますか。子どもが遊ぶ時泥をビスケツトに見立て、木の葉をお金に見立てて遊ぶことを。もし、そういうものをあげないと機嫌が悪いのです。もし、私たちが「これは本当のお金ではないのよ。帰ってからお母さんがあなたに本当のお金をあげるわ」と言ったとしても、その時は遊びに夢中で、お母さんが本当のお金をあげて、何か買って食べなさいと言つても、おそらくお金はポケットにしまつて、偽物のビスケツトと遊び続けるでしょう。この意味がわかりますか。

お父さんやお母さんは当然子どもにお金をあげることもできるし、本当のビスケツトを買つてあげることもできます。問題は子どもがそれを使えるか使えないかです。あるいはその物があるかないかです。おそらく、子どもはポケットに入れるだけで、忘れてしまい、二、三

日たつたら腐ってしまうでしょう。この意味がわかりますか。

同じようなことで、みなさんはすぐに悟りを開くことができます。間違ありません。悟りを開くことは最も簡単なことです。私は悟りを開くことほど簡単なことを今まで見たことがありません。私は世界三十数ヶ国を旅行しましたが、買物することさえ、そう簡単でないと感じています。時にはある食べ物がまずくて食べられないので、他のものを買に行っても長い間待たなければなりません。普段私たちは物を買いたいと思つたら、まず苦勞してお金を稼がなくてはなりません。それで初めて自分が欲しいものを買えるお金が貯まるのです。買ったとしても気に入らないこともあります。なぜなら、外見は良くても使いにくいからです。

気に入った、ぴったりの服を着たければ、やはりまずお金を稼がなければなりません。それで初めて布地が買えるのです。買って帰つて来てから、まだ随分待たなければなりません。洋服屋さんは時間が空いたら仕立てくれるのですが、時には二週間でできると言っていたのに、三週間たつて電話して聞いたら、まだできていませんと言うのです。

私たちが外出して買物するのもそんな簡単ではありません。お金があつても同じです。その場所に欲しいものがなかった時には、何軒かお店を回つて初めて気に入ったものを買えるのです。ですから、買物は悟りを開くことより、早く簡単ではないのです。悟りを開くことはこの世で最も簡単なことです。唯一、簡単でないところは、引き続き發展させ、ますます悟りを開

いていくこと、引き続き私たちの仏性を認識することです。多くの人は少しばかりの仏性を認識しただけで、すぐそれにカビを生えさせたり、印心後はもうやることはなくなったと思ったりするのは、これは誤った考え方です。大切にすることを知るべきで、それでこそ初めて印心できるのです。

印心する前にまず自分にはつきり聞いてください。「自分がここへ来た目的は何か。解脱するためなのか。それとも、ここに遊びに来たのだろうか。好奇心で、マスターがどんな法門を教えるのか知りたいからか。聞くところによるとマスターの教え方は他の人と違って、レベルも他の人とは違うようだ。マスターのレベルは一体どこに達しているか推し量ってみるために来たのか」と。

みなさんには測ることはできません。私にはみなさんに推し量られるところはありません。一人の人に何もなしとしたり、みなさんはどうやってその人を測るのですか。レベルもないにどうやって比較できるのですか。わかりますか。私にはレベルもなければ智慧もあります。この点については、私は先ほどはつきりと話しました。私は決して自分は非常に多くの智慧があると誇張して言ったりしていません。自分が大智者であるなどとも言ったりしていません。人によっては、自分は「大知識」だと言ったりします。しかし、私は少しも大きくありません。ですから、みなさんが私を呼ぶ時は「大きくないマスター」「智慧のないマスター」「無名のマスタ

―と呼んで結構です。

無名の「無」は何もないという意味であり、「名」は名前です。無名とは、決して名前がないという意味ではありませんが、名前がないと言ってもいいでしょう。このようなわけで、当然測ることはできません。レベルがあるから初めて測ることができるのです。一つの場所も周囲に境界線があるから測ることが可能なのです。私は自分に何があるのかわかりません。私は本当に何の智慧もありません。

みなさんが私に会いに来る時はいつも、自分の「プレゼント」を持ってきます。ただ、ある人のプレゼントは白かったり、ある人は黒かったり、ある人はおいしかったり、ある人は苦かったり、ある人は大きかったり、ある人は小さかったりします。いずれにしろ、みなさんに贈りたいプレゼントです。私もみなさんのプレゼントにより、縁に応じて反応して、みなさんに見せています。従って、私の講義を聴きに来て、ある人はこの一部分だけを理解し、ある人はまた他の部分を理解するだけです。または、その部分だけしか聞いてなく、帰ってからその部分だけを記憶していて、その他は全部忘れてしまっているのです。わかりますか。

なぜなら、みなさんはそのプレゼントを持って来ても、後でまた持って帰っているのです。私はただ開けてみなさんに見せてあげるだけです。私には何もありません。一枚の鏡のようなものです。もし鏡をここに置いていたら、どんな人でもここを通る時、みんな自分の本来の姿

を見ることができると、自分の顔とか外見とかを見ることができると。鏡は話をしません。また、決まった同じ形を示すこともありません。私たちがどのようなであろうと、鏡はそのまま写し出すのです。

講義の前は、私は何を講義するのか自分でもわかりません。講義が終わったら、今何を講義したのかも覚えていません。みなさんは信じないかもしれませんが、これは本当のことです。私は中国語がわからないので、弟子が「即刻開悟の鍵」を本にした時、本の中で何が語られているのか全然知らなかったのです。弟子たちが何回も読んで聞かせてくれましたが、読んでもらうたびに新しく聞くのと同じ感じでした。私は他の人に「この話は素晴らしいですね。私はどうしてこんな話かうまいのでしょうかね」などと言ったりするくらいです。

というのは、私は「無所住（心は執着するものがない）」ので、私には智慧がありません。観音法門を修行したら、大智慧が得られるだろうと思わないでください。始めたばかりの頃は得られるかもしれませんが、その後はなくなってしまう。智慧もなくなり、仏陀にもなれません。なぜなら、たとえ仏陀になったとしても、自分が仏陀であることがわからないのです。覚えていないのです。しかし、ある人が「あなたは仏陀です」と言ったら、おそらく少し思い出して、心の中で「仏陀とはおそらくこんなものかな」と思うことでしょう。

一昨日、私が宜蘭から帰ってきた時は夜遅くなり、夜中の一時過ぎごろでした。その時間は



もともと餓鬼が物を食べる時です。しかし、山道を歩いてきたのでおなかの具合がよくなり、帰って来たら、おなか为空いた感じがしたのです。どうしたらいいでしょう。餓鬼のことは気にせず、おなががすいたから何か食べたいと思いました。みなさんは、私がおなががすいたら、たくさん食べると思うでしょう。そうでしょう。実際は、私は一口、二口食べたなら食欲がなくなり、もう食べたいとは思わないのです。

その時は少し味付けにと思って、自分で香菜（中国パセリ）を少し加えてみましたが、足りなかったのもう一度取りに行きました。台所に行つて香菜を取つて来る時、私は突然手を止めて、これが仏陀の生活なのだろうかと心の中で思いました。多くの人が私は仏陀だと言うので、私はたいへん驚き、仏陀がどうしてこんなことをするのだろうか、と思いました。早朝一時か二時に帰つてきて、おなががすいて、そして香菜を探して食べるのです。心の中でこれはなじみのない仏陀（中国語で陌生仏）だなと思つたのです。おそらく今後私たちは「南無陌生仏」と唱えることになるでしょう。（笑い）

その時私はとてもなじまないと感じたのです。しかし、本当になじまないのではありません。ただあの感じは口には言えないものです。私はそばにいる弟子に「仏陀の生活は本当にこんなものなのだろうか」と聞きました。彼女は下手な返事をしました。「そう、そうです。これこそ仏陀の生活です」。私が何を言おうと、彼女にしてみれば、みな間違いないことであり、私がする

ことはみな正しいことなのです。ですから、彼女はこんな様子がすなわち仏陀だと思ったのです。彼女はさらに私を慰めて言いました。「あなたは本当の仏陀です。なぜなら、今日会ったあの殺人犯のような人ですら、あなたに会うと、感動して悟りを開くこともできたからです」

しかし、私は「仏陀」など何も感じませんでした。仏陀など何もありません。意味がわかりません。麵を食べる時は食べるだけのことで、「仏陀」が食べているという感覚はまったくなく、食べる時は食べるだけのことです。

もし、みなさんがそのような状態が心配だったら、観音法門を修行しないでください。なぜなら、修行してから自分が誰だかわからなくなり、人々があなたに「あなたは仏陀です」と言っても、あなたはわからず、自分はまだ以前と同じだと思ってしまうからです。もし今誰かが「あなたは仏陀です」と言ったら、あなたは必ず「冗談でしょう」と言うはずで、それで、私がみなさんに「みなさんはみんな仏陀です」と言ったとしても、みなさんも信じないでしょう。

たとえ少しばかり理解したとしても、完全には信じられません。そうではないですか。自分が仏陀であると完全に信じられる人はいますか。もし、いたら立ってください。私に礼拝させていただきます。(笑い)

みなさんは観音法門をたくさん修行すると、同じように他の人に崇拜され、「在世仏」と呼ばれます。しかし、あなた自身は特に感じるところはなく、信じないわけでもなければ、信じる

わけでもありません。知らないわけでもなければ知っているわけでもありません。

みなさんはまだ覚えていると思いますが、達磨が梁武帝と会った時のことです。梁武帝は達磨が自分のことをどんなに立派で大したものであるか、無限の功德があるかなど賛美するのを待っていました。結局何も褒めなければかりか、ただ梁武帝に「お寺を建てたり、僧侶に供養したりしても何の功德もありません」と言いました。その時梁武帝は大変悩み、彼に「あなたは誰ですか」と質問しました。たぶん当時、梁武帝は禅問答の修行をしていて、「私は誰なのか」という禅問答をしていたのだと思います。それで、達磨に「あなたは誰か」と質問したのでしょう。達磨は「私は知りません」と言いました。おそらく彼はその時頭が空っぽになっていたと思います。多く修行すると、何もかもみな忘れてしまいます。彼は自分が誰であるかもすでに忘れてしまっていたのです。

達磨大師は決して彼をだましたわけではなく、また冗談を言ったわけでもないのです。面倒くさくて話をしなかったわけでもありません。達磨はうそをつけないのです。彼は本当に知らなかったのです。それで、知らないと言ったのです。その時、梁武帝はその「知らない」というレベルがどういふものなのか理解しようもなく、彼は単なる凡人なのだと思います、帰ってもらいました。達磨が帰ってから、梁武帝は他の人に聞きに行き、あの「知らない」という人は、結局のところどういふ人なのかを確認しようとしたのです。他の人は「あなたは知らないのです

か。彼は大変な悟りを開いた人ですよ」と言いました。そのとき、梁武帝は後悔して、すぐに人をやって追いかけてきましたが、他の人は「今、彼を追いかけても無駄です。彼は帰って来ません。たとえ全世界が彼に頼んでも彼は帰って来ません」と言いました。本当におかしなことですね。彼自身は知らないのに、人々はみな彼が誰であるかを知っていたのです。達磨は本当にかわいいですね。

私も自分が誰であるのか知りません。しかし、多くの人々がやって来て、私のことを証明しようとしています。ある人は、私は金剛王仏だと言います。ある人は古仏だと言います。しかし、あまりにも古いため、いまだかつて見たことがなく、聞いたこともなく、それで名前が何なのか知らないのです。また、ある人は、私は琉璃王仏だと言う人もいます。ある人は、私の体からたくさんの手が出て来たのを見て、私が千手千眼観世音菩薩だと言う人もいます。ある人は、私が地藏菩薩だと言う人もいます。また、ある子どもが私に質問しました。「マスター、あなたは大勢至菩薩ではないのですか。なぜなら、私には智慧があるからそのように思ったのです。私を文殊様だと言う人もいます。なぜなら、私には智慧があるからそのように思ったのです。私が思ったわけではないのです。私の体からすぐ大きな光の環が出ているのを見た人もいます。彼らはみんな見ているのです。みんな私が誰か知っているのです。しかし私自身は知りません。」

私は素直にみなさんに言います。決して冗談ではなく、また達磨と比較するわけでもありません。

せん。私に言わせれば、彼も別にどうということはありません。私はみなさんに、私は達磨と同じだと強調するわけでもありません。そんな意味はありません。なぜなら、彼は彼、私は私で、彼とレベルを比較する必要もなく、彼が仏陀になっても、私は別に構わないのです。彼が宇宙で最高であっても、私には関係のないことです。

しかし、正直言って私は彼のことを理解しています。なぜなら、現在私も自分が誰か知らないからです。比較しているわけではありません。この意味がわかりますか。多くの人がみんな、私は誰か知っているのですが、ただ自分だけが知らないのです。こんなことはすべてあの観音法門を修行したために起こったことです。もし、みなさん心配なら修行しないでください。

以前、私は自分が菩薩の化身だと感じていたころがありました。なぜなら、私はあんなに良かったからです。私は布施もでき、忍辱もでき、謙遜もでき、肉食もしました。しかし、観音法門を修行してから私は思いました。「牛、馬だって肉食している。肉食できたからと言つて別にそんな大したことでもないじゃないか」。布施もお金がたくさんあるから布施ができるのです。おそらく、私は以前に人から借りていたのでしよう、その人を見たらすぐ返したくなるのです。先方がまだ口も開かないうちに、私はもう返したいと言っているのです。これは先ほど私が話した、仇が母胎に入つて私たちの子どもとなるのと同じ意味です。わかりますか。

みなさんは私の話を信じないかもしれませんが、みなさんはここへ真理を聞きたいと思つて来

たのですが、真理は往々にして「忠言耳に逆らう」です。みなさんも、もし耳に逆らうと感じるのであれば、ここに綿があるから耳を塞いでもいいですよ。(笑い) 今さら塞いでも遅すぎますね。これから先、私たちが講義をする前に、まず綿をみなさんに配っておくべきですね。聞きたくないところはすぐ耳を塞げばよいので、そうすれば、私たちも誤解をさけられ、みなさんも不愉快な思いをせずにすむし、私のことを怒ったりもしないでしょう。聞くところによると、お坊さんを怒らせると福報がなくなるそうです。これは聞いた話であって、私は少しもそんな感じは持っていません。今、何か問題はありますか。怒りたいことでもいいですよ。それも私へのプレゼントの一つだと思えばよいでしょう。

**問** 観音法門を修行するには、どんな心の準備をすれば、修行がうまくいくのでしょうか。

**答** 本来に生死を解脱するためであれば、それで十分です。それこそが最大の心の準備です。本来に解脱を求め、仏陀になろうとするのであれば、観音法門を修行すべきです。しかし、おそらくあなたは修行してからは仏陀になりたいとは思わないでしょう。

**問** 初めてマスターにお目にかかった時、心からマスターを崇拜しました。マスターの本も読みました。しかし、まだ悟りを聞いていません。私は菜食していないので、カルマが大きすぎ

るからでしょうか。

**答** 私たちの思いは非常に強く、何かを思えば、それを得られるのです。それで、「一切唯心造（すべては心で作られる）」というのです。修行すると私たちの思いはさらに強くなります。なぜなら、私たちは自分自身のこのパワーを使うようになるからです。悟りを開くとはこのパワーを開くことなのです。それからは毎日そのパワーを使うことができます。その時私たちの身・口・意（行動・言葉・考え）はみな清浄でなければなりません。そうでなければ、私たちがそんなにも強いパワーがあつて、よくないことを思つたら、さらにまずいことになるのではありませんか。意味がわかりますか。

もし、その時に私たちが人を殺したいと思つたら、刀はいりません。その人はそれで殺されてしまいます。従つて、修行する人に最も重要なことは身・口・意をきれいにすることなのです。私がみなさんに菜食しなさいと言うのはみなさんの慈悲心を養わせるためです。みなさんのパワーが大きくなってから、それを良い方に使えるからです。例えば、私たちがトラを子ども頃から飼つて、毎日肉を食べさせていると、大きくなって、万一食べる肉がなくなる日が来たとしたら、トラは誰を食べると思いますか。そのトラは人間を食べるでしょう。なぜなら、肉を食べるのが習慣になつていてからです。私たちがトラの慈悲心を養うことをせず、毎日豆腐やグルテン（タンパク質）を食べさせてなければ、当然肉を食べるのに慣れてしまいます。

ですから、釈迦は「座禅して修行する人は、菜食しなければ仏陀になれない。最高でも魔王にしかなれない」と言っています。魔王になれるのであれば、すでに立派なものです。なぜなら、魔王は三界では非常に高い地位だからです。彼は三界以内のことをコントロールしていて、三界以内の国王だからです。

魔王は最高で梵天の地位に達することができます。パワーは非常に大きく、神通力も不可思議です。しかし三界を超えることはできません。なぜなら、慈悲心が足りないからです。陰陽もよく学んでいないので、まだ陰が多すぎ、陽が非常に少ないのです。差があるといえば、そこです。わかりますか。ですから、なぜ菜食しなければならないのか、と私に聞かないください。みなさんが三界を超えるには必ず菜食しなければなりません。慈悲心は非常に大切なものです。もし私たちにパワーがあっても慈悲心がなければ、私たちはそのパワーを乱用するでしょう。私の言っている意味がわかりますか。

背が高く、大きくて、大変な力持ちに育った人が、非常に凶悪であるのと同じように、そのような人は社会に対して、大変危険な人になります。背が高く、大きく、その上力持ちの人がいたとして、しかも反対に非常に慈悲深い人だったら、彼は必ず多くの人を助けることでしよう。彼は、彼の肉体の力で人を助けて、物を持ってあげたり、道路を直してあげたり、大変重い荷物を担いであげたりして、たくさんの人を助けるでしょう。しかし、もし彼に慈悲心や博



愛がなかったら、力で人を殴ったり、殺したりするでしょう。これではさらにひどいことではありませんか。

もし軟弱な人だったら、悪い心を持つていたとしても問題ありません。なぜなら、彼が人を殴っても、かゆいところをかいたのと同じぐらいのことで特に大したことではありませんから。

**問** もし、印心してから毎日二時間半座禅できなかつたらどうすればよいのでしょうか。

**答** それなら修行しないほうがいいです。本来に誠心誠意であるなら、必ずできます。睡眠を少し減らし、テレビを見る時間や、新聞を読む時間を少し減らし、電話やおしゃべりや友達と会うことを少し減らします。このようにすれば毎日相当多くの時間が節約できます。わかりますか。一度に続けて二時間半座禅する必要はありません。朝少し早めに起きて夫と子どもがまだ起きて来ないうちに一時間座禅して、夜一時間遅く寝て、座禅します。昼の休憩時間にさらに三十分座禅すればいいのです。

みなさんはいつも女性的感情で私に質問しますが、ここへ来るからにはもつと厳肅になつてください。くだらない問題を質問して、私の時間と活力を浪費しないでください。私はみなさんと遊んでいるわけではありません。もちろん時には遊んでも結構です。しかし、修行の問題を質問する時はそのようではいけません。

**問** 私は肉を食べるのが大好きでした。食べずにはいられなかったのです。しかし、マスターの本を読んでからは、肉を見ると吐きたくなくなります。これはどうしてでしょうか。

**答** 怪人（マスターの冗談）に変わっておめでとう。すでにみなさんに話した通り、観音法門を修行することは大変危険なことです。あなたはまだ修行していないのに、私の本を見ただけなのに、もうそんなに危険になっています。修行したら野菜ですら食べたくなき恐れもあります。肉どころではありません。ですから、修行しないほうが良いでしょう。（マスターの冗談）楞嚴経の中で釈迦が言っています。「どんなものであるかとそれを食べる時は、我が子の肉を食べるのと同じように思わねばならない」。〈楞嚴経四巻〉彼が言っている意味は、僧侶や修行者は、たとえ野菜を食べる時でも自分の子を食べるような思いで口にしくく、ましてや肉を食べるなんて、ということですよ。わかりますか。

本当に修行を深めると、たとえ野菜でも食べたくなくなります。なぜなら、彼らにも生命があるからです。ただし、生をむさぼり死を恐れる意識がうすいので、食べる時、そんなに苦しまないのです。

どんなものもみな仏陀です。ですから、私たちが野菜を食べるのも仏陀を食べることです。先ほど私は人形の話をしました。野菜は一種の人形です。宇宙には一種の大いなるパワーがあつて、それはすべての衆生を照らしています。すべての衆生を成長させ養っています。もし、

この大いなるパワーがなければ衆生も存在しません。それで、私たちはいつも「仏光は常に照らす」と言います。仏光とはすなわちこの大いなるパワーを指しています。もし、私たちがこの大いなるパワーを見なければ、光として見る事ができません。もしこの仏音を開きたければ、一種の超世界の音に変わります。いわゆる「世間の音に勝る音」です。意味がわかりますか。

このパワーが植物に達したとき草木となります、一個の体に達したとき人間となります、動物の身の上に達した時は豚や鶏やアヒルなどになります。従って、植物も当然このパワーから造られたものであり、ただ表面が異なるだけの事です。表面が異なる包装をされているので、見たところ違ったものに見えますが、実際の中味のプレゼントはまったく同じものなのです。例えば、中秋の節句の時、私たちはたくさんプレゼントをします。買ったものは同じでも違った包装紙で包むので、見た目は違ったものに見えますが、実際は開けたら中味はみな同じです。

従って、野菜も神であり、仏陀です。造物主のパワーでもあります。何か特別なものはないのです。悪人もこのパワーが彼を激しく動かしたからこそ、そのように悪くなったのです。言いかえれば、悪人もこのパワーが造ったものなのです。

例えば、二人の人がいて、一人は善人で、一人は悪人の場合、もし二人が同じ時間に死んだとしたら、その時誰が逃げられるでしょう。彼ら二人の体は同じようになり、座ることもでき

ません。たとえ、善人だからといって座ることができるわけではないのです。その時善人、悪人、二人はどこへ行くのですか。大いなるパワーのところへ戻るのではないですか。大いなるパワーには陰陽があり、陰のものは陰の場所へ行き、陽のものは陽の場所へ行くのです。どこへ行こうと、いずれもすべてこの大いなるパワーの中にいるのです。意味がわかりますか。

私と同じです。私は上には頭があり、下には足があります。頭も足もみな私のものです。みなさんは「私たちが尊敬しているのはマスターの頭だけだから、あなたの足は、私たちが切ってもいいですか」などと言うことはできません。見映えはよくないけれど、それでもそれは私のものです。わかりますか。私のおなかの中は当然見映えがよくないですが、それだからといって、「マスター。あなたのおなかの中はすごく汚い。私たちがそれを取ってしまいます。私たちが尊敬しているのはあなたのおなかの頭だけですから」などと言うことはできません。

なぜなら、私は物を食べるのにまだ必要だからです。おなかがあれば、私の食べた物はどこで消化するのですか。例えば、別荘は当然きれいです。でも、中にはトイレもあります。みんながトイレで眠るわけではありませんが、私たちにはそれが必要なのです。

従って、陰陽はいずれも良いのです。悪人も善人もみんな良いのです。鬼も良いし、魔も良いし、仏陀も素晴らしいのです。意味がわかりますか。しかし、みなさんは仏陀になりたいから、修行する必要があるのです。仏陀になりたくなければ、魔になっても良いのです。それは

それで役に立つのです。なぜなら、地獄の人は魔が来て早くカルマをきれいに洗い流してくれることが必要だからです。例えば、服が少し汚れている時は、水で洗えばそれでいいのです。

しかし、本当にすぐく汚れている時は粉石けんを使って、二、三日水に浸しておく必要があります。もし、それでもまだ洗ってきれいにならない場合は、においが臭くて手でさわると皮膚がむけそうな漂白剤に浸す必要があります。そのようなひどく毒性の高い化学洗剤を使って初めて黒く汚れたところを洗い落とし、衣服を白くできるのです。そのようなものは飲んだら中毒しますし、好んで飲む人は誰もいません。私たちは毒の強いものは高い所において、子どもが触れないようにしますが、漂白剤は役に立つもので、一番汚れている服をきれいに洗うことができます。

地獄も同様に、みな私たちを手助けしてくれるものなのです。しかし、私たちは慎重であるべきで、地獄に行つてきれいに洗うなんて面倒なことをする必要はありません。現在一人のやさしい在世のマスターを見つけてゆつくりと洗つた方がより楽です。もし、魔が来てから洗うとしたら、おそらくそんなに良いものでなく、非常に苦痛でしょう。

**問** 大修行者はどうして凶悪な猛獣を非常におとなしくさせることができるのですか。  
**答** これは大変簡単なことです、それは磁場の問題です。なぜなら、どんな衆生にもみんな仏

性があります。仏性を完全に発展させた人は、衆生の仏性を引出すことができるのです。ですから、その時トラは自分がトラであることを忘れて、ただ仏性を表すだけなのです。どんな衆生にも仏性があり、もし仏陀の心で犬を見るなら犬も仏陀であり、先ほど私が話したように、大修行者には分け隔ての心がありません。

広欽老和尚は非常によく修行して、少なくとも阿羅漢のレベルでした。野獣を降伏させることができ、ライオンやトラが子猫や子犬のようにおとなしくなり、彼をとても尊敬しました。牛頭法融禪師が牛頭山で修行している時、付近に野獣がたくさんいて、至る所にうろろろして、蛇も這いまわっていました。少しも彼を傷つけることがなかったのです。これは彼が少なくとも阿羅漢のレベルに達していたことを表しています。

私はおそらくまだそのレベルに達していません。なぜなら、蚊も私を刺すからです。もちろん、蚊が来たらいつも刺すわけではないのですが、刺したい時に刺すのです。私も彼らの勝手にさせています。わかりますか。阿羅漢のレベルまで修行するとわかるのですが、動物はあなたに大変敬服します。小鳥やサルが花や果物を持ってきてあなたを供養します。これは、阿羅漢のレベルの最も特別なところですよ。阿羅漢の特色といってもよいでしょう。

以前、ある人がいて、彼は大変よく修行をしており、山の上に住んでいました。小鳥が花や果物を持ってきて供養しました。しかし、ある一定の時間修行してからはなくなりました。

なぜなら、小鳥は彼がどこにいるかがわからなくなったからです。彼の「存在」がどこにあるのかわからなくなったからです。それで物を持って来て供養しなくなったのです。決して彼のレベルが落ちたわけではありません。

## 問

先ほどマスターの講義を聞いていて、あなたに学ばなくてはならないと感じています。マスターは蚊があなたを刺すとおっしゃっていますが、先日「白宮」の小部屋で講義を聞いていた時、私は気がついたのですが、蚊はあなたを刺さないでみな私たちの方に来て刺していました。

## 答

みなさんのような多くの菩薩が来てくれて、私を助けてくれたのです。菩薩を刺すとより福報があるので、私のような凡人には構わなかったのです。菩薩の血を刺して吸えるのはたいしたものです。それで、玄奘が西方へお経を取りに行った時たくさん鬼や魔が彼を殺して、彼の肉を食べようとしたのです。聞くところによると、菩薩の肉を食べると長生きでき、たくさん神通力と福報があるそうです。

あの日は、みなさんたくさんの方が来て蚊も忙しく、今までにあんなにも多くの菩薩が来るのを見たこともなかったのです、すぐにみなさんを刺したのです。私は毎日同じところに住んでいるので、ある時は刺されたり、ある時は刺されなかつたりします。凡人を刺しても彼らには

何の助けにもならないので退屈していたのです。それで、みなさんが来たら蚊は急いでチャンスを捕えて刺したのでしょうか。

あなたが私に学びたいというのもよいでしょう。ただあなたにわかってもらわねばならないのは、私も蚊に刺されるし、薬も塗らなければならぬということです。病気になったら、自分で治すことはできません。漢方医に脈をとってもらったり、西洋医に採血検査をしてもらったりします。その結果、彼らはみんな言います。「あなたは病気ではない」。しかし、私は病気で大変苦しいのですが、誰もわからないのです。ですから、私は「私は病気です」とは言いたくないのです。なぜなら、誰も信じないし、医者もみんな「病気でない」と報告するからです。しかし、私は確かに病気で、ただ、私だけがわかっていて他人は信じないのです。

みなさんは修行したら、蚊にも刺されないし、蛇にもかまれないし、トラがやって来てあなたに帰依し、供養するなどと思っただけではありません。私について修行する場合、こういったものを欲張ってはいけません。あなたにもこのようなことが起きる可能性は大いにありますし、またはないかもしれません。これは必ずというわけではないのです。蚊と同じで刺したければ刺しますが、私に「刺しますよ」と声をかけたりはしません。

観音法門を修行するということは、このように不思議なことなのです。自分が阿羅漢なのか、菩薩なのかもわからないし、自分のレベルがどこなのかもわかりません。修行してから、達磨



のように変な衆生になるかもしれません。他の人が「あなたは誰ですか」と彼に聞いても、彼もわからないのです。もし、これを「禪」を長年修行した人たちに聞いたら、このような問題に対しては必ず回答をするでしょうし、または何かを描いて人に自分のレベルをわからせるでしょう。または、「カルマは本来と空なり、衆生は本来有なり、色即是空、空即是色……」などと奥深い禅語を唱えたりするでしょう。人はそれで初めて彼のレベルがどんなものかを知ることになるのです。

観音法門を修行する人にはこんなことはありません。私もみなさんにそのようなものを教えられません。従って、みなさんはおそらく観音法門に失望するでしょう。わかりますか。もちろん、修行したら収穫があります。ないことはありません。もし、ないのであれば、私たちは何の必要があつて修行するのですか。なければ損です。私たちの宇宙にはあんなにも多くのものがあるのに、修行しても何も得られないのであれば、これは損をすることではないですか。

当然、修行すべきものはあります、ですから、それに基づき修行するのですが、話すことはできません。人に見せることができないばかりでなく、どんなものか描いて見せることもできません。みなさんは禅宗の十牛図を知っていますか。第一図は牛を探し、第二図は跡を見て、第三図は牛を見るのです。ただし、そのようなものは私たちにとってまったく役に立ちません。従って、私はみなさんにはつきり言っておかなければなりません。みなさんも、まずよく考

えておかなければなりません。私がみなさんをだましたなどと言わないことです。修行したらトラがやって来て頭をなでしてくれるというようなことはありません。トラを見たらすぐに逃げべきです。(笑い) あるいは直ちに反応すべきです。トラがやって来て頭をなでしてくれるのを、そこで待つてはいけません。危険すぎます。修行が高くなれば動物が来てあなたと親しくなるなんて思つてはいけません。そんなことはありません。動物はあなたの肉のにおいをかいでやって来るのですから。(笑い) 蚊の一番多いところで修行しようなどと冒険をしないようにしてください。二、三日も修行したら、骨だけになってしまうでしょう。(笑い)

観音法門の修行はとても普通です。自分のことをよく面倒見なければなりません。毎日おいしいものを食べ、冬には暖かい服を着、夏には薄着をすることです。食事も栄養のある、高タンパク質のものを食べるべきです。観音法門を修行したら、決してこの体がどうでもよいということではありません。わかりますか。

人によってはおそらくまだわかつてないでしょう。まだトラの頭をなでたいなど思っています。私はトラがいるところには住めませんからね。(笑い) 万一、ある日トラが自分の仏性が見えず、ただ自分のおなかだけが見えたとして、そこに私が座つていて、やさしそうなのを見たら、いとも簡単に私をおなかの中に入れてしまおうでしょう。そうなったらどうしましょう。(笑い) それで私は深山で修行したくないのです。トラにかまれるのが怖いからです。(笑い)

**問** 私は一冊の禅宗の本を見ましたが、作者が言うには、悟りを聞くのは大変難しいことで、たくさんの大師が一生涯学んでやっと悟りを聞くとのこと。教えてください。悟りを聞くときみな「空」になってしまうのですか。

**答** もし、何も考えないのであれば、それでは石ころになるのと同じではないですか。もともと、たくさんのものがあるのに、修行したらみな空になるのでは損ではないですか。そのような僧侶の話は聞く必要ありません。彼らは修行したらみな空になると思っています。もしそうなら、私は修行しません。それでは損ですから。私たちはもともと智慧があります。どうして空になるのですか。石ころも空なら、それでは私たち自分自身を失うことになります。

（禅師は常に「雑念を絶ち」、でたらめなことを考えてはいけません。頭をゼロに帰すべきだ、と私たちに教えています）ゼロに帰ってはいけません。ゼロに帰るとはこの意味ではありません。ゼロはこの「道」を指しているので、「空」で何も無いということではないのです。ゼロは本来の姿を指しており、源の意味です。その源にいる時には、私たちは分け隔ての心もなく善悪を区別しません。雑念をなくそうと思っても、そんなに簡単ではないです。ゼロに帰れという意味は、私たちに観音法門を修行しなさい、という意味なのです。観音法門を修行する時、私はみなさんが源に帰るよう助けるからです。その時が本当の「安心」なのです。このようなことは、言葉では話しようがないですし、また、話すことはできません。

問 私はマスターに学びたいと強く思っています。ただ、私の家のことをよく処理してからマスターに学びに来たいのですが、よろしいでしょうか。

答 誠心誠意なら構いません。そうでなければ来ないでください。誠心誠意でなければ、私はあなたを追い返すでしょうし、その時あなたは悩んで怒るでしょう。ですから、まず誠心誠意かどうか自問すべきです。直ちに私を信じなさいということではありませんが、誠心誠意に道を求めるべきです。先ほど私が話したことを、どうしてあなたはすぐに信じられるのでしょうか。体験があつて初めて信じ、体験がなければ信じる必要はありません。たくさん見て、たくさん聞いてから初めて信じることができのです。私の本をたくさん読んで、同感できるかどうか自分に問いなさい。修行してから、体験が得られ、進歩もあり、大変うれしく思い、利益があつて、智慧も開いた時初めて信じられるのです。ただし、誠心誠意であるべきです。

誠心誠意と信じることは同じではありません。しかし、みなさんが誠心誠意に道を求め、生死から解脱するために来るのであれば、私を信じなさい、と無理強いしません。誠心誠意とは自分に対してであり、信じるかどうかは、修行してからでよいのです。直ちに信じるべきだということではありません。わかりますか。

まだ物を買っていないし、使ってみてもないのにどうして信じるができるのですか。買って帰って使つてわかるので、確かに良いものだなと思つたら初めて信じられるのです。一般

の人は無理に信じさせようとします。天国と地獄があることを、阿弥陀仏がいることを、観音菩薩がいることをあなたに信じさせようとします。にもかかわらず、少しの体験もあなたに与えないのです。あなたは観音菩薩とは何かもわかりません。観音菩薩の少しばかりの光ですら体験できず、仏音も聞けないのに、これでは何を信じると言うのですか。私は絶対に無理やり信じさせることはしません。ただ、誠心誠意に道を求めて来るべきです。

**問** お尋ねしますが、出家者をどのように呼べばよいのでしょうか。

**答** あなたがどんな呼び方をしようが構いません。礼儀はそんなに重要ではありません。なぜなら、あなたの心は本当に無礼ではないからです。一般の人は出家者を僧侶と呼びます。ただ、マスターあるいはチンハイと呼んでも別に構いません。呼び名は特に重要なことでなく、あなたの真心が最も重要なのです。

**問** 私はある法門にかかわったことがあります。やはり光を見て、音を聞くことを教えるものです。マスターが教えているものと非常に似ています。

**答** たとえあなたが印心しなくても構いません。あなたの法門を引き続き修行するのも良いことです。私は無理強いしません。ただ、あなたに話して聞かせているだけです。本の中にもあ

りますが、ある師もよく似た法門を教えていました。しかし、実際はまったく違うものです。そのような師はオウラック（ベトナム）にはたくさんいます。アメリカにもいます。インドだけでも二、三種類あります。見たところ「あまり大差ない」法門のようですが、実際はまったく違うのです。私が教えているのは最もオリジナルで、最もはつきりした、最高の法なのです。彼らは別のところから法門を盗んで持って帰り、むちゃくちゃに教えているので、教えてもはつきりせず、また教え方もよくありません。彼らは半分しか教えなかつたり、一部分だけ教えたりして、一〇〇%教えないのです。従って、弟子はその後引き続き修行することができません。例えば、万一教える人が死んでしまったら、あなたは引き続き修行することができません。なぜなら、彼は第一歩はどうすべきかだけを教えて、第二歩はどうあるべきなのかを教えてないからです。わかりますか。

現在のインドにもそのような不完全な教え方があります。あるものは、マスターが非常に厳しいので、弟子をテストするのです。弟子に完全なものは教えていないのです。しかし、真に偉大な仏陀や菩薩はそんなことにはこだわりません。あなたが修行してもしなくても、一〇〇%あなたに伝えます。その後あなたが修行しなくても、あなたに対して何もしません。しかし、一部分しか教えなくて、万一師が死んでしまったら、あなたはどうやって引き続き修行したらよいのかわからないでしょう。

以前、インドに一人の師がいました。彼はたった一句しか教えませんでした。例えば、あなたは第一世界の蜜語（真言・マントラ）だけしか教えません。その他の第二、三、四、五、六、七、八などの世界については何も話しません。弟子の修行が第一世界のレベルに到達したら、再び彼を訪ねてきます。その時に初めて、第二世界の蜜語を教えるのです。彼は規則を非常に厳格に定めていたのです。

ただ、弟子がまだ第二世界に達する前に師は往生してしまったので、弟子は再度生れ変わって来て、他のマスターを探して修行しなければなりません。しかし、このマスターも彼には完全な内容を告げず、ただ、彼が第二世界へ到達したと告げただけで、彼がまだ修行をよくしてないうちに、その師がまた往生してしまったので、その彼はまた生れ変わって、他のマスターを探して修行をすることになりました。そして、最後にとうとう私の師のところへやって来たのでした。

これは最近の話で、十数年前のことにすぎません。その彼は、私の師に対してこう言いました。「マスター、今回私は完全な地図が欲しいのです。半分なんていりません。一部分でもいりません。私はすでに二回生れ変わってきています。毎回師はほんの少ししか教えてくれず、まだ学び終えてないうちにその師は往生してしまうのです。だからお願いです。完全に私に伝えてください。万一あなたが往生されても、私が引き続き修行を続けられるように」と。

時には、私も大変な挫折を感じることもあります。なぜなら、人々はこの優れた修行方法について感謝しないばかりか、誹謗し、カルマまで造るからです。けれども、私は引き続き一〇〇%法門を伝えていきます。それは非常に誠心誠意な人がいるからです。法門を全部伝えれば、万一明日師がいなくなってもみなさんは修行が続けられます。半分だけ伝えて、マスターが行ってしまったら、みなさんは必ずもう一度生れ変わって来なければなりません。なぜなら、法門の全部がなかったら、あなたは三界を超えられないからです。

ある師は同じことを講義しますが、ただまず教理を教えるだけで法を伝えることはありません。毎月あなたに講義録を一部送付してあなたが理解するのを待つのです。二年たってから初めて法を伝えるのですが、伝える時にはただ一句を教えるのです。私のように、人々を一世で解脱させて永遠に戻って来ないようにするために、公に一回で全部教えてしまうのではなく、ありません。







## 臨終の状況

一九八七年九月十一日 フォルモサ・羅東において

今日は、私たちが最も恐れているけれども、避けられないことについて話します。それはすなわち「死」です。生老病死の中で一番恐いのが最後のものですね。そうでしょう。恐いですが、避けられないのです。今日私が話したいのは、大部分の人の死ぬ時の状況は、どのようなものかという話です。

私たちが聞くところでは、この体は金、木、水、火、土と魂から構成されていて、魂は仏教では「真体」「本来の面目」あるいは「仏性」と言いますが、今はこのような名詞にこだわらず、私は魂と言います。みなさんがわかりやすいからです。

私たちは人が死ぬ時、魂が出て行くと聞いています。この金、木、水、火、土からできている体を離れます。しかも金、木、水、火、土も互いに分離してばらばらになります。なぜなら、魂が体の中にある時は、一つのものがみなを引きつけて一緒にしているようなもので、この数

珠と同じで、中に糸が一本ある時数珠はみな一緒ですが、私が糸を抜いたら、珠は全部地面に落ちてしまうようなものです。

私たちが死ぬ時の状態も同じです。ただ私たちは数珠ではありません。感覚があるので、死ぬ時は非常に苦痛で、苦しいのです。第一に私たちはこの世界を離れたくないし、友人、夫、奥さん、息子、お父さん、お母さんなど親しい人と別れたくないからです。第二に非常に恐ろしくて、この世界を離れてからどこへ行くのかわからず、今まで他の境界（きょうがい）のことはまったくわからず、この世界のことしか知らないからです。第三に自分の訓練がよくできていないので、死んだ時どうしたらよいのか知らないからです。そうでなければ、死ぬ時は非常に楽しく、恐がるようなことは何もないのです。

臨終は最も楽しい時です。もし、私が明日にでも行けるとしたら、最もうれしいことです。ただし、今はまだ行けません。みなさんにここに引つ張られているので、やらなければいけない責任がまだ残っており、みなやりとげてから初めて行けるのです。今日行こうとしてもだめで、仏陀や菩薩に押し戻されてしまうからです。

広欽老和尚が禅定して、高い境界で仏陀や菩薩と学んでいた時に、戻って来なくなかったという話を聞いたことがありますか。とても楽しかったからです。あの境界は大変良く、美しく、自在で、ゆったり落ち着いて安らかで、誰がこの小さくて暗黒の牢獄へ戻って来たいと思いま

すか。誰も思わないでしょう。もし私たちの魂が抜け出して、高い境界で学ぶことができるとしたら、やはりこの小さな暗黒の牢獄へ戻るのを嫌がるはずです。広欽老和尚も当然ながら戻りたがらなかつたのですが、もう一度下りて来て衆生を救うべきであり、それから上がって来てもよいと、仏陀や菩薩が彼に告げたのです。

多くのマスターたちも彼と同じ様な状況です。ある日、私のマスターが椅子に座って非常に嘆き悲しんでいたのです。弟子が「マスター、私は今まで、あなたがこんなに悲しい様子をされているのを見たことはありません。今日はどんな悩みがおありなのですか」と尋ねましたが、彼は返事をしませんでした。弟子は再び聞きましたが、それでも答えませんでした。三度目の質問でやむなく返事して、言いました。「そうさね。誰がこんな所へ戻って来たいと思うかね。誰がこの肉体へ戻って来たいなんて思うかね。無理やり戻されてこの肉体の牢獄に住むのは本当に不愉快だよ」

同じ様なことで、普段自分自身をよく訓練していれば、この世界を離れる時は、買い物に行つたお母さんが私たちに、あめやビスケットを買って来るのを待っているのと同じようなものです。高い修行を積んだ人は臨終の時になつても、子どもがお母さんが買い物から帰って来るのを待つのと同じで、何も恐ろしいことはありません。ただ大多数の人はこの世にいる時に練習してないので、どうしたらよいかわからず、どうしたらよいか教えてくれる人もいないので

す。だから死ぬ時は非常に苦痛なのです。

この娑婆世界では、多くの人が多くのことを教えてくれます。お父さんやお母さんはどうご飯を食べるのか、どう路を歩くのかを教えてくださいます。教師は英語の書き方、中国語の書き方を教えてくれます。その他にも、私たちにたくさんのお話を教えてくださいます。医者、看護婦、または助産婦は未来の母親にどうやって子どもを生むかを教えます。例えば、妊娠中はどのように体を扱うか、胎児をどのようにすれば、お産の時に生みやすくて、あまり痛くなくてすむかなどです。

しかしながら、誰も私たちに對して死ぬ時はどうすべきかということをお教えずにくださいません。このことは欠落しています。生老病死の中で「生」は教える人があり、「老」も考える人があります。養老年金や老人保険を事前に準備したりします。「病」も医者が治療しますし、医療に携わる人たちが病気の予防を教えてくださいます。しかし「死」は誰も教えずにくださいません。これは良くないことです。ですから、明日私はみなさんにどのように「死」ぬのか（印心を指す）をお教えます。今日はまず死の状態について話します。

大多数の人は死ぬ時にこの世界を離れることを望みません。お父さん、お母さん、夫、妻と別れるのが忍びないのです。なぜでしょう。それは、一生涯彼らと生活を共にし、毎日彼らのことばかり思っていたので、別れる時になって、彼らのことだけが頭の中であって、まだ愛情

があり、自分の奥さんに未練があり、心の中で「彼女はまだあんなに若いのに、誰が面倒見なのか。子どもはまだあんなに小さいのにどうして私が行ってしまったていいものか」と思い、心中非常に心配でならないからです。私たちが心配している時、私たちはもつとも重要な期待を、息子や、妻、夫の身にかけているのです。この切っても切れない思いのために、私たちは再び戻って来て輪廻するのです。

再生する時、奥さんや、夫やお父さんになって来るのではなく、犬になる可能性も非常に大きいのです。そうなるとうる介です。なぜなら、犬になっても彼らに近づくことができるからです。苦痛はここにあるわけで、もし私たちがもう一回来て、以前と同様にお父さんや、夫、奥さんになれるのだつたらまだいいのです。そういうことだつたら当然みなまた帰ってくることを歓迎するでしょう。

しかし、毎回希望通りになるのは不可能です。なぜでしょう。因があれば、果があるからです。例えば、私たちがオレンジを植えればオレンジが採れるし、リンゴを植えればリンゴが採れます。もし生きている時に何も善いことをせず、ただ悪い種ばかりまいていたら、死んでから再び戻って来る時には、当然この悪い種の結果を得なければならぬのです。もし私たちの品性や個性、生活様式が犬とあまり変わらないなら、再び人間になることに値しないので、犬になつて再来しなければなりません。これは決して、神が私たちを罰しようとしているわけ

はなくて、私たち自身がこの路を造り、そのような結果を造ってしまったからです。私たちがリンゴを植えたら、当然リンゴを得なければならぬのです。犬の因を植えたら犬の果を得る、人間の因をまいたら人間の果を得るのです。

人間とは何でしょう。人間は布施、戒律、忍辱、精進、禪定などの品性を備えています。人間は殺生しない、盗まない、酒を飲まない、邪淫をしない、嘘をつかないという五つの戒律を守るべきです。殺生しないとは動物の肉を食べないことを含みます。私たちは自分の手で殺しはしませんが、他人が殺した物を食べます。彼らは私たちのために殺生をしているのであって、これは間接的殺生であり、それで私たちに影響があります。もし私たちがこの五つの戒律を守れなかつたら、再来して人間になることはできません。

ですから、どんな宗教の経典の中にも、この世のことをそんなに多く思っていない、離れ難いと思っていない、この世に執着してはいけない、と強調しています。なぜでしょう。なぜなら、私たちがこの世を思えばこの世に再来するし、神を思えば上に行くし、仏陀を思えば仏陀の所に行くのです。それで、宗教はみなその辺のことを教えているのです。ただし、仏陀を思うこと、神を思うことは決して簡単なことではありません。

みなさんはすぐ往生したいですか。印心とはすなわち往生を学ぶことです。印心が恐いなら、印心に來る必要はありません。印心とは、私がみなさんにどのように「死」ぬのかを教えるこ

とです。その他には何も教えることはありません。死ぬ時はどんな様子なのかを教えるだけです。印心の時死ぬのと同じようになります。ただしこれは偽の死であり、楽しい死で、苦痛な死ではありません。みなさんが死が怖いなら、印心に來る必要はありません。印心は死ぬ時のあの状態と似ていますが、今私が言っているように、怖いものは何もないばかりか、大変面白いものです。

死んだ時、徳の足りない人は再び戻って来て動物または幽霊になります。あの孤独な幽霊、野卑な鬼、餓鬼になります。七月の頃、みなさんは爆竹を鳴らし、賑やかに二羽の鶏、一頭の牛、一匹の豚、三個のリンゴ、三本の線香でお参りしますが、それはあの幽霊や亡霊を供養するためなのです。もし供養する人がいなかったら、彼らは餓死してしまいます。徳のない人は死後、あの餓鬼とか、幽霊や亡霊になってしまうのです。

カルマの非常に重い人は死後地獄に落ちます。カルマとは何でしょう。それは良くないことで、例えば、生きている時に悪いことや殺生、邪淫や人をだましたりすることなどです。私はわざとみなさんを脅かしているわけではありません。ただ經典の中で言われていることを話しているだけです。地獄は本当にあります。ないのではありません。それは、衆生の因果が造り出したものです。

先ほど私はオレンジを植えればオレンジが採れると言いました。私たちが良い因果をまけば、



良い結果が得られるのです。悪い因果をまけば、悪い結果を得るのです。地獄は私たち人間が悪いことをして造り出したものです。天国があるなら、すなわち地獄があります。地獄がある信じると、天国もあると信じるべきです。幽霊がいると信じるなら、仏陀もいると信じるべきです。福報のない人については話をするのはもうやめます。私はみなさんがみな福報のある人だと期待します。フォルモサは非常に福報が多いようで、多くの人が裕福です。ただし、死後はどうなるかわかりません。このようなことは誰も話さないからです。

占いができる人はたくさんいます。みな「あなたは大変良い。二年後にはお金が儲かるでしょう。卒業できるでしょう。会社のオーナーになれるでしょう」などと言います。しかし、誰もあなたが死後どこへ行くのかを占える人はいません。私たちが一番聞きたいことは誰もしやべらないのです。私たちが一番知りたいことは誰も教えないのです。そうでしょう。みんなですらめなことを教えるだけです。

例えば、子どもを生むことについては、これは教えなくても生むことができます。動物に子どもの生み方を教える人はいません。しかし、動物は非常に多く繁殖しています。ただ私たち人類が「慈悲心」がありすぎて、彼らをほとんど食べ尽くしています。さもないければ、彼らもつと多く生んでいるでしょう。そうですね。動物は誰も教えませんが、子どもをたくさん生みます。だから「生」は教える必要がないのです。

「老」についてはどうでしょう。私たちは本来老化するものです。数十年後、何もしなくても老いてしまいます。養老年金、保険金があったとしても、安心できません。人によっては、養老年金があるにもかかわらず、それまで生き延びられません。そうですね。養老年金を享受できるまで生きられないのです。

「病」の時は、たくさんの医者がいるといっても、これで万全であるとはいえません。そうですね。現在医者が治せないたくさんの病気があります。例えば、エイズはまだ治せる薬がありません。ガンも治しようがないです。そうですね。現代の人はお金もたくさんあり、病院も多く、薬もたくさんあります。しかし、病気はやはり病気であり、しかも、前よりさらにひどくなってきています。多くの病気はこれまで聞いたこともありません。なぜでしょう。これは、私たちが非常に多くのカルマを造り出したためです。

私たち地球上の人間はますます怠けてきており、道徳を忘れ、「道」にかなったもう一つの生活を忘れ、自然の法律と釣り合いのとれた生活を忘れてしまっています。勝手に天然の物を利用して、土地を利用して、天を利用して、自然を利用して、木材を乱伐しています。その地理環境のことを事前に調査もせずに、木材を伐採し、非常に多くの自然環境を破壊し、今日私たちが山に登りたいと思っても、登れないくらいにしまっているのです。

多くの場所で道端の木材を切り伐採し、木の根がないので土壌も固まらず、樹木の保護もし

ないので、泥土が流失しやすくなっています。これはほんの一例にすぎません。木を切る以外にも、動物を切り、人を切り、国家全体を切り、都市を丸ごと切っています。第二次大戦の時、日本の広島は町全体がほとんど平地になってしまいました。

私たちは、木だけではまだ飽きたらず、動物も切り、動物の後には人間も切っています。ですから、道徳のレベルの落ち方は甚だしいのです。私たちがそういう雰囲気を作り出し、そういう因果を造り出しているために、地球は非常に恐怖の場所となってしまうのです。地球は本来良い所だったはずですが、人間が最も高貴なものであるなら、私たちの地球も最も良いものはずですが、そうでしょう。しかし、私たちは自分の立場をよく理解できずに、自分を高貴な立場から引き下ろしてしまっています。本当に残念なことです。

「私たちは生まれて来たけれども、いつかは死ぬ定めになっている。少しばかり殺生したからといって何の関係があるのか。たとえ動物を殺さなくても、彼らは時間が経てば、災難にあつたり、病気になつたりしていざれ死ぬのだ。私たちがその人を殺さなくても、その人は自ら病気になつたり、年老いたりしていざれ死ぬ。だから少しの人殺しをしても関係ないのではないか」と自問している人がいるかもしれません。

もちろん、大いに関係はあります。というのは、彼の因果は死ぬ時期ではないのに、私たちが彼を無理やり死なせるからです。これは例えば、果物は熟してから食べるべきで、未熟のまま

ま食べたら、中毒になったり、腹痛、頭痛がしたりすることと同じです。野菜も同様です。従って、私たちが殺生すると、その魂を無理やり追い出すことになります。まだ出て行きたくないし、準備もできてないし、時期もまだ来てないのに、それなのに、無理やり出て行かせたら、カルマを造るのです。

さて、昔あったことをお話しします。釈迦がまだ生きていた頃、一人の国王が自分の子どもによって牢屋に入れられました。子どもは本来親に孝行すべきなのに、この王子は不孝者で、父王を閉じこめたのです。母親が牢屋に夫を見舞いに行き、差し入れをして夫に食べさせました。その時、王子はすでに国王になっていましたが、皇太后が父王に物を食べさせたと聞いて非常に怒り、皇太后も閉じ込めてしまったのです。仏教の物語を見たら、二人が牢屋に閉じ込められたことがわかります。

昨日、私は観無量寿経のことを講義しましたが、このお経はあの皇太后のためにあるのです。皇太后は牢屋にいる時苦しくてしようがなかったので、仏陀に祈り、助けを求めました。釈迦は彼女のマスターで、彼女は釈迦について学んでいたのです。助けを求めたらすぐやって来たのです。釈迦の化身が阿難（あなん）と目犍連（もくけんれん）の化身と一緒に牢屋に現れ、彼女を教え、慰めたのです。その時彼女は仏陀に質問しました。「どんな世界がこの娑婆の世界より、清らかで、多くの苦しみが無い世界なのか」。釈迦は彼女に多くの世界を見せてあ

げました。彼女は極楽世界が好きになりました。このことがあってから、この観無量寿経ができたのです。

この皇太后の因果は彼女の前世と関係があります。その時あまりにも苦しかったので、皇太后は釈迦に質問しました。「私たちは何も悪いことはしてないのに、なぜこんな因果な目に遭わねばならないのですか。なぜ王子は私たちに対してよくしてくれないのですか。理由をお教えください」。その時釈迦は言いました。「あなたは覚えているはずです。数十年前あなたたち二人には息子がいなく、誠心誠意息子を求めたところ、ある日夢を見ました。夢で天使があなたに『ヒマラヤの山である人が修行しているが、その人があなたの息子になって王子になるでしょう』と言ったのです。翌日あなたたちは目が醒めてから、ヒマラヤで修行しているその人を探し出して息子になりたいかどうか聞きました」

その修行者は自分が禪定した時、自分の因果が見えたので、「はい、私はなりたいです。ただし私の生命はまだ三年残っております。三年の修行を終えれば、生命も終わりますので、国王、王妃にはそれまで待っていただきます。その時にあなたの息子になります」と言いました。しかしその時、国王は非常に焦っていて、こう言いました。「私たちはもうこんなに年とってしまったている。もう二年も待ったら、私は死んでいるかもしれない。それでは不安だ。今すぐ私の息子になりなさい」。その修行者は言いました。「それはできません。無理強いし

ないでください。私の生命はまだ終わってなく、死期もまだ来てないのです」。その時国王は待ちきれず、剣で修行者を脅迫して言いました。「今すぐ私の息子になるべきである。もう待てない」

国王は当時修行もしてなく、忍耐力もなく、布施もせず、戒律も守らず、忍辱もせず、仏教にも出会ってなかったので、その人を無理やり死なせたのです。その修行者は言いました。「私の生命はまだ終わってないのに、あなたは権力で私を無理やり死なせようとしています。今後私があるの息子になる時は、あなたに対して親不孝でしょうし、あなたを殺して王位を奪うかもしれません」。彼は言い終わると、すぐ毒を飲んで死にました。

死後、王妃は当然すぐ妊娠し王子を生みました。そして予言者を呼んで運勢を占わせたのです。予言者はあの修行者と同じような話をして言いました。「王子は今後王宮を乱し、国王を殺し、国王を殺した後は王妃に対しても良くしてくれないでしょう……」。

彼ら二人は話を聞いて恐れをなし、すぐ王子を三階から突き落としました。殺してしまいました。かっただけです。育てたくなかったのです。不幸な結果に遭いたくなかったからです。しかし王子は死にませんでした。ただ手の指が一本折れただけで、抱き上げた時は、まだワーワー泣いていて死んでいませんでした。後にすすくと大きくなり、聡明でハンサムな子に育ちました。その頃には国王も王妃ももう殺すには忍びなくなり、大変可愛がって、心の中では「よし。構

わない、育てよう」と思いました。大きくなってから、この子がこのような大逆非道なことを本当にしでかすとは、夢にも思わなかったのです。

釈迦が話し終わると、王妃は思い出して心から悔い改め、もう息子のことを恨まなくなりました。後に、息子も後悔し、仏陀に帰依して修行に努め、よい人間となりました。

今、私がこの話をしているのは、因果は避けることができないものであり、何かの因をまけば、何かの果を得るのだということ、みなさんにわかってもらいたいからです。私たちが殺生し、殺人をする時は、彼らの魂を無理やり追い出しているのであり、従って、私たちはこの因果を受け取らなければなりません。彼らは後から私たちを殺しに来るでしょうし、あるいは私たちが彼らを殺した時と同様に、私たちを無理やり死なせるでしょう。もしかしたら、私たちが動物になって再来した時に殺されるかもしれません。人間になった時に殺されるとは限りません。この生涯で殺されるとも限らず、次の生涯で再び帰って来て、このカルマを清算するかもしれません。

従って、どんな宗派でもみな殺生しないことを強調しています。殺生しないとは動物を殺さないことを含みます。というのは、動物にも魂があり、命を惜しみ、死を恐れるからです。もし動物がそうでないなら、当然問題はありません。野菜や樹木には比較的このような命を惜しみ、死を恐れる意識はありません。石にもありません。それで私たちが野菜を食べてもカルマ

は非常に少ないのです。私たちが毎日観音法門を二時間半修行するなら、このカルマはないのと同じです。しかし、動物の潜在意識はすでにあり、彼らの死を恐れる態度は人間と同様なので、彼らを殺すことは問題があるのです。

私たち人間の場合はどうでしょう。私たちが死ぬ時、他人に強制されて死ぬわけでもなく、誰かに殺されるわけでもないのに、なぜあのように苦しまなければならぬのでしょうか。それは準備ができてないからです。ドアが開かないからです。

例えば、このドアが全部閉まっていて、長い間開けてないとしたら、当然ドアは壊れているかもしれません。仮に無理やり開けても、開かないかもしれません。火事になったら、慌てて開けようとしませんが、開きません。ぶつかってドアを開けるしかないのです。しかし、こんなやり方では、私たちはやけどしたり、つらく、痛い目に遭ったりすることになります。もし毎日ドアを開けていけば、慣れているので、一押しすれば開き、問題なくすぐ出られるのです。

同様に私たちの体にも多くのドアがありますが、どのドアでもいいわけではありません。例えば、私たちが三階に住んでいるとしたら、窓から跳び出るわけにはいきません。そんなことしたら、けがをするでしょう。階段を下りればよいのです。しかし、階段があるかないか知らなかったり、慌てていて階段がどこにあるのかわからなかったりして、火の中を逃げ回っていると、結果として火に焼かれてしまいます。



従って、練習しなければなりません。戦争がまだ起こっていない時に、私たちの国や政府は戦争の時と同じ状況を作って、私たちに事前の演習をさせます。私がオウラック（ベトナム）にいた頃、政府は警報システムを設置して、一週間あるいは一ヶ月に一回訓練をしました。「ウー」と、この音が聞こえたら、私たちはみな安全な所へ走って行って隠れるのです。五分か十分して警報が解除されてから出て来ます。私たちは何事もないことは当然知っていますが、毎日このような訓練をしなければならないのです。

しかし、死ぬ人は事前に練習をしていないのです。私たちはいつの日か必ず死ぬことを知っているのに、誰も事前に往生の練習をすべきであると考えつかないのです。一般の人がただ毎日考えているのは、朝は何を食べようか。昼は何を食べるべきか。晩は何を食べようか、ということです。十時以降にまた外に行つて軽食を食べたりします。外を見ればわかるでしょう。私が講義をしている時、道場には多くても数百人の人がいますが、外にはもつと多くの人が入いても、講義を聞く人は大変少なく、物を食べている人は大変多いのです。彼らは死ぬ時の練習のことは考えず、忘れてしまつています。いつの日か自分は死ぬということが明らかにわかつていながら、まだ百年もあるような感じを持つているのです。

本当にまだ百年もあるのでしょうか。何ともいえません。明日には死んでしまうかもしれませんが、多くの人が若いのに死んでいます。ですから、私たちはもう少し利口になつて、生きて

いる時に死ぬ準備をすべきです。

子どもを生む前にみなさんはよく準備しておきますね。前もって服を縫っておいたり、きれいな服を買って側に置いて、赤ちゃんが生まれるのを待っていたり、しかも男の子か女の子かがわかっていきます。それは前もって買い物しておく必要があるからです。まだ生まれる前からあんなによく準備しているのに、ではなぜ死ぬ時の準備は何もしないのですか。死ぬ時が最も重要なことです。生まれる時はたくさんの人が見に来て、付き添ってくれて、慰めてくれて、面倒を見てくれます。しかし、死ぬ時は誰も一緒にいてくれず、その時が一番孤独で、苦しいものです。なぜ生きているうちに準備しないのですか。そうする方が利口なやり方ではないのでしょうか。

私たちが苦しいのは、まさにこのためです。すなわち事前に準備ができてないからです。も準備したいのなら、ドアを開けるのを助けてくれる人を探すべきです。毎日開け、開けたら、また閉めます。また開けて、閉めます。そのようにしていたら、ドアはゆるんできて、開けたい時にすぐ開くようになります。さもなければ簡単には出られません。私たちにはドアはたくさんありますが、すべてが出口のドアとは限りません。例えば、この窓は外に出られそうに見えますが、そこから出たら、頭をぶつけることになります。出るなら大きなドアから出なければなりません。しかし、大きなドアが開いていなかったら、やはり出られません。

私たちの体では、目もドアであり、耳も、鼻もドアです。私たちの体には九つの穴があり、それらはみなドアです。しかし、もしそれらのドアから出ると、私たちはまた輪廻転生して、高くない境界（きょうがい）に生まれることとなります。ただし、一つのドアがあつて、もしそこから出て行けば、非常に高い境界に行くことができます。そのドアは目では見ることでできず、普通の鍵では開けられないのですが、修行している人だけが開けられるのです。私たちがまだ自分では開けられないなら、その修行を十分した人に聞きに行くべきです。なぜなら、彼は自分でドアを開けたことがあり、どうしたら開くのか知っているからです。そして、私たちにどうしたらこのドアが簡単に開くのかを教えてください。

私たちはみな「生」に備え、「老」に備え、「病」に備えることができます。仕事をしている時に、なんとか少しばかりでも貯金をして、将来病気で仕事ができなくなった時に使えるようにします。もしそうだとしたら、私たちは同様に功德を貯金して、死ぬ時に使えるようにもすべきです。功德は布施によるものではありません。布施は当然助けにはなりません。布施をする時の私たちの心は比較的空っぽであり、寛大です。一日中自分のことばかり考えるのではなく、他人のことを考えます。他人のことを考えると、私たちの心の空間は広がるのです。

それで、戦争の時、人の心は広がっています。国家の安全と危機のみを考え、個人の家庭のことは考えないように変わり、心の空間が広がります。例えば、私たちの目が鼻ばかり見て

いるとすると、私たちは鼻のことしか知らないことになるし、きれいな女性に魅せられると、自分の鼻のことは忘れて、私たちの心の空間はその女性のところにまで広がることになります。

同様に私たちが布施をすると、心が開いて朗らかになり、この「私」を忘れ、心の空間が広く変わります。空間が広れば広がるほど、私たちはゆったりして、窒息感がなくなります。ですから、布施をする人は非常に自在であり、見たところ自由で楽しげです。なぜなら、彼の心は広々として、目で遠くを見るのと同様だからです。もし私たちが狭い窮屈な部屋に住んだら、うっとうしく感じます。そうですね。閉じこめられたように感じます。もし私たちの家が広ければ、空気の流れがよく感じるのではないですか。市街地に長く住んでいると、うっとうしく感じて、休暇を取って田舎で遊ぶとか、山歩きしたくなるのは、空間が必要だからです。

布施も同様です。布施とは自分のために無形の空間を作り、呼吸がしやすい良い雰囲気を作ってくれます。布施は自分の精神を助けることができます。従って、どの宗派も自分を愛するのと同じように人を愛せよと教えています。これは布施が私たちに有利だからです。ただし、もしただ布施をするだけなら、それは智慧のドアとは関係ないことです。たとえばあなたが毎日布施をしたとしても、百万年経ってもこのドアは開けられません。このドアを開けるには、専門家によらなければなりません。手術をする医者や手術を専門にし、家を建てる人は家を建てるのが専門で、英語を教える人は英語を教えるのが専門なのと同様です。悟りを

開いた人も人に代わって、専門に人のために悟りを開かせることができます。自分自身のドアがよく開いていれば、他人のも開けてあげられるのです。

もしこの無形のドアを開けないでいると、私たちはウロウロ走り回るようになります。例えば、私たちが死ぬ時、生前に「往生」の練習をしていないので、魂が出て行くこうとする時、ドアはみな閉まっていて魂は出られません。行ったり来たり、あっちへ動き、こっちへ動きするだけです。それで非常に苦痛を感じるようになります。もしドアが開いていたら、魂（あるいは意識、主人と言ってもよい）は自動的に出て行きます。

開いているのが良いドアだったら、魂は出てから自然に楽しくなります。万一、悪いドアだったら、出てからすぐ困難にぶつかります。魂は勝手におなかを見つけて、その中に入って受胎してしまいます。もし人間のおなかに入ったら、まだそれほど間違えたとはいえませんが、万一、動物のおなかに入ってしまったら大変なことです。

これは真実です。みなさんは新聞とかテレビで、このような報道を見ることがあると思いますが、ある動物が泣くとか、ある動物は人間に似ているとか、あるいはある人は見たところ動物に似ているとか、これらはみな魂があちこち走り回って、出口を知らなかったための結果です。

私が印心するのは、みなさんにどの路を行くべきかを教えることです。防空演習の訓練と同

様、本物ではありませんが、実際の状況に出会った時、気が楽になるのです。軍人も同様、フォルモサ（台湾）では兵役年齢に達した男子はみな兵隊に行かなければならないのです。そうですね。兵役が終わった後も、時たま徴兵されて兵隊になります。訓練が必要だからです。

修行も同様です。印心の時、私はいかに死ぬかを教えます。私は何も特別なことを教えるわけではなく、ただみなさんに、いかに死ぬかを教えるだけです。ただし、みなさんも毎日練習しなければなりません。さもないと忘れてしまうからです。どうしてでしょう。毎日この世の中のことを知り過ぎて、近づき過ぎて、妻や夫に私たちの注意力を吸い取られ、仕事や雇い主に注意力を吸い取られるからです。例えば、昼寝をしたいと思っても、彼らはすぐやって来て文句を言うし、奥さんもやって来て文句を言います。そうですね。ですから、私たちは毎日少なくとも二時間半の時間を節約して、往生の練習をすべきです。

これは兵隊に行くのと同じで、みんな知っていることです。兵隊は前もって訓練しなければなりません。それで初めて戦争の時に簡単に殺人ができるのです。しかし、死ぬ時のことも前もって自分を訓練しておくべきだ、ということを考えていた人はいません。これは何も神秘的なことではないし、何も不合理なことでもありません。これはとても自然なことであり、食事したり、眠ったりするのと同じことです。ただ私たちに注意を喚起する人はいませんし、そのようなことを非常にわかりやすい道理で、聞かせてくれる人もいないので、私たちは何かとて

も面倒で、神秘的なことだと思つて、釈迦だけにできることで、自分のような「凡人」にどうしてできるのだろうかと思つたのです。

実際、釈迦と私たちに何の違いがあるのでしょうか。彼にも鼻、目、耳があり、私たちにも鼻、目、耳があります。釈迦のカルマは私たちより多いのです。誰もみなさんに話さないのは、彼らはあえて話そうとしないからです。私は今日釈迦のカルマについて、みなさんに話しましょう。

釈迦は生まれながらの王子でした。誰もが争つて彼を抱きたがり、放そうとしませんでした。彼がひと泣きすると、十数人、ひどい時は百人の人が走つてきて、彼の世話をしました。彼は人々に借りがたくさんあり、三十歳近くまで生きて、何もよいこともせず、毎日食べたり、飲んだり、遊んだり、またしよつちゅう狩猟に出かけました。冬には冬の宮殿があり、夏には涼しい宮殿があり、春にも春の宮殿があるのです。こんなことで何が人のためになるのですか。

私たちはみな人間としてなすべきことは、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧であると言つていますが、彼は少しもそんなことはせず、布施もせず、みな国のものに頼つて成長しました。毎日多くの人が彼に仕え、両親までが彼のあとについてまわり、彼が何かしたいと言えば、すぐしてやり、彼の部下も彼の後にびつたりとついてまわり、すぐ彼の言う通りにしました。彼の妻たちもみなこんな調子で、国全体が彼一人に仕える状態でした。こんなことでは人に借

りがたくさんあるのではないですか。

聞くところでは、もし一人の人間が布施もせず、または仕事もしないと、カルマは非常に重いそうです。そうですね。私たちはよい人となり、よき夫、よき妻となつて社会に利益をもたらさなければなりません。それによつて四つの重大な恩に報いる必要があるからです。しかし、彼は少しも報いることがなく、三十歳まで生きて、それがみな飲み食いや、遊びで世の中を享受するだけでした。彼のカルマは非常に重いものではないですか。しかし、このような人でも仏陀になれました。みなさんはこんなによい人間で、小さい時から両親に孝行、社会に対しても役に立つこと多く、愛の心があり、慈悲の心があり、布施をし、戒律を守り、忍辱もしている、それでどうして仏陀になれないのでしょうか。

なれません。必ず仏陀になれます。私が保証します。自分をそんなに低く見ないでください。これは私たち自身の問題です。私たちは自分を尊重していません。他人に対しては傲慢な態度をとつていながら、自分自身に対しては尊重していません。自分を尊重することと、傲慢になることとは違います。

傲慢とは何でしょう。人を軽視することです。彼の目には、女性はだめ、学問のない人はだめ、部下もだめ、支配人もだめなのです。なぜなら「私」は彼らより聡明だからだ、ただ「私」にはお金がないから、支配人になれないだけだ、と言うのです。それが傲慢な心であり、他人



を尊重しないだけではなく、自分をも尊重していないのです。自分を尊重しないから、他人も尊重しません。このような傲慢な心は一種の病気であって、自分を尊重していることではありません。

本当に自分を尊重する人は、他人をも尊重します。自分の価値がどこにあるかがわかっているとともに、他人の価値がどこにあるかもわかっています。そういう人は非常によく、自信もあります。うぬぼれません。うぬぼれる人は仏陀にはなれません。なぜなら、他人を尊重しないからです。自信のある人は仏陀になれます。この二点は違うことを理解すべきです。私たちは自信を持つべきであり、自分が仏陀になれることを信じるべきです。仏陀になれる人はいません。もし、私が嘘をついたなら、私は地獄に落ちるでしょう。

仏陀になれない人はいないにもかかわらず、多くの人が仏陀になれないのはなぜでしょうか。それは自信がなく、マスターの指導がなく、私たちの修行を励ます人がいないからです。「私たちは誰か。私たちにはどんな価値があるのか。私たちは何になれるか」と言ってくれる人がいないからです。

あるいは、私たちにこのような話をしてくれる人がいるかもしれませんが、私たちは聞いてもわからないし、またその人を信用しないのです。なぜなら、社会から受けている影響が非常に大きいからです。もし小さい頃から、お父さんやお母さんが、私たちに「お前は大きくなっ

たら必ず物ごいになる。お前のこの様子ではどうしようもない人間になる」と言って、私たちが両親の話信じたら、大きくなって自信のない人間になるでしょう。後に、また社会からの影響も受け、友人や上司が私たちを批判して「あなたはろくでもない、あれもよくない、これもよくない」と言うと、私たちは彼らの言うことを信じて、自分が本当によくないのだと思うのです。教師も「あなたたちはなんて愚かなんだ、こんなに長い間教えているのに、まだわからない、英語もしゃべれない、なんて愚かなんだ」などと言います。しかし、実際は愚かではありません。この世のことを学べない人は愚かな人だということではありません。

本当です。正直に言うとその世には何も学ぶ物はありません。私たちは小学校、高校、大学からずっと現在まで何を学べたというのですか。十九年も勉強していながら役に立つものがどれだけあるというのですか。みんな忘れてしまっているのです。何年も英語を勉強したのに、まだしゃべれません。フランス語も勉強しましたが先生に返してしまいました。数学を勉強したのに計算もできません。現在はコンピューターを使ったほうが速いから意味がありません。いろいろ多くのことを勉強したのにどれも役に立ちません。英語を勉強しても翻訳もできないのです。ここにたくさんの大学卒の人がいますが、ついでに聞きますけど、*Mathematics* は何ですか。知っている人はいません。(マスター笑う) どうしてでしょう。それはこの世のものは私たちにとつてあまり役立つものではないからです。

この世は無常です。たとえ、私たちが非常に多くのことを学んだとしても、別にどうということないのです。大科学者でも必ずこの世を去らなければならないし、最も有名な天才でもこの世を離れなければならないのです。最後には何もなくなるのです。

ですから、この世のことを学べない人は、決して愚かな人ではありません。卒業できなかった人も愚かな人ではありません。一番愚かな人というのは、どのように「死ぬか」を学んだことのない人であり、それこそが本当に愚かな人です。生老病については、たくさん学んでいるし、よく勉強しているのに、なぜ、ただ一つ「死」という科目についてだけは学んでいないのか考えたことのない人こそが、本当の愚かな人です。わかりますか。なぜなら、死ぬ時は本当に苦痛ですから。金、木、水、火、土が分解する時は本当に、本当に苦痛なのです。

ですから、人が死ぬのを見ると、非常に苦しんでいますね。そうでしょう。たとえ帰依しているマスターが立って念仏を唱えても、役に立ちません。両親と一緒に念仏を唱えてもやはり役に立ちません。教師が英語を聞かせても、やはり役に立たないのです。博士の卒業証書が置いてあって私たちに見せてくれても、やはり何の役にも立たないのです。妻や夫や息子が手伝いたいといっても、手伝えないのです。ですから、私たちは死ぬ時に手伝ってくれる人を探すべきです。

今日ある人が私にこう質問しました。「死ぬ時はほとんどの人はこの世を去るに忍びなく、

夫や妻のために心を痛め、この世のことで悩みます。こんなことでどうして去って行くことができるのでしょうか。確かにこれは大問題です。私たちが苦痛に感じるのはこの世を去るに忍びないからでもあるし、別の一面ではまだ準備がよくできてないからです。ですから、在世の真のマスターを探すがとても重要になるのです。いわゆる「仏陀」とは、真のマスターを指しています。私は「仏陀」という言い方は好みません。なぜなら、私が仏陀と言うと、みなさんは仏教における釈迦に執着するからです。それで、私は明師またはマスターと言うので

す。  
真のマスターとはすでに仏陀のレベルに達し、輪廻転生を超越したレベルに達した人を指します。この人は生死のドアを行ったり来たりできます。私たちが玄関を出たり、入ったりするのと同様に自由です。それで、この人は私たちを連れて出て行くことができます。どうして、私たちと一緒に連れて行くことができるのでしょうか。それは、生前私たちがこの人の弟子になり、印心を受けていれば、臨終の時この人は私たちを連れて出て行くことができるからです。

印心とは何でしょう。それは、すなわちこの人は、私たちを手の上に乗せることができ、私たちはその保護圏内にいることです。この人は化身となって私たちを迎えに来るでしょう。その化身は非常にきれいで光り輝き、三十二の相を備えています。また、たくさんの仏陀や菩薩

たちも一緒にやって来ます。私たちがマスターや西方の境界が現れるのを見た時、私たちは夫や妻のことを忘れてしまうでしょう。なぜなら、私たちはその時、夫や妻がこれらの境界と比べてあまりにもみすぼらしいことがわかり、心の中で「私はすぐに仏陀や菩薩について行きま

す。私の邪魔をしないで欲しい」と思うからです。

実際は、思う必要さえありません。マスターは来たらすぐあなたを連れて行くので、あなたは夫や妻やこの世のことを考える時間もないのです。彼らが泣いてもあなたは聞こえません。聞こえるのはマスターの講義と話だけです。仏陀や菩薩の音楽が聞こえて、本当に美しく妙なるものです。みなさんには夫や妻や親しい人たちの悲しみは見えず、ただ見えるのはマスターがとも光り輝き、威厳があり、ものすごいパワーを持っていることであり、西方の美しく妙なる境界やその他のいろいろな境界が見えます。あなたがこの世で修行した程度によってそれなりの境界が出現します。

例えば、私の弟子たちはそれぞれ修行のレベルが違います。もし第一世界のレベルに達した人がいたら、その人が死んだ時第一世界が出現します。第一世界はこの世よりもきれいなので、その人の衆生も私たちのこの世の人よりはきれいです。そうになると、私たちの妻は別に大したことがなく、比較すればわかりますが、すごく醜く見えます。ですから、彼女たちと別れるに忍びないということはありません。さもないと、私たちはこの世を離れられないのです。この世

は私たちをしつかりと縛り付けていて、世々代々縛り付けられています。今も相変わらず縛られています。今だって当然そうです。

この世に私たちはすでに来てしまっています。しかし、他の世界のことを私たちは知りません。万一、もっと良い境界（きょうがい）が出現して、私たちを引き寄せなかったり、荘嚴な仏陀や菩薩が、私たちを迎えに来てくれたりしなければ、私たちはこの世を離れることはできません。ですから、マスターが非常に重要なのです。一番大事なのは、私たちが死ぬ時であり、マスターが私たちを迎えに来てくれて、私たちの注意力を引きつけ、私たちの魂を連れて出て行き、私たちがこの世に縛りつけられないようにしてくれることなのです。

印心とは死ぬ時の状況を勉強することであり、それ以外の何物でもないので。しかし「死」を学ぶといっても、必ず良い方法を学ぶべきです。私たちが往生する時、自由に死後の境界を選ぶことができるのです。一般の人が死ぬ時のように、なすすべもなく、受け身で、助けもないような状態ではありません。

大半の人は、生前に少しの福報があれば、死後この世を離れる時に光を見ることもありますし、あるいは音楽を聴くこともあるでしょう。ただし、それらは非常に低いレベルのものにすぎません。例えば、第一世界のレベルに行つたとしたら、そこは阿修羅の所です。阿修羅の所にも天国もあれば、地獄もあり、阿修羅全体がみなよくないわけではありません。そこでは光

を見ることもできません。アメリカにある素人の予言者がいて、彼は医者ですが、病院での仕事の時、もっぱら死後生き返った病人の話を記録していました。その結果、発見したことは、彼らが言った体験はみな同じで、みな光を見たり、一人の光り輝く人が迎えに来たりしたことなどでした。

このような人は、修行した人ではありません。ただし彼らには福報があります。彼らは生前大変よい人間でした。ですから、死後天国へ行ったのです。天国へ行く人は光り輝く人が迎えに来ます。それが天使です。天使には光があります。ですから、彼らも光を見たと言うのです。ある人は非常に美しい境界へ行つて、戻つて来てから何週間も泣いてばかりいました。そこがあまりにも美しかったので、この世にもう帰つて来たくなくなりました。しかし、あちらの人が彼を帰らせたのです。「あなたの仕事はまだやり終わっていません。因果がまだ切れていません」と、あちらの人たちは彼に言ったのです。ですから、彼は戻つて来てから何週間も泣いていました。他人に話すわけにもいかず、後になってある人が彼に聞いたので、初めて話をしたのです。

大半の人は死んでから高い境界に行つても、戻つて来てから話をしただりません。なぜなら、話しても誰も信じないからです。特に西側の国では、例えば、アメリカでは彼らはみな科学を信じ、死後のことなど信じないからです。死後魂が戻った人の大部分は、戻つて来てから、み

な孤独感を味わっています。あんなにも美しい境界を目にしたのに、住むことができないので、何週間も泣いたのです。あの境界を見たのに、戻ってまたここに住まなければならないのは、当然、大変苦しいことです。

私は人が楽しくしているのを見るのが好きです。逆に弟子の中には私を見たら泣き出す人がいます。私は彼女に何でそんなに悲しんで泣くのかと聞きました。彼女は言いました。「マスターが私を高い境界に連れて行ってくれました。戻ってから、この世を見てとても嫌になり、もう住めそうにありません」

そういう状況であつても、引き続き生活していかなければなりません。逃げてはいけません。修行の高い人はこんなことにはなりません。修行を始めたばかりの人だけが、このように往生を急ぐのです。私の指示通り修行した人はすべて、今後みな上に行くことができます。何も焦る必要はありません。泣く必要などなおさらないのです。ただ、人によつては泣くこともあるでしょう。なぜなら、素晴らしい境界を見て、大変美しく、とても楽しかったのに、座禅を終えた後、また戻って来て夫や子どもを見なければならぬし、汚い市場に行つて買物をするしなければならぬからです。万一、夫が彼女に対してやさしくなかつたりすると、もつと惨めで、もつと苦痛です。

修行を始めたばかりの人はパワーが足りないために、いつも高い境界と娑婆の世界を比較し



ているので、このような状況が起こるのです。修行の高い人についていえば、楽しみと苦痛は同じものであって、何の問題もないのです。そうでなければ、どうやって生活していくのですか。私のマスターもある一日だけ悩んだことがありますがおそらくその日は体の具合が悪くなかったからか、弟子が言うことを聞かなかったから、そのようになったのだと思います。そうでなければ悩んだりしません。私も時には悩みますが、人には知られないようにしています。なぜなら、私が悩んでいたら、弟子は当然離れてしまうでしょう。

ある弟子は修行すると「私はもう夫もいらぬ、妻もいらぬになった」と言ったりしますが、これはいけません。私たちは世俗の責任を全うしなければなりません。私たちの因果は必ず清算すべきで、逃げてはいけません。修行者は勇敢であるべきで、どんなに苦しくても必ず耐え忍ぶべきです。なぜなら、これが最後の一世だからです。他の人と比べて、私たちは本当にラッキーなのです。他の人たちはこの世にまた戻って来なければならぬし、しかも何時になったら戻って来られるのかも知らないし、戻ってから人間になれるとは限らないし、幽霊や動物などになる可能性も大いにあります。

印心の時に、私たちはこれが最後の一世であるとわかります。当然、もし怠けて私の指示通りに毎日修行しなかったら、再び戻って来なければなりませんし、三回も四回も戻って来なければならぬかもしれません。一回だけではありません。私は怠ける人が一世で解脱できると

は保証しません。釈迦でさえ保証していません。当時でも須陀洹（しゅだおん）がいました。須陀洹のレベルを得ると、二回または三回、四回と戻って来なければならなかったのです。阿羅漢になってはじめて戻る必要がないのです。阿羅漢のレベルを得た人は、みな修行の努力をした、レベルの高い人たちです。須陀洹とは怠けてゆっくりと修行する人のことであり、一日修行しては、二、三日「休息」する人で、そういう類の人は当然再び来なければなりません。

しかし、この世にまた来ることは、本当に苦しいことで、まず子どもにならないけません。子どもの時はすべてがはつきりせず、何もわからないのです。成長してもマスターを見つけないことができないかもしれないし、年老いてからやっとマスターに会えたとしても、ほとんどの人は、みなすでに八十歳にもなってしまうてから、マスターについて学ぶことになりません。私たちは、このような人に対しては、戻って阿弥陀仏を唱えなさいと勧めています。本当に遅すぎるからです。私のマスターのマスターはさらに厳しく、六十歳を過ぎた人は受け入れないことにしていました。印心した弟子の父母だけを受け入れていました。

ただ例外もあります。特別な事情のある時は、私は受け入れます。私の弟子の中にはすでに八十歳になった人もいますが、同じように修行ができますし、六歳の子どももいます。六歳から八十歳まで老若男女全部います。彼らはみな修行ができるし、非常に良い体験をしています。古代の阿羅漢や菩薩と同じようにです。

阿羅漢とか菩薩は、何かすごい衆生だと思ふ必要はありません。実際、彼らも私たちと同じで、何も変わったところはないのです。ただ、内面が違い、レベルが違うのです。彼らの潜在意識はすでに成長していて、智慧は広く開いているのです。私に印心を受けた後はレベルも変わります。

釈迦に一人の弟子がいました。彼はすでに九十九人殺しており、最後に仏陀を殺して百人にしたいと思っていました。彼のカルマは当然非常に重く、無間地獄に堕ちるべきものでした。そうですね。なぜなら彼は阿羅漢を殺し、さらに仏陀を殺したいと思っていたからです。しかし、釈迦は反対に彼を救ったのです。彼は仏陀を信じたので、それから過ちを改めました。結果、修行後、阿羅漢になったのです。

在世のマスターはこのように貴重です。ですから、経典の中で釈迦はこのようにほめたたえています。「仏陀を探すのは非常に難しい。会うことは非常に難しい。仏陀に帰依して初めて解脱でき、地獄に落ちなくてすみ、輪廻して畜生にならなくてすむ」。仏陀とは在世のマスターを指しています。帰依するとは、釈迦に帰依するだけではありません。仏陀がまだ生きている時に、私たちは初めて彼に帰依することができますのです。往生してからは、その人の弟子に帰依しなければならないし、その弟子が往生してからは、その弟子の弟子に帰依しなければなりません。このような方法で帰依して初めて正しいのです。私の言っている意味がわかりま

すか。

私たちには現在帰依の伝統があります。これは古代からずっと伝わってきたものです。従って私たちは自在になりたければ、必ず真の師、マスターに会う必要があります。過去の仏陀を礼拝するではありません。そのようなことをしても無駄です。私たちが華陀や扁鵲を拝んだからといって、病気が治るわけでもないのと同じです。なぜなら、彼らは過去の医者だからです。もし現在の病気を治したかったら、生きている医者を探すべきです。生きている名医は必ずしも有名ではないかもしれませんが、それでも構いません。要はその人が私たちの病気を治しさえすればよいのですから。華陀のようにあんなに有名である必要はないのです。そうですね。

華陀と扁鵲は中国で最も有名な神のような医者です。ただし彼らはすでに死んでしまっています。どんなに彼らを拝んでも無駄です。同様に、私たちが過去の仏陀を拝んで、どうしようというのですか。拝むのは結構です。ただそれは彼らを尊敬しているからであり、過去、現在、未来の先生を尊敬するのは当然のことだからです。しかし、解脱したかったら、必ず在世の真のマスターを探さなければなりません。すでにドアの開いた、解脱した人を探すのです。そのような人は鍵を持っていて、私たちを助けてドアを開けてくれます。

これは非常に簡単なことです。別にそんなに神秘的なことでもないし、大したこともありません。

ません。もともと私たちは生老病死を学ぶべきであり、この四つを全部学ぶべきです。現在すでに三つを学んでいます。これにプラスもう一つ学ぶということは、別に大したことでなくてもなければ、難しいことでもありません。

私たちは、生、老、病以外にも「死」を学ばねばなりません。「死」を学ぶためには、毎日生死を思いのままにできる人を探さなければなりません。その人は死にたければ死に、生きたければ生きることのできる人です。そういう人であって初めて私たちを助けることができるのです。なぜなら、その人は専門家だからです。英語を専門に教える教師が、英語を教えることができるのと同じです。死を教える専門の教師であって初めて、私たちに死を教えることができるのです。みなさんは死を非常に恐れているかもしれないですが、恐れているからといって避けることはできません。避けようがないなら、早く勉強すべきなのではないでしょうか。

みなさん「死」について学びませんか。嫌でも駄目です。そのうちに往生の時が来るのですから。牛頭馬面（地獄の番人）がやって来て、私たちを無理やり引き離す時、非常に苦痛です。しかし、生前にこのドアが開いていれば、死ぬ時にはそんな問題はないのです。私たちの体には九つの穴があります。ただし、もう一つ見えないドアがここに（智慧眼の所を指して）あります。これは第十番目のドアです。生前に毎日観音法門を修行していると、死ぬ時にこのドアはすぐに開きます。非常に速く、一秒で開きます。しかし、みなさんのは毎日閉まっているの

で、私が一時間かけてやっとみなさんのドアを開けることができるのです。

昨日、みなさんは「マスター、あなたはまだ鍵を私たちにくれませんか」と尋ねましたが、鍵はあげられません。問題ありません。問題なのはみなさんのドアが開きにくいので、一時間の時間が必要なことです。私のドアはすぐに開きます。みなさんののは長い間、開けてなかったの、ドンドンたたかなければならず、比較的時間がかかるのです。私がみなさんに、鍵をすぐあげたくないではありません。あげるからには条件があります。通常でも人に来てもらってドアを開けたり閉めたり、あるいは鍵を作ってもらう場合、費用を払うか、または食事を出さなければなりません。私にドアを開けてもらいたいなら、やはり私の条件に従わなければなりません。必ず完全菜食であること、そして毎日二時間半を私に捧げることです。この二時間半は、みなさんが自分では開閉のできないドアを、私が開けられるように手助けしたことへの賃金です。それだけです。その他、私は何もいりません。

みなさんの代わりに、私にドアを開けてもらいたい人は、絶対に殺生をしてはいけません。慈悲心を持たなければならぬのです。これが私の条件です。みなさんは慈悲の心を起こさなければなりません。私たち自身が、あのように苦痛な死を無理強いされたくないのですから、当然直接または間接の方法で、他の生き物を無理やり苦痛の死に追いやってはいけません。良い因をまけば、良い果が得られます。私たちが平和に死にたいのなら、衆生が平和に死ぬよう

助けるべきです。この因をまかないで、どうして良い果が得られるのでしょうか。もし私がこのように教えなかったとしたら、それはうそをついていることであり、みなさんをだましていることになるのです。また因果律にも合わないことにもなります。オレンジを植えてどうしてリンゴがなるのですか。そういうことはありません。ですから、私はこれらの条件を言わなければなりません。

私は、みなさんに毎日二時間半を節約して、私に捧げるべきだと言いましたが、実際は私にくれるのではなくて、みなさん自身に与えているのです。ただ、みなさん自身に与えることはすなわち私にくれることに等しく、みなさんが楽しいことは私の楽しみでもあるのです。従って、みなさんが自分に対してよくしたくないと思っても、少なくとも私に対してはよくすべきです。二時間半を私に布施しなさい。私は何もいりません。ただ、みなさんに二時間半托鉢するだけです。もしみなさんが私に布施をするなら、死ぬ時はきつと楽しいでしょう。もしくは、死ぬ時を待つまでもなく、毎日が非常に楽しいものになります。座禅の時に西方浄土に行き、戻って来てから目を開けて、仕事に行くのです。学生が毎日学校に行つて勉強し、帰ってから食事をして予習復習をして、翌日また学校へ行くのと同じです。

いわゆる「常に仏陀に従つて学ぶ」です。すなわち、毎日仏陀の所に行つて学ぶのであって、この世で学ぶのではありません。この世で学べるものは何ですか。娑婆の世界では私もみなさ

んに何も教えることができません。ただ現在このように一般的な道理を少しばかり話をし、世間話をするだけです。ただし、みなさんが高い境界（きょうがい）に行くのであれば、私は他のハイレベルの道理を教えることができます。なぜなら、高い境界には違った道具があるからです。

昨日、私は第一の世界のことを話しましたが、そのこの衆生が発明した機器、またはどんな物でもみな私たちに比べて進んでいます。私たちが想像できない、見たことも聞いたこともない物です。私たちは現在コンピューター、テレビ、電話などを持っており、本当に進んでいます。実際はそんな物は大了なことではなく、みな彼らのゴミが落ちて来たのを、私たちが拾って使っているにすぎないのです。私たちの最高の科学者はあちらでは卒業もできない最低の学生で、落ちてきて科学者になった人たちです。卒業できた人はみな高尚な場所で他のことをやります。

「常に仏陀に従って学ぶ」とは、仏陀の所に行つて学ぶことです。私もこの娑婆世界で、できるだけみなさんに教えています。しかし、みなさんが高い境界に行った時、私は違うことを教えるでしょう。レベルが高くなれば教えることが違います。いずれの世界にもみな学校があります。みなさんが娑婆世界にいる時、例えば、無量光座禅センターにいる時は、私はみなさんに内在する神秘的なものを少しばかり教えます。高い境界に達した時には、やはり学校があり、



私はそこでも高いレベルの智慧を教えるでしょう。寝ている時に、私はみなさんをハイレベルの学校へ連れて行って学ばせます。なぜなら、みなさんは昼間は大変忙しく、まったく座禅をしない人もいるので、私としては連れて行きようがなく、夜寝ている時を見計らって上に連れて行って学ばせるのです。

眠っている時は力が入っていないし、頭もそんなに硬くないので、簡単に連れて行けるのです。昼間は難しく、座禅させようとしても、時間がないと言います。たとえ時間があっても、ダンスに行ったり、おしゃべりしたり、いろいろくだらないことをやっているのです。ダンスもいいですし、テレビを見るのもいいですが、ただしは時間を割いて座禅すべきです。テレビを見る時間がなくても構いませんが、座禅をしないのはいけません。必ず毎日死ぬ時の練習はしなければなりません。もし今日四時間あったら、テレビを一時間半見て、二時間半座禅をすればよいのです。明日もし二時間半しかないとしたら、全部座禅に使わなければなりません。

ただし、真のマスターの指導がなければ、みな「座禅」でなく「錯禅」です。いわゆる「錯禅」とは間違った座禅をすることで、だから「錯禅」というのです。「錯禅」すると、魔に取りつかれ、もうろうとし、昨日あなたが質問した状態と同じになります。正しい座禅をしていればそんなことは起こりません。大半の人はみな錯禅しており、どう座禅してよいかわからず、勝手に座っているの、錯禅と言うのです。

本当の座禅をしている人は非常に楽しく、もうろうとせず、座禅をすればするほど正しく、素晴らしいです。間違った座禅にはなりません。座禅と錯禅は違うのです。私が中国語がわからないではありません。錯禅とは正しい座禅をするのではなく、むちゃくちゃに座つて行うことです。（マスターの言葉遊び、中国語で座と錯は発音が似ている）座禅とは何でしょう。すなわち禅定です。外面は世界から離れた形が「禅」であり、内面が乱れてないのが「定」です。

（この時ちようど講義会場の外で誰かが大声で叫んで邪魔をしていた）もしみなさんの中で以前に魔を見たことがない人がいたとしたら、今、見てすぐわかったでしょう。魔とは何でしょうか。およそ、私が車で講義に来るのを邪魔したり、講義の時にわざと妨害するとか、その類のものがすべて魔です。魔とは頭の上に長い角が生えているから、魔だというわけではありません。人を妨げたり、邪魔したり、修行している人の妨害をしたり、マスターが人々を救うに行くことを邪魔したり、人々が講義を聞きに行くのを妨害したり、人々が講義を聞いている時に居眠りとかおしゃべりをさせたり、人々に良い道理を聞くことを邪魔し、自分のむちゃくちゃな意見だけを聞かせようとしたり、一日中たくさん無駄話をさせたりするもの、これらすべては魔に引っぱられたものです。

ここに來て講義を聞くのに、ただの二時間しかないのに、時間を大事にせず、おしゃべりま

でしたいのです。自分がとても重要だと思っているので、一日中人とおしゃべりした上に、ここに来てまでもまだおしゃべりをして、私に講義をする機会を与えようとしません。このようなことが魔に引っぱられたということです。魔とはその人自身のことではありません。魔とは一種のパワーで、このようなパワーがその人に影響し、その人をこんなふうに変えてしまうのです。

私のマスターがドイツで講義をした時、一人の人が外からやって来て、講演壇上に駆け上がりました。彼はたくさんの馬糞を私のマスターに投げつけようとしたのです。私のマスターは言いました。「よろしい。どうぞ」。結果はかえって何も起こりませんでした。その人はそこに立ったまま、投げつけることもできないし、置くこともできません。面白いことに、彼が投げつけようとすると同時に、感電したようになって、投げつけることもできなければ、置くこともできなかつたのです。その時、私のマスターは手を振って、彼を出て行かせました。出て行く時、彼の物が落ちてしまいました。私はちょうど前の方に座っていました。袋の中は衆生のカルマがいっぱい入っていたのです。(笑)

教師になるのも簡単ではありません。常にそのような魔障によって邪魔されます。なぜ魔障があるのでしょうか。それは人々の共通のカルマです。意味がわかりますか。講義を聞きに来る人の中にはカルマが非常に多い人とか、福報が少なく、非常に傲慢な人もいます。従って、

魔はそういう人を利用して面倒を起こすのです。もし、一人ひとりがみな純粹で謙虚であれば、魔としてはここにやって来て邪魔のしようがないでしょう。しかし、人々が純粹ではないために、魔の邪魔があり、定まったカルマがあり、共通のカルマがあるのです。

みなさんは大体同じ様なカルマを持っています。ですから、同じ国に生まれ、一つの家庭と一つの団体で生活しています。それがいわゆる共通のカルマです。共通のカルマ以外にまだ別のカルマがあります。これは、自分のカルマで、かなり特別で、他人とは異なっています。従って「個別のカルマ」と呼ぶのです。もし私たちが定まったカルマと共通のカルマを超越したのであれば、修行に頼らなければなりません。なぜなら、私たちは一種の最大のパワーを持つているからです。それがいわゆる本来の姿、あるいは仏性というものです。釈迦は「神を信じるべきだ」などとは言っていません。彼は「自分に頼って、自身の明かりとなりなさい」と言っています。

いわゆる「自分」とは何でしょうか。すなわち、本来の姿です。釈迦は私たち凡人の頭脳に頼るべきだ、などと言っています。私の言っている意味がわかりますか。どの衆生にもみな仏性があり、どの衆生もみな仏陀である、という意味です。このことを認識する前は、私たちは凡人です。認識した後は仏陀になります。私たちの中にはみな仏陀がいます。ただし魔もいます。もし、ある人が魔の部分をたくさん発展させていけば、魔の所へ落ちて行きます。わか

りますか。

従って、仏教ではこの二つのパワーを称して「魔仏」と言います。道教では「陰陽」と言います。もし、私たちが陰の面を發展させると、私たちは陰となり、陽の面を發展させると、陽になります。陰陽をみな平均して發展させると、それが「道」です。心の平常がすなわち道であり、道にかなった人がすなわち陰陽が平均している人です。「君子」とは陰陽が平均し、陰に偏らず、陽にも偏らない人です。「君子」とはみなさん男性を指すのではありません。女性の仏性も男性と同じです。

六祖慧能が五祖に会いに行った際、器量も良くなく、背も低く痩せこけていて、その上オウラック（ベトナム）からやって来たので、五祖は「お前は南蛮人だ。どうして仏陀になれるのだ」と彼に言ったのです。その頃、中国人はオウラック人を南蛮人と呼んでいました。彼らわが国を占領し、オウラック人を軽視していました。それで、オウラック人を南蛮人と呼んでいたのです。六祖慧能はオウラック人です。彼は南海からやって来て、顔かたちも良くなく、体も小さく、黒くて痩せていたからです。彼は木こりで、木を伐ることで生計をたてていて、大変貧乏でした。それで、彼が来るとすぐに、五祖は「お前のような、この南蛮人がどうして仏陀になれるのだ」と言ったのです。六祖は「人間は南北の区別があるが、仏性にはない」と言いました。

私も同様のことを言います。人間には男女の区別はありますが、仏性にはありません。もし男性だけが仏陀になれるとこだわっている人がいるとしたら、それは誤りです。君子とは陰陽が平均している人をいうのであって、「陰」の多すぎる人は女性で、女性の特性を備えているのです。「陽」の多すぎる人が男性で、君子とは陰陽が平均した人を指すのです。

従って、君子の形はこの肉体を指すものではありません。当然肉体を使って初めて衆生を救えるのですが、しかし、その君子の相というのはこの肉体ではありません。もし、私たちがその君子の相を見ようとするとするならば、必ず仏眼、天眼、あるいは智慧の眼を使わなければならず、それで初めて見る事ができるのです。肉眼では見ることができません。ただ智慧の目が開いた後では、肉眼でも見える日が来るでしょう。天眼を使わなければならないとは限らないのです。なぜなら、その時には肉眼が天眼に変わっているからです。たとえ、目を開けていても座禅はできるし、目を開けていても天国地獄を見ることができません。体はここにおいて講義をしています、同じ時刻に化身はアメリカに行つてその弟子を救っています。どんな衆生がどんな場所で祈り求めても、いずれも化身となつて行けます。それで「何千億の化身」というのです。釈迦だけが何千億の化身になれたのではなく、道を得た人は誰でも何千億の化身になれます。印心した後は、どんな人でもみな一人の化身のマスターが守ります。そうでなければ、全部の弟子をどうやって面倒見るといいますか。どうやって彼らを保護できるかというのですか。肉

体は一つだけです。どうやってそんなに多くの人の面倒がみられるのでしょうか。死んだ時に彼らを連れて上へ昇ることをどうやって保証できるのでしょうか。

そのような人は何千億の化身ができるからです。別の言葉で言うなら、誰でも彼の保護を受けることができるので、彼をマスター、先生あるいは父親と尊称するのです。彼が先生と同様に私たちを教えてください、また父親同様に子どもの面倒を見てくれて、そして私たちの魂を救ってくださるからです。だからこそ、彼を師父（マスター）と呼ぶのであり、法師と呼ぶのは彼が人に法門を教えることができるからです。

道を得た教師は英語の教師と同じで、英語の教師は英語を教えられるので Master of English であり、法師は Master of Dharma です。法は Dharma で、すでに法を得た人を法師とかマスターとか呼ぶことができます。さもないと、単なる一種の呼び名で、その名は形だけの名にすぎず、真のパワーは持ってないことになります。

**問** マスター、あなたは智慧のドアを開ける鍵を持っているとおっしゃいましたが、私としては、このドアが開かれた後に、結局のところ、生に向かうのか、死に向かうのか、あるいはその他のよくない場所へ向かうのかわかりません。証明の印があるのですか。もしあるのであれば、私はこれは真の法門だと認めることができ、安心して私の生命をマスターに差し上げられ

ます。

**答** 私に生命をくれる必要はありません。あなたの生命は自分で管理しなさい。私には暇もありませんし、管理したくもありません。あなたはただ私の指示通りに行えばよいのです。観音法門を学べば、当然保証があります。開悟の時に証明の印があります。あなたは自分の体験したことを經典と比較して同じものかを見ればすぐわかります。体験のない話は比較のしようもないでしょう。

いわゆる「印心」とは經典上の体験が直ちにあることです。それでこそ、初めて悟りを開いたといえるのです。体験もしないで、何の悟りを開くのですか。どんな証明の印のですか。何を印心するのでしょうか。印心とは以心伝心です。伝心の時あなたは、自分の得た体験が古代の修行者と同じものであること、また經典上に記載されているものと同じものでもあることを知るでしょう。

例えば、普門品の中に記載されているように、観音菩薩のパワーを得た時は菩薩の三十二の化身を見ることができるとし、おそらく観音菩薩があなたを救いに来ると見ることもできるでしょう。あなたが印心する時、おそらく私が来てあなたに何かを教えるでしょうが、これが第一の証明の印です。なぜなら、このことは私が菩薩の化身であることを表しているからです。いわゆる菩薩の化身とは一人の人を指すのです。その人は内面であなたに教えることができ、



あなたを連れて高い境界に行くことができます。そうでなければ、あなたは、この人が他の師と違うことをどうやってわかるのでしょうか。

第二の証明の印は観世音菩薩の体験があることです。観音法門を修行する人は、観音菩薩と同様に梵音や海潮音などを聞くことができます。印心の時にあなたはそのレベルに達するでしょう。もしこのレベルに達していない場合でも、少なくとも初歩的レベルに達するでしょう。必ず光が見えます。楞嚴経に記載されている二十五の菩薩の体験をご覧下さい。彼らが悟りを開いた時に見たものは何ですか。みんなが見たのは光ではありませんか。あなたが印心する時もすぐに光を見ることが出来ます。この点から、あなた自身で比較することが出来るでしょう。このような回答であなたは満足できましたか。（答える…満足しました）

**問** いわゆる光には良いものと悪いものの違いがありますか。

**答** 良いも悪いもありません。ただ低いレベルと高いレベルの違いがあるだけです。印心の時に、私があなたに話します。どんな光が低いレベルで、どんな光が高いレベルかを。

**問** いわゆる音流とは仏性のことですか。

**答** これは単に名称の違いだけです。時により異なる名称を使うのです。例えば、音流、音、

波動、梵音、海潮音、この世に勝る音など、実際はみな同じことです。「音流」は楞嚴經の中で述べられているもので、私は楞嚴經の中の名称を借用したにすぎません。釈迦は楞嚴經でこう言っています。「仏陀はこの音流によって下りて来て、衆生を救い、菩薩と衆生はこの音流によって上に昇り、円満な解脱を得る」。みなさんはこの話の段落を読んだことがありますか。

(答える人あり…あります)

(仏陀でも音流に頼らなければならないとしたら、これでは自在でないということではないですか) もちろん自在です。例えば、あなたの家に階段があれば、あなたは階段に頼って階下へ下りるべきです。当然のことながら、あなたは跳び下りることもできますが、相当痛いでしょう。あなたにパワーがないわけでもないし、この階段が大変なものであるということでもありません。これは単に下に下りるための一つの方法にすぎないのです。わかりますか。実際には「頼る」とも言えないのです。ただ、凡人の言葉では言いようがありません。言葉でものを言えは言うほどややこしくなります。従って、マスターが伝法する時は一言も話しません。それでもみんなは法を得ます。これを「以心伝心」と言うのです。

現在まで私はいろいろなことを話してきました。すでに三、四日連続で講義しています。しかしまだ伝法はしていません。その時は一言もしゃべりません。けれども、それが最も重要な時なのです。この三、四日非常に多くのことを話しましたが、みなさんはまだ法を得ていませ

ん。私が話をしない時が、印心を伝える時、つまり以心伝心なのです。この世の言葉は使いません、意味がわかりますか。言葉を使うと、話せば話すほど誤解が生じ、面倒が増えます。ご覧なさい。経を聞き、経を読む人があんなにも多いのに、悟りを開く人がいないではないですか。ですから、私は経典を使わない、別の方法を伝えています。

**問** マスターの著作の中でカルマは音流から生まれる、と述べられていますが、すべての事柄はみな音流から来るのでしょうか。

**答** そうです。もし音流からでないとしたら、どこから来るのですか。一切唯心造（すべては心で造られる）なのです。ですから、私たちのカルマは当然この仏性の音流から来るのです。

（マスターの著作で、すべてのものがみな音流から来るとおっしゃっています。もし私たちが罪を犯すとしたら、これは私たちの間違いではないということですか） 違います。けれども、もしあなたが閻魔王にこのように言っても無駄です。彼は「お前はやはり地獄に落ちるべきだ」と言うでしょう。そうではありませんか。あなたは閻魔王に向かって「私は無罪です。この罪は仏性であり、音流の罪です」と言っただけじゃありません。なぜなら、「知っている」と「解脱」とは決して同じではないからです。

（レコードの音がとんでいたとして、これは録音時のミスで私のミスではない、ということと

同じではありませんか) そうです。けれども、あなたとしてもどうしようもないでしょう。すでに録音済みのものであり、今となってはもう単純ではありません。わかりますか。あなたが自身が録音したけれど、あなたは知らなかった、だからあなたのミスではない、と言えますか。結局のところあなた自身のミスなのです。というのは、あなたという主人が録音したものだからです。

私たちも同じです。本性は非常に純粹です。この世は学校であり、私たちに物事を勉強させてくれます。ただ、私たちが学習する時、わかっていないために多くのミスを犯します。私たちは自分を責めるでしょう。たとえ「これはあなたのミスではない。あなたはまだ学習の段階だから、当然ミスもしますよ」と言ってくれる人がいたとしても、私たちはまだ安心できず、非常に焦ります。人によってはまだ卒業してないのに、ビルから飛び降りてしまうくらいです。わかっていないために、自分をコントロールができないからです。わかりますか。

悟りを開いてない人と悟りを開いた人とは外面上は何の違いもありません。悟りを開いてからも、食事もすれば、睡眠もとります。しかし、大変自在で、カルマはありませんが、現在もなお今までと同じで、開悟した後、美しく変わるといってもありません。当然霊体はなくなりきれいになります。ただ肉眼では見えません。開悟した後、外面は何の変化もありませんが、単に内なるものが変化するだけです。本人は今やカルマがなくなり、自分が仏陀であり、菩薩

あるいは阿羅漢であることがわかっているのです。

「わかっている」とはいうものの、わかってもいないのです。もし自分が仏陀であるとかわかっていたら、その人は仏陀ではありません。しかし、その人がわかってないとも言えないのです。このことは私としては明確に言うことができません。(笑い) みなさんが仏陀になったらわかるでしょう。私がこのように説明しても、みなさんは聞いてもまだ満足できないでしょう。私自身もまだ満足できないのですから。でも仕方ありません。これは凡人の言葉で話し尽くすことのできることはありませんから。

例えば、みなさんが私に「あなたは仏陀ですか」と尋ねたとしたら、私は「そうです」とは言えませんし、「そうでない」とも言えません。「そうです」と答えても正しいし、「そうでない」と答えても正しいのです。意味がわかりますか。もしあなたが、私は仏陀でないと行ったら、私はそう思わないし、またあなたが私は本当のところ仏陀であると言ったら、私はやはり満足しないでしょう。わかりますか。仏陀とはそんなものです。私の話がみな正しくないとしても構わないし、みなさんが私は仏陀であると信じなくても構いません。私にはみなさんを助けて智慧のドアを開ける能力があり、直ちに開悟の体験をさせられる能力があると信じていればいいのです。経典と比べてみればいいでしょう。私個人が誰であるかに構う必要はありません。みなさん自身が誰であるかを気にかけてください。



## 黒白神通力

一九八七年九月二十六日 フォルモサ・台北無量光座禪センターにおいて

今日は黒白神通力の話をします。ここには神通力が好きな人がたくさんいますので、どのように神通力を使うのかを、みなさんにお話しします。さもないと、みなさんは私に神通力がなと思うでしょうから。私に神通力がないと思っっている人はいませんか。

黒白神通力は最も簡単なことですから、どうして私にないことなどあるでしょう。私には何でもあります。黒神通力もあり、白神通力もあり、赤、緑、黄色、青、灰色、コーヒー色と何でもありますよ。(笑い) みなさんが好きなものをまず登録してください。そうしたら、私が見なさんの要望に基づいてお教えしましょう。今日ここに来ている方は神通力に関する話は好きですか。(答える…好きです) わかりました。これから黒白神通力の話をしましょう。

黒神通力は本来白神通力でもあるのです。黒は白であり、白は黒なのです。これは金剛經に述べられていることと同じで、私が勝手に言っているわけではありません。どうして黒は白なの

でしょうか。それはこのパワーが創造のパワーだからです。わかりますか。陰は陽でもあり、陽は陰でもあるのです。陽がなければ陰はなく、陰がなければ陽はありません。陰陽の調和なくして世界は存在しないのです。

黒神通力とは何でしょうか。それは修行をしてから、その大きなパワーを使って悪いことをすることです。どうしてそのようにできるのででしょうか。一切唯心造(すべては心で造られる)からです。私の言っている意味がわかりますか。例えば、私たちが強壯剤を飲み過ぎた時も病気になるます。そうでしょう。ある時私のマスターが私にマッサージ薬を飲ませましたが、飲んだ後もう少しで死にそうになり、ずっと吐き出したいと思っただけですが、マスターが私にくれたものですから、飲まないわけにもいかず、無理に飲み続けました。飲んで吐き、吐いてはまた飲むというようなことを何回も繰り返しました。マッサージ薬は本来マッサージにだけに使うもので、飲んではいけないのです。幸い死なずにまだ生きています。中毒しませんでした。薬の中には塗るだけなら中毒しませんが、飲むと中毒するものがあります。

神通力も同じです。私たちが良い面に使えば、それは白神通力です。悪い面に使えば、それは黒神通力です。それだけのことです。何も違いはありません。

(たくさんの人が次々と入って来て、講義を聞く) 外の世界はあんなに大きいのに、みなさん遊びに行かずにここへやって来て、ぎゅうぎゅう詰めになって講義を聞くなんで、なんとま

あ本当に気が狂ったのでしょうか。私が黒神通力を使ってみなさんをコントロールしているのでしょうか。（笑い） 私がみなさんをコントロールしてどうなるのですか。いっそう煩わしくなるだけです。私は一晩中座禅して、日中ちよつと寝たいと思っても、それもできません。スツプが「たくさんの人が講義を聞きにきています」と報告するものですから。もちろんたくさんの方は私一人より大事ですから、私は睡眠を犠牲にするしかありません。人が多ければ多いほど、私の仕事も増えます。私が喜んでいるなどと思わないでください。私は黒神通力を使いません。

黒神通力とは何でしょう。それは毒薬と同じです。みなさんはよく黒神通力を使いますが、自分ではそのことがわかっていないのです。わかりますか。（誰かが答える…わかりません） よろしい。今から私がお話ししましょう。みなさんが悪いことを考えるたび、それが自分に対してであろうと、他人に対してであろうと、その時あなたの思いが大変強く、パワフルなら、相手または自分に対して影響を与えます。わかりますか。

例えば、あなたが毎日「あの人はあんなに悪い。あんな人病気になるばいばいのに。あんな人どうにかなくてしまえばいいのに……」と思うと、彼は必ずそうなります。もしあなたが本当にそんなに一人の人を恨むと、彼は必ず影響を受けるのです。意味がわかりますか。このことから、私たちは因果があることを知ります。例えば、あなたがある人を殺したり、害を与えた



りすると、その後その人は生まれ変わってあなたに害を与えます。これが黒神通力です。黒神通力でなければ、どんな神通力でしょうか。

私たちの内には非常に大きなパワー、無量無辺のパワーがあり、これは不可思議なものです。私たちはほんのわずかしか使っていないのですが、それでももうこんなにすごいのです。良い面に使おうと、悪い面に使おうと、どちらでもものすごいのです。もし私たちがこのパワーを良い面に使おうと、世界はもっと良くなるものではありませんか。でも私たちの大部分はそれを良いことに使っていません。私はみなさんのことを言っているではありません。おそらくみなさんは良いことをしているでしょう。例えば、ご主人を罵るとか、奥さんを殴るとか、私の善し悪しを論じるとか：（笑い）このパワーがこんなに大きいということがわかったら、慎重にならなければなりません。黒神通力を使わず、白神通力だけを使うことです。

黒神通力は私たち自身にも影響します。ですから、どの宗教も、また宗派の教主も、自分を愛するように隣人を愛しなさい、と教えます。あなたが人を恨むことは自分を恨むことになるからです。これこそ先ほど私が言った「因果応報」です。わかりますか。あなたが人を恨んで、その人に悪いことが起これば、病気になる、早く死んでしまえなどと呪うと、その後その人も同じようにあなたを呪うのです。みなさんが生死を輪廻し、この苦しい生老病死の輪の中をぐるぐる回っているのは、まさにこの黒神通力のせいです。

黒神通力は人に害を与えるだけでなく、自分にも害を与えます。催眠のパワーを持っている人たちもいて、その人は、あなたに眼を閉じさせると、思うように操ることができます。あなたは何かしたくても、まったく自分をコントロールできません。これも黒神通力ですが、ただ名称が違うだけです。一般には「催眠術」と呼ばれていますが、私は「黒神通力」と呼びます。というのは催眠術を使う人は黒神通力のパワーを使っているからです。

しかし、この黒神通力も白に変えることができます。彼はこのパワーを使って病気を治すこともできます。私の言っている意味がわかりますか。催眠術を使って病気を治すということを知っていますか。（誰かが答える：知っています）従って、先ほど私が言ったように白神通力、黒神通力はいずれも私たちの考え方によって変わるものなのです。

みなさんは、ある人が「オンマニパドメイウン」と唱えるのを聞いたことがあるでしょう。これは自分の病気を治すために唱えているのです。または魔を追い払い、良くないパワー、不運を追い払うために「オンマニパドメイウン」と唱えている人もいます。とにかくこれも一種の小さな神通力です。ある人は「オンマニパドメイウン」と唱えて、人の病気を治すこともできます。私はみなさんにこんな呪文を唱えなさいと言っているのではありません。そうではなく、あのような人はすでに長い間呪文を唱えていて、意念を集中するパワーがあるということ、また意念を集中することさえできれば、多かれ少なかれパワーがあるということ、

わかってもらいたいのです。

「オンマニパドメイウン」という呪文が役に立つのではなく、こういうラマたちはこの呪文を長い間唱えているのでパワーがあるのです。これはまったく、彼らが常に自分を訓練した結果であって、どうということはないのですが、少しは役に立つのです。

しかし、一日ぐらい唱えただけでは、もちろん大して役に立ちません。例えば、英語を学び始めた時は当然話せませんが、毎日勉強して、繰り返し練習すれば流ちょうに話せるようになります。私がフォルモサに来たばかりの時も標準中国語は話せませんでしたが、今は話せます。毎日練習したからです。わかりますか。水泳も同じです。水泳を学び始めた時は泳げませんが、毎日練習すれば、自然に泳げるようになります。

黒白神通力は完全に私たちの考えによつて決まります。私たちは人が幸せで平安であることを祈る時、本当に誠心誠意に祈るなら、その人は幸せになり、平穩になります。もちろんこれもその人自身の因果によるのですが、少なくともその間はその人は幸せで平穩です。

經典に述べられています、すでに九十九人殺した人がいました。というのは、彼のマスターが「正午までに百人殺せば必ず仏陀になれる」とだましたからです。彼は自分のマスターの言うことを本当に信じてそうしたのです。九十九人殺した後、百人目が見つかりませんでした。その時ちやうど自分の母親がやって来るのが見えたので、母親を殺そうと思ったのです。母親

は仏陀を信じていて、存命中すでに釈迦に帰依していたので、仏陀が現れて彼女を救ったのです。彼は仏陀を見ると、殺そうとしたのですが、釈迦は神通力を使って彼を救いました。

仏陀の神通力と、先ほど私が言った黑白神通力とは違いますので、みなさん絶対混同しないようにしてください。仏陀の神通力は神通力ではありません。仏陀自身が神通力です。これはすでに何回も言った通りです。

ある人は私に会うとすぐ病気が治ったり、困難が解決したりすると言っています。みなさんは私が神通力を使ったり、呪文を唱えたり、大悲水を使ったり、または線香を焚いて、何か書いて水の中に入れて人に飲ませたりするのを見たことがありますか。（答える…ありません）これらはすべて黑白神通力です。私は自然にしています。みなさんが来れば、必要なものは私に有るのです。欲しいものは何でも手に入ります。銀行強盗さえしなければよいのです。（笑い）そんなことは手助けするわけにはいきません。

釈迦に救われてから、彼は大変感動して、仏陀について出家し、毎日一緒に道を学びました。ある日彼が托鉢に出た時、途中で一人の妊婦に出会いましたが、もうすぐ生まれる様子で、とても苦しうに、大声で「マスター。まもなく生まれます。助けてください。私たち母子の無事を祈ってください」と叫びました。彼は出家したばかりで、どうしてよいかわからず、帰って仏陀に聞きました。仏陀は彼に、今すぐ戻ってその妊婦に「子どもはきつと無事に生まれます

す。母子ともに幸せで、無事で元気でしよう。私は生まれてから今までうそをついたこともないし、悪いこともしていません。私が言ったことは必ずそうなるし、きつとその通りになりますよ」と言いなさいと、言ったのですが、彼は「マスター、だめですよ。私は生まれてから今まで悪いことをしてないではありません。ご存じのように、私は九十九人殺しました。どうして悪いことをしたことがないと言えますか。うそをついたことがないと言えますか」と言いました。

仏陀は「それはもう過ぎたことです。私について出家してから今に至るまで、うそをついたこともないし、殺人もしておらず、何も悪いことをしてない。彼女にちゃんとそのように言え方がいいのです」と言ったので、彼は急いで駆けて行って、仏陀の言った通り、妊婦を元気づけました。本当に子どもはすぐに無事生まれました。見たところまるまると血色良く、とても元気そうでした。本来難産で、すでに何日も陣痛があつたのに生まれなかつたのが、彼がお祝いの言葉を言い終わるやすぐ生まれたのです。母子ともに無事で、幸せで、元気そうだったので、彼自身もとてもうれしかったのです。

なぜこうなつたのでしょうか。仏陀のパワーは過去のカルマをきれいに洗うことができるからです。意味がわかりますか。私がいつも言うように、みなさんは印心した後、過去のカルマはなくなり、ただ現在のカルマと定まつたカルマが残るだけです。私がみなさんの定まつたカ

ルマを洗うと、印心した時にすぐ往生するので、できないのです。今はまだ因果があります。私たちはこの体があるので、定まったカルマがあるのです。定まったカルマとは何でしょうか。それは固定しているもので、私たちが生まれる前にすでに仕組まれているのです。その後私たちが毎日造る新しいカルマが加わり、生涯私たちは大変多くのカルマを造ることになります。

例えば、私たちが呼吸する時、たくさんの目に見えない細菌や微生物が死にます。道路を歩いている時もたくさんの微生物を殺しています。草を刈る時もたくさんの衆生を殺しています。わかりますか。さらに私たちが道路を歩いている時や、ハイウェイをドライブしている時も、衆生に借りができ、たくさんのカルマをもたらすことになります。ということ、私たちは四重の恩があるので、返さなければなりません。この体がある限り四重の恩があるのですが、一瞬にしてすべてをきれいに返すことはできません。私の言っている意味がわかりますか。ですから、ここにどどまって返さなくてはいけないのです。

私たちは何をもって返すのでしょうか。身・口・意で、すなわち仕事あるいは修行、座禅で返すのです。在家者は仕事でお金を稼いでカルマを返します。出家者は自分の修行のパワーで世界の毒気を解かし、社会をもっと道徳的にし、より住みやすい所に変えて、ますます暗く、地獄のようにならないようにすることです。私の言っている意味がわかりますか。これが「身」に関する面です。

「口」は、私たちが人に道徳を説き、平和で高尚な話をして、人をしてますます楽しくさせ、悟りを求める心を持たせ、内在する仏性、内在する最大のパワーを認識することを人々に思い出させるのです。私の言っている意味がわかりますか。これが「口」の面です。

「意」とは何でしょう。それは白神通力を使って人が幸せになり、国が平和で世界が平穏であることを祝福することです。わかりますか。身・口・意で衆生に奉仕し、四重の恩を返してから、私たちは初めてこの世を離れることができます。

みなさんが私に、この定まったカルマを洗って欲しいと言うなら、それもできます。不可能ではありません。すぐ往生したい人はいませんか。手を挙げてください。（ある人が手を挙げる）あなたは借りが多いので、早く逃げたいのでしょうか。違いますか。いいですよ。でもそれでは英雄ではありません。私たちは世々代々悪いことをたくさんしてきました。今、衆生は大変苦しんでいるので、私たちは彼らを元気づけなければなりません。私たちのせいで彼らは苦しんでいるのです。私たちがここに住むからには、どんな人に対しても責任があります。わかりますか。

世界がどのようなんでも、すべては私たちみんなの責任です。すべて人のせいにしてはいけません。私たちも過ちを犯しています。おそらく前代あるいは前世においてその人に良くないことをしたので、その人はこの世界にやって来て私たちが恨んでいるかもしれない。これ

も私たちの過ちであり、私たちが彼をそのようにしたのです。ですから、私たちは完全に人を責めることはできません。よく修行して私たち自身を浄化し、この恨みの気持ちを解かなければなりません。

「徳をもつて恨みに報いる」べきであって、「恨みを抱く」ではありません。このようにして初めて恨みの気持ちを解かすことができるのです。恨みの気持ちはすでにあるので、すぐには解かすことができません。解かそうとすれば相手を殺さなければなりません。しかし、殺しても何にもなりません。恨みの気持ちを取り除くことができないばかりか、かえって倍増し、ますます厄介になります。ですから、釈迦またはどの大師も恩を以って恨みに報いるよう教えているのです。

イエス・キリストは「汝の敵を愛せよ」(Love your enemy)と言いました。というのは、敵もあなたがつくったものだからです。わかりますか。仏教では「一切唯心造(すべては心で造られる)」と言い、老子は「門を出なくても世界を知ることができる」(道徳経：不出戸，知天下。)と言っています。その意味は「すべては心で造られる」と同じです。私たちの心で世界を観察することができるのです。内面と外面は同じだからです。従って、門を出なくても世界を見ることができのです。この言葉の持つ意味は非常に深く、決して魂が抜け出して初めて世界を見ることができるということではありません。もちろん魂が出る時にも見ることが



できますが、それは低レベルです。

みなさんはある人の魂は出て行くことができ、ある人はここに講義を聞きに来ないけれど、魂が抜け出してここへやって来てこっそり見て、こっそり聞いている、ということ聞いたことがあつたでしょう。時々私の弟子も、魂が抜け出してここへやって来ます。見ることはできるのですが、聞くことはできません。彼はとても怠け者で、他の人は自分でここに講義を聞きに来るのに、彼は自分は大した者だと思って、来たがりません。来れば他の人に自分が私について学んでいるのがわかり、面子がないと思うからです。

その人は以前一貫道にいて、資格はすでに「前人（えらい先輩）」でした。私に印心を受けた後は二度と来なくなりましたが、魂が抜け出してここへ見に来るのです。私は彼に、「男たる者は何をするにしてもオープンにすべきです。夜こっそり他人や個人の家に来るようなことはやめなさい。そんなことして何になるのですか。私たちには人の家にこっそり入る権利はありません。学びたいなら、公明正大に講義を聞きに来なさい。肉体であろうと阿修羅の無形の体 (Astral Body) であろうと、入ってくることはすべて泥棒の行いです」と言いました。

老子の言う「門を出ずして天下を知る」という状況はそのような人とは違います。魂が抜け出ると解脱は違います。解脱は三界を超えることです。私たちの最後の最も精細な体が、外を囲むいくつかの体を離れて抜け出すことです。わかりますか。最後のあの体は魂ではあり

ません。一般の人がいう魂も一種の体ですが、ただ私たちのこの肉体よりも少し良く、かなりきめ細かく、普通の眼では見えません。ただし修行者には見えません。

私たちの修行仲間の中にも七日間座禅や三日間座禅には参加しないで、魂が抜け出してここへ私に会いにやって来る人がいます。どうしてそんなことをするのでしょう。もちろん魂が抜け出してここへ来てもいいのですが、彼は大変怠け者だったので、ここを護る龍神護法にたかれ、追い返されましたが、彼が「私はこのスプリームマスター チンハイを知っています」と言ったので、龍神護法はやつと入れてくれました。

しかし、私が講義しても、彼は声を聞くことができません。もっと高い修行をして初めて聞くことができるのです。わかりますか。彼はまだこのレベルに達していませんから、私や修行仲間や無形の衆生に会っても、どんな声も聞こえず、ただ私が口をばくばくさせているのを見るだけです。彼がとても失望したというので、私は「何を失望したのですか。七日間座禅に来ればいいじゃないですか」と言いました。

私は人に、このようなことをするよう勧めたことは一度もありません。というのは、その弟子は以前巫術を修行したことがあり、今もその習慣を完全には断ち切っていないからです。私たちの魂でこの娑婆世界を駆けずり回っても、まったく役に立たず、大変なパワーの浪費です。魂が抜け出したからには三界を越えて、上に行つて「道」を学ぶべきです。それでこそ本当に

仏陀を学ぶことになるのです。娑婆世界では、私は仏陀の経を講義するすべがありません。この世界の経典を講義できるだけで、良いことは何も話すことができませぬ。最良のものを学ぶには、上に行つて学ばなければならぬからです。わかりますか。

この世界のことについては、私はただ仁愛、義務、礼儀、智慧、信用、道徳や互いに仲良くすることを教えられるだけです。みなさんに盗みをしない、邪淫をしない、酒を飲まない、タバコを吸わない、殺生をしないなどを教えていますが、これらはこの世界のことです。もともとしてはならないことなのですが、みなさんが忘れてしまつていたので、私は再び思い起こさせるしかありません。

実はこのような話をするのは本当に退屈です。ハイレベルの境界（きょうがい）においては女も男もなく、まったく問題がありませんので、こんな退屈な話はしなくてよいのです。私の言っている意味がわかりますか。上に上がつて初めて本当の真理、本当の道を学ぶことができます。しかし、必ず法を伝えなければなりません。印心後私の指示に従い、一生懸命修行すれば、私たちの霊体が、外を何層にも取り囲んだ体の束縛を脱出して、初めて上に上がることができるのです。

もし一番外側の体を離れて、娑婆世界を行つたり来たりするだけなら、その人の魂が抜け出て遊びに行つたとしかいいようがありません。フォルモサのある尼さんが、何週間か禅定に入

ることができるようになって、一日中そこに座っていました。弟子は彼女が往生したと思ったのですが、見ると体はまだ柔らかく、体温があつたので、埋葬できませんでした。二週間後、やっと抜け出した魂が帰って来て「あちこち駆けずり回って見てきましたが、世界は本当に乱れていますね」と言ったのです。

これも魂が抜け出した現象です。彼女はただ一個の体を出ただけです。わかりますか。まだ大解脱ではありません。大解脱はこの娑婆世界をあちこち駆けずり回るのではなく、上に上がって仏陀について学ぶことなのです。わかりますか。

本来黒神通力の話をしたいと思っていたのに、どうしてこんな話になつたのでしょうか。黒神通力を使うことはもちろんいけません。永遠にいけません。それは遅かれ早かれ我が身に返ってくるからです。原因があれば結果があります。オレンジを植えればオレンジがなり、リンゴを植えればリンゴがなります。リンゴを植えたのにオレンジに変わることはありません。そうでしょう。

同じ道理で、もし私たちが黒神通力を使えば、自分自身を害するのです。今はその結果が見えなくとも、その後必ず見えます。おそらく何日か、何週間か、何年か、または何世か経つてからも、必ず以前に黒神通力を使った結果が現れるのです。

ある人が私の所にやって来て、「某氏の親族が今ある祈禱師に黒神通力を使われたか、何か

呪文をかけられて、その結果精神が錯乱し、病気にまでなりました」と言ったのです。このようになことに対しては、私はどう言ったらいいのかわからないので、ただ「その人によく仏陀を唱え、道徳的なことをするように言ってあげなさい」と言うしかありませんでした。なぜその人はこんなことを引き起こしたのでしょうか。それは前世で黒神通力を使って人を害したから、今その因果が現れたのです。

ですから、永遠に人を責めてはいけません。自分を責めるべきです。我が身に何が起ころうとそれは私たち自身のカルマの力でそうなったのです。わかりますか。たとえ外の人から叱られても、彼らを責めてはいけません。ましてや、私から少しくらい叱られたからといって、怒って私から離れてしまうとか、あるいは私を誹謗するなどは、なおさらいけないことなのです。私に叱られて怒る人は本当に大バカの大バカです。私がちよつと叱れば、それはみなさんを助けて、たくさんカルマを解消し、地獄に落ちずに、鬼神に捕まって焼き肉にされずにすむのです。先週言いましたように、もしみなさんが地獄に落ちて焼き肉になりたいなら、もう私に会いに来ないでください。もし天国に行つて仙桃を焼きたいというなら、できるだけ私の話を聞かなければなりません。

広欽老和尚も言っていますが、あなたのマスターがどんなに叱つても、怒り恨む思いを抱いてはいけません。これはあなたたちの、中国の師が言ったことで、私だけがこのようにな

とを言っているわけではありません。私だけがそう言っているなら、それは独裁です。しかし、どの大師も同じように言っており、私も自分のマスターが言っていることを学んだのです。私には大師ではなく、自分のマスターである大師に学んで、彼らが言ったのと同じことを言っているのです。

私たちが他人によくすれば、自分にとってもよいのです。この道理があるからこそ、私たちは布施をし、戒律を守り、忍辱をするわけです。忍辱とは何でしょう。それは何がどうであろうと、自分の因果であることをはっきり認識することです。他人の過ちではありません。もし彼が自分に親切でないなら、おそらく前代において、自分が彼によくしなかったのでしょうか。今、清算すべきです。みなさんは私が禅宗の三十三名の祖師の話をしたのを覚えていますか。大禪師といえども、因果を逃れることはできず、ある人は首を切られ、ある人は腕を切れ、ある人は殺されるなど、すべて彼らの因果を清算しなければならなかったのです。

禅宗の大マスターたちですらそうなのです。まして私たち凡人はどうなのでしょう。少しばかり障害に遭っただけで、信念が弱まり、私に少しばかり叱られると嘆き悲しみ、傷つき、ここを離れようとし、二度と私について学びたくないと思うのです。そして批判するのです。誰かに「どうしてマスターから離れるのですか」と聞かれると、ちゃんとした理由が言えないのです。もしマスターに叱られて離れるというなら、本当に大変愚かで、英雄にはなれません。

今誰かがすぐ往生したいと言うなら、それも同じで勇敢とは言えません。前世で人を殴って  
おいて、今殴られたからといって、もういい、逃げ出したというのはいけません。その原因  
(種)をまいたのなら、その結果を受けねばなりません。受けた後初めて離れられるのです。

みなさんがすぐ往生したいというなら、私は同意しますが、ただ私たちみなが往生したなら、  
この世界は誰が世話をするのですか。フォルモサ(台湾)の人々はどうするのですか。私たち  
の総統はどうするのですか。もし全フォルモサの人が印心した後すべて往生してしまつたら、  
総統は、部長はどうなるのでしょうか。彼らは大変孤独ではないのでしょうか。(笑い)

全フォルモサの人が、私に西方に連れて行かれて、私たちの総統が一人であちこち駆け回っ  
ているのを見て、私たちは西方にいて安心していられるのでしょうか。西方から見下ろして楽し  
いでしょうか。

今あなたが行ってしまつてしまうと、あなたの孫、息子、娘は泣きくれますよ。なぜなら、因果をま  
だ清算し終えてないからです。彼らも因果のために泣くのです。もし因果がすでに完全に断ち  
切れているなら、何も感じないはずですよ。わかりますか。

ある人は出家すると、家族を一遍に一刀両断できることもあります。もともと夫、妻、父母  
に大変執着していたのですが、私に会ってからは何もいらぬ、私さえいてくれればよいと言  
うのです。その結果私は大変厄介な目に遭います。私にとって彼女はまったく必要ありません。

引き取って何をするのですか。それなのに彼女の夫は、私が彼女を必要としないことを信じないので。彼は自分の奥さんがとても好きですから、私も同じように彼女が好きだと思っているのです。

みなさんは犬が物を食べているのを見たことがありますか。みなさんが寄って行くと、犬はすぐ「ワンワン」吠えますね。実際、あなたは犬のえさが欲しいのではありません。誰が犬のえさなんか欲しがりますか。でも、犬はあなたがいらぬことを信じません。自分は好きだからです。ですから、あなたが入ってくると、自分の所に来ないうちに二本の大きな歯をむき出して吠えます。「近寄るな！これは俺がかじる骨なんだぞ、見に来るな」と言っているのです。誰が犬のえさなんか欲しいものですか。まったくゴミですよ。

同じように、もしみなさんの夫か妻が出家したいといつても、私がその人を好きだからなどと思わないでください。私が好きになつて何をするのですか。人が来て私を縛り、私が「自在」でなくなるだけです。でも、みなさんが私を縛ろうというのなら、私も縛られて、みなさんと一緒に遊んだらいいでしょう。

私はみなさんの夫や妻がそれほど好きで、必ず出家してもらいたい、その人たちがいなければ私は死んでしまう、というのではありません。そんなことはありません。もしみなさんが出家したいなら、まず夫や妻とはつきり話をつけてください。私はまったくみなさんのゴミはいり



ませんから。わかりますか。彼が好きなのは彼のことであって、私は好きではありません。全世界のことにかかわらないのに、あなたの妻や夫にかかわって何をするのですか。

私はもっぱら、みなさんに修行をして欲しいだけです。その人の因果はもう切れていて、世俗のことに執着せず、離れようとしているのが見えたなら、初めて出家することを承諾します。本来母親や父親は子どもを大変可愛がるもので、この世界においては子ども、夫、妻は私たちにとって最も重要です。そうでしょう。しかし、因果が切れる時がくれば、彼らは他人と変わらない感じか、または修行仲間という感じだったり、強いては友人のように感じたりします。少しも未練はありません。それだからこそ、私は出家できたのです。さもないと、夫はあまりに良くしてくれたので、きつと出て行くに忍びなかつたでしょう。

この点については、本に私の略歴が紹介されていますので、見ていただければわかります。私は中国語が読めませんので、私の弟子が書いたものです。時々彼女たちは文章をかいつまんで、私に読んで聞かせます。私があまり聞くのが好きでないことを知っているからです。印刷が終わってから、私は何かおかしいと思って「本の目次はどこにあるの」と聞くと、私に読んで聞かせてくれたので、その時初めて彼女たちが前にわざと読み違えたことがわかりました。でもどうしようもありません。物事は本来こんなものです。ご存じのように、私は中国語が読めませんので、本に書き間違いがあっても、私の問題ではありません。何でまた中国語の話な

んかしたのでしょうか。(笑い) 私はもう年ですね。ある人は私を古仏だと言います。古すぎますね。ですから、さっきまで何の話をしていたのか時々忘れてしまうのです。(ある人が答える) マスターは人が出家することを好まない、とおっしゃいました) そうです。もちろん好みません。まったくゴミですからね。あの犬の話と同じで、私が出家を承諾するのは、すべて個人の意志を尊重するからです。でも私が言わないと、みなさんもわからないでしょう。

私にとっては、世界は犬のえさのようなもので、どうして未練などありません。世界全体に未練がないのに、あなたの奥さんやご主人に未練があつてどうするのですか。しかし、みなさんが解脱したい、修行したいと望んでいるし、ここは修行する場所ですから、みなさんがやつて来て、誰でも修行することを歓迎します。世界は私のものではないし、道理も私のものではなく、みなさんすべてにここへ来て修行する権利があるからです。ただし私はみなさんに、自分の個性や自分の過ちのために、ここで真面目に修行している人に迷惑をかけないようにお願いします。それだけです。

時には私は出家者を厳しく訓練しますが、それは一つの団体が平和であつて初めて一緒に修行できるからです。わかりますか。私がみなさんに来てはいけなやか、みなさんを良く思っていないということではなく、他の修行者を守るためです。さあ、本題に戻りましょう。

今、みなさんはどのように黒神通力を使うかわかりましたね。私がみなさんにこの話をする

目的は、みなさんが家に帰ってから黒神通力を使いなさいということではありません。白神通力を使うならいいです。修行すればするほど、ますます慎重にならなければなりません。修行すればするほど、パワーがますます大きくなり、思想もますます強くなるからです。黒神通力は非常に強い思想を抱いて、人に悪いことを呪うか、自分を処罰することです。毎日「私はだめだ。私はだめだ。どうしてこんなふうになつたのか」と思うことは、これは「自己暗示」で、このようなことは大変嫌なものです。黒神通力で人を害することは、とてもよくないことなのに、黒神通力で自分を害することはもつと想像しがたいことです。

出家したいと思っている人たちがいますが、これも白神通力を使って「世々代々出家するのが好きだ」と自己暗示しているのです。みなさんが出家したいなら、今すぐ自己暗示をすればいいのです。毎日「私は出家したい。私は必ず出家する。私は出家する。私は出家する。私は出家する」と思いなさい。ある日必ず出家できます。しかし、心の中でそう信じていなければなりません。口で言うだけではだめです。ですから、私が大多数の人が念仏しても無駄だと言うのはこういう意味です。わかりますか。パワーがないのです。一日中唱えるだけで、呼吸をしているのと同じように一種の習慣になつてしまつていて、心をそのことに集中しないので、少しも意味がないので、西方に行くことができません。

私には、心を込めて「念仏」させ、みなさんが必ず西方に行ける方法があります。それが観

音法門です。私は生まれてから今まで何も悪いことをしたことがなく、うそをついたこともないので、私が何を言おうと、すべて本当のことで必ず事実になります。あの人殺しの阿羅漢と同じです。意味がわかりますか。私たちの教主が、私たちにうそをついてはいけない、殺生してはいけない、盗んではいけない、などと教えるのは、私たちのこの完全なパワーを保護するためののです。もし殺生したり、盗んだりすれば私たちのパワーが漏れます。わかりますか。漏れればパワーは失われます。ですから、修行者はますます慎重にならなければなりません。

戒律は自分を保護するためです。純粹でない人、心がきれいでない人がいたとします。その人たちが修行すると同様に、パワーも神通力も持ちますが、このパワーが良い面に使われないのです。というのは、彼らはすでに悪いことをするのに慣れてしまっているのです、大きなパワーがあっても、口を開けばうそをつき、そのパワーは幻想に変わり、真実でなくなるか、あるいは常に人を害したり、殺すことを考えたりして、悪い心を断ち切ることができません。修行して、パワーがあるのに、悪い心があるようではどうしようもありません。私の言っている意味がわかりますか。

黒神通力はこのように私たちの不純な心、悪い心、悪い考えから生まれるのです。もともと黒も白もないのですが、私たちの考えが改まらないから黒に変わるのです。もし考えが正しく改まれば白神通力に変わります。

例えば、私たちが自己訓練し、身・口・意（行動・言葉・考え）をきれいにし、道徳的で、思うことは人の良い所で、人が平和で幸せになることを祈り、永遠に悪いことを考えないようにすれば、当然私たちのパワーは直ちに他人に利益を与え、人を害するのではなく、ただ助けるだけなのです。

従って、聖人と祈禱師の差はほんのわずかです。ただ思想が違うだけです。悪い思想なら祈禱師になり、良い思想なら菩薩か阿羅漢になります。ですから、私たちは本当に慎重になければなりません。修行者はどんな方法、法門、宗派の修行をしようと、道徳が最も基本条件です。しかし、道徳だけでは不十分です。道徳があれば、人に利益を与えることができますが、現世でしか利益を与えられません。来世まではできません。自分の来世も面倒見られないのに、どうして人の面倒など見られるでしょう。大海の中の船と同じで、方向が定まらず、風に任せて揺られ、方向を失ってどこへ行ったらいいのか自分で決められません。私の言っている意味がわかりますか。

私について学ぶなら、道徳のある人になるばかりでなく、歩むべき方向があるのです。さもないと、道徳があるだけでは人を解脱させることができないのです。道徳的なことはもともとやって当然なことです。やってあたりまえのことなので、布施をたくさんした人がよい人だなどと思わないことです。必ずしもそうではありません。もしかしたら、前世で借りが多すぎて、

今、戻って来て清算しているのかもしれない。ですから、この宇宙の因果律により、私たちの思想や金銭はいろいろな方面に吸い取られています。これはすべて前世で人からの借りが多すぎたためです。わかりますか。

これからちよつとした例え話をしましょう。昨日私は病人のお見舞いに行きました。帰ってから、風呂に入る間もなく、お客さんがやって来て、私に「私はオウラック（ベトナム）人ととても好きです。私が大学で学んでいた時に、あるオウラック籍の学友が大変助けてくれたからです。私はお金がないので、そのオウラック籍の学友がお金をくれて、私が必要な物は何でもくれました。彼は今アメリカにいます」と言うのです。

昨日私に会いに来たその客はフォルモサ人で、建築士で、とてもよい人で、いつも他人を援助しています。なぜでしょうか。彼は今まで多くの人が自分を助けてくれたからだと言うのです。彼は私に、自分の最大の恩人はあのオウラック籍の大学生ですと言いました。彼は私もオウラック人であるのを見て、とても良い印象を持ちました。みなさん、私ですらそのオウラック籍の大学生の影響を受けているのです。ですから、一人がよいことをすれば、国全体が影響を受けます。そうでしょう。一人が悪いことをすれば、国全体にとつてもよくありません。

その人はかつてオウラック人に助けられ、今は金銭、権力、そして力もあります。しかし、当初彼を助けたオウラック人は今は落ちぶれていたのです、彼はすぐ金銭の援助をし、彼に会い

にアメリカに行きました。以前恩を受けたので、今そのお返しをするのです。

同じ意味で、もし私たちが前世で人から多くの恩を受けていたら、今生まれて来て忘れていても、因果律の影響を受けるので、お金があれば喜んで布施をし、その人（前世の恩人）を見ればとてもうれしくなり、なぜ彼はこんなに苦しんでいるのか、なぜお金がないのか、と思い、すぐに使ってくださいとお金を渡すのです。他の人が苦しんでいるのを見ても心が動かないのに、なぜ彼を見るとすぐ心が動くのでしょうか。それはかつて彼があなたを助けてくれたからです。わかりますか。

すべては心で造られます。どんなことでも因果がなせるものですから、よい行いをしたからといって、何も傲慢になるのではなく、布施をしたからといって何も大したことではないのです。イエス・キリストは「こちらの手で布施をしたことを、あちらの手が知らないようにすべきだ」と言いましたが、それこそ本当の布施です。私たちは生まれる時は何も持つてなく、この世を去る時もポケットは空のまま行きます。そうである以上、私たちは自分が何を布施したと言えるのでしょうか。飢えた人がいれば、私たちは当然食べ物を与えるべきですが、そんなことは動物だつてできることであつて、必ずしも人間にしかできないわけではありません。

大修行者はヒマラヤや大変高い山で隠れて修行し、食べ物がありませんが、サルが果物を、小鳥も果物や落花生を、ゾウがサトウキビを持つて来てくれると聞いています。動物でさえこ

んなによくしているのに、私たち人間がどうしてよくしないですむのでしょうか。私の言っている意味がわかりますか。

布施とは何でしょうか。布施はごく普通のことにはすぎません。私はこのような基本的なことはほとんど話しません、話すこともあります。印心した時に話したでしょう。私はみなさんにプリントを配り、布施し、戒律を守らなければならない、と言いました。これらはすべて人としてやらねばならないことです。私たちは衆生に四重の恩がありますから、返さなければならないのであつて、何も大したことではないのです。わかりますか。

従つて、どの宗教もすべて布施を奨励しています。ただし、大師たちはこの点を再三強調することはありません。ただ言うだけで、後はあなた自身がやらなければならないのです。彼らは布施を一番重要なこと、あるいは一番重要な目的にしています。いくら布施をしてもそれで終わりということはないからです。そうでしょう。世界はこんなに苦しんでいるので、私たちが億万長者であつても、一人ひとりすべて面倒見るということはできません。できるだけやつて、私たちの家庭、父母、国家の面倒を見ることができればいいでしょう。私たちは全世界の面倒を見るべきがないからです。

布施も一種の白神通力です。人を楽しくさせますから。私たちのパワーで人が楽しくなるよう祝福し、人を助け、貧乏から豊かにし、餓死しそうな人を満腹にしてあげるの、一種の白



神通力なのです。わかりますか。私たちは毎日そのような神通力を発揮しています。みなさんは黑白神通力が何か、自分はわからないなどと思わないでください。もちろんわかっています。ただどう使うのかわからないだけです。今日私は白神通力をどのように使うべきかをみなさんにはつきりお話ししましょう。

私たちが神通力を学ぶ修行をしたいというなら、それもやはり「意」の修行です。いわゆる「意」とは何でしょうか。故意にある種の神通力を使って、意識的にその人に十分な食べ物を与え、お金を与え、飢え死にさせないことや、あるいは故意に護符（お札）を描いたりすることです。つまり、白神通力とは一種の故意に発揮する神通力なのです。

観音法門を修行することは、すなわち最高の無為（何もしない）の神通力を持つことです。自然に出て、身・口・意ともまったく使いません。わかりますか。例えば、みなさんはここへ来ると、すぐにとでも楽しくなったり、病が消えたり、災難が去ったり、あるいは私がみなさんを救いに来るのを見ることなどは、すべて私が故意にやっているではありません。私はまったく身・口・意を使っていませんが、依然としてここで平常通り講義し、寝て、食べて、普段とまったく同じです。でも私が何をしても、みなさんは利益を得るのです。

私は身・口・意の中にあるのではなく、あの種の「故意の神通力」を使っているわけではありません。護符（お札）を描く必要もなければ、「意」を使って神通力を発揮するので

もないのです。おおよそ考えでもつてすることは、すべて白神通力の範囲内のものです。私は白神通力を使いません。

私の神通力は、みなさんは調べることも触れることもできません。ある人がここへやって来て、私に護符を描いて、それを入れた水を飲ませて欲しいと言いましたが、私は何もしませんでした。みなさんが水を持つてきて私に加持して欲しいと言つても、私は何も加持しません。私は加持とは何かわかりません。しかし、みなさんの病気は自然に治ります。これはみなさん自身が自分を救つたのです。私は加持できるものは何もありません。私は自分そのものがここを離れて行つてしまつてゐるのに、何を加持するのですか。加持する人はいないのに、みなさんが喜ぶので、私はいつも衆生に合せてゐるのです。

加持力はもちろんあります。ないではありません。みなさん自身ご存じのように、この加持力は大変利益があり、とても強いのですが、私は何もしません。これは完全に「為無為」です。するのですが、していません。わかりますか。

先ほど、私は布施も白神通力の一種であると言いましたが、それは貧乏人を金持ちに変え、餓死しそうな人を満腹にさせることができます。人の病気を治してあげるのも白神通力の一種で、これは意識的にやることです。意念を集中したり、護符を描いたり、あるいは何かの方法でああなたの体に接触したりしなければなりません。あなたの病気が治ります。白神通力を使

えば、当然人に利益を与えますが、そのあと、やはりこのカルマを清算しなければなりません。きれいに逃れる方法はないのです。わかりますか。

なぜカルマがあるのでしょうか。それは私たちがその病人のカルマに介入しているために、清算しなければなりません。おそらくこのカルマの清算のために、私たちは一定期間病気になるか、命を落とすことさえあります。もちろん私たちは好意から人を助け、人の病気を治そうとしているのであって、人に害を与えようとしているわけではありません。しかし、この病気を治すという考えはまだ「意」の中にあつて、三界を超えたパワーではありません。まだ三界内にいる限り、あなたがどんな物を使おうと、良い物であれ、悪い物であれ、針一本使つて衣服を縫つても清算しなければなりません。一円使つても清算しなければならないのです。

最高のレベルは何も必要としません。何も必要としませんが、何でもあるのです。わかりますか。多くの本当の大修行者を見た時、彼らの生活は大変苦しうに見えますが、例えば、ミラレバがチベットの高山で修行していた時、時々食べ物はなく、着る物さえありませんでしたが、それでも彼は大変楽しうでした。彼は故意に自分を罰していたのではなく、すでにそのレベルに達していて、彼はこの世界を必要としなかったのです。みなさんがまだ何か必要とするなら、それはみなさんがまだこの世界の因果の影響を受けていることを示しています。私たちが何も必要としないなら、どんな物でも使つてよく、しかも何の因果もありません。何を使

うにしる、知っていなければならぬのは、それは内在のマスターが私たちにくれたもので、必ず内面から物を使い、内面から世界を見なければならぬ、外面から見てはならないということでは、大多数の人たちがカルマに苦しんでいるのは、私たちの思いが外に行ってしまうって、主動的ではなく、受動的に変わってしまったからです。私の言っている意味がわかりますか。本当の楽しみ、平穩を得たいなら、受け身でなく主動的な人にならなければいけません。

主動的とは何でしょうか。それはこの内在するパワーから行動し、この内在するパワーによって世界を見ることです。この内在するパワーこそが私たち自身のパワーなのであり、また私がいとも言っている「マスターのパワー」なのです。わかりますか。みなさんはまだ自分のパワーを全部は発展させていませんので、マスターのパワーを借りて使うしかないので。まだお金を稼いでいないので、マスターから少し借りていいのです。みなさんが自分で店を開いてうんと稼いだら、私のお金を使う必要はありません。今一時的に借りるのは問題ありません。最初は私のパワーに頼っても構いません。それから、みなさん自身のパワーを使えばいいのです。実際は私のパワーもみなさん自身のパワーなのですが、みなさんはそれがわからないので、私のパワーを借りて使うわけです。

この内面の最高のパワーに頼って世界に対応すれば、私たちは影響を受けません。しかし、世界に頼って世界や自分に対応すれば、大変厄介なことになります。世界とは何でしょうか。

みなさんが見る世界はとても乱れているでしょう。何もかもがきちんとしていなく、すべてが生老病死の苦しみなのです。もし私たちが毎日このような状況を見れば影響を受けます。私の言っている意味がわかりますか。例えば、伝染病にかかっている人がいて、毎日その人に近づき過ぎ、世話をしすぎて、不注意で自分を守らなかつたら、私たちも伝染病にかかり、病人になってしまわないでしょうか。

この内在するパワーに頼って生活すると、主動的な人になります。私たちはそのような人です。本来の姿を探し当てた人、あるいは自分の主人を探し当てたと言います。いわゆる「自分の主人を探し当てた」とはこのパワーに頼るといふ意味です。しかし、このパワーを認識しなければどうやって頼るのでしょうか。わかりますか。ですから「印心」は、私があなたの面倒を見て、このパワーがどこにあるか、毎日どのように使うか、使えば使うほど豊かになることを教えているのです。例えば、銀行にたくさん預金があつても、毎日引き出して使わなければ、私たちは何に頼って生活すればよいのでしょうか。

同じような意味で、私たちの内面には大きなパワーがあるのに、どこにあるか、毎日どのように使うべきかも知らなければ、私たちにとっては当然役に立ちません。「印心」とは私がみなさんにどのようにするか、どのように自分のお金を持って来て使うかを教えることです。足りなければ、私がみなさんに一時的に貸してあげることができません。貸すと言いましたが、利

子はつきませんし、返さなくてもいいのです。私は使いきれませんから、みなさんが本当に必要なら私から借りられます。いくら借りても結構です。億万長者は貧乏になったり、損をした  
り、破産する心配がありませんから。

先ほど私が言ったように、観音法門を修行するのは黒神通力でもないし、白神通力でもない  
のです。三界以内の法門を修行するのが黒白神通力です。観音法門は「意」を使わないからで  
す。しかし、私たちはこの智慧または知識を使って毎日社会に対応することができません。それ  
は自分にとつても世界にとつてもよいことです。もし私たちが毎日悪いことを考えて、ある人  
のことを死んでしまふべきだ、破産すべきだなどと思っていたら、世界は当然悪くなります。  
そのようなことを黒神通力に変わったと言うのです。わかりますか。

従つて、修行を積めば積むほど慎み深くして、よいことだけを考え、よい状況を作り、よい  
計画を立てて、大衆に利益を与え、世界に利益を与え、国家に利益を与えなくてはなりません。  
そのようにして初めて白神通力と言えるのです。

でもみなさんに言いますが、一番いいのは何も考えないことです。というのは、観音法門を  
修行すると自然に衆生に利益を与え、家庭、国家、世界に利益を与えるからです。観音法門を  
修行した人は、印心後真面目に修行し、私の指示に従つて、毎日少なくとも二時間半座禅し  
さえずれば、どこへ行つても、行つた先はすぐ変わつて福報に満ちています。マスターのパワー

がみなさんと一緒に歩むからです。わかりますか。例えば、一本の水道管があるとします。水流が多いと、水道管をどこにつなごうと、つなぎさえすれば水が出てきます。砂漠を通っても問題ありません。水は水ですから、砂漠でもこの水道管をつないで、水を使用できます。

観音法門を修行するのはこの水流と水道管と同じで、私を水流に例えたとしたら、みなさんはまだ水流にはなれませんが、少なくとも水道管のようにどこにつないでも、人々が飲む水があります。必ずしも水流のある所に行かなければ、飲み水がないわけではありません。水道管をつなげばよいのです。私の言っている意味がわかりますか。その時は祈らなくても、水は自然に出て来ます。神様に助けてくださいと言ったり、水を取りに行ったり、「人工水」を作ったりしなくとも、水道管をつなぎさえすれば、使える水はあるのです。そうでしょう。水道管は非常に安いのです。水道管は二時間半の座禅だけですから、非常に安いのです。

一日は二十四時間あり、私たちはすでに世界に二十二時間与えていて、残りの一〇%の時間を自分に与えるだけです。それでもできないのですか。愚かな人だけがそうです。身・口・意すべて世界に与え、一日中この世界を観察し、誰が良い、誰が悪い、誰が苦しんでいる、誰が楽しそうだ、誰が貧乏だ、誰が病気だと、一日中彼らに奉仕し、家に帰ってからは妻が着る物があるかどうか、子どもが飢えてないかどうかなど、二十四時間他の人に奉仕しているのです。みなさんは自分に奉仕していると言っても、そうではありません。みなさんは食事時でも、

慌しく商売のことを考え、悩みに煩わされて、食事といっても本当に食事とは言えませんし、寝る時も寝付けず、今日の仕事のことを考え、社長は今日機嫌が悪く、仕事がうまくいかなかったなどと思うのです。ですから、みなさんは本当に自分に奉仕しているのではなく、二十四時間この世界に翻弄され、この世界に縛られ、この世界に閉じこめられているのです。みなさんは一日中世界に閉じこめられているのに、自分ではわからないのです。わかりますか。

私はみなさんに二時間半「閉じこもりなさい（座禅をしなさい）」と言ったら、みなさんは長ずぎると思うでしょう。二時間半「閉じこもる（座禅をする）」のはだめですと言っておきながら、なんとまあ二十四時間「閉じこめられたい」のですから、本当に愚かですね。わかりますか。どうして聞いていて反応がないのですか。みなさん本当にユーモアのセンスがありませんね。（笑い）今やっと苦笑していますが、私を喜ばせようとして、わざと笑ったふりをしているのですか。

みなさんは毎日二十四時間「閉じこめられて」、慌しく、血、汗、涙を流しても、二十四時間苦痛を感じません。私はみなさんに二時間半都合つけて「閉じこもって（座禅をして）」、自分に奉仕して、自分を回復し、自分の病氣養生をし、自分で身・口・意の修行をして、明日には社会に奉仕しなさい、と教えているのです。しかし、みなさんはいろんな口実をつけて、あまりに苦しいとか、座禅する時間がないなどと言ったり、怠けすぎたりして、二十四時間ま



るまるただ世界に奉仕することに使っています。

実際には何も奉仕していません。ただ、おなかがいっぱいになり、着る物があるだけで、他はまったく役に立っていないのです。そうでしょう。生涯他の一人の人に尽くしたとしても、毎日最高の山海の珍味を食べさせ、一番きれいな着物を着るほかに、あなたはその人に何を与えられますか。百年後にはその人も永久の旅館に行つて眠らなければなりません。そうでしょう。そこで眠つて永遠に帰つて来ません。ですから、私はお墓のことを永久の旅館と言つています。

フォルモサはそのような旅館が特に多いですね。人が多く、場所が狭いのに、どこへ行つても、永久の旅館を見ることができません。とてもきれいですね。ある時私は出家者に「住む所がなければ、フォルモサにはあんなにたくさんきれいな家（墓）があるので、そこに住めばいいです。問題ありません。心配しないで」と言ったことがあります。本当ですよ。もしどこにもなければ、あそこに行つて住みましょう。彼らの草刈りを手伝え、主人は喜びますし、出家者がそこで修行すれば、彼らにも福報があつて喜ばれます。問題ありません。万一本当に住む所がなければ、お墓に行つて住みましょう。

みなさん、私が住む所がないのを心配しているなどと思わないでください。私はただみなさんの道場がなくて、講義を聞きに来られなくなるのを心配しているのです。私個人はどこに住

もうとかまわらないのですが、しかし、みなさんこんなに多いので、私としても場所を探さざるを得ないのです。ですから、私の頭にも白髪が一本あります。(笑い) 今まではなかったのですが、今一本見つかりました。ああ一本半みたいですね。(引き続き笑う) みなさん、こんなに多くの人のために私の髪は白くなりました。そうでなければ、私たち出家者の生活は一番簡素なのですが。

私がどこに行こうと、彼らはどこでもついて来て、まったく何も必要なものではありません。「電気」も「明かり」もいらず、「水」は至る所にあります。フォルモサは水源が至る所にあり、水道管一本つなぎさえすれば、家に持ち帰って使うことができます。「住」も永久の旅館(墓)に住めばいいのです。私たちはそのような一流の家を探して住むのです。普通の家よりもきれいな墓もありますから。みなさん見たことありますか。ある人は百万元を使って墓を作ったのですが、私は一万元で買える土地が見つかりません。

住む所は出家者にとっては何も問題ないのです。出家者は状況に応じてどう対応するか身につけています。お金がなければどうやって生活すべきか、衣服がなければ自分でどうやって縫うか、食べ物があればどうやって野草を探すか、誰も恵んでくれなければ、どうやって独立生活を営むか、住む所がなければどうやってありあわせのもので解決するか、すべてを身につけています。みなさんからの供養に頼らなくても生活できるのです。

みなさんが供養するのは自分に供養するのであって、みなさんが修行仲間や私に供養しているなどと思わないでください。ですから、供養する時はあまり大声で大げさにしないようにしなければいけません。まだ供養していないのに国中に知れ渡りますよ。「私」は十万元マスターに供養します、何月何日「私」は車でマスターを送り迎えます、とこういったことは不要なことです。みなさんは自分に供養しているのです。

私には何が必要なのでしょう。一日一食、せいぜい二食、三食で、量は子猫並みです。みなさんは誰に供養するのですか。私はみなさんから供養してもらう必要はまったくありません。布施といっても何の布施でもありませんし、供養といっても何の供養でもありません。すべて自分に供養しているのです。道場がなければ、みなさんは私に会いに来ることもできないし、講義を聞きに来ることもできません。もし私が墓に住めば、今日のように天気がよければ、講義を聞きに来ることができずから、来てもらえばよいのです。しかし、台風や雨が降れば、みなさんは私に会いに来られません。ですから、みなさんがお金を供養して土地を買って道場を建てるのは、すべてみなさん自身のためです。みなさんはこの点をわからなければなりません。

私はそんな話はまったくしません。みなさん今まで私が「私はもうすぐ土地を買います。みなさんできるだけ供養してください」などと言うのを聞いたことがないでしょう。聞いたこと

あります。きつとないはず。私は恥ずかしがりですから、お金のことをいうのが一番嫌いです。またそんなことを考えたこともありません。

ある人は私が大変高い修行を積んだ者で、欲しい物は何でも手に入ると聞いて、「マスター、どうしてお金のことを考えないのでか」と尋ねました。それを聞いて、何時間も気分が悪くなり、(笑い) 吐きそうになりました。本当です。正直言つて、私にこんなふうにする人はいとは思つてもいませんでした。しかも「弟子」が言つたのですよ。本当に「土地」と同じですね。(笑い)。中国語で「徒弟」(弟子)と「土地」の発音が似ている。智慧がありません。

私がどうしてお金のことなど考えるでしょう。私はまったくお金に対する概念がないのです。私が郵便局に行った話を知っていますか。私はお金の計算ができないので、郵便局に持つて行って計算をお願いしました。お金がたくさんで計算が容易でなかったからです。郵便局の人が「いくら持つて来たのですか。どうして前もつて計算しておかなかったのですか」と聞くので、「そちらに機械があるでしょう。機械の方が私より速く計算できるでしょう」と言つたところ、「そんなことしてはだめですよ。だまされますよ。あなたは大体九十万と言いましたが、結局百万余りでした。もし誰かが多い分持つて行つたらどうするのですか」と言われました。私は「大丈夫です。持つて行かれればそれまでです。それだつてフォルモサ人のお金です。フォルモサ人のお金をフォルモサ人が使うのに、私に何の関係があるのでしょうか」と言つたの

です。

みなさんに道場がないのは、フォルモサ人の共通のカルマであって、私には関係ありません。大道場があれば、みなさんの福報になり、そうすればみな講義を聞きに来られますが、それにも私には関係がありません。関係ありますか。(答える…ありません) ですから、供養と私とは関係ありません。布施をする時も「私(自分)」が布施をするのだと思わないでください。供養も大げさにしないように。これらは何でもないことです。さもないと、私は気分が悪くなり、おそらくお金をみなさんに返してしまうでしょう。

供養は無心でしてこそ供養できるのです。わかりますか。お金に執着してはいけません。そうでなければ供養しなくて結構です。私は必要ありません。今お金はたくさんあつて使い切れません。使い終わつた時にまた考えましょう。(拍手) 実際に、私はこういうことは決して言うはずがありません。私はお金がない時もありますが、みなさんはまったく知りません。私にお金がある時も言わなければ、みなさんもわかりません。そうでしょう。私はこういうことは言うはずがありません。私はそんなことを心にとめないからです。

講義をする時、衆生に利益を与えるために、ちよつと言つただけです。そうでなければ、どうして私がお金のことなど考えるでしょう。あの弟子は私が大変高い修行を積んだので、欲しい物は何でも手に入ると思つて、私にお金のことを考えるべきだと提案したのです。考えよう

とすればできます。私はちよつと思っただけでお金がそこにあるのです。ないではありません。でも私はまったく考えられないのです。

おなかがすいた時初めて食べたいと思います。そうでしょう。もうすぐ飢え死にしそうになった時、何を考えますか。きつとおかずとか、パンとか、食べたい物を考えますね。そうでしょう。でもおなかいっぱいになってもまだ食べたいと思いますか。山海の珍味であつてもどうでもよくなるでしょう。のどが渴いた時、まず何を思いますか。何か飲み物を探して飲むことですね。もしここまで（マスターはのどを指す）いっぱい飲んだら、上等のワインや世界で一番高い飲み物を持つて来られても、もう飲む気はしなくなるでしょう。意味がわかりますか。

従つて、お金のことを考える人というのは、お金が好きだから考えるのであつて、あの弟子はそのことを忘れているのです。好きでもないのに、どうして考えられますか。おなかいっぱいになつてどうしてご飯のことを考えられますか。私がどうしてお金のことを考えられますか。私は聞くとお金が悪くなります。こういう状況だから気分が悪くなるのではなくて、弟子がどうして私のことをこんなふうに通うのかということ、気分が悪くなるのです。なぜ私にお金のことを考えさせようというのでしょうか。私は考えることができます。もし無理に考えようとするれば、とても苦痛です。あなたがおなかいっぱいなのに、殴つてどうしても食べなさい、食べなければ殺すと言われたら、とても苦痛に感じるでしょう。

ちよつと脱線しすぎましたね。何を話していたか忘れえました。私も年とつて、ある人は私が古仏であると言います。古すぎますね。ですから、何の話をしていたのかよく忘れれます。（笑い）先ほどは黒神通力と白神通力の状況を話しましたが、観音法門は神通力を超えた法門です。黒白神通力のことは大体話したと思います。ひと休みしましょう。何か質問ありますか。黒神通力を私に見せたいと思う人はいますか。あるいは白神通力を発揮したいと思う人は。あなたは（基隆のある修行仲間を指して）まだ神通力を修行したいのですか。毎日どの神通力を修行しているのですか。黒？ 白？（その修行仲間が答える…わかりません）みなさんは毎日黒白神通力を発揮しているのですが、ただ知らないだけです。

私がみなさんに修行日記を配ったのは、みなさんに自分で黒白神通力をどの程度まで使ったかをチェックしてもらうためです。わかりますか。自分が毎日黒神通力をどのくらい発揮したのか、白神通力をどのくらい発揮したのかを見て、修行日記に書くようにという意味です。さもないと、みなさんはむちゃくちゃになって、自分でもわからなくなり、自分をコントロールできません。悪いことをするのが黒神通力で、良いことをするのが白神通力です。わかりますか。誰も神通力が何であるか知らないなどとは言わせません。誰でも知っているのですが、ただ自分をコントロールできず、良い面に使うことができないのです。黒神通力を使う方が白神通力を使うより多いので、かえって自分を害するのです。

人に害を与えれば、その後報いが自分の身に降り掛かってきます。私たちに世々代々生老病死の苦しみがあるのは、自分が黒神通力を使いすぎて、白神通力を認識しないからです。黒神通力を認識すればするほど、私たちの生活はますます苦しくなります。もし生活がとても困難で苦しんでいる人がいたら、その人のカルマは非常に重いといえます。

カルマとは何でしょうか。悪いことをした結果であり、自分自身が造り出したもので、今、「こんにちは」とやって来たのです。意味がわかりますか。しかし、本人は忘れていて、とても苦痛に思い、恨むのです。以前自分自身が造り出したものだとかわかれば、もちろん恨むこともないのですが、大多数の人は宿命通がないので、みな忘れてしまったのです。

宿命通とは何でしょうか。それは過去の生活を見られることです。もし第二界に行けば、過去の生活を見ることができません。ただし第五界に行った後、初めて未来の生活を見ることができると。従って、大多数の占い師はあなたがいつ死に、いつ金持ちになり、いつ損をし、いつ結婚するかくらいまでしか占うことができません。せいぜいこの生涯のこれから、例えば将来何年以内にとか、全生涯のことだけで、他のことは占えません。あなたが死んでからどこへ行くのかは占うことができません。わかりますか。

ごくわずかの人だけが往生の状態を占うことができますが、それでもその時に起こることを言うだけです。例えば、その人を見て「今彼は地獄に行きました。または今彼は天国に行きま



した」と言いますが、せいぜいこれだけです。彼がそれからどうなるかなどまったくわからないし、天国に行った後何をするのか、地獄で何をするのかなどわかりません。ましてや、いつ天国を離れ、いつ地獄を飛び出すのかなどわかりません。こういったことはごくわずかの人がわからないのですが、ただ第五界に行った後は何でもわかります。過去、現在、未来をあたかも本を読むのと同じように一ページ一ページと見ていくことができます。

第五界の人は私たちの過去、現在、未来の生活を、どの生涯でも見ることができですが、言いません。言えば、私たちの修行過程や修行能力に影響するからです。例えば、あなたが毎日座禅して修行しているのに、私が「あなたは前世では暴君でしたよ」などと言ったら、あなたは必ずつらくなるでしょう。そうでしょう。私が「あなたの前世は楊貴妃か西施でしたよ」と言っても、あなたは、今はこんなに器量が悪く、まるで東施のように見えるので、（笑い）あなたの気持ちは大変落ち込み、とても苦悩し、冷え冷えとし、大変つらいでしょう。そうでしょう。昔西施であつた時のことに執着するでしょう。

大マスターたちはこのようなことは言わないのです。私たちが知りたいなら、第五界まで修行すればわかります。第三世界、第四世界を超えて、第五界に到達した後、私たちの過去、現在、未来の生活がわかり、自分で自分の生活を決めることができます。例えば、娑婆世界に下りて衆生を救うか、あるいは第六、第七、第八、第九、第十、第十一、第十二、第十三……無

量無辺の世界に上がって、遊びに行くとかです。その時私たちは主動的になり、受動的ではありません。わかりますか。

大多数の観音法門の修行をしてない人、あるいは修行をしてない人はみなこの世界に動かされているので、「受動」と言うのです。わかりますか。祈祷師に黒神通力をかけられて被害を受けたら、その後別の祈祷師に黒神通力を使って救われたり、人に黒神通力をかけられて病気にされた後、別の所に行つて、祈祷師に神通力を使って病気を治してもらつたりするのです。

私はみなさんに、私が帰依したオウラックのマスターの妹が、人の病気を治した話をしたことがあります。彼女も出家者で、多くの病気を治すことができ、大変神通力がありました。今は二度と神通力を使って病気を治すことはしません。というのは、一定期間人の体を治すことができるだけで、永遠に魂を救うことはできないからです。白神通力を使って人を救つたとしても、厄介なことが多く、人の因果に介入し、人に代わつてカルマを背負い込むからです。ですから、今は彼女は医者にかかるよう勧めています。

受動的な衆生はとても苦しいです。時には私たちはお金がなくて苦しんだり、良い食べ物や良い衣服がなくて苦しんだりもします。そうでしょう。しかし、広欽老和尚は、山上に住んでいた時が一番幸せな人でした。全然お金がなく、ぼろをまとい、食べ物もなく、何週間も、何ヶ月も誰にも会うことなく、ただサル、トラ、蛇、小鳥などの動物が相手でしたが、彼は一番

幸せな人でした。

彼は戻って衆生を救ってから苦しくなりました。わかりますか。彼は食べたくなかった。弟子がずっと無理に食べさせようとするので、とても苦しかったのです。そうでしょう。

彼は往生する前に「もしこのご飯を食べれば、必ずあと一週間残らなければならぬから、食べないよ」と言ったのです。

みなさん見てください。彼はこの世界をこんなにも「慈しみ」、この世界をこんなにも「愛した」ので、たとえ一週間であってもどまりたくないと言って、食べないと言い張ったのです。しかし、私たち凡人がずっと無理に大師の肉体をとどめて来たのですが、これは unnecessary ことです。もし彼に継承できる良い弟子がいれば、彼が残っているのと同じです。

みなさんは好きなように鬼神通力や、白神通力を修行して構いません。私はもうすべて話しました。みなさんは毎日修行したいものを修行すればいいです。しかし、私はみなさんに観音法門を修行するのが最良であることを提案します。黒でも、白でもありません。内在する音流が自然にこの世界をきれいに洗い、私たちのカルマもきれいに洗い、音流のパワーが自然に世界を整えてくれるのです。

私たちを整えるとは世界を整えることです。「一切唯心造（すべては心で造られる）」だからです。わかりますか。老子も同じことを言っています。彼は「この『一』を得た後はすべて

が得られる。世界はすべて良くなる」というふうに言ったではありませんか。私の翻訳はあまり良くないですが、みなさん道德経を見ればわかります。（道德経第三十九章に「昔之得一者，天得一以清，地得一以寧，神得一以靈，谷得一以盈，萬物得一以生，侯王得一以為天下貞」とあります。）

「一」を得るとは何を指すのでしょうか。この仏性を得ること、内在する天国を得ること、自分の本来の姿を得ること、自分のこのパワーを得ることです。この音流こそ、私たちの本来の姿であり、私たちのパワーなのです。今、私たちはただ少しばかり見ているにすぎず、最大のものではありません。さらにもっと高いレベルがあります。私たちの本来の姿は多方面に渡っています。わかりますか。ある人は小さな一面しか学ばないで祈禱師になりますが、もし良い面を学べば白神通力になり、全部学んだなら仏陀になり、イエス・キリストになり、道を得た老子などになるのです。私の言っている意味がわかりますか。私たちは完璧で非の打ち所のない人にならねばなりません。

完璧な人とは何でしょうか。在家者なら家庭を大切に、国家を愛護して、自分の責任をきちんと果たさなければなりません。しかし、また時間を割いてこの大道を認識しなければなりません。そのようにして初めて完璧な人といえるのです。完璧で非の打ち所のない人は簡単になれません。釈迦しかなれないというのではなく、私たちでもなれるのです。私について修行さ

えすればなれます。

私たちはこの世界をおろそかにしていませんし、家庭、夫、妻を顧みないのでありません。やはり十分に面倒を見なければなりません。仕事もしなければなりません、ただもう少し賢くなり、毎日時間を一割節約して、私たちの身・口・意を修正し、私たちの宇宙や心を修正することに、この世界は自ら良くなります。というのは「すべては心で造られる」からです。

「すべては心で造られる」以上、私たちが自分の心を修正しないで何を正すというのですか。

しかし、大多数の人たちは外に求めて、この社会を改革しなければならない、戦争しなければならぬ、そうして初めて世界を平和に、幸せにすることができると思っています。実は戦争すればするほど、改革すればするほど、状況はますます悪くなるのです。そうでしょう。世々代々たたくさんの人が社会を改革しようとしたが、できませんでした。なぜでしょう。それはその人自身が自分を変えることができなかったからです。中国人はみな孔子が説く道理を知っています。たたくさんの人が論語、大学、中庸を読みましたが、できませんでした。ですから世界はまだ大変乱れており、中国も平和ではありません。

まず身を修めて、それから家庭を円満にし、国を治め、天下は平和になります。まず、身を修めなければ、家庭の円満はありません。一つの家が乱れ、二つの家家庭が乱れ、たたくさんの家庭が乱れば、国も乱れます。国が乱れば世界も当然平和ではありません。ですから、身

を修めることが一番重要で基本です。身を修めなければ、国を治めるとか、天下を平和にするなどと語るべきではありません。治めれば治めるほど乱れるのです。孔子はあんなにはつきり言っているのに、それができた人はいません。

みなさんは自分が身を修めていると思っていますか。どんな身を修めたのでしょうか。毎日たくさん栄養剤を飲んで肉を作り、この肉体を補強するように、ここが漏れていれば、ここを補強し、あそこが病気なら手術して補強するようなものです。ある人は肺病になったと言っては豚の肺を食べます。そうすれば肺を補強できると思っっているのです。頭に病気があれば、豚か牛の脳を食べる、そうするのも脳を補強できると思っっているのです。もし心臓病にかかれば、おそらく豚の心臓で補強するのです。そうでしょう。（誰かが答える…そうです）私は適当に言っただけですが、当たっているでしょう。（笑い）

これらはすべて私自身が思いついたもので、まだ証拠はありません。でも私がこのように考えるのは理由があります。子どもの頃、母がよくたくさん物の物、例えば、肝臓、肺、腎臓、心臓などを麵と混ぜて煮てから、食べさせてくれたからです。母はこれを食べれば全身を補強することになると言っていました。（笑い）母が炒めものを始めると、私は直ちに二キロメートル先まで逃げ出しました。私はまったく見られませんでしたから。どうして補強できるのでしようか。ですから私はとてもやせていました。一目見ると怖くなったからです。「補う」ので

はなく、「怖かった」のです。(中国語の「補」と「怖」は音が似ている) ですから、見ることができませんでした。

みなさんの中には心臓を食べて心臓を補強し、肺を食べて肺を補強すると思っている人もいるでしょうが、補強するならば、よくわかって補強すべきです。これは動物の心臓であって、人の心臓ではないのですから、心臓を補強するには人間の心臓を食べてこそ正しいといえます。

(笑い) 補強するならばきちんと補強しなければなりません、みなさんは人を殺して食べるようなことができますか。実際に人殺ししなくても、墓の中にたくさんあります。(笑い) 聞いてだけで吐き気がしてきませんか。でも豚を食べてよいのなら、どうして人間を食べてはいけないのでしょうか。豚も人も死んだら状態は同じで、すべて肉です。私たちの体を補強するには人間の体でもって補強しなければならぬのに、なぜ動物の肉で補強するのですか。こんなことをしていたら、ますます動物に似てきます。どうしたらよいのでしょうか。

みなさんは何かを愛すればすぐそれに変わります。知っていますか。アヒルや犬を飼っている人は、ますます自分の飼っているペットに似てくるではありませんか。見たことありますか。

(誰かが答える…あります) 動物を食べた後もますますそれに似てくるので本当に厄介です。人を補強するには人の肉を食べるべきです。そうすればフォルモサの墓がこんなに混み合っている問題が解決できます。(笑い) 人を食べられないなら、どうして豚は食べられるのです

か。同じように肉でしょう。人を食べれば少なくとも私たちに比較的近く、なじみがありますね。私たち人と人の体は化学構造がほとんど同じで、男女の差があるだけです。しかし、この問題も解決可能です。男が男を食べ、女が女を食べればよいのです。(笑い)

私はみなさんに今後豚肉を食べないように、本当に補強したければ、墓に行つて自分の同類を食べるよう提案します。これは冗談ですが、みなさん本当に肉を食べたくて、しかも吐き気がしないなら、どうぞ食べてください。豚を食べられるなら、当然人間も食べられるはずですよ。衆生を食べるのは、親族を食べるのと同じです。どこが違うのでしょうか。豚、牛は本来おいしくないからこそ、みなさんはあんなにたくさん調味料を入れなければならないのです。そうでしょう。(答える…そうです) もし本当においしいのなら、まったく焼く必要はなくて、切りながら生のまま食べればいいのです。しかし、まずくて、吐き気がし、汚いので、まづきれいに洗つてから、たくさん調味料に一定時間浸けて、臭みを抜いてから食べるしかないのです。わかりますか。唐辛子、五香、黒胡椒など薬味の味しか残つてなく、豚の味はまったくなくなっています。その時初めて食べられるのです。

ですから、私に「肉はとてもおいしいですよ」などと言わないでください。それは自分をだましています。もし魚がおいしいのなら、大海で魚を捕ったばかりの時が一番新鮮です。どうして食べないのでしょう。家に持ち帰つてきれいに洗つてから、外から中に包丁を入れて、し



つばや頭などだめなところを切り捨てて、一切れ一切れとまるでチョコレートのようにして、(笑い) まったく魚の姿には見えません。それに塩、五辛(ニラ、らっきょう、ネギ、ニンニク、たまねぎ)あるいは他のおいしい物を加えて煮た後は、魚を食べるのではなく、それらの調味料を食べているのです。

ですから、私に「魚はとてもおいしいですよ」などと言わないでください。何もおいしいこととはありません。みなさんに生きた魚を捕まえて生のまま食べなさいと言っても、まったく食べられないでしょう。そうでしょう。

鶏、アヒル、小鳥も同じで、とても汚いので、みなさんはあんなにきれいに洗って、何時間か煮たり、形が変わるまで蒸したり、焼いたりするので、見たところこれが肉だとはまったくわからず、まるでビスケットのようで、大変きれいです。ある人はそれに色づけして、色とりどりで、大変美しくして、そうして初めて売りに出します。そうでしょう。レストランではアヒルを真っ赤に染め、豚も真っ赤に染めます。赤ければ赤いほど人は喜んで買うのです。これは何を表すのでしょうか。こういった物は本来まったくおいしくないのです。わかりますか。

白米なら洗ってよく炊けば食べられます。塩をかけなくても大変おいしいです。ある人は白いご飯のまま食べますが、それでも大変おいしいでしょう。野菜も同じです。塩をかけなくても、生のまま食べられます。しかし、今野菜を栽培する人は農薬を使いすぎたり、下肥をかけ

すぎたりで、あまりきれいでないので、よく煮る必要があるのです。従って、中国人の習慣は必ず野菜をよく煮ることです。実際は野菜も本来生のまま食べることができ、生のまま食べられないのはごくわずかです。野菜は本来大変きれいで、とてもおいしく、味があり、香りが良く、しかもビタミンをたくさん含んでいるからです。

果物も同じです。人工調味料を加える必要はなく、直接取ってきてそのまま食べればいいのです。（マスターはすぐ梨をかじって食べる） 本当においしいですよ。（笑い） もし私が小鳥を一羽捕まえてこのようにして食べれば、みなさんは私のことをどう思うでしょうか。あるいは私が空中の小鳥を一羽射落として、口を開けてほおばれば、みなさん気持ち悪くなるでしょう。（答える…そうです） なぜでしょう。それは私たち自身が無意識の内にそれが間違った食料であることを知っているからです。しかし、今日に至るまで、人にだまされていたので改めることができません、人は本来菜食であることを忘れていたのです。しかし、本当に忘れていたのでもありません。もし本当に忘れていたのなら、人が生きた動物を食べるのを見てどうして吐き気がするのでしょうか。私の言っている意味がわかりますか。

なぜみなさんは小鳥を食べると、梨を食べるのは違うように感じるのでしょうか。それは無意識に動物を食べることは間違いで、果物を食べることこそが正しいのだということを知っているからです。私が生野菜を食べても、みなさんは気分が悪くなることはないでしょう。ど

うですか。(答える…ありません) ニンジンを持って来て私に食べさせてください。(マスターは生のまま食べてみせる) 言ったことはすぐにやります。こうすればみなさんは違うと感じるでしょう。もしみなさんが今ぴちぴちした鶏を一羽私に持って来て、私に取り上げてすぐ食べたなら、みなさん気持ちいいですか、悪いですか。(答える…悪いです) 当然気持ち悪くて、恐ろしいですね。そうでしょう。(答える…そうです)

しかし、一般の人は鶏をきれいに洗って、羽毛を抜き、足を切って、豆腐のように一切れ一切れにし、塩を少し加え、香料に浸し、(笑い) 二、三時間煮た後、自分をだまして食べています。

ニンジンが生野菜ですが、大変おいしいです。なぜでしょうか。これは私たちの食料であり、食べてよいもので、また食べなければなりません。違和感がないので、何も驚くほどのことではないし、怖いとも思わないのです。しかし、私たちが動物を食べる時は、とても良くないと感じます。良くないことはわかっているけれど、なぜ食べるのかわからないのです。父母が食べ、世々代々社会全体が食べ、国全体が食べるから、私も食べる、私が食べないと、みんなが私を変な人だと思うから、みんなのために食べるのです。みなさん「受動的」になっていて、主動的になれません。わかりますか。

みなさんは自分が何を食べるか判断することができないし、なぜ食べたなら大変気分が悪くな

るのかも知らずに、食べ続けるのです。このようにすればとても自然だと思いながら、（マスタートーがニンジンをかぶりとかじる）食べられないのです。これはすべて抑圧があるからです。みなさんは自分を小さな白ウサギに変えてしまっているのです。（笑い）家庭の抑圧、友人からの抑圧、国家、社会、世界から抑圧されて不自由になっています。みなさん男性は自分立派な男などと思わないでください。何が立派のですか。とても小さい、小さい男なのです。（笑い）奥さんが菜食をさせてくれないから、みなさんはあえて菜食できないのです。父母がみなさんに無理やり肉を食べさせるから、みなさんは食べるのです。社会で友人と商売すると、彼らがみな肉を食べ酒を飲むから、あなたも食べないわけにはいけません。

商売はみなさんの命より大事で、みなさんの自由な思想よりも重要で、みなさんの独立したパワーよりも大事なので、みなさんは自分を失ってしまい、魂を社会に売り渡し、商売に売り渡してしまったのです。みなさんは主人ではありません。商売がみなさんの主人に変わったのです。みなさんは社長ではなく、みなさんの商売と商売上の友人こそがみなさんの社長なのです。彼らが何か言えば、みなさんはそれを聞き、彼らがあの何の感情もないお金を持って来てみなさんに与えると、みなさんはすべてOK、酒を飲むのもOK、肉を食べるのもOK、麻薬を吸うのもOKなのです。

酒や肉はいずれも麻薬であって、私たちも良くないと思っているからこそ、きれいに洗って、

一本一本に切ってビスケットのようにして、自分をだますのです。その後油でいためて、色とりどりにして、たくさん香料をふりかけて初めて食べられるのです。ということは、これらの食物はまったく食べるべきでないということです。しかし、ニンジンや直接食べてもよく、何も加える必要はありません。ご飯も同じですし、トマト、果物、どんな生野菜もみな同じです。

オウラック（ベトナム）には「長山」という大きな山があります。とてもとても長く、南部よりずっと北部まで延びており、とてもとても深く、深山に隠れて修行している人たちがいます。衣服を何着か持っているだけで、種子を持って山に登り開墾して、野菜を植えます。野菜しか食べず、ご飯はありません。

この状態は本当です。私のあるマスターが話してくれたものです。彼の親族が山上に隠れて修行しており、一、二着の衣服しか持たず、塩、ご飯、香料、味の素、五辛、唐辛子など何もありません。彼らは野菜を切って煮て食べます。毎日同じで、このようにして一生を過ごすのです。野菜を食べるのですから、何も加えなくてもよいのです。わかりますか。

オウラックにも以前はそのような修行をした人がたくさんいました。彼らは自分を罰したり、故意に苦しい修行をしたりするのではなく、状況が自然にそのように変えたのです。彼らとはとても自在で、有る物を食べて、まったく問題ないのです。彼らは無理に自分で苦しい修行をしたわけではありません。もし無理に苦しい修行をしたのなら、何も得ることができず、「苦しい

仏陀」「大変苦しい仏陀」に変わっていたでしょう。(笑い) 人々はすでに十分苦しんでいるのに、仏陀になってもそんなに苦しいのなら、誰が仏陀になるでしょう。私は苦しい仏陀にはなりたくないのです。楽しい仏陀になりたいです。そのような状況でないのに、無理をして苦行をすることは、格好をつけることです。

外面に頼って修行すれば、「外面の仏陀」になり、「内在の仏陀」になれず、仏性を得ることができません。例えば、あなたの家が金持ちで、自分で独立してお金を稼いで生活でき、家の人もあなたの修行を邪魔しないとします。しかし、あなたは毎日わざと少ししか食わず、故意にやせて、人はあなたを見ると、「本当に大変高い修行を積んだ人のようだ」と賞賛します。

(笑い) こんなふうにして結果はどうなるのでしょうか。「やせた仏陀」「飢えた仏陀」「醜い仏陀」になるのです。これはいけません。

彼らが苦しい修行をしたのは、おそらく状況がそうだったからでしょうが、それでいてとても自在でした。苦しいのですが、苦しいとも感じず、広欽老和尚と同様に、山上で修行した時も苦しいとも思わなかったのです。わざと苦しい修行をしたわけではありません。わかりますか。私たちの修行がそのようなレベルにまで達すれば、すでに苦海を超えているのです。

従って、苦しいといっても、何も苦しいことはありません。もし故意に自分を罰しているなら、きっと修行が間違っていて、邪道を歩んでいるのです。例えば、現在私たちはまだこんな

に良い所があつて住めるのに、どうしても住まないで、弟子たちをどぶで一緒に住むようにさせるのでしょうか。そんなことをしたら、みなさんどう感じますか。「あの師は気が狂ったのだ。良い所があるのに住まないで、わざわざどぶの中に住むなんて」と思うでしょう。仏陀になるためにこんなことをするのなら、してもなれません。なったとしても、「苦しい仏陀」になるのであつて、「苦しい仏陀」と一緒に修行したいと誰も思いません。仏陀は楽しくなければならぬのです。

有る物を使うのが自在な人です。何か欲しいと思つて、故意に自分の状況を変えてはいけません。それはわいろに変わります。わかりますか。このようなことも一種の黒神通力です。なぜなら、自分の「意」でこの自然のパワーを強迫し、「もし私を仏陀にしてくれなかつたら、私は餓死します」と天の神様を強迫して、自分の言うことを聞かせようとするからです。これでは子どもと同じで、キャンディーをくれなければ勉強しない、または寝ないというようなものです。わいる仏陀も仏陀になることができません。警察にお金を使ってわいろを贈る人たちがいるように、修行者の中には「我執」のパワーを使って、仏陀や菩薩に早く仏陀にして欲しいと強迫する人たちがいますが、それはだめです。

私たちが観音法門を修行するのはとても自然です。そうでしょう。しだいに何も食べたくなくなります。みなさん在家者でもそう感じるでしょうが、もし真剣に修行すれば、苦しい修行

はまったく必要なく、自然に未練がなくなりません。わかりますか。食事をして何も味を感じなくなりません。時にはおいしいと思うこともあります。修行をすればするほど、世の中のすべてに対して何も感じなくなり、有る物を着て、有る物を食べて、以前のように選り好みしなくなると、明日この世を去ってもいいと思うようになります。そうでしょう。

なぜ私たちはこの世がこんなにも好きなのでしょう。この世には私たちが楽しませてくれるものは、何もないようだということがわかってるので、配偶者を探したり、金儲けをしたりすれば楽しくなると思うのです。いろいろな方法で試みるのは、すべて快楽を追求するためであり、「貪り・怒り・愚かさ」はすべて快楽のためなのです。私の言っている意味がわかりますか。これも本当の「貪り・怒り・愚かさ」ではないのです。いわゆる「煩惱は菩提である」はこういう意味です。

なぜ女性のことを思うのでしょうか。彼女と話すれば、楽しそうだと思うからです。なぜ男性のことを思うのでしょうか。彼と話すれば、気分が良いと思うからです。心の中で「彼（彼女）」と結婚した後は生活が必ず変わり、もっと楽しくなる」と思うのです。まさか二、三年すれば違ってくるとは思いません。これらはすべて人をだましているものであって、外面だけにすぎません。わかりますか。



結婚前や婚約前は彼氏は「ああ、君の髪の毛は黒くて、とてもきれいだよ」と言いますが、結婚後三、四年すると、「今日の食事はまずいなあ、どうしてスープの中に髪の毛が一本落ちてるんだよ。汚いたらありやしない」（笑い）と言うのです。結婚前のデートではいつも「君はとてもきれいだよ。細長いまゆに切れ長の眼」と褒めていたのが、結婚後何年も経つと、「毎日これを塗ってどうしようというのさ。あちこち塗りたくったっておたふくに変わりないさ。」（笑い）お前の化粧を待っているおかげで、俺は二時間も外出できないでいるんだぞ。お前が出家してくれば一番いいのに」と変わります。（笑い）

その時おそらくあなたは私の所に駆け込んできて「私、出家したいです」と泣いて訴えるでしょう。そんな人は私もいません。（笑い）化粧に二時間も費やしてやっと外出できるようでは出家には不向きです。私について出家する人は動作が速くなければなりません。私は割合にせっかちな性格で、外出時は五分で出発しなければなりません。間に合わない人はセンターに残ってもらうて待ちません。すでに習慣になっています。

私は門を出るのは早いのですが、名が出ることを大変恐れます。名前が出すぎると大変疲れて体がもちません。今毎日ニンジンと梨を食べていますが、これでどうしてこんなに多くの弟子を取れるでしょうか。あるいは今後肉を食べ、酒を飲まなければならなくなり、そうして初めてパワーが出るのかもしれませんが。（笑い）みなさんは肉を食べ始めて、パワーが出て、二

ンジンではパワーが出ないと言いますから。そうでしょうか。(答える…違います)

冗談ですよ。よろしい。これから自在の問題を話しましょう。自在であれというのに、私はなぜみなさんに菜食しなさいというのでしょうか。自在が良いというのに、なぜ肉食はだめなのでしょうか。私たちは自在になることはいいのですが、他の衆生に害を与えてはいけません。彼らにも自在にさせねばならないのです。みなさん、私の言っている意味がわかりますか。例えば、タバコを吸う人がいるとすると、彼がタバコ好きなのは彼の権利ですが、他人に自分がタバコを吸うにおいをかきなさいと強制することはできません。わかりますか。ですから、タバコを吸う人はとても自分勝手だと言えます。

肉を食べる人も同じです。彼は大変「自在」で、肉を食べたいので食べるのですが、肉を食べることが他の衆生の生命を傷つけていることに気がつきません。それらは殺される時、とても苦しいのですが、言葉があってもしゃべることができず、誰も命を救ってくれないので、あの動物は涙を流します。動物の肉を食べる人は大変自分勝手です。私たちが自在であるのは間違いいではないのですが、他の衆生にも自在にさせねばなりません。生きようとすれば、生かしてあげなければなりません。無理にその頭を切って肉を食べることはできません。わかりますか。そんなことをすれば、恨み、抵抗し、ワーワーわめくでしょう。でも、私たちはわからないし、聞かないで、逆に動物たちがなぜ人間の言葉の話さずに「鶏語」や「牛語」を話すのか、

俺にどうしてわかるのか、と責め立てるのです。ですから、殺しても何とも思いません。動物たちがフォルモサ語を話さないから、殺してもいいのだと言うのです。たとえ動物が標準中国語を話しても、みなさんは聞かないでしょう。すでに殺生が習慣になつていきますから。

この種の自在と本当の自在とは違います。自在は自分勝手ということではありません。自在とは私たち自身が自在であることです。何事にも縛られたり、妨げられたりせず、また何物にも未練はないのですが、他の衆生が自在であることも許容し、無理に命を短くさせたり、無理に私たちのおなかの中に住まわせてはならないのです。私たちのおなかの中は大変美しいかも知れませんが、動物はそこにはすみたがりませんので、無理にすまわせることはできません。動物は外にすむのが好きなのです。より自然で、あちこち飛び回ったり、駆け回ったりして、夫、妻、息子と一緒に遊びます。私たちが家族で遊びに出かけるのが好きなのと同じです。従つて「自在」ということは、肉食も菜食も同じだとは言えません。完全に違います。

はい。今日はしゃべりすぎました。二時間あまりですね。何か質問ありますか。反対の人はいますか。私が言ったことはすべてあつていますか、そうですか。(答える…そうです) ここで「そうです」と答えたからには、帰つてからそのようにしてください。毎日たくさん座禅して、たくさん観音をして、あまりテレビを見ないで、自分の本来の姿を多く見るようにしなければなりません。



## 蛇の虫

一九八七年六月七日 フォルモサ・台北無量光座禪センターにおいて

先週は毛虫の話をしました、今週は蛇の虫の話します。みなさん蛇を知っていますね。ここに一匹の蛇がいて、よくはつてきます。もし何かでドアの隙間をふさがなかったら、今でも毎日やって来るでしょう。私たちが明かりを消して座禪しようとするたびに、蛇はやって来ます。毎回そうなのです。今は入つて来させません。

ある日、私のマスターのマスターのマスターが、弟子と一緒に遊びに出かけた時、山の上で一匹の息絶え絶えの蛇を見ました。まだ死んでなく、生きていたのです。その体から虫がたくさん出て来て、その蛇の肉を食べながら、あちこちはいずりまわっていました。みなさんそのような光景を見たことがありますか。見たことがなくても想像できるでしょう。その蛇はもちろん大変苦しんでいて死ぬにも死ねず、生きるにも生きられないのです。たくさん虫がその体から出て来たのです。

仏教の經典にも、獅子の体内の虫が獅子の肉を食べることが記載されていますが、その意味は、仏教徒や仏教の僧侶が自ら仏教をだめにするということ です。釈迦は先見の明があり、彼は末法時代には、たくさんの虫が獅子を食べながら中から出て来て、そうしてたやすく破壊されてしまう、と言いました。他の動物は獅子を食べられませんが、中で成長する獅子の体内の虫だけが獅子を食べることが出来るからです。それは後ほど、また日を改めて話すとして、今はさっきのあの蛇の虫の話をしてしましよう。

あの蛇の虫はどこからやって来たのでしょうか。もちろん蛇の体内で大きくなったもので、蛇の肉や眼を食べるので、大変恐ろしく、苦しそうに見えます。彼の弟子はこのような光景を見て、当然とてもつらくなり、マスターに「この状況を変える方法はないのですか」と尋ねたところ、私のマスターのマスターのマスターは、「変えてはいけません。これが蛇たちの因果なのだ。この蛇は以前良くないマスターだった。いわゆる偽物のマスターだった。自分はマスターを装って、たくさんの人を解脱できなくさせ、たくさんの人に邪道の修行をさせたのだ。その偽物のマスターは死んでから蛇に変わった。あの虫は彼の弟子で、今復讐しようとしているのだ。両方とも解脱できなかったからだ。弟子はあの偽物のマスターのせいで自分たちが解脱できなかったことを恨んで、その頭や肉を食べにやって来たのだよ」と言いました。従って、でたらめな教え方をしていると、その報いは恐ろしいものです。

みなさんご存じのように、印心する時、私はいつも再三みなさんに、人に教えてはいけない、自分がマスターになるか、またはマスターにそうしなさいと言われて初めて教えに行つてよろしいと強調しています。私はよくみなさんに「私は明師（マスター）ではありません」と言います。何を「明」白にするのでしょうか。何も「明」白にするものはありませんよ。「師」は「失」です。（中国語では師と失は同音、髪の毛を「失」っていますから（剃髪の意味）、「師」に変わりました。（笑い）

私たちオウラック（ベトナム）では剃髪した人でありさえすれば「師」と尊称されます。「師公」とは年をとった僧侶を指し、その人を「師」と呼びます。意味はこちらでいう「僧侶」あるいは「比丘尼」に相当します。オウラックでも「比丘」「比丘尼」という言い方はありますが非常に少ないです。すべて「師」といいます。「師姑」の意味は「比丘尼」です。「マスター（師父）」は比丘を指しますが、短くして「師」とだけ言います。

私がいつも言うように、私が弟子を取るのには、まったく私のマスターがそうしなさいと言つたからで、私は本来取りたいと思いませんし、今でもそうしたくないのです。みなさんの誰かがこの仕事がやりたいなら、または誰かこのビジネスができる人がいたら、私はすぐ代わりません。

実際、マスターになつても何も良いことはありません。人がやって来て私にひざまずくのを

見て、私が喜んでいるなどと思わないでください。そんなことはありません。私は少しもうれしくないので。しかし、マスターにとってもなりたがる人たちもいます。その人は剃髪もしないし、あまり勉強もしませんが、人のマスターになるのがとても好きなのです。

私のいわゆる弟子の中にも何名かいます。彼らはもともと、ひどく魔にとりつかれていました。私は本来そういった人たちには教えたくないのですが、教えないわけにもいけません。菩薩戒を受け、菩薩道を修行するからには分け隔ての心があつてはいけません。ですから、みなさんはよく、多くのまつたく教える価値のない人を、私が同じように教えているのを見ています。時々みなさんも私に「どうしてあんな魔にとりつかれた人を教えないければならないのですか。彼はまだ、まつたくちゃん勉強してないですよ」と文句を言います。その時、その弟子はともひどく魔にとりつかれていて、死にかかつていて、私に助けを求めにやつて来たのです。魔にとりつかれた状態が少し良くなると、すぐ戻つて人に教えます。教えれば教えるほどだめになるわけです。

ある弟子がやつて来て、私に「何人かの修行仲間が家に帰つてから、その人について学び、ある呪文を唱えています。唱えれば唱えるほどますますレベルが下がりに、ついにはとても低いレベルまで落ちてしまいました。その修行仲間は本来大変高いレベルで、上の境界（きょうが）まで上がつて、菩薩やマスターに会うことができ、また大変高い境界に遊びに行くことも

できたのですが、あのような呪文を唱えてからは、唱えれば唱えるほどますますレベルが下がり、ついには阿修羅と地獄にまで落ちてしまったのです」と言いました。

みなさん、彼が唱えたのはどんな呪文か知っていますか。楞嚴呪と他の呪文もありました。彼らは楞嚴呪、超度呪、往生呪などたくさんさんの呪文を唱えるべきだと言っています。呪文は本来良いのですが、ただその法を伝える人が間違っているのです。その人が魔にとりつかれているので、当然その人のいわゆる弟子にうつって、唱えれば唱えるほどだめになり、ますますレベルが下がって、その後一緒に地獄に落ちてしまいます。

みなさんに言っておきますが、衆生を救うのは大変なことです。彼らは、自分たちは地蔵王法門を修行したと言います。地蔵王は地獄にいるので、もしみなさんがそのような法門を修行すれば当然地獄に落ちます。(笑い) 問題は、その人は果たして地蔵王菩薩なのかどうかということです。本当に地蔵王菩薩が私たちに法を伝えたのでしょうか。本当に彼にはパワーがあるのでしょうか。私たちの仕事は地獄にあるのでしょうか。私たちが修行してあるレベルを得た後は、阿羅漢のレベルになろうと、何か菩薩のレベルになろうと、成果を得た後はそのようなパワーを持ち、地獄か天国に行くように願をかけることができます。またはその時、ある世界に行つてある人を救うことも当然できるのです。現在修行はまだ何も成果がないのに、人に尊敬されることを好み、至る所ででたらめをしゃべり、たくさんの人に教えたりするので、唱



えれば唱えるほどますますレベルが下がって、たくさんの魔が彼らをかき回しにやって来て、彼らの福報を横取りします。彼らは福報も足りないのです、ますます病気になるのです。

ある日、彼のいわゆる弟子たちが私に会いに来ましたが、彼女たちを見てびっくりしました。というのは、彼女たちは以前よく私の所に来たのですが、当時は顔が明るく問題ありませんでした。しかし、久しぶりに会うと、あの人たち、あのような人について学んでからというものが変わってしまいました。ですから、彼女たちを見たたん、私は本当に驚きました。

今、彼女たちは良くなりました。怖いことを知り、自分たちが間違っていたことを知って、二度と唱えなくなりました。自分で体験したからです。そして私に「今後永久に唱えません。マスターが最高であることが今やっとわかりました。マスターの法門、観音法門こそが最高の法門であることをもう本当に理解しました」と言ったのです。彼女たちは今とても喜んでいて、二度とあのような人について学ばなくなりました。

ですから、みなさんが道を得る前は人に教えてはいけません。そんなことをすれば人を害するだけです。これは本当のことです。もし私たちがまだ大して功德を積んでなく、レベルもあまり高くないなら、人に教えてはいけません。人を害し、自分を害します。もし私たちが「我執」で人に教えたなら、大変な結果になります。その後彼らのカルマを背負うだけでなく、あのような無形の衆生のカルマを背負わなくてはなりません。

しかし、彼らに代わってカルマを背負ったからといって、必ずしも彼らを救えるわけではありません。彼らのカルマはあまりに多く、少しぐらい背負っても何も意味がなく、役に立たないばかりか、私たち自身を害するからです。大海のみがどんな汚れた物でも洗えるのです。一、二杯の水だけではちよつと洗えるだけで、何の役にも立たず、かえって水をますます汚くするだけです。この小さな杯の汚い水を使っても、どんな物もきれいに洗えません。大海の水でも汚い物を洗い始めた時は汚く染まるのですが、それはつかの間にすぎず、時間が経つときれいになっていくのです。

ですから、マスターたちが衆生のカルマを背負っても問題があります。何もないことはありませんが、それはすぐなくなります。人のカルマを背負うのは他人のためになることであり、マスターたちにとつては大したことはありません。少し影響はありますが、何ら深刻な問題にはなりません。福報や功德がまだ十分でない人は、自分自身が使うだけでも十分ではないのに、人を助けたいと思うので、当然両方とも足りないのです。

私は、私のマスターや、マスターのマスター、マスターのマスターたちがたくさんの人を救ったために、時々病気になるのを見ました。例えば、訳もなく咳が出たり、訳もなくのどが悪かったり、おなかの具合が悪かったりします。これらはすべて衆生のカルマを消化するためなのです。消化の時は、当然体が影響を受けて疲れたり、病気になることがあります。

私のマスターのマスターはある時病気がひどくて、起き上がることもできないほどでしたが、講義の時間になると、すぐ出て来て、何もなかったように講義して、終わったら家に帰ってまた倒れたそうです。彼は自身をしばらくの間自由にさせて、病から抜け出していたのです。そうしなければならなかったからです。講義が終わって戻ってから、またその病気を引き受けたのです。

これはちやうど、私が講義の時に黄色の僧衣を着ていて、自分の部屋に帰ってから着替えをしてリラックスするのと同じです。一日中着ているわけではないのです。それは耐えられませんが、私は本来あまり着たくないのですが、着てみるととても面白いもので、どうということはあります。みなさんは遠方から来るので、私も礼儀上このような服装をしているのです。そうすればより正式になり、私のみなさんに対する敬意を表すことができます。きちんとした服装するのは、みなさんを尊重しているからです。そうでなければ、私は行ったり来たりするのはバジャマのままでも構わないのです。毎回人が来るたびに、私が僧衣を着てみなさんと話をするのは、私が尊重の心を表すためです。

時にはその病気が本当ではありません。彼が病気なのではなく、他の人が、病を彼に放り投げたのであって、ガムテープが彼の体にくっついたようなものです。時々、私は人を見たときに気分が悪くなる場合がありますが、ある人は私を見たときに気分が良くなります。それ

は互いに交換しているからです。(笑い) 商売のように、彼はカルマで私の福報を買い、私は彼のカルマを引き取ります。彼は私の福報をもらうので、私はもっぱら福報を売っているわけです。みなさんカルマさえあれば、買いに来られますよ。(マスター笑う) ですから、彼はすぐ気分が良くなるのですが、私は逆にすぐ気分が悪くなります。でも何でもありません。とにかく誰かがゴミを引き取らなければなりません。

私たちの社会にはゴミ収集専門の人がいます。宇宙も同じです。修行面でも同じです。誰かが責任を持ってゴミを洗わなければなりません。普段私たちはご飯を作り終わった後も、おわんや鍋を洗ったり、床を掃いたりしなければなりません。しかし、あのようなカルマをなくすには一定の時間が必要です。すぐなくしきれるものではありません。そうでないと不公平です。因果は因果です。どんなことがあつても避けることはできません。

ある人が私に「私はマスターを見るとすぐ病気が治りました。この病気も、あの病気も治ったのです」と言うので、私は「そうでしょう。わかっていきます。もう言わないで。これ以上言うと、私はうらやましくなりますから」と言いました。(マスター笑う) ある時、ある人が私に「ちゃんと座禅できないのです」と言うので、「よろしい。今座禅しに行きなさい」と言いました。その結果彼はすぐ禅定できました。彼が禅定した時、私の心はかえって不安定でした。

(笑い) ですから、その人が私に「先ほどは座禅がうまくできました」と言ったので、私は「よ

ろしい。もう言わないで。これ以上言うと、私はうらやましくなりますから。あなたが禅定で来た時、私は『落ち着かず』、とても熱かったのですよ」と言ったのです。実はどうでもいいのです。これは本来ありふれたことですから。

私たちが汚いおわんを水で洗ったり、床を拭いたりする時、水はとても汚くなるでしょう。床拭きする時、水がますます汚くなるのを知っているでしょう。もともとこの水はきれいなのですが、モップを中につけると、部屋中の汚い物がそこに集中するので、当然汚くなります。でも私たちがバケツの中の汚い水を水流の中に捨てさえすれば、しばらくして汚い部分は見えなくなります。そうでしょう。水を捨てたばかりの時は、まだ少し汚いのですが、しばらくするとそうでなくなり、前と同じようにきれいになります。水がとても多いので、汚い物が散らばり、すぐきれいになるからです。

海も同じです。彼らはゴミをすべて海に捨てますが、海水が汚れているように見えません。捨てたばかりの時は、少し汚れて見えるかもしれないませんが、その後はそうでなくなります。そうですね。同様に一人のマスターはたくさんのお水を持っていなければなりません。十分にきれいでない時は自分で自分を洗うことができ、しばらくするときれいになります。私の言っている意味がわかりますか。（答える…わかります）

ですから、みなさんはマスターになるのはいいなあ、あんなにもたくさんいいことある、な

どと思わないでください。実際は何もないのです。しかし、何も良いことがなくてもやらなければならぬのです。私たちが何かをするのはみな面白いから、または好きだからやるというのなら、何か話す価値があるのでしょうか。例えば、私たちはある人がとても好きだとします。というのは、彼は私たちにとってもよくしてくれるからです。こんなことは話したところで何か意味がありますか。イエス・キリストは「あなたが自分の兄弟姉妹や親族だけを愛し、彼らを敬愛するが、自分の敵を憎むというのであれば、これは話したところで何の価値があるのだろうか」と言いました。これなら修行してない人と同じではありませんか。

私たち修行者について言えば、たとえカルマが大変重い人であろうと、救うべきなのです。フォルモサでは長年殺生し、数十年も魚を捕り、あるいは数十年も魚や肉を売ったりしている人がたくさんいますが、みんなここに私を尋ねて来て印心を受けました。ある人は私に「あんな人に印心しないでください。あんな人は本当に印心してあげるに値しません。マスターが彼らに印心するたびに、疲れて死ぬ思いをしなければなりませんから」と言いました。彼らのカルマは非常に重いのですが、しかし印心を願う以上は、やはり印心しないわけにはいきません。彼らに悔む心があつて、仕事を変えさせればよいのです。私に分け隔ての心があつてはいけませんからです。

フォルモサは割合に小さくて、仕事を探すのも容易ではありません。生活のために、生きて

いくために、たくさんの人がやむなく、あまりしたくもない仕事をしています。後になって彼らは当然後悔するか、あるいは改心して修行しようと思います。しかし、カルマはまだあるので。とてつもない功德を積まない限り、「私は後悔している。以後二度とこんなことはやらない。だからもう大丈夫だ」などとは言えないのです。こうすればカルマを消すことができますと思っているのですが、そう簡単ではありません。水を使って初めて汚いところをきれいに洗うことができます。ですから、マスターになるには衆生のカルマを消す能力がなければなりません。これができなければ、彼らに阿弥陀仏を唱えることを教えるだけでよいのです。大げさに言って、人に何かを教えたりしないことです。

先ほど言ったこの人は、私を見習って他の人に自分の目を見るようにと言っています。（笑い）みなさん誰だかわかるでしょう。これ以上言いません。私がドイツに行った時、彼の状態は大変悪く、もう少して死ぬところでした。毎日私のテープを肌身離さず、道を歩く時も聞き、寝る時も聞いていて、テープを聞くことにしがみついて、片時も離せませんでした。彼はほとんど死にかかっていました。なぜなら、その時魔がたくさんやって来たからです。彼は以前そのようなものを救ったからです。

印心後、私は彼にこれ以上救わないように言ったのですが、彼が聞き入れなかったのです、ついに魔につかまったのです。その後怖くなってできなくなり、どこへ行くにも私の録音テープ

を放さず、前後左右に私の写真をいっぱい置いて、ドイツまで電話してきて私にぜひ会いたい、もう死にかかっていると言うのです。いくらお金がかかろうと、どんな問題があろうと、どんなに面倒でも、私にぜひ会いたいというのです。彼は本当に耐えられなかったのです。でも私は「ドイツに來ないでください。この寺院は女一人で、あなたが住むにはとても不便です。あと何日かしたら私は帰りますから」と言いました。彼は男性ですから來ないようにしたのです。

このようにして彼はついに生き延びました。電話が終わったら、とたんに良くなって、私がフォルモサに戻ってから、私について一定期間学んで生き生きしてきました。しかし、私がちよつとでも試験を与えるとすぐ離れていきます。私たちの修行はこの「我執」が妨げになって、進歩できないのです。

彼は今でも同じで、引き続き人にためを教え、教えれば教えるほどひどく、真つ暗な地獄しか見ないので、少しも良いところはありません。また帰って来たいようですが、私は断ります。私は本当に疲れましたから、こんな厄介な人はやはり「彼のマスター」に面倒見てもらいましよう。

地藏王は地獄の人の面倒を見るのが仕事です。あちらにいて、もっぱらあのような地獄の衆生に教えています。今私たちは娑婆世界にいますので、まだ地獄に行つてないのに、そんなものを修行して何になるのでしょうか。地獄の仕事はやる人がいます。私たちはこちらから



あちらに行つて人に教える必要はありません。まだ福報が十分でないので、そのようにはできないのです。

楞嚴呪も同様で、在家者はできれば唱えないでください。唱えたと厄介なことがたくさん起こります。出家者が唱えても問題が生じることさえあります。出家者は在家者より身・口・意がきれいです。彼はこの世界を捨てたので、少なくともそういった功德があるからです。さらに天竜八部（仏法を守護する八種の天部）が護つてくれます。なぜなら、彼は本当に道を求めていますので、唱えてもまだ問題は少ないからです。彼は仏陀に代わつて唱えるのであつて、「我執」で人を救おうというわけではありません。もし彼が「私が衆生を救うのだ」という考えがあるなら、大変厄介です。しかし、在家者がまだ何も修行してないのに人に教えに行つて、衆生を救うということを知ると本当につらいです。すべてこの「我執」の問題です。

フォルモサにはこのような人がたくさんいて、みんな狂つています。そのような人たちが私の所にやつて来た時は、みんな頭がくらくらしていて救うのが大変です。彼らは他の人に影響を与えて、全体の雰囲気が悪くし、フォルモサ全土がそのような魔と陰気な影響を受けることにさえなります。従つて、ここへやつて来て教えることは本当に大変でとても厄介なことです。

普段私がどこへ講義に行つても、すぐ問題が生じます。初めて行つた場所で問題のない所はありません。台北でも、澎湖でも、台南でも同様です。たくさんの方が講義を聞きに来るだけ

ですぐ問題が生じます。ほんの数人なら大丈夫ですが。

これは魔が耐えられなくなったためです。彼らの宮殿は揺らぎ、壊れ、住む所がなくなったので、大変あせって、緊張し、福報が十分でない人や内心十分純粹でない人を利用して私の任務を攪乱し、私の教えを混乱させ、破壊しようとしているのです。しかし、そう簡単にはいきません。フォルモサにまだ修行する人や、まだ十分純粹で、十分きれいな人がたくさんいさえすれば、彼らは打ち破ることができないのです。

もし一人の人が修行すれば、何百何千の人の利益になります。現在フォルモサの人口は二千万人ですから、一人の修行につき千人の利益になると計算すると、二万人印心して初めてよいということになります。ですから、みなさんもっと努力してください。帰ってから新聞広告を出してください。(笑い) 私たちはあと一万九千人余り必要です。二万人になったら私は弟子を取りません。(笑い)

私のマスターは「もし一人が六ヶ月ごとに二人連れて来て印心したら、十年あるいは二十年後に全世界がすべて印心してしまうことになる」と言いました。増えますからね。一人が二人連れて来て、以後その二人がまた各自二人連れて来る。このようにして二人、二人と増えていきます。印心に来た人は誰でも二人連れて来れば、最後には当然すべて印心してしまうこととなります。六ヶ月ごとに二人、三ヶ月ごとに一人で構いません。みなさん帰ってからやってみ

てください。三ヶ月に何人連れて来られるでしょうか。「徐々に」このことを「速く」成し遂げられるようになります。(笑い) 末法時代ですから、時間は急ぎます。

この島は大変小さいです。地図で見ると本当にとても小さいです。時々私はどうしてこんな小さな所なのにこんななにぎやかで、たくさんの方ができるのかと思います。こんなに小さいのですが、人が住んでいて、講義をする人もいて、動物を捕まえて食べる人もいて、あんなに大きな寺を建てる人もいて、たくさんの方をやっていきます。

世界地図で見ると、フォルモサはほとんど見えません。見えませんが、「我執」は大変大きいです。この島よりも大きいです。私は「我執」のない人を少ししか見たことがあります。この「我」があまりに大きすぎて、教えるのは容易ではありません。さらにあのような過激な教理がたくさんあります。例えば、人に何も修行させず、すべては空、すべて捨てればよいというものです。何を捨てるといのでしょうか。もしすでにすべて空なら、まだ何を捨てるといのでしょうか。もし修行後はすべて空というのなら、なぜ念仏に行くのでしょうか。なぜ人に何かを教えに行くのでしょうか。あんなに多くの寺を建ててどうするのですか。すべて空なのでしよう。

大きな寺を建てる人ほど、さかんに「空」を言い、「すべて捨てた人」などと言います。大きな寺を建てれば建てるほど(笑い)、ますます人にすべてを捨てさせ、弟子をたくさん取る

ことに執着し、たくさんの人に自分の寺に来させようとします。帰依した弟子が他のマスターについて学ぼうとすると、すぐに耐えられなくなり、地団駄を踏んで泣きわめき、まるで子どものように「私がいらなくなったの。ひどい。あなたは私と何十年も一緒だったのに、どうしてスプリームマスター・チンハイの講義を聞きに行くの。しかも彼女の印心を受けるなんて」と言います。彼らが言う「空」とはこのようなものなのです。

私はこの尼僧に会った時、もっと体を大事になさいと言いました。彼女はやせていて、病気だったからです。彼女は「出家者は体のような無常のものにはこだわりません。病気は病気のままで、健康なら健康なままで。『心無所住（心は執着するものがない）』です」と答えました。しかし、弟子が私のところに来て、印心を受けると許せないのです。わめき騒いだりして、その時は「空」ではなく「有」に変わり、「執着しない」が「縛りつける」に変わるので。す。（笑い）一日中ワーワーわめくので、弟子はたまらなくなり、自分もたまらなくなるのです。

ですから、これはすべて口先だけで良いことを言っていますが、心がついていかないのです。人が言うのをまねして、「すべては空、心は執着するものがない」と言いますが、これはすべて金剛經を暗記して言っているだけです。自分は少しも修行していませんから、口を開けば、そのレベルがどの程度かすぐわかるのです。もし「心は執着するものがない」と言うなら、出

家者がどうしようと本人まかせで、なぜ弟子がよそへ学びに行つたからといって、一日中ワーワーわめくのでしょうか。なぜあんなにトラブルを起こして、あんなにたくさん問題を弟子と他の人にもたらすのでしょうか。ですから、すべて口先だけで実際は自分ではできないのです。

従つて、人に教えないのが一番良いのです。まだマスターのレベルにならないうちに、あんなに弟子をいっぱい取ろうとしたら、マスターになつた後、やる気をなくしますよ。教えるべきなら教え、教えるべきでないものは教えないことです。もともと私もあまり教えるのが好きではないのですが、これはやらなければならぬことです。ですから、「好き」も「嫌い」もありません。ただ私はあの魔にとりつかれた弟子たちをすでに何回となく教えました。彼らはやはり聞かないので、私はとても疲れ、教えられるならそれも仕方ないと思つています。慈悲心にも限度があり、時には彼らに自分で自分の課題を学ばせることも必要だと思ひます。

仏陀や菩薩は他人の因果に介入しません。あのように救うために何かを唱えたり、あるいは楞嚴呪を唱えたりすることは、他人のことに介入することです。魔が来てあなたに聞いているわけでもなく、自分に代わつてあなたに何かをして欲しいと頼んでもいないのに、あなたが自分で厄介なことを引き起こすことは、他人のことに介入することになるのです。

例えば、あなたが僧侶になつて、人から読経を頼まれて行くのは、もしそれが伝統で、読経が僧侶の仕事だと思ふのならまあいいでしょう。しかし、目的がはっきりしないなら、自分で

厄介なことを引き起こすか、地獄に落ちることにさえなるのです。もしお金のために読経するなら大変多くのカルマを作ることになります。私たちの行いがすべて苦しみを救い、他人の利益になり、衆生を慰めるようなものであつてこそ初めて福報があるというものです。しかし、心の中で福報をもらいたいなどと考えているようなら、何も福報はありません。福報にも限度があるのです。

私たちが何をするにつけても、「無我」の態度でできるのは容易ではありません。私たちは自分ですでに「無我」であると思つているからです。実は「思い込み」であつて、実際はそうではありません。ある日みなさんは自然に、何もしなくても人があなたを見ればすぐ病気が治るか、あるいはすぐ悟りを開くようになるけれども、あなたは何もしていない、その時こそ本当の「無我」なのです。

現在はただ「私は自分が無我であると思つている」だけです。ですから、あなたは何かをする時、「これはマスターがするのであつて、私がするのではない」「私」はおごり高ぶつてはいけません。しかし、マスターが私にさせてくれるのは、「私」が良い人間だということを表している。「私」はやはり立派なもののだと思つてでしょう。

そうなら依然ちよつとした我執があります。これはやはり「私が思う」からです。思うのと身をもつて修行するのとは違いますし、信じるのと体験するのも違います。みなさんは修行を

始めたばかりですから、ゆっくりやっけていくように教えています。まずこの「私」を捨ててください。何をするにしても、「私」がするのだと思わないように、徐々に頭を訓練していただく。しかし、このようにしてもまだ本当の「無我」ではありません。なぜなら、これも訓練によって、「私がするのではない」と思うので、やはり私がやっているのではないと「私

が思う」のです。  
本当の「無我」とは菩薩の境界であり、何もなくても他人は自然に利益を得るのです。みなさんは人が私に会いに来た時、病気が治ったということをよく聞くでしょう。これは何も私

が神通力を示したのではありません。もしみなさんがそのように言うなら、それは私を誹謗することになります。私は何もしていません。  
これは水と同じです。あなたは飲みたいと思えば飲みます。わざわざあなたに飲んでもらうとか、飲ませるといふものではないのです。それが水だからです。火も同じです。寒い時近づけば気持ち良くなります。わざわざあなたに気持ち良くしてもらおうとしてはありません。それは火ですから、あなたが来さえすれば、熱くなります。わざわざあなたに熱く感じてもらうおもうとしているわけではありません。そんなつもりはありません。太陽も自分がそんなによく照らしていると思っているわけではありません。わざとあなたを熱くしようとしているのではなく、故意に何かしているわけではありません。自分のことをしているだけです。太陽とは

そのようなものなのです。もし、私たちもこんな程度までできたなら、その時こそ本当の「無我」になります。

「無我」もたくさんのレベルがあります。始めたばかりの時はまだ小さな「無我」にすぎないのですが、修行した後はますます良く、ますます高く、ますます拡大して、それ以後はどの衆生も利益を得られます。その時のレベルはすでに三界を超えているのです。第五界に達した時、初めて人に教えることができます。そうでないと自分自身にも人にも厄介を引き起こすだけです。

もし私たちがどこかへ行つて人を加持している、病気を治していると思つたり、人の病を治療したりすることが好きなら、まだこの「私」が存在しています。みなさんは私が法を伝えるのを見ていますが、実際、私は何の法も伝えていないのです。いつも私は「伝えることができない法はない」と言っています。しかし、マスターがいなければ法はありません。ただそれだけです。

この法は自然に出て来たものです。もしみなさんが何か利益を感じたなら、それも自然なことなのです。私がおざと何かしているわけではありません。みなさんが私に「今、私はとても困っています」と言ったとしても、私はみなさんがますます困難になるよう祈っているわけはありません。そんなことはありません。



もちろん、私はみなさんが楽しくあって欲しいと望んでいます。私にもそのような祝福する心があります。みなさんがとてもかわいそうに見えますから。みなさんが楽しければ私もうれしいのです。そのような心はありますが、故意に何か神通力を使ってみなさんに良くなつてもらおうというのではありません。これはただ慈悲の心だけで、神通力ではありません。人が苦しんでいるのを見ると、私も同じように苦しくなります。この「同じように苦しくなる」感覚があるので、相手の苦しみを受けて、その人に少しばかり福報を与えるのです。これは「自然の慈悲心」から出たものです。（このような慈悲心と人間の感情は違います）ですから、他人に利益をもたらすのです。

しかし、これもパワーがあつて初めて利益をもたらします。パワーがなければ、慈悲があつても何の役にも立ちません。あなたにお金がなければ、誰かがやって来て「私はもう飢え死にしそうだ」と言つても、あなたには食べ物もなく、同情しても何も与えられません。お金があれば、助けられるでしょう。観音法門を修行する人は特に何も考えなくても、必要な人にはひとりでに利益がもたらされます。いらなと言つてもやつて来ます。

これはお金と違います。お金は入れた所に鍵をかけたなり、ポケットに入れたり、あるいは銀行に預けたりできます。そうすれば誰にも触れないでしょう。しかし、修行の福報はそうではありません。あなたが入つて来ると、相手はすぐもらつて行き、良い影響を受けます。何も言

わなくてもよいのです。嫌だと言ってもそうなります。もちろん相手は必ずもらうでしょう。人が利益を与えてくれるのに断る人がいますか。しかし、「欲しいか欲しくないか」などと思う必要はありません。利益は向こうからやって来るのです。ただカルマが非常に重くて自分で閉じこもっているため、福報が入って来られないというような人は当然利益の受けようがありませんが、そうでない限り誰でも欲しいと思うものは手に入ります。

みなさん、今帰って金剛經を読めば必ずより良くわかるはずですよ。衆生を救うが救われた衆生はいない、布施はするが布施はしていない、これこそが本当の布施です。病気を治すが「病気を治したりはしない」、これこそが本当に病気を治すことです。病気を治すことはこの体の病気を治すだけでなく、「無明病」を治して初めて本当の病気を治すことになるのです。

ですから、私たちは釈迦を医の大王と称賛するのは、彼はどんな病気でも治したからです。しかし、彼は何か神通力を使ったのではなく、彼が神通力であり、彼が神通力に変化し、誰でも欲しいものはかなえられたのです。これが功德は計りしれないという意味です。彼はどんな功德も持つていて、計り知れないほどで使い切れないのです。これこそが天人導師（天界と人間界の師となる者）です。

經典にも述べられています。私たちは善き友を選択し、良い修行仲間と一緒にいなければなりません。殺生をする人や食肉解体場職員を友としてはいけません。そうでしょう。しかし

仏陀や菩薩は逆にあのような人を友人にしています。従って、私に「どうしてあのような人に印心して助けるのですか」と聞かないでください。

禅宗十牛図（中国宋代の禅宗の入門書）の最後の図の中で「食肉解体場職員、あるいは泥棒は私の友人である」と言っています。当時彼は何も分け隔てせず、まったく構わなかったからです。また、その功德は使い切れず、誰がもらいに来てもよかったです。五百元欲しいなら五百元あげ、五千元欲しいなら五千元あげ、五万円欲しいなら五万円あげることができ、欲しいだけもらえたのです。彼は使い切れなかったからで、なぜこんなに欲しいのか、ということはどうでもよかったです。

イエス・キリストも同様で、彼はかつてある遊女を弟子にしたのですが、他の弟子が大変怒り、信徒も怒って、イエス・キリストに責めよって「どうしてあんな人を弟子にしているのでしょうか。あんな人を私たちの修行仲間にするのですか」と詰問しました。彼らは自分たちが大したものだから、イエス・キリストが弟子にしたのだと思っていたのです。彼らは傲慢で、自分たちが大したものだと思っていたのです。しかし、今この遊女でさえイエス・キリストの弟子になれるなんて実に都合が悪くなりました。彼らは今後二度と外部に偉そうに「私が一番偉いのだ。私のマスターも一番偉いのだ。私たちのグループはすべて聖人だ」と言えなくなつたのです。今やグループの中に遊女が一人いるので、彼らはみなイエス・キリストに文句を言

いました。(釈迦も一人の遊女「モダンガール」を弟子にしています)

イエス・キリストは「あなたのカルマが五百キログラムなら、あなたを許しましょう。他の人のカルマが五トンなら、その人も私は許します。これはあなたとどんな関係があるのでしょうか」と言いました。例えば、私があなたに五百元あげ、彼に五千元あげたとしても、各自それで満足していればよいのです。また例えば、あなたは私に五百元借金があったとします。私は、あなたは返さなくてもよいと言い、勘弁してあげたいと言いました。彼は私に五千元借金があつて、やはり私は勘弁してあげたいし、返さなくてもよい、と言いました。それはあなたとどんな関係があるのでしよう。すべて私のお金で、私があげただけあげるわけです。

さらに例えば、あなたが大富豪で、この人はあなたに二百元借金があり、あの人はあなたに二千元借金があり、別の人はあなたに二百萬元借金がありますが、ある日あなたはこれらの金はすべて返してもらわなくてもよいと決心します。あなたは彼らに返済能力がないと思つたので、「よろしい。すべて忘れましょう。みなさんの借入書をすべて破りましょう」と宣言します。それでもあなたにはまだたくさんのお金があります。二百元借金している人は二百萬元借金している人をねたむ必要はありません。これらはすべて大富豪のお金であつて、自分たちのお金ではないからです。

同じような状況で、釈迦が生存中にそのようなカルマが大変重い人を救つたことがあります

た。ある人がすでに九十九人殺し、最後に釈迦を殺して百人にしようとしたのです。自分のマスターから、正午までに百人殺さなければならぬ、そうして初めて仏陀になれると教えられたからです。しかし、よくも人を殺して初めて仏陀になれると教えるマスターがいたものです。その男はマスターの話を聞いてから、大変焦りました。もうすぐ正午になるのに、百人目が見つかりません。それで仏陀を見るやすぐ殺そうとしたのですが、仏陀はこの機会を利用して逆に彼を救ったのです。

本来殺生する人には、私たちはあえて近づきません。巻き添えになり、カルマを背負い込むのを恐れるからです。しかし、仏陀や菩薩は恐れませんが、恐れるようなら仏陀や菩薩ではありません。私はまだ仏陀や菩薩ではなく、みなさんは、私が仏陀や菩薩であると信じる必要はありません。けれども、私は仏陀や菩薩に学び、彼らのカルマを背負い込んで死んでも、それでいいのです。巻き添えになることを恐れませんが。

なぜなら、衆生は私と同じだからです。彼に障害があるのは、私にも障害があるのと同じです。何を恐れるのでしょうか。しかし、これには必ず「無我」のレベルでなくてはなりません。それで初めてこのようにできるのです。もし分け隔ての心があったらできません。まだカルマに囲まれているからです。

先ほどまだ何のレベルにも達してない人の話をしましたが、彼自身魔にとりつかれているの

で、他の人に自分の眼を見させようとはします。その人を知っている人は、彼の眼がどんなかわかりますね。(笑い) 彼に教えを受けた人たちが私に「マスター、私は彼の眼を見た時とても怖かったです。でもマスターの眼を見た時はとても楽になりました」と言いました。

日頃私はこのようなことはほとんど話しません。大部分は哲学的な理論を話すだけですが、みなさんの中に新しい人がたくさんいるからです。もしすべて印心した人なら、当然修行にいても少しお教えするでしょう。しかし、毎回新しい人がいるので、大部分は理論のことを話します。例えば、「無上正等正覚(この上なく正しい悟り)」「禪とは何か」「なぜ観音法門を修行しなければならないのか」などですが、いつもマスターと弟子の修行関係の話をする機会が見つからないのです。

日頃みなさんは、いつも親族か友人を連れて来るので、私は話せません。時々私も特に少し時間を割いて、もっぱらすでに印心した修行仲間だけに話そうとするのですが、彼らもやはり忘れて、いつも新しい人を一、二名講義を聞きに連れて来るのです。新しい人がいると、こういった修行上の「秘密」は話せないのです、気楽には話ができません。今、三ヶ月間こもって修行に専念する機会を利用して、もっと修行面に関する話をして、少し「我執」を抑えたいと思います。そうでないと、みんな修行もだめになります。人に教えるのは本当に大変です。

ある日私のマスターのマスターがある人を印心しました。その人から頼まれたからですが、

その人はかつて銀行強盗か殺人か、とにかく大罪を犯しており、弟子の紹介で来たのです。その紹介した弟子は大変良い弟子でした。

その時、私のマスターのマスターは弟子に「他の普通の人なら百人紹介しても良いが、あの人は紹介しないで欲しい」と言ったのですが、その弟子はわからず、印心してやって欲しいとずっとお願いしました。そしてその人もマスターのマスターの足をつかんだまま行かせず、「印心してくれないと、私は帰りません」と言ったので、最後にはマスターのマスターは結局印心してあげました。印心後、私のマスターのマスターは川に落ちて溺れ死にしようになりました。もうほとんど溺れ死んだと言ってよいでしょう。しかし、また生き返ったのです。印心してあげた人のカルマがとても深かったので、死にこそしなかったものの、何時間かは（川の中で）死んでいたといつてよいでしょう。

ですから、マスターになると問題がないわけではありません。問題はたくさんあり、弟子が多ければ多いほど、問題も多いのです。しかしこれは彼らの仕事です。そういったことを気にはしていません。問題にぶつかるときれいに洗ってくれます。でも子どもについては別です。子どもはまだ歩けないのですから、速く走ってはいけません。どうしてそんなに焦るのでしょうか。

私たちには慈悲心があるので、他の人が私についてこの法門を学べないのを見て、菜食を勧めるけれど、相手は菜食せず、私の本を勧めても読んでもわからないか、読みたがらないが、

とても修行したがっている、ただ割合に怠けているだけという人に対して、私たちはどうしたらよいのでしょうか。彼に、阿弥陀仏を唱え、引き続き彼自身が本来信仰している宗教を誠心誠意信じることを教えることです。人に教えるにしても、その人がそう願ったり、興味をもったりして、初めて教えるのであって、信じるように強制すべきではありません。無理強いははいけません。

歴代の禅師たちはみな弟子に自分で努力し、自分で機会を見つけてできるだけ修行して、この道を探すよう教えました。彼は「私があなたに代わって修行しよう」とは言うはずがありません。質問すると、すぐ「違う」と言われました。時には答えることさえせず、自分で回答を見つけるようにさせました。

あなたができるだけやって、努力してこそ、自分で結果が出せるのであって、代わってやってくれる人は誰もいません。ですから、人に修行を無理強いすることはできないのです。人に修行を無理強いするのもよくありません。自分がそのような悟りを求める心を持ち、道を求めようと決意し、生死の問題を知りたいと決意しなければなりません。食事の時も、寝ている時もある問題を考え、どこへ行っても、あるいはいつでも道を求めるようになって、その時初めてわかるのです。人に修行するよう強制してはいけません。

ここでは弟子が時々怠けるので、私もとてもつらいのですが、みなさんに修行を無理強いす



ることはできません。私も叱ったり、強く言ったりできますが、むだです。やはりみなさん自身の修行に頼らなければならないのです。「私はどうしたら生死から解脱できるのだろうか。私はなぜまだ自分の仏性を完全には理解できないのか。なぜ私はまだこんなに多くの煩惱があるのか。私はどうしてまだこんなに無明なのか」と渴望しなければなりません。自分で渴望して初めて答を見つかることができます。

毎日私に甘えて、強制されて修行するようではいけません。もしみなさんがここに住んでも、怠けて修行しないなら、追い出すこともできますが、私は毎日みなさんに修行を無理強いできませんし、また規則で修行を強制することもできません。例えば、何時に座禅しなければならぬ、何時に寝なければならぬ、何時に食事しなければならぬ、何時に解脱のことを思わなければならぬ、何時に休まなければならぬ、などはいけません。

本当に修行したい人なら、二十四時間いつでも修行します。トイレに行っても修行するので。心が「道」にありさえすれば、それが修行であり、生死の問題があれば、それが修行です。そこに座っていることが修行ということではありません。座っている時は、心が安定し体調も良いので、比較的容易にひらめくのです。仏陀や菩薩のパワーと容易に交流でき、光も割合大きいので、ますますきれいになって、一定時間訓練した後は、路を歩いても修行し、寝ていても修行するようになります。

しかし、そこに座っていれば仏陀になれるというものでもありません。それは「錯仏」（間違った仏陀）であり、「対仏」（正しい仏陀）ではありません。「錯」であって、「坐」ではありません。（中国語の錯と坐は音が少し似ている）ですから、仏陀になるのは簡単でもありませんが、またそう簡単ではありません。それは私たちの修行態度がどうなのかによります。

まだ仏陀になってないうちから、他人のことに介入したり、あたふたと衆生を救ったりしてはいけません。自分さえ救えないのに、何を救おうというのですか。衆生を救いたいなら、彼らに私の本を読ませて、私の教理と観音法門を紹介しなければなりません。先生になったつもりで人に教えに行つてはいけません。自分がまだ十分学び終えてないのに、どうして先生になれますか。まだ英語が話せないのに、人に英語を教えるのはおかしなことではないでしょうか。いわゆるマスターになりたがる人がとても多いので、大変不思議に思います。マスターになるとこんなに大変なのに、どうしてなりたがる人がいるのでしょうか。私は状況に迫られてやむなく人に教えているのです。私自身も何回も国外へ逃げましたが、やはり逃れられないのです。

もし、みなさんが本当に慈悲の心があるから教えてあげたいというのであれば、阿弥陀仏を唱えることを教えてあげればいいです。必ずしも先生になつて何か呪文を唱えるよう強制したり、毎日一軒一軒廻つてなぜ楞嚴呪を唱えないのか、なぜ大悲呪、往生呪を唱えないのか、なぜ一生懸命修行しないのか、と聞いて回つたり、毎日他人の家のチャイムを鳴らして、どの呪

文を唱えれば役に立つと言って回ったりする必要はありません。他人に介入することになりません。彼らは何も頼んでいないし、亡霊もあなたに助けを求めているわけではありません。

釈迦が盂蘭盆（うらぼん）の話をした時、弟子の目犍連（もくけんれん）が救いを求めてやって来たので、助けてやらなければならなかったのです。仏陀が楞嚴呪を話したのも弟子である阿難（あなん）が遭難して、救いを求めてやって来たからです。しかし、みなさんはこの楞嚴呪は内面のマスター（化身仏）が話したものであることを知っておかなければなりません。

私たちも同じです。ある弟子の両親が亡くなったり、ご主人が亡くなったりした時、私に助けを求める電話があると、その後、実際に内面のマスターが出て来て、彼らを連れて高い境界に行きます。これは自然なことであって、私がみなさんのドアをノックして、「ご主人が亡くなったのに、どうして知らせてくれないのですか、彼は印心していませんが、どうして印心するよう連れて来なかったのですか。亡くなった時あなたも知らせてくれなかったのです、どうして救うことができますか」とは決して言いません。すべては自然に行われ、みなさんの希望通りに、私のパワーができる限り助けます。私のパワーはこの肉体ではなく、この人でもありません。別の一種のレベルであり、仏陀や菩薩のレベルなのです。この肉体は何でもありません。普通の人なら、私もこんなに世話を焼きません。私は毎日、衆生を救ったり、霊魂を救ったりして、自分で面倒なことを探しているわけではありません。この世界には霊魂がいっぱいあ

るので、一体いつになったら救い終わるでしょうか。彼らが魔になりたければ、そうさせておけばよいので、私には関係ありません。あの種の衆生は生きている時は、どんなに言っても聞かず、道徳的なことをするように言ってもせず、初歩的な仏陀を唱えたり、仏陀を拝んだり、あるいは何か宗教を信仰するように教えても信仰しないばかりか、たくさんの悪行をしたので、当然その報いを受けなければなりません。

しかし、弟子やその親族は事情が特殊です。彼らは私に助けを求めてやって来たので、その時仏陀や菩薩は感動して当然助けます。私の弟子にはこのような状況は大変多く、普通のことです。

私は別に広告を出していませんし、あちこち行って「私は靈魂を救えます」と言っているわけでもありません。すべてみなさんが自分から電話してきて助けを求めるのです。時には聞きたくないこともあります。というのは、ある人は何でも私に助けを求めて来るからです。でもやはり私の弟子ですから、当然面倒見なければなりません。

私がそう思うだけで、彼らには福報があります。私は決して何か呪文を書いて送るわけでもありません。縁もゆかりもない人に、どうして何か唱えるよう無理強いできるでしょうか。助けを求めて来ないのに、どうしてできるでしょうか。本当に解脱を求める人だけを助けられるのです。相手がまったく望んでないのに、無理強いすれば、殴られるかもしれません。「私

を煩わせに、誰があんたをここに呼んだのか。私は幽霊のままでもいいのだ。魔の生活はとても面白いからなあ」と言うでしょう。（マスター笑う）

もう一つ話しましょう。もつとよくわかるかもしれません。ギリシヤに良く修行した人がいました。彼は魔を追い払うことができ、靈魂のある所、例えば避暑地へ連れて行くこともできました。一般の人は生前福報が少ないと、死後そこに一定期間住むこともあります。その後戻ってきて、人間になるか、動物になります。

そのギリシヤの修行者は靈魂を連れてそのような所に行きました。ある日彼は亡くなったばかりの友人を見ました。その友人は生きていた時は、ギャンブルが大変好きだったので、死後も仲間を探して、賭博をしていました。彼が友人を見た時は、とても暗く、とても汚い所で、幽霊の友達と賭博をしていました。賭博をする人にとっては、ただ賭博さえできれば、どこでもいいのです。もともと彼らは隠れて賭博をしていたので、そこはとても汚かったです。

賭博が好きなのは、昼であろうと夜であろうと一日中やっており、タバコを吸いながらやるので、そこは見たところとても汚いのです。誰も掃除せず、食事も取らず、ただ適当にサンドイッチを食べるだけです。サンドイッチのいわれを知っていますか。昔、ある国王が大変賭博好きで、食事をするのも面倒だったので、家来が考えてあのサンドイッチを食べさせたのです。そうすれば席を立たずに食べながら賭博ができますから。（笑い）

そのギリシヤ人の修行者は友達がその暗く汚い所で賭博しているのを見ると、なんといいっても友達ですから、哀れに思つて、「ちゃんと生活しているかい」と聞くと、「とてもいいよ」と答えました。その修行者は「ほら、ここは暗くて汚くて、何も面白くないじゃないか」と言つて、神通力を使つて美しい音楽をたくさん奏でて、きれいな景色に変えて、避暑地を友達の前を持つてきて見せて、その暗い所を吹き飛ばしてしまいました。それから、友達を連れてあちこちに遊びに行きました。

彼ら二人はその避暑地で遊び、美しい音楽を鑑賞し、きれいな花をめで、甘美な果物を食べました。そこには美しい境界がたくさんあり、水が流れ、きれいな家がたくさんありました。彼はさらに友人に道徳の話をしたのですが、何時間か経つた後、その賭博狂の友人が「いつになつたらそんな話をやめてくれるんだい。もう聞きたくないよ」と言つたのです。彼は大変驚いて、「聞きたくないって！このきれいな景色が嫌いなのかい」と言うと、友人は「ああ、とってもつまらん。帰つて賭博がしたいよ」と言つたのです。（笑い）私の言っている意味がわかりますか。ですから、魔に無理強いしてもむだです。

私たちは修行さえすれば、神通力を持ちます。そういった神通力、例えば呪文を唱えるか、または他の方法でも、魔を追い払うことができます。しかしそれ以後、もし私たちのレベルがさらに上昇すると、このカルマを清算しなければなりません。なぜなら、彼らには自分たちの

因縁があるからです。ですから、とても大変です。

時には弟子を助けるため、マスターは弟子にどうすれば魔障を少しづつ減らしていけるか教えるかもしれません。しかし、そのマスターもそういったカルマを清算しなければなりません。というのは、本来他人の因果に介入してはならないのに、弟子の真心からの求めで、そのマスターが引き受けさえすれば、弟子に代わって少しのカルマを背負うことになります。でも、そのマスターもいつもそうするわけではありません。本来これら魔障を処理することは、一人のマスターにとつて大した問題ではありませんが、彼ら自身一緒にカルマを取り除かなければなりません。さもないと、以後またこの世界に戻って来なければなりません。現世では相手に迷惑をかけてはいけません。そうすると、その後また戻って来なければなりませんから。今数十年苦しめば、その後気楽に行くことができます。

大修行した人は、力で他の人の邪魔をしてはいけません。どんな衆生であろうと傷つけてはならないのです。幽霊も衆生ですから、傷つけてはなりません。みなさん釈迦が神通力を使って幽霊を追い払ったとか、人の病気を治したという話を聞いたことがありますか。經典に述べられていますか。私はそのような記載を見たことはありません。彼はどんな病気も治していません。

ある人がちやうど息子を亡くしたばかりで、釈迦に生き返らせてくれるよう泣いて頼みまし

たが、釈迦は介入しませんでした。彼はその人に五代に渡って一人も亡くなってないような家族があるかどうか探さない、もしそのような家族を探し当てることができたら、その家の物を少し持つてきなさい、そうすれば初めて神通力を使って息子を救うことができる、と言ったのです。結局、もちろんそのようなことはありません。彼は便宜的な方法で彼女に教え、目覚めさせたのです。

釈迦はもちろんその婦人の息子を生き返らせる能力があつたのですが、そうしませんでした。おおよそ神通力を使って人を救ったり、病気を治したりすることは、力を誇張することであり、よくないことです。そのような人はおそらくまだレベルが高くはないか、あるいは「我執」があります。大修行した人は神通力を使って病気を治しません。

印心した時、私がみなさんに配ったプリントにはつきりと「もしみなさんの中にかつて神通力を使って人を救った人がいれば、今それを止めなければなりません。そうでないと上のレベルに上がれません」と書きました。そのような神通力は三界以内のものであつて、もし私たちがそのような神通力を使えば、解脱することができません。

例えば、私たちは飛行機でアメリカに行かなければいけないのに、自動車や自転車に執着して、毎日それらに乗っていては、いつになつたら飛行機に乗れるのでしょうか。自転車は地面を走るものですし、自動車も陸地を走れるだけなので、それらに執着しては飛行機に乗れ



ません。当たり前のことですね。空港まで行ったら、自動車や自転車に乗るのをやめて、飛行機に乗れるのであって、飛行機に乗りながら車を運転するなんて不可能です。そうでしょう。

神通力を使うことは極めていない、ということですよ。きつとそうです。目鍵連（もくけんれん）をみると、あんなに神通力があるのに、何の役にも立ちませんでした。母親さえ救えないのに、ましてや衆生は言うまでもありません。なぜ目鍵連は神通力があるのに、母親を救えなかったのでしょうか。それは、彼は阿羅漢のレベルの修行と、神通力の修行しかしていないので、智慧が開いていなかったからです。

ですから、神通力の修行をしても役に立ちません。私がいつもみなさんに言っているのです。「神通力を使つてはいけません。神通力があつても使わないでください」と。私自身も神通力を使いません。みなさんよそで勝手に「私のマスターは病気を治せるのですよ。ここへ来ればすぐ良くなりますから」などと言わないでください。それはみなさんが夢を見ているのであって、私は故意には何もしていません。おそらく少しばかりの愛の心、少しばかりの同情心があつて、誰かを見てかわいそうに思うと、愛の心が表れ、心の中でそう思うだけで、その人はすぐに感応があり、福報が得られるのです。私が故意にそのように思うのではなく、自然にそうなるのです。

例えば、みなさんかわいい子どもを見ると、当然ある感情がわいて、いとおしくなり、抱き

しめたいと思うでしょう。それは自然なもので、故意にそう思ったり、抱こうしたりするわけではありません。そうでしょう。仏陀や菩薩も同じです。自然に衆生がいとおしくなり、人がとても謙虚であったり、あるいはとても苦しんでいたりするのを見ると、ある一体感を持ち、愛の心が生まれますが、そのような感覚が衆生に利益を与えるのです。仏陀や菩薩自身がそのような神通力を備えているので、なりたいと思うものに変わります。その磁場は大変平和で、人に利益を与えます。近づきさえすればすぐ利益を受けられるのです。

ただし利益の多い少ないはみなさん自身がどの程度カルマに遮られているかによります。利益が多ければ、みなさんには窓があることを表しているので、さらにもう少し見ることができません。利益が少なければ、みなさんには壁がたくさんありすぎることを表しているので、見通すことができません。

今みなさんの中にマスターになりたい人はいますか。いませんね。みなさん家に帰ってからこつそり、いわゆるマスターにならないでくださいね。私にはわからないと思っても、実はちゃんとわかりますから。

**問** 釈迦は神通力を使ったことがあるようですが、というのは、阿難（あなん）が魔女に惑わされた時に、釈迦は神通力を使って救いました。マスター、ご説明いただけませんか。

答 彼は神通力を使ったものではありません。自然にそうなったのです。なぜでしょう。阿難が困難に遭遇して、今にも戒律を破りそうになった時、仏陀に「仏陀、すぐ私を救いに来てください。私は困っています」と助けを求めたのです。

弟子にとっては当然のことで、困難に遭遇した時はすぐマスターを思いうかべます。彼がマスターのことを思った時に、マスターは自然に光を放って彼を救ったのです。たぶん釈迦は自分が救ったのが阿難であることも知らなかったでしょう。自然にしたことです。その時釈迦の肉髻（にくけい）…釈迦の三十二相の一つ、頭頂の隆起部分のこと）から一筋の光が放たれ、光の中から蓮花が現れ、その蓮花の上に一人の化身仏が座っていました。その化身仏が楞嚴呪を講義しました。釈迦の肉体が楞嚴呪を講義したのではなく、その内面のマスター、化身のマスターが講義したのです。

「千葉蓮花、有化如来、坐寶花中、頂放十道、百寶光明、一一光明…放光如来、宣說神呪。南無薩怛他…娑婆訶。」は明らかに、化身仏が言ったものです。もちろん化身仏は何でもできます。彼の神通力は広大で、行くが如く来るが如く、したいことは何でもできるのです。これは完全に内面のことで、この世界とは関係ありません。魔王とは関係ないので、魔王には防ぎようがないのです。

しかし、もし外で神通力を発揮すると魔王は不平を言うでしょう。この世界で神通力を使っ

て人を引きつけてはならないからです。内面では何をしても構いません。マスターと弟子が知っているだけです。

その時、阿難は目を閉じて心の中で仏陀の助けを求めました。彼は文殊菩薩（超世界の菩薩）という化身仏が救いに来るのを見たのです。これは彼の内在の体験です。彼は帰ってから、みんなに話し、みんながそのことを知ったので書き記したのです。みなさんご存じのように、千枚花卉が重なった蓮の花は第一の世界のもので、彼が救いを求めた時は第一の世界のレベルで、マスター、すなわち化身仏に会いました。普通の肉体が神仏のことを講義したではありません。

**問** 目犍連（もくけんれん）は阿羅漢のレベルまで達したのに、理屈からするとその母親も当然彼の利益を受けるべきですが、どうして餓鬼道に落ちたのですか。

**答** 阿羅漢は衆生を救うことができないからです。彼の母親はカルマが非常に重かったので、救うことができませんでした。經典にもはっきりと「菩薩はあれだけの神通力があり、あれだけのパワーがあり、福報、功德があり、あれだけの慈悲心があると述べられています。しかし、羅漢はわずかしかありません。そのパワーは大変限られており、何ら非常に深い智慧や計り知れない慈悲心もありません。（華嚴経を見ればわかります）

問 私たちはまだ阿羅漢のレベルに達していないのに、なぜ私たちが印心した後は五代まで超生できるのですか。

答 簡単です。みなさんは菩薩道を修行しているのであって、羅漢道を修行しているのではないからです。私がみなさんに教えているのは菩薩道で、羅漢道ではありません。従って、みなさんは殺生をしてはいけませんし、夫婦の交わりも減らさなければいけません。これらはすべて菩薩の戒律です。戒律を簡単に要点だけ整理してお教えしましょう。聞けばすぐ菩薩の戒律とわかります。肉食しないのが菩薩の戒律です。菩薩の戒律だけが「衆生の肉を食べてはいけない」と述べています。羅漢は大多数は一人または二人で山上で修行し、衆生を救うなどとは思わないのです。衆生がとても苦しんでいても彼らは心を動かされることはありません。

菩薩は違います。彼らは心を動かされ、人を救いたいと願をかけます。ですから、観音菩薩、普賢菩薩、文殊菩薩はみな大變有名で、智慧があり、神通力があり、慈悲心があります。彼らは世々代々その種をまき、その原因を作ったので、彼らはいずれも菩薩のレベルを得たのです。

阿羅漢はその原因を作っていないので、当然その結果を得ることができません。従って阿羅漢は菩薩の神通力、菩薩の慈悲心、菩薩のパワーはありません。華嚴経に、華嚴法会が開かれた時、たくさんの菩薩がやって来て釈迦と神通力を發揮したり、あるいは何か良い境界に変えたりしたのですが、その法会にいた羅漢には少しも見えず、少しも聞こえず、まるで盲人か耳

の不自由な人のようだった、と記載されています。彼らは菩薩のレベルが得られず、羅漢のレベルにすぎなかったからです。

仏陀や菩薩は仏陀や菩薩のものを享受し、その世界は阿羅漢にとっては未知のもです。二つの分けられた世界のように、阿羅漢は仏陀や菩薩の境界（きょうがい）をまったく体験することができません。当然彼も生死を完全に解脱できることには何ら問題ありませんが、パワー不足で、人を救うことができません。ただわずかな神通力があるだけです。目犍連と同じです。目犍連の神通力は大きかったのですが、母親を救うことはできませんでした。

みなさん印心した後は五代まで超生できます。そうでしょう。みなさんに菩薩になりたい、五代を救いたい、菩薩の道を実行したいという心がありさえすれば、それでよいのです。みなさんは前世においてかつてそのような因果の種まきをし、仏陀や菩薩の前でたくさんのご徳を積み、数多くのそのような智慧の因果の種まきをし、たくさんそのような慈悲心の因果をなしたので、今やつとこのような菩薩の道にめぐり会うことができたのです。他の人は、私たちが言っても聞かず、興味がないか、あるいは聞いてもわからないのです。そのような種まきをしていないからです。

經典に目犍連が自分は母親すら救うことができないのかと思つて、帰つて泣いたとあります。この点について、私は疑問に思っています。私は、彼は本当に帰つて泣いたのではなく、泣い

た時に化身仏と化身菩薩が現れたのを見て、彼らの指導を受けた後、帰って来て母親を救ったのだと思います。これは内面の仏陀や菩薩が私たちに教えるのですが、外面は私たちも彼が教える方法で行うことができます。

例えば、ある人が自分あるいは誰かが病気になった時、真心こめて祈った結果、観音菩薩が内面に現れて「あなたは帰って、これこれの草の葉と草の根を混ぜて何時間か煮た後、お母さんに飲ませれば大丈夫です」と教えてくれるのを見ました。しかしこの観音菩薩が現れる時というのは、普通の人がやって来てあなたと話すようなものではありません。誠心誠意ひたすら思った時に、初めて観音菩薩が現れるのであって、それは別のレベルなのです。



## 魔の仕事を認識する

一九八七年八月九日 フォルモサ・台北無量光座禪センターにおいて

今日、ある修行仲間が私に「マスター、しばらく私を叱らないのはどうですか」と言うので、私は「問題があつて初めて叱るのです。服が汚れて初めて洗濯するようなもので、すでにきちんと洗濯してアイロンもかけて、たたくでタンスの中に入れてあるなら、もちろん洗濯する必要はありません。洗濯が終わっているのです、また出して着たり、誰かが動かしたり、あるいはうっかりして床に落としたりしない限り、洗濯する必要はないのです。きれいな洗濯する必要はありません」と言いました。

しかし、一度洗濯したからといって、永遠にきれいなままであるとはいえません。例えば、印心した人はそのレベルが第五世界に達していても、時には魔のパワーに攻撃されることがあります。レベルが高ければ高いほど、ますます頻繁に攻撃されるのです。魔はあらゆる方法を使って、印心した人を仏陀のパワーから連れ去ろうとするので、法を伝える人にたくさん問



題を起こし、順調にいかないようにするか、またはその人について学んでいる人にたくさん疑問や障害を起こさせたり、たくさん論争させたりして、良いところを見せず、悪い面だけを見せようとしませう。

例えば、ここへ来てもマスターに会おうとしないで、外のゴミだけを見たがるのです。ですから、魔にとりつかれた人は必ずしも変だったり、一日中ワーワーわめいていたり、口の中でぶつぶつ言っていたり、何かめちやくちやなことをするわけではないのです。修行にもたくさんレベルがあり、魔にとりつかれるにしても当然たくさんレベルがあります。一流と二流があるのです。魔は必ずしも頭に二本角を生やしていたり、歯がとても長かったりするわけではありません。そうではなく、魔の仕事はとてもきめ細かいのです。ですから、私たちは「道が一尺高ければ、魔は一丈も高くなる」と言います。

魔の仕事とは何でしょうか。魔は人が論争したり、けんかしたりするようにけしかけ、自殺するように仕向けたり、他人の欠点を探したり、うわさ話をさせたりするのがとても好きなのです。良い面にはふたをして、悪い面だけを見させようとしています。私が良い教理を話す時には人に聞かせないようにし、他の修行仲間がでたらめを言うことだけを聞かせようとしています。

例えば、あの人は性格が悪い、あの出家者はだめだ、あの在家者はだめだ、誰々はマスターに対してどうだ、誰々は修行が良くない、あの夫婦はどうだ、彼らの家庭は問題がある、など

と言ったりするので。どれもつまらない、無益なことです。魔はこのようなことを言っているに知らせ、あの暗い面に注意を向けさせて、心をそのような良くない面に向けさせるのです。私たちの心が暗い面にあると、私たちのレベルはその暗い所でとどまってしまいます。そうでしょう。ですから、みなさんは、こういったことはみな魔の仕業であることを知らなければなりません。

魔はその他に割合ハイレベルなこともやります。例えば、論争や知識のような学問を学ぶように仕向けます。実を言いますと「禪問答」はその一種です。それはまだ知能の範囲 (Mental Field) に属しますので、せいぜい第一か、第二世界に達することができるだけです。

おおよそ論争を好み、このようなものを弁論するか、あるいは少しばかり雄弁な人はいずれも頭脳のレベルにとどまっていて、第二世界を超えることはできません。ましてや三界の外に出ることなどは言うまでもありません。釈迦や他の教主が亡くなった後に、魔がその団体や道場に紛れ込んで、徐々にその教主の教え方や教理を変えていったのです。例えば、釈迦は禪問答を教えるにはいないのに、魔は禪問答などを教えるのです。

私はみなさんにだけ話して聞かせています。みなさんは私の弟子ですから。もしみなさんが外で人に話したら、殴られるでしょう。今まだ一部の大僧侶を含め、たくさんの人が禪問答を学んでいますので、外に行ってみだりに話してはいけません。私が人に教えるものには三種類

あります。一つは外面を教えます。もう一つは内面を教えます。さらにもう一つは奥深い内面を教えます。そのような内在する奥深いものは、みなさんが内面のマスターに会った時にだけ初めて学ぶことができるのです。

しかし、そのような内在の奥深い学問は人にわからせることはできません。人に話すと、すぐ障害が表れます。なぜなら、それが魔の仕事だからです。その仕事は修行者にたくさんの障害を与えることです。修行を積み積むほど魔は嫌がります。実際、魔といっても何もありません。それはただ私たちをテストする道具にすぎないのです。私たちは修行する時、テストを受けなければなりません。そうして初めて自分のレベルがどの程度かを知ることができます。

ですから、私たちは魔のパワーを憎んではいけません。ただ注意深く、その存在を認識すべきです。私たちが魔に試される時は、これは仏陀の仕事ではなく魔の仕事であり、右側ではなく、左側であることを知らなければなりません。どんな時でも、私たちはうわさ話をしたり、私や修行仲間のどこが良くないなどと批判したりするのが好きな人を見たら、その時は魔が来たことを知るべきです。そしてすぐ自分に言い聞かせなければなりません。「すぐ一刀両断にしなければならぬ。これが魔の仕業であることはわかっている。悪い影響を与えようとしているのだ。すぐ止めるべきだ」と。

修行は必ず常に自分をチェックして、魔につけ込まれないようにすることです。いわゆる「自

分をチェックする」とはただ自分を責めたてて、「私はどうしてこんなに悪いのか。なぜ行いが魔のようなのか。自殺するのが一番良い」などと、愚痴を言うことではありません。チェックとはそのような意味ではありません。

私たちは本来大変きれいなのですが、この世界に住んでいると魔のパワーが非常に多いので、これに影響されるのです。実際私たちの欠点はすべて魔に影響されたものです。いわゆる「本来無一物 何處惹塵埃？」（本来何もないのに、どこからほこりがたつのか）とはそういう意味です。私たちは本来非常にきれいなのですが、この世界によって汚いものに染まったのです。しかし、高い修行を積めば、蓮の花のように、汚泥から出てなお汚泥に染まりません。

私たちはみな蓮の花が仏陀のレベルを代表すると言いますが、なぜでしょうか。それは汚い泥土に育っても、少しも影響を受けず、良いにおいがし、きれいで、ハエや、ミツバチや、蝶が来ないので、一番きれいな花なのです。不思議なことに他の花はすべて蝶や、ミツバチや、ハエが蜜を享受し、または破壊されるのですが、蓮の花だけはそのようなことがなく、泥土の中で成長しても、最もきれいで、香りが良く、純粹なのです。

私たちの修行もますます蓮の花のようになければなりません。しかし、私たちがまだ上のレベルに達するまでは、泥土の中にいて、それに囲まれているので、外側はその影響を受けるのです。例えば、蓮の根を泥土の中から取り出すと、蓮の根はきつとそれほどきれいでなく、表

面はとても汚く、何回も洗ってやるとききれいになり、食べられるようになります。

私たちがまだ高いレベルまで修行してない時は蓮の根と同じですが、高いレベルに達した後には泥土の影響を受けなくなります。修行を積めば積むほどますます攻撃を受け、たくさんの魔障の畏に引つ掛かります。最も困ったことは私たちが自分のマスターから離れ、観音法門から離れようとする事です。観音法門は最高の法門で、他の法門では人を解脱させることはできないからです。みなさんはまだ修行を始めたばかりですが、それでも修行の結果が少し表れて、それがみなさんにやる気を起こさせて、引き続き修行する励みになります。そのような始めたばかりの修行の結果でも、魔はすぐ連れ去ろうとしますので、確固とした信念を持ってやらないと修行は大変です。

前回、講義の時ふれましたが、千年以上も前に達磨がすでに「今は末法の時代だ。悪人が多く、善人が少ない。修行が大変だ。もし私ごとどまっていたらもつと多くの災難やカルマを衆生にもたらすことになるだろう。だから私はもう行く」と言いました。千年以上も前に彼はこう言ったのですが、現在はどうかでしょう。「末法の時代」ではなく、「魔法の時代」と言うべきです。

しかし、私たち印心した人は心配する必要はありません。印心後、私たちは「黄金時代」に入ります。末法であろうと、魔法であろうと、黄金時代であろうと、それは完全に私たちの内

在によって決まります。従って、「一切唯心造(すべては心で作られる)」と言うのです。私たちが末法時代に入るか、黄金時代に入るかはすべて自身が選択するのです。

黄金時代とは何でしょうか。それは一人の在世の仏陀とその弟子たちが一緒に法を広め、修行して、この世界の雰囲気を浄化することです。そういう人は黄金時代に生きているのです。ですから、釈迦が生きている時代を正法時代、または黄金時代と言ったのです。でもその時、悪人はいなくなりました。彼を殺そうとした人もなくなりましたし、批判をする人もなくなりました。彼の親族のデーヴァダッタさえ何回も彼を殺そうとして、至る所で反対し、別の宗派を作って、常に彼を殺害する機会を狙っていました。

ですから、私たちは末法時代であれ、黄金時代であれ、すべて私たち自身が作ったものであることを知るべきです。もちろん黄金時代もあれば、堯舜時代もありますが、その時代は戒律もなく、国家の法律もなく、仁、義、礼、智、信もなく、何もありませんでした。どうして当時の世界はあんなに平和だったのでしょうか。彼らには「道」があったからです。彼らは天真らんまん、純真で、生まれつき「道」がありました。国王に「道」があり、公民に「道」があり、父母に「道」があり、夫婦に「道」があったので、国王がいて、父母、夫婦がいましたが、みなとても純粹だったのです。

しかし、私はなぜ今あまりに男女関係がありすぎてはいけないのでしょうか。それは

私たちの頭脳がすでに悪く変わってしまったからです。本来男女関係は悪いわけではありません。ただ私たちの頭脳があまりに悪いのです。もし「道」がなければ、私たちが何をするにかかわらず、すべて悪いのです。たとえ布施をしても、人を救っても悪いのです。なぜなら、「私」が救うからです。人を救うことが目的になってしまったからです。「私」が彼を救えば有名になり、人は私を好きになるだろう、そして「私」を大変慈悲深いと思うだろうと、この「私」がすべてを毒薬に変えてしまったのです。男女関係は以前はもともと自然なもので、生存するためだけであり、何も悪い考えはありませんでした。しかし今日の男女関係は一種の相互利用や、過度の肉体的行為に変わってしまいました。考え方が悪いので、すべてのものが悪く変わったのです。

堯舜の時にも、夫婦も息子もいましたが、世界はあんなにも平和でした。なぜでしょうか。頭脳が大変純粹で、悪い考えがなかったからです。しかし、今日たとえ私たちが同じことをしても、結果は違ってくる。私たちにも夫婦や子どもがいますが、昔とは違います。もう堯舜時代の雰囲気はなくなっています。

従って、誰かが「仁、義、礼、智、信」を提唱しなくてはなりません。人類は忘れてしまったからです。「道」はすでになくなり、現在むちゃくちゃで、互いに殺し合い、互いに傷つけ合うように変わってしまったのです。ですから、誰かが立ち上がって、衆生に説明して聞かせ、

「こんな状態ではだめだ。あなたはどうして自分の両親に対してそんなふうにするのか。両親はあなたを生み、苦勞してこんなに大きくしたのに……」などと言わなければなりません。

本来自然に孝行するもので、何も説明して聞かせるものではないのです。ですから仁、義、礼、智、信も必要なかったし、孝行の基準を設ける必要もなかったのです。しかし、人類はますます悪くなりました。友人に対しても悪くなり、信用を守らないので、「友達にそんなふうであってはいけません。彼はあなたを信用して一緒に仕事したいと思っていますので、だましてはいけません。友達に対しては信用を守らなければなりません。そうして初めて平和であり、仕事をすることができるのです」などと言わなければなりません。

何事もはつきり説明しなければならなくなったら、それは良くないのです。言葉を使わずに、自然にやるのが最良です。「道」が失われてからは言葉を使わなければなりません。それで孔子、墨子などが世に現れたのです。すべて衆生に「道」がないためです。なぜなら、黄金時代はすでに没落してしまっただからです。

今はもつとひどいです。私たちはこの時代に生まれて、とても厄介です。地上には毒気が満ちており、都会に住めばわかりますが、ちょっと外出すると、体がねばねばして、まるで硫黄ガスのようなのです。車から排出される排気ガスは私たちの体に影響し、私たちの精神や思想にも影響します。ですから、現代人は哀しみや悩み、悲観的な思想が多いのです。今、人を救って、



教えて説明して聞かせることは大変です。今日、説明しても、聞いた人は明日には忘れるでしょう。時には明日まで待たず、さつき聞いたと思っただけで忘れています。もし釈迦が今、衆生を救いにここに来たとしても、首を横に振って「私は衆生を救いたくありません」と言うでしょう。

私は釈迦ではありませんが、何回も首を横に振りました。しかし、みなさんが必ず私を連れ戻そうとするので、私も行くに忍びなく、二、三名の弟子に真心があり、心から道を求め、解脱を求めているのを見て、この少数の真心のある弟子のために、私はやっとなどまったのです。他の人もその影響を受けられるよう期待していますが、簡単ではありません。そうでしょう。

みなさんに聞きたいのですが、「みなさん、私の教理をどの程度覚えていますか」。私が経典を講義する時、居眠りしている人もいれば、聞いてもわからない人もいます。もう一度尋ねると、彼が全然わかってないことがすぐわかります。あるいは私に質問した時に、私はすぐわかります。この二時間は無駄な講義をしたわけで、何の役にも立ちません。すべて空気に漂っていて、耳に入っていないのです。ということ、人に教えるのは本当に大変なことです。

でも何を言ったところで、ここへ来さえすれば多少なりとも良い影響を受けて帰りますが、来ない人は厄介です。まだ高い修行を積んでない間は講義を聞きに来ることは大変重要です。みなさんはここに来て、パワーをつけて、家に帰ってから、家庭や、社会や、国家に分けられる

からです。街灯のない田舎のように、この世界をすべて暗黒にしてはいけません。小さな街灯がたくさんあれば、田舎もそんなに暗くありません。昔街灯がなかった時は夜になると、田舎は真つ暗で、もし月が出ていなければ、まったく見え、路を歩けませんでした。

みなさんこのような状況を経験していませんか。私は経験しています。私は戦争時に生まれました。当時私たちは山の上に住んでいて、自分でサツマイモを植えていました。父がサツマイモを植え、母が布を売りに行きました。しかし、父もいつも家にいたのではなく、期間をあけて教えに行くとともに、自分のこともしたのです。父は医者兼教師でした。当時は医者だけでは生活できなかつたので、教師も兼ねていたのです。

父は遠い道のりを歩かなければなりませんでした。難を避けるため、私たちは他の家より遠く離れていました。山の上にはまったく明かりがなく、我が家に一つ小さな明かりがあるだけでした。外は本当に真つ暗で、時には自分自身さえ見えないほどでした。みなさんこのような生活を体験したことありますか。若い人はないでしょうが、年輩の方はたぶんあるでしょう。当時私たちは街灯を一つつけました。とても小さかったのですが、とにかくありませんでした。今でも私たちが住んでいる山の上は、街灯がないと、とても暗いのです。

修行は本当にそう簡単ではありません。マスターのパワーに頼らなければ頼るところがありません。あのような宗教に頼っても何にもなりません。禅問答に頼っても役に立ちません。本

当に愚かな禅問答です。どうして今でもまだあのような宗教があるのでしょうか。それは魔の仕業だからです。魔は私たちを忙しくさせ、毎日仏陀を拜んだり、禅問答をさせたり、あるいは何か経典を唱えさせたりして、私たちがこの世界を離れるまで、そのようなことをやらせようとしているのです。それでとても満足しています。なぜなら、私たちは自分に「私は修行したよ。これでもう十分だよ」と言い聞かせることができるからです。今、どんな宗教もみな死んで初めて仏陀を見ることができ、死んで初めて西方へ行ける、解脱できる、と言っているではありませんか。今、解脱できますと言える人は誰もいません。

実際、今解脱できるのです。今仏陀を見ることができ、少なくとも仏陀の音を聞くことができます。レベルがもう少し高ければ、仏陀の境界（きょうがい）を見、内在する仏陀を見ることができ、仏陀が私たちをより高い境界に連れて行って、ハイレベルな仏陀の道理を勉強することができます。そのような高い境界を見られなくても構いません。仏陀の音を聞くことができればそれでいいのです。私がい、私を信じさえすれば、必ず解脱できます。なぜでしょうか。

修行を積み積むほど、ますますこの世界は私たちにとって何でもないと感じられ、その時はもうすでに解脱していて、あまり執着せず、この世界にあまりきつく縛られません。夫、妻、子どもがいても、ただ私たちの責任にすぎないことがわかっていきます。彼らは無常で因果によ

りかわり合っているだけです。ですから、以前のようにはっきりつかまえることはありません。出家してなくても、出家したのと同様で、心は明るいのです。

もしある日、私たちの内在の主人がとても高いレベルに行くことができたら、その時、私たちは誰が何であつてもまったく構わず、仏陀になつてもならなくても構わず、何になつてもいい、というふうになります。その時こそ「在世解脱」したのです。死後初めて解脱できるのであります。そのような言い方は人をだますものです。私たちを忙しくさせ、死後解脱できるのかどうかもわからないくらい忙しくさせ、一生修行しても仏陀の光も仏陀の花も見たことがなく、一生禪問答をやつても何の結果もなく、たとえ、少くも結果が出たとしても、それは頭脳の幻想から出たもので、本当に究極の解脱ではありません。

もしみなさんがそのような禪を修行している人について学ぶと、どんなに傲慢かわかります。理論ばかり多いだけで、経典から「仏陀の光に影はない」「花が開いて仏陀を見る」「禪は言語を用いない」など、いくつかの言葉を学んでは、たくさん話すのですが、自分は少しもわかつてないのです。みなさんそのような体験したことありませんか。なければ今尋ねて行つて論争してみてください。とてもくだらなく感じて、「お願いですからそれくらいにしてください。私は帰ります」と言うでしょう。このような議論は実に退屈きわまりないからです。

従つて、私たちは気をつけなければなりません。至る所にたくさん魔障があります。お

よそ私から離れたたいという人に対しては、私は絶対縛りつけません。あなたに懐疑心が生じたら、私はすぐ自由にさせます。私から離れた人はその後大変苦しむでしょうが、「あなたが出て行った後、こんな厄介なことが起こりますよ」などと言いません。私は何も言いません。あなたが自分で選んだのですから。

声もかけずに、私から離れた人はもつと大変な状況になります。私から離れると、すぐ魔がやって来ます。今がチャンスだからです。あなたがマスターはいらないと言う以上、魔は当然すぐやって来ますので、いろいろな問題、いろいろ厄介なこと、災難、カルマや因果のすべてが身に振り掛かり、非常に長い時間がたつてから、自分で気がつきます。その時私の所に戻って来ても、やはり歓迎します。

しかし、誰でも歓迎するというわけにはいかないのです。帰って来た態度が本当に謙虚で、本当に懺悔しているか、あるいはまた面倒をかけようとしているのかを見分けなければなりません。面倒をかけに来た人に対しては、多くのマスターは通常何も言わず、あらかじめ警告もせず、黙って離れます。こうすれば割合早いのです。その人のレベルが実際低すぎるのを見れば、本人が自分でゆっくり学ぶようにしなければなりません。そこで待っていて下の方に引っぱり張られるわけにはいきません。従って、マスターは何も言わず、ただ黙って去るだけです。

ある人のレベルが低すぎると、彼は必ず自分のマスターを自分と同レベルまで引っぱり張ってマ

スターに同情してもらい、自分のレベルをわかってもらおうとします。それは不可能ですし、またそうしてはいけません。なぜなら、そういう人間の感情は人を疲れさせるからです。相手は人に慰めてもらいたいのです。とてもいいですよ、問題ないですよ、とほめられたいのです。

しかし、一人のマスターとして、そのような小さな人間の感情のために、世俗的な礼儀のつとめて、一人の弟子を喜ばせることはできません。そんなことをしてはいけないのです。彼を引つ張り上げてやらなくてはなりません。彼と一緒にいて喜ばせてはいけないのです。もし、彼が動かなければ、そこにとどまらせるべきです。例えば、ある人が泥土の中にいれば、私は引つ張り上げてやらなければいけないのです。もし、本人が上がって来ないなら、そこで遊ばせません。私が彼と一緒に泥の中で遊ぶことはできません。私はそれほど愚かではありません。

真のマスターはたくさんの人に印心することができますが、ただし大きな福報を持つている人だけがマスターを信じ、引き続き修行できます。私たちが道徳のある人や大きな福報のある人なら、魔も私たちを動揺させるすべがありません。でも魔は試してみるので、私たちが攻撃しても、それは壁に頭をぶつけるようなもので、その結果疲れて逃げてしまいます。例えば、魔はマスターを連れ去ることはできません。弟子を連れ去ることができるだけです。あのような哀れな小さいサツマイモ、学び始めたばかりで、まだマスターの道理もわからないような人こそ連れ去られる可能性があるのです。

魔はマスターをあらゆるに連れ去ることはできないのです。ご覧なさい。私がフォルモサ（台湾）に来てから今まで何回攻撃されたものか、弟子からも外の人からも知らない人からも攻撃されましたが、私は何ら問題ありません。しかし、弟子は少し攻撃を受けても耐えられませんか。

いわゆる攻撃とは何でしょうか。例えば、人が私をどんなに悪いか批判しているのを聞くと信念が揺るぎ始めます。二、三日後に困難に会うと、私に助けを求めて、感応があつて、状況が良くなると、今度は私を信用し始めます。また何日かしてある修行仲間が良くなって、欠点があるのを見たり、またはよく修行してないのを見たりすると、家に帰ってからもこうしたゴミを心の中におき、三、四日経つても忘れられず、考えれば考えるほど嫌になります。私から離れよう、センターから離れようとなります。単にある修行仲間のために、私から離れ、法門を離れようとすることこそ、魔の罠に引つ掛かったことです。

魔はとてもきめが細かいのです。数多くの方法で私たちを連れ去ることができるので、私たちはしつかりした心を持たなくてはなりません。魔は必ずしも普通の人間ではありません。時には大変有名な僧侶の姿をして他の宗教の道理または自身の道理で私たちに話し、マスターから離れさせ、観音法門を離れさせようとするのです。

魔は「この人は出たばかりの人だ。わからないのか。我々仏教はすでに二千五百年経っている。カトリックだつて千五百年余経っている。だから伝統のつとらねばならない、それでこ

そ修行なのだ。この観音法門は今まで誰も修行したことがないのに、どうしてそんなに簡単に信じるのか。我々は千年から二千年念仏しており、何百何千万人の人が唱えているのに、あなたは小さな団体について、観音法門を修行してどうしようというのだ。こんなふうにするのはあまりに頼りない。大勢の人間がいて初めてパワーがあるのであって、大勢の人間が修行するのが良い法門なのだ。わずかの人間しか修行しないのは悪い法門なのだ」と言います。魔はいかにも理にかなったようなことを言いますが、実はそれはすべて魔の道理なのです。

なぜこうした魔の道理を私たちは聞き入れるのでしょうか。なぜ私の本当の講義を聞きに来たがらず、むしろあの類の僧侶が魔の道理を話すのを聞きに行きたがるのでしょうか。そのような人のレベルはまだ低すぎて、彼らと似たようなものだから、彼らの言うことがわかるのです。その人のレベルはまだ人類の意識の範囲であって、聖人の意識のレベルではありません。もし依然として人類の意識のままなら、私たちは狭い感情しか持たず、執着し、「私の」と「彼の」との区別をします。しかし、聖人の意識にあるなら、そのような狭い考えはありません。聖人の見方と私たち凡人の見方は違います。

例えば、今みなさんはここに座っています。当然外の様子を多くは見ることはできません。私と修行仲間や道場しか見ることができません。しかし、屋上まで上がって行けば、状況は変わり、見方も違ってきます。



さらに例えば、みなさんが外にいる時の考えとここに来てからの考えも違います。時には家では座っていられないのに、ここへ来ると座れます。家では座禅したくないのに、ここへ来ると自然と座禅をしたくなります。どうしてでしょうか。それは境界が違うからです。

ですから、真偽を判断する必要がある、ある人を特別に信用してはいけません。自分が一生懸命修行して、ある程度の時間修行すれば、自然に判断能力ができますし、私も信じなくてもよく、ただ修行を続けていればそれでいいのです。あなたが「禅問答」を修行しているにしても、「阿弥陀仏」を唱えているにしても、実際、あなたは何が良いのかまったくわかっていないのです。人が良いと言うから、あなたも良いと言うのです。あなたにできることは二つしかありません。「信じる」か「信じない」かだけです。なぜなら、あなたにはまだ判断能力がありませんから。

今、私は観音法門を教えています。少なくともみなさんはすぐに少し利益があり、すぐに結果が得られます。例えば、光を見ることができ、境界（きょうがい）を見ることができ、智慧が開きます。このような確実な結果でさえ、まだみなさんを信じさせるには不十分で、十分証明することができません。みなさんは判断できないので、観音法門は他の法門より劣るなどと言うのです。

もし何も判断できないほど判断力がないのなら、どうしてあちこちに行って、そんなにたく

さんの法門を修行しているのですか。一つの法門を修行すればいいのです。「観音」を修行すればすぐ結果が出ますが、他の法門はそうではないからです。この一点だけでも私は確かに観音法門を修行するのがとても良いとすることができます。少なくとも私には少しお金があつて、あなたのポケットに入れることができます。もしある法門が良いと言うなら、自分で行って修行してください。私はあの法門を修行して何の結果もなかったのです。しかし、「観音」を修行してすぐ結果が出ましたので、私は少なくともこのささやかな信心により、引き続き修行していくことができました。

まだ判断能力がないのに、どうして勝手にこの法門は良い、あの法門は良くない、あるいはあの僧が良い、この僧は良くないなどと批判できるのでしょうか。はっきりとした判断力を持つて高い境界に達しなければなりません。その時初めてどの法門が良く、どれが良くないということがわかるのです。最高の所まで到達しなければなりません。そうして初めてすべてがわかります。

ですから、魔に利用されてはいけません。気をつけるべきです。修行者は二十四時間常に気をつけなければなりません。魔がやって来たら、すぐに認識しなければなりません。およそ悲しみ、苦悩し、自分を卑下し、自殺したいと思ひ、うわさ話をして、人の良くないところを見たり、私の外面的な行動を批判したりして、凡人の心で私を測り、修行仲間を測ることなどは

すべて魔の仕業ですので、すぐに認識しなければなりません。

なぜなら、仏陀や菩薩にとつてはそんなことはどうでもよく、かかわらないからです。仏陀や菩薩は余計なことを言わないし、人が良いかどうかなど関心がありません。もし、その人が良くないと思えば、すぐに本人に「こんなふうでは良くないですよ。改めるべきです」とさとしてあげます。このように言うのは慈悲心からであつて、本人に忠告し、また責任もあるからこそ教えさすわけです。しかし、そのようなマスターは自分が責任を負っている人だけに教えさとし、外に出て全世界に対してどうすべきか教えるではありません。

私たちはどんな宗教も、どんな人も批判するつもりはありません。「何が魔の宗教で、何が仏教なのか」という判断基準を認識しなければなりません。仏教は人に、自分が必ず解脱できることを信じさせ、人を喜ばせ、幸せにし、毎日「高い境界に行ける」と希望を抱かせ、その上、修行の成果があるのです。魔の宗教は、毎日あなたにどうすべきかを教えますが、何も結果がなく、口先だけです。それが魔の宗教なのです。

相手が自分はどうな宗教であると言つても、私たちは魔の教理もあり、仏陀の教理もあることを認識しなければなりません。魔の教理とは何でしょうか。例えば、魔は道徳や社会的責任で、私たちを縛りつけようとして、「あなたはまずこうすべきだ……だから修行できないのだ」と教えます。

もちろん、私たちは自分の責任をおろそかにすることはできません。しかし、こうした責任で私たちが娑婆世界に縛りつけることもできないのです。国家に対してであれ、家庭に対してであれ、私たちは自己の責任を果たさねばなりません。いつかは必ずそれから離れることも知っていなければならないのです。ですから、やはり他のものにも頼らなければなりません。ただ家庭、国家、あるいは仁、義、礼、智、信のみに頼ってはいけません。これらはいずれも二次的なことで、主要なことではありません。なるべくマスターと一緒にいて、そうして初めて魔がどこにいるかを認識でき、みなさんのポケットの中にたくさん魔がいて、早くつまみ出してどぶに捨てないといけないことがわかります。

永遠に安全でいたければ、マスターと一緒にいなければなりません。「マスターと一緒にいる」とはどういうことでしょうか。それはつまりどんな時でもマスターを思うことです。何をしてもすべてマスターのパワーでやったのであり、何を考えてもすべてマスターが考えるのです。そのようにして初めて魔に包囲されません。マスターと一緒に修行すれば、魔は来られません。マスターから離れると、魔はすぐやって来ます。

いわゆる「マスターから離れる」とは何を指すのでしょうか。それはマスターのことを思わず、我執でやり、凡人の頭脳で判断し、でたらめに話し、勝手に考え、マスターを信用せず、マスターと一緒にいないことです。そうすればすぐ魔に利用されます。毎日私と一緒にいれば、

絶対に何も問題ありません。あなたのレベルがどうであろうと、私はあなたを守り、連れて上がります。あなたのカルマがどうであろうと、私はあなたを連れて上がることができます。もしみなさんが毎日私と一緒にいるのなら、この点私は保証できます。

もしみなさんが私と一緒にいたくないというなら、私は強制しません。みなさんは毎日魔に來てもらって、心の中に住んでもらい、頭脳の中は魔で一杯になります。「魔」とは何でしょう。もっぱら人の暗い、悪いところを見ることです。人の明るいところを見るのが仏陀です。ですから、安全でありたいなら、毎日マスターと一緒にいなければなりません。

みなさんは内面のマスターを見ることができません。これは重要ではありませんが、いつでも私がみなさんと一緒にいることを知っていなければなりません。マスターがいるのに、みなさんはそれを無視し、気にせず、マスターの言うことを聞かないで、マスターにみなさんの顧問をお願いするのではなく、逆に魔に顧問をお願いし、マスターの教理に従わずに、魔の教理に従っているのです。これでは仏陀、菩薩でもどうしようもありません。なぜなら、仏陀や菩薩はとても自在で、あなたがそうしたいと言うのであれば、そうさせてくれるからです。

みなさんに言うておきますが、私はみなさんのために、すでにすべてのことをやり終えました。解脱、西方の位、聖位などすでに手配済みです。まるですでに裁断し、服ができあがって、あとはみなさんがその時になつて着るだけのようなものです。でも、みなさんは着たがらない

で、毎日外を出歩いていて、家に帰らなければどうして着られるでしょう。印心の時、私はすでに裁断して衣服を作り上げ、すべて完成しているのです。位もすでにあちらでみなさんを待っています。

しかし、みなさんのレベルがあまりに低すぎ、しかも忙しすぎて、つまり魔の話を聞くのに忙しすぎるので、これらのすでに準備されているものを認識しないのです。例えば、今料理がすでに準備されて、あちらでみなさんが食べるのを待っているのに、もし私が言わなければ、みなさんはあちらに料理があることも忘れているのです。なぜでしょうか。みなさんは私の講義を聞くのに忙しすぎるのと、時間も来てなければ、おなかもすいていないので、食べたいと思わないからです。ある人は時間が来たのに、食べたがりません。なぜなら、他のことに忙しいか、外に話しに行くかで、当然ご飯もおかずも食べられません。

私はすでにすべてを準備しました。解脱の位のない人はいません。印心した人であれば、すべてあります。みなさんがもらいに来るのを待っています。印心した人はすぐ解脱します。名前はずでに報告されて登録もされており、位もみなさんを待っています。しかし、もしみなさんが離れてしまえばなくなります。例えば、私がみなさんに座席を準備しているのに、来なければ、その席には座る人はいません。あるいは食事を用意したのに、誰も来なければ、食べる人はいません。たとえ印心時に、私が「みなさんは必ず解脱できることを保証します」と言っ

でも、みなさんには選択の自由があるので、位を享受しに来ることも、離れて行くこともできるわけです。

しかし、私としてはみなさんに「魔障を忘れないで、魔のパワーを軽視しないでください。魔は毎日私たちをテストします。魔は私たちに位を享受しに戻って来させないようにしたいからです」と忠告しなければなりません。実はそうさせないというのでもありません。彼らは大変公平で、みなさんが戻って、私が準備した衣服を着るだけの価値があるかどうかをテストしているだけです。

例えば、ある人が私に「マスター、私はマスターについて出家したいのですが、私を弟子にしていただけませんか」と聞きますと、私は「しましょう」と答えます。その日から私はすぐ出家の僧衣を準備します。まずサイズを計り、それから買いに行つて、買って来てから全部一ヶ所に置いておきます。時が来てないか、あるいは彼が着られないか、着るに値しないため、まだとつてあるだけです。時が来て初めて彼に着せます。

印心後も同じです。私は位をすでに準備したので、みなさんはすでに永遠に解脱したのです。しかし、みなさんが逃げたいというなら、それでも結構です。みなさん自身が好きなようにすればいいのです。世々代々どこに逃げようと構いませんが、長い時間が経つてやっとまた私にめぐり会うことができます。めぐり会わないわけにはいかないのです。ただみなさんはかなり

苦しく、苦悩し、哀しみ、暗く、この娑婆世界を何回となく輪廻しなければならず、ひどい時はさらに地獄に落ちることもあります。もしあちらに行きたいというのなら、私は別に阻止しません。

従って、気をつけなければなりません。一世で解脱しようと思えば、マスターのパワーを信じ、観音法門を信じなければなりません。この音こそマスターのパワーであり、みなさんのマスターなのです。マスターとはこの肉体を指すのではなくありません。肉体は一つの道具にすぎません。このパワーは肉体を通らなければ発散できないからです。まるで電気のように、もし電線や電灯がなければ、光を発することができないようなものです。同様に、ただこの電力を信じて初めて光があり、解脱できるのです。

従って、外見を見てはいけません。「私はこの人が好きでない。どうして彼女はああなのかしら。どうして彼女はこうでないのかしら」などと思っははいけません。あなたはこういうのが好きでも、彼はああいうのが好きだとしたら、どうしますか。ですから、外見にとらわれてはいけません。その人の中に電気があればそれでよいのです。電球の形はすべての人に気に入ってもらえません。ただ、私たちに光を与えて本を読むことができればいいのです。これこそが一番重要です。

公衆の前では個人の好みを主張してはいけません。もしみなさんが個性を持ちたくて、例え



ばこんな姿が好きだというのなら、自分で修行してください。その後はそのような姿に変わります。私のような姿が好きでないというのなら、これも自分で修行してください。その後は自分の好きな姿や好きな個性に変わります。私の外見を批判する必要はありません。私が何をしても、みなさんにはうかがい知れないのです。私が人を叱れば、みなさんは粗暴だと思うでしょうし、人にひざまずかせれば、とても厳しいと思うでしょうが、そんなことはありません。実際、私がすることは一〇〇%正しいことです。みなさんが凡人だからわからないだけです。私は永遠に間違いをしませんし、また間違つてはならないのです。

みなさんは人を見る時はいつも外見を見ているだけです。隣の奥さんが座っているのを見て、その人はとてもおとなしいと思うでしょうが、どれくらいおとなしいのかは知りません。彼女は家では夫を尻に敷いて、家の人に厄介をかけ、またただっ子になっていますが、見た目にはとてもおとなしく、良く見えます。実はそうではないのです。

従つて人の外見を見ても役に立ちません。私が誰かを叱るのは、必ず理由があります。私が何を言おうと、それには必ず理由があるのです。そう信じて初めて聖人のレベルに到達することができます。さもないと、凡人の頭脳のがきの中にとどまっています、「いつも、マスターがこう言うのは一体正しいのか、正しくないのか。なぜマスターはこうなのか」などと考えます。これはまだ頭脳の論争内であり、知能の次元にすぎず、聖人のレベルではありません。

知能のレベルと聖人のレベルは違います。知能のレベルにはまだ良い、悪い、賢い、愚か、などがありますが、これらはすべて外面的なものです。いずれも「問題と答」に属するものです。私たちに問題があり、答があり、一つの答を「得る」ということがある限り、私たちのレベルはまだ知能の次元であることがわかります。

従って、達磨が五人の弟子にそのレベルを聞いた時に、慧可（中国禅宗第二代の祖師）の番になると、彼はただ礼拝した後、そばに立って一言も発しませんでした。しかし、彼だけが位を得て、継承するレベルになっていたのです。他の四人の弟子はと云いますと、聞かれるとすぐに「私の意見は……」と言ったのです。もちろん達磨は彼らにも授記しました。彼は「お前は私の皮を得た。お前は私の骨を得た。お前は私の肉を得た。お前は私の血を得た。しかし慧可は私の髓を得たのだ」と言ったのです。

慧可はその時論争もせず、何も言う必要がなかったのです。彼はすでに知能のあがきを超越し、論争、判断、善悪のレベルを超えていたからです。その時こそ一〇〇%完全無欠です。まだ問題や疑問があっても、もちろんいいのです。なぜなら、私たちのレベルがどうであれ、実際そういうのですから。自分で自分を偽って装う必要はありません。「私は今何の問題もありません。私はマスターに会うと口を閉ざしてしまいます。私はもう『空』のレベル、『分け隔てのない』レベルに達しましたので、どんな言葉も必要ありません」と言っただけではありません。

こんなふうに思ってははいけません。マスターをだましたり、修行仲間をだましたりしてはいけません。修行者は大うそを言ってはいけないのです。いわゆる「大うそ」とはまだそのレベルになっていないのに、自分はもうそのレベルに達したと言うことです。それは間違っています。私が言いたいのは、もしまだ疑問や問題があるのなら、それは私たちのレベルがまだ知能の次元であることを、みなさんにわかしてもらいたいです。

でも自分のレベルが低すぎて、マスターを理解できないからといって、マスターから離れたり、あるいは法門を離れたりしないことです。自分を認識し、いわゆる「己を知り、彼を知れば、百戦百勝」を認識しなければなりません。私はみなさんがすぐ「空」のレベルに達するよう要求しているのではないし、またみなさんに疑問が生じたら私が怒るとか、みなさんを尊敬しないなどと言っているわけでもありません。

私がこのように言うのは、みなさんに自分のレベルを認識してもらい、魔に対する警戒心を高め、徐々に、慎重に修行していただきたいからです。私たちは自分のレベルで、自分をだましてはいけません。ましてや魔に私たちの弱いパワーを利用して、私たちを連れて行かせてはならないのです。そんなことになれば、私たちの時間を浪費するだけでなく、また来て生死を輪廻しなければなりません。これは残念なことではありませんか。

私について修行するのは簡単すぎます。解脱もとても容易です。毎日観音法門を少なくとも

二時間半修行して、私が持っている不可思議な功德を信じ、私は最高のレベルであることを信じていれば、それでよいのです。それだけです。その他は関係ありません。あなたがかつて何をしたとしても、すべて超越できますし、あなたの過去のカルマがどんなに重くてもすべてきれいに洗うことができます。あなたが娑婆世界にいても、第二世界まで修行さえすれば、私はあなたを第五世界まで連れて行ってあげます。あなたが世界を離れる時、私はあなたを出迎え、私が行く所にもあなたも行きます。

もしあなたがまだ第一世界にいるなら、上がって行くことができません。第一世界にはまだ「貪り・怒り・愚かさ」があまりに多すぎるので、一定期間そちらで学んでから初めて上がって行くことができます。しかし、第二世界に着きさえすれば、私があなたを第五世界まで連れて行ってあげますから、問題ありません。

マスターのパワーは計り知れず不可思議です。「五代」までも引き上げることができますから、どうして人間一人を引き上げられないことがあるでしょう。みなさんを連れて行けないなら、マスターになるに値しません。みなさんはあんなに私を信頼し、毎日できる限り座禅して、あんなに努力して修行しているのですから、私がどうしてみなさんを引き上げないのでしょうか。全世界でさえ少し引き上げることができるのに、どうして弟子一人を引き上げられないことがあるでしょう。ですから、私を信じる人は、永遠に生死を輪廻することがないことを知る

べきです。私がこの不可思議なパワーを持つていることを深く信じるべきです。

修行を始めたばかりの人にとっては、外にたくさん誘惑があつて心を奪われるでしょう。まるで子どものように、おかあさんが中でご飯を炊いているのに、外で物売りが大声でアイスクリーム、キャンデーと叫ぶと、子どもの心は当然誘惑の方に行つてしまいます。おやつの方がご飯よりおいしいと思うからです。でもキャンデーは害になります。虫菌になったり、食べ過ぎると体にも良くありません。

子どもが好むのは外の包装がきれいで、食べるととても甘いからです。実際は悪いところがたくさんあります。キャンデーを食べ過ぎると私たちの体内のビタミンを破壊しますが、子どもは喜んで食べるのです。子どもは何が良くて、何が悪いのかわからず、ただ甘ければよいのですから、中に毒薬を入れられてもわかりません。ですから、子どもの薬は大変苦いのですが、外を砂糖でまぶすと喜んで飲みます。外側を見ると色鮮やかでしかも甘いので、中に苦い薬が入っているのがわからないのです。

修行を始めたばかりの人は子どもと同じように、「アイスクリーム、キャンデー、ビスケット」の呼び声が聞こえたと心がそちらの方に行つてしまわないようにしてください。修行を始めたばかりの人は「身」はマスターについて修行していますが、心はまだ一〇〇%完全にマスターに預けているわけではなく、少し外に残しては他のマスターに会いに行ったり、他の寺に

参拝に行ったり、あるいはある神様がとても良く効くと聞き、試しに行ったりします。そうすれば加持はますます良くなると思うのでしようが、こんなに欲張ることは良くないことがわからないのです。そして自分にカルマをもたらし、自らのレベルを止まっただまにするか、あるいは長い時間がたってからやつと上がる事ができるのです。

このようにあちこちむやみやたらに駆け回り回るのは、ゴミを集めることです。そしてゴミを宝に変えたいと思うのです。自分の宝をまだきれいに磨いてないのに、ゴミをたくさん集めて持ち帰って、自分の宝の上に置いて、宝を覆ってしまっているのです。これはカルマと同じで、毎日出かけてカルマをたくさん集めて持ち帰るので、当然修行の進歩は大変遅いわけです。

みなさんが誰に会いに行こうと、私は干渉しませんが、ただこれは魔のパワーであつて、何もない所がないことを知るべきです。私はもうたくさん見ているので知っています。実際に見なくてもわかります。私が知らないことは一つありません。

みなさんが家で何をしているか、私が知らないと思つてはいけません。そう思つたら間違いです。私は言いたくないだけです。言つて何になるでしょうか。何の役に立つのですか。みなさんが私を信じない以上、みなさんのカルマは自分で処理してもらいます。みなさんが何をしても、「マスターは必ず知っている」と思ふべきです。ですから、やる前にまずそうするのが良いかどうか、私が同意するかどうか、修行の助けになるかどうかを考えなければなりません。

今日私は正直に申し上げますが、私が知らないことは一つもないのです。もし私が知らなければ、私は凡人です。みなさんも毎週日曜日ここへ講義を聞きに来たり、座禅をしに来たりしなくてもいいのです。遠路はるばる大変な時間の浪費ではありませんか。それなら、山を拝み、水を拝み、骨（釈迦の骨）を拝んで、体を動かした方が楽しいでしょう。団体に所属して、友達もでき、社会的な雰囲気もあります。何を好んで遠路わざわざここにやって来るのでしょうか。

みなさんに、私が何でも知っているとということがわからず、私がどこにでもいることが信じられないなら、ここに来る必要はありません。私は毎日みなさんと一緒にいて、どこにでもいて、何でも知っている、知らないことは何もないことを理解すべきです。

時々、私はみなさんを叱りますが、なぜ叱るのかみなさんはわかりません。私は何も言いませんが、みなさんのカルマを見て、まず少し洗うのです。万一、みなさんがたくさんゴミを持ち帰ったら、今後きれいに洗い落とせない可能性があるのです。みなさんを哀れんで、今うちに少しずつ洗っているのです。私がなぜ叱るのか言わなくてもいいし、説明する必要もないし、また説明すべきではありませんが、みなさんは私が知らないことは何もないことさえ知っていれば十分です。

ですから、みなさんは時々私に叱られたら、まず「最近私は何か間違いをしたかな。人に知

られたくない秘密があったかな」と自問してください。叱られたらすぐ「たぶん、ある修行仲間がマスターに告げ口したのだろう。さもないと、どうしてマスターが知っているのか」などと連想しないでください。どうして知らないことがあるでしょう。誰かが私に告げ口したのであればありません。ですから、他人を責めてはいけません。そのような考え方は間違っています。口実を設けて自分を許しているのです。

実際、真心をもつて自問すれば、すぐわかることです。私はみなさんと同一体ですから、みなさんが何をしようとすべてわかり、みな知っています。誰かに報告に来てもらう必要はありません。私のレベルは肉体にありません。ここにはいません。私はこの肉体ではありません。みなさんはなぜ、私がこの肉体ではないのか理解できないかもしれませぬ。

印心後、私はみなさんと一緒にいます。私はみなさんと共に路を歩き、食事し、仕事をし、布施をし、忍辱し、精進し、座禅し、災難時にはあなたを救出し、困難に遭遇する前にまずあなたに警告し、みなさんに代わって手配するか処理して、災難や困難があまり大きくならないようにしていることを、みなさんはある日発見することでしょう。

いつかみなさんは必ずわかりますが、その時やっと一〇〇%信用したと言えるのです。現在はまだ八〇%、極端な場合は一%しか信用していないのです。たとえ一%だけでもいいです。そのわずかな信心で修行することもできます。少なくとも一%はあるわけですから。他の師は



少しもみなさんを信用させることができません。あなたは彼があなたを加持できることを信じられず、彼が講義できることしか信じません。彼は良く修行しているかもしれないかもしれませんが、あなたは彼があなたと一緒にいることを信じられないし、彼があなたを解脱に導いてくれることも信じないでしょう。ただ私についてだけ、そのような信心が持てるのです。もしそのような信心がないなら、私について学ぶ必要はまったくありません。



## 「道」を得た真のマスターの磁場の吸引力は無限である

一九八七年四月二十二日 フォルモサ・澎湖において

印心後、私に会うのは割合に簡単です。澎湖では多くの人が家で座禅している時に私に会えます。ですから、本当に私に会いたいと思うなら、印心して座禅すべきです。そうすれば自分にとっても良いですし、私にとっても良いのです。というのは、その後私はこの肉体で、ここにみなさんに会いに来る必要はありません。みなさんが家で座禅するのはテレビを見るのと同じで、私はみなさんの無形のテレビに現れます。

一般の人は、私たちはこの肉体であると思っと思っていますので、痛い時には、私たちが痛いと思いい、肉体が親族と離れる時には私たちが離れると思うのです。実際、私たちはこの肉体ではありません。この道理がわからないと、どんな痛みも和らぎませんが、わかれば痛みはとても和らぎます。

肉体は衣服と同じです。表の肉体という衣服とは別に、もう一つ別の衣服があります。内

にしまっていて使っていません。どうして私たちは「修行者はとても自在です」と言うのでしょうか。彼らは一番外側のこの肉体を破り、内側のあの体を破ることが出来るからです。さらに中に入ってもう一つのもっと微細な体も破らなければなりません。少なくとも三つの体を破って初めてその人は自在になったと言えるのです。

この三つの体と三界は互いに通じ合っているのです、私たちは「三界」と呼びます。「三つの体」と呼んでもいいのです。両方とも似たような言い方です。私たちがあのような衣服を破ることができれば、自由な人間になれます。さらに高い修行をすれば「如来」の境界になれます。

いわゆる「如来」とは何も神秘的なものではなく、得難いものでもありません。私たちは、修行はとても難しく神秘的で「道」を得ることは不可能だと思つていますが、実はそうではありません。修行は科学と同じで、一步一步ゆっくり学んでいきさえすれば、その後必ず卒業できます。そうでなければ、釈迦はどのようにして道を得たのでしょうか。昔から今に至るまで、たくさんの人たちが自在になり、レベルも高いのです。ただ、彼らはあまり有名でなかったのです、私たちが知らないだけです。

そうした大師の中で、何人かは比較的特殊な事情で大変有名になりました。後世の人は彼らだけが「如来」と思つていますが、実は現在ヒマラヤにはまだ大修行者がたくさんいます。その人たちのことをもう少し知つていたら、きっと釈迦よりレベルが高いと思うでしょう。

もちろん実際はそうではありませんが、なぜ私たちはそのように考えるのでしょうか。私たちは釈迦が生きていた時、彼が大変なパワーを持ち、その神通力は大変大きかったことを知っていますが、彼にはまだ發揮してないパワーがたくさんあり、記載されていないことがたくさんあります。従って、私たちは釈迦の本当の能力とパワーを知らないのです。

釈迦がどんな生活をしたかわからないことがたくさんあります。そんなにも多くのことは調べようがありません。せいぜい人が書いた経典から少し知るぐらいでしょう。しかし、これら経典は釈迦の生存中に書かれたものではなく、死後三百年経ってやっと書かれたので、記載が正確でなかったり、抜けていたりすることが多いのです。優れた弟子がすでに亡くなっているので、書けないことがたくさんあります。

私が少し深い道理を弟子にだけ話して聞かせるのと同じように、他の人に対しては話すことができないのです。印心する気がなければ当然深い道理を聞くことができません。天の機密を漏らすわけにはいきませんから。私はたくさん漏らしていますが、それは弟子に漏らしているだけです。宇宙の法則とはこのようなものです。私は公共の場所では、どんな奥深いことも言うことはできません。私が言う道理がわからないからです。

例えば、ある人は台北に行ったことがあり、何回も泊まったことがあるのに、あなたは一度も行つたことがないとすると、その人があなたに「台北の中山北路の角に素敵な喫茶店がある

のをご存じですか」と聞いても、あなたはピンとこないでしょう。しかし、行ったことがある人に言えば、その人はすぐわかります。私たちが友達と秘密の話をして、他の人にはわかりません。

夫婦のことも同じです。二人の間には他人ではうかがい知れない、二人だけにしかわからないことがあります。それでご主人が何か言えば、奥さんはすぐわかるのです。あるいは奥さんが言えば、ご主人はすぐなすくのです。でもそばの人には二人が何を話しているのかまったくわかりません。

修行も同じです。内面の体験はおおっぱらに外部の人に話してはいけません。ただ私は時々気分がはずみ、少し漏らすことがあります。前回澎湖でも少し話したことがありますが、あまり多く話してはいけません。体験と言葉とは違うからです。

例えば、私がビスケットはとてもおいしいと言っても、言っているだけであって、本当にビスケットを味わっているわけではありません。意味がわかりますか。万一私がしゃべりすぎると、みなさんはまだ本当にビスケットを食べていないのに、私があまり何回も言ったので、「私はもうビスケットの味がわかった」と、みなさんの頭がみなさんをだますでしょう。このように思うと、もう本当のビスケットを求める気がしなくなってしまう。そうでしょう。

私は浅い道理を話すことが好きなのではありません。公共の場所で深いことを話すわけには

いかないのです。深い道理を学びたいという人は、私について勉強してください。その時初めて話すことができます。例えば、あなたが医学校で学んだことがなく、歯科の知識も勉強したことがなければ、歯医者があるに深い医学知識を話してもわからないでしょう。そうでしょう。歯医者のおさんでもわからないのに、ましてや私たちはなおさらのことです。

私について深い道理を学ぶことも同じで、私たちは自ら体験しなければなりません。人の体験を聞いても役に立ちませんが、自分が体験していれば別です。体験してから阿弥陀経を読むと、経典に記載されたさまざまな境界（きょうがい）、例えばきれいな花、八功德水、小鳥のさえずりなどすべてわかります。

薬師仏経には、東方薬師仏にどんな功德があるのか、その国土の地面は瑠璃で、空は黄金であるなどと書かれています。そのようなものも内在の体験です。釈迦の弟子が座禅の時見たので書き記したのです。私の弟子も同様にそのような本が書けます。それよりもっと良い体験があるのです。私の弟子の中には阿弥陀仏経よりも良い体験をした人が少なくありません。薬師仏経よりもすぐれた体験をしています。私が言ってしまうと、何も面白くありません。

ある日、ある人が私に「阿弥陀経には、西方極楽世界に八功德水があり、地面は黄金で敷き詰められていると記載されていますが、私にはとてもつまらなく思えるのです。なぜ私たちはそこに行かなければならないのでしょうか」と尋ねました。彼が言ったのは間違いではありません。

ん。私が阿弥陀仏経を読んだ時もとてもつまらなく思えました。私も阿弥陀仏の所へは行きたくないのです。なぜでしょうか。

それはこの境界は本当の体験ですが、言ってしまった後、パワーが失われるからです。ですから、私たちは経典の記載を読んで、そこは何か良いのか、なぜ、往生したらそこに行きたいと願をかけねばならないのか、何でまた私は西方に行くためにこんなに苦勞して修行しなければならぬのかと思うわけです。

そうです。以前、私も本当にそう思いました。私がまだ観音法門を修行する前、阿弥陀仏を唱えることを教えてもらって唱えました。他に選択がなかったからです。しかし、心の中で「私はそんな良い所においてどうするの。別に宝石が欲しくてたまらないわけでもないし、八功德水が欲しくてたまらないわけでもないし、きれいな光輝く宮殿に住みたいとも思わないのに、西方に行つて何をするのでしょうか」と思ったものです。私はその人と同じように、いつも自分に「なぜ」と尋ねていました。

内在の体験は話してはいけません。一旦話したら、あの妙なる輝かしい所は消えてしまうのです。例えば、中国一の美女は西施と言われていますが、西施がどのように美しいか想像できますか。彼女には絶世の美しさがあるとされていますが、この描写は決して西施ではありません。もし私たちがこの描写を読むだけだと、当然つまらなく感じます。そうでしょう。

内在の体験も同じです。みなさんが聞きたいと思っても、私はあまり話したくないのです。話しようがないからです。話そうとしても完璧には話せません。この世界の言語には限界があるからです。ですから、私がどのように言っても実際の情景とは違います。もし言語で言い表せるというのなら、みなさんはどうして結婚するのですか。小説を一冊買ってきて読めばいいではないですか。本の中に「この女性はどんなに美しいか、あの美人はどんなにきれいか」とはつきり書いてあります。それで十分ではありませんか。どうして実際に相手を見つけて結婚するのでしょうか。書かれたことと実際の状況とは違うので、奥深い体験は簡単に話すことはできないのです。昔の人が「禪は言語を用いない」と言ったのはそういう意味です。

今、私の弟子も同じです。私は弟子が体験を話すことを許しません。ですから、みなさんは釈迦だけがそのような体験をしていて、天国や地獄に行けると思うでしょうが、実は私の弟子も同じように行けるのです。何の違いもありません。修行さえすれば体験できるのです。もちろんすべての弟子がそんなに多くの体験があるわけではありませんが、ある人もいます。修行のレベルが違うため、修行の功德も違います。これは彼らがどれだけ努力をしたかによります。

私の弟子もたくさん体験をしています。みなさんが知らないだけです。本を出してもよいのですが、私は彼らに話させません。なぜなら、話しても役に立たず、他の人は自分がそのような妙な境界を体験できないと、誹謗したり嘲笑したりして、あんな体験は何も大したこ



とではないと思うからです。自分たちがそのような体験をする時に心身とも変化して、潜在意識に変化が起き、大変楽しくなり、智慧が開き、こうした変化が全部組み合わさった時にそのような体験になる、ということが彼らにはわからないのです。

従って、何か境界が見えたらそれで十分というものではありません。重要なのは彼らがそのような体験をした後、人間全体が大きく変わり、以前とはまったく異なった人間になるということです。例えば、みなさんはたぶん私に「どうしてマスターは経典をあんなにうまく講義できるのですか。どうしてマスターは法を伝えることができるのですか。どうしてある人はマスターに会うと、止めどなく涙が流れるのですか。まだ印心してないのに、どうしてこんなにマスターのことを思うのですか」と尋ねるでしょう。なぜなら、私には体験があり、すでに自分が変わったからです。人は以前と同じでも、潜在意識が変わり、智慧も変わり、別人に変わったのです。以前とはまったく違うのです。

どんな人でも自分の磁場のパワーを持っています。二つのパワーがうまく組み合わせると互いに寄り合います。一般の人は両親からは離れることができませんが、夫婦の間は簡単には離れられません。彼らの磁場は大変平和で、うまく組み合わせあっていて、互いに愛し合っているからです。

修行も同じです。修行程度が高くなると、私たちの磁場はますます強くなりますので、一人

を引きつけるだけでなく、百人でも、千人でも、一万人でも引きつけることさえ問題ありません。どんな人でも私たちを見ればとても喜びます。なぜでしょうか。修行後は私たちの磁場が変わって、パワーがますます強くなるので、人が私たちを見ると自然に引きつけられるのです。私たちが故意に人を引きつけるのではなく、相手の方からやって来るのです。

釈迦が講義をした時、誰もが釈迦をじっと見て、眼をパチリともさせなかったと聞いています。本当に釈迦が好きだったのです。しばらく会っていなかったのに、どんなに見ても足りないと思ったからです。私のマスターもインドでは同じで、トイレに行くことさえできませんでした。

修行とは人の深い体験や内在体験を聞けば十分だというものではありません。自分でも体験しなければなりません。体験しなければ、自分を変えることはできません。人の体験を聞いても役に立ちません。歯科の勉強をしたことがない人が、歯科医の友達からどんなに治療法を学んでも、永久に歯科医になれないようなものです。聞きすぎて退屈にさえ感じて、心の中で「私は歯医者になりたくない。聞いたって何も面白くない」と思うでしょう。しかし、自分が勉強して初めてとても面白いことがわかります。

もし、私が自分の内在の体験や私の弟子の体験を、すべてみなさんに話すとしたら、どのよう

界は体験した本人だけがわかることです。それで「奥深い」というのです。たぶんみなさんは聞いても特に大したことではない、と思うでしょう。阿弥陀経の講義を聞くと、とても人を引きつけるように聞こえますが、少数の人を引きつけるだけです。私にとつては何も役に立ちません。もし私が阿弥陀経を読むと笑ってしまうと言えば、彼らはきっと私が外道であると批判するでしょう。

私が言っているのは本当の話です。なぜなら、まだ音、色のある境界（きょうがい）にとどまっているなら、まだ究極とはいえません。金剛経にも「音、色を用いては如来を見ることはできない」（若以音聲求我，以色見我，是人間行邪道，不能見如来。）とあります。従って、私たちは阿弥陀仏の所を超越して、初めて自分の如来の境界、あるいは如来の状態を探し当てられるのです。私が言っている体験も、まだ音と色のレベルのものであり、凡人の言葉で言ったものは、みなまだ「二」なのです。

本来こんなことは話すつもりはなかったのですが、やっぱり言ってしまうました。（笑い）  
こんなふうに言っただけはいけません。ほとんどの人は聞きたくないでしょう。大多数の人は阿弥陀仏と縁がありませんから。真理とはこのようなものです。話しても少しの人しかわかりませんが、話す以上は本当の話をしなければなりません。そうでなければ話してはいけません。真理を語るのは容易ではありません。私に比較的近い人だけが奥深い道理をたくさん聞くこと

ができるのです。

従って、多くの人が私について出家したがりです。そうしてこそ私と一緒にいて、私の行く所どこでも行くことができ、私が言うことはすべて聞くことができるからです。私が講義をする時は事前に何も準備する必要はありません。準備しないほうが、かえってよく講義できます。あるいは座禅を終えた時はよりよく講義できます。釈迦も同じでした。毎回講義する時は、いつも座禅を終えた後に出て来て、講義しました。

ですから、経典に、私たちはよく次のような記載を見ます。「如是我聞，釈迦牟尼仏在某某地方，從禪定出來，跟阿難說……或是跟文殊師利菩薩說……等等。」（私が聞いたところ、釈迦はある場所で禪定から覚めて、阿難に……と言いました。あるいは文殊菩薩に……と言いました）彼は禪定より目を覚まし、自分の高弟に神秘的なことを話しました。これは多くの人に聞かせることもできないし、話してもいけないのです。しかし、私はみなさんに修行すれば必ず利益があることを保証します。利益がなくて、どうして私がこのように変わったのでしょうか。

なぜ、みなさんは私の講義を聞きたがるのでしょうか。なぜ、私を信用するのでしょうか。それはみなさんがそうしたパワーを感じられるからです。意味がわかりますか。さらには言語を使わずに話す必要さえありません。大マスターや大修行者は大きなパワーを放ち、何も言わなくても、人は自然にその人に引きつけられていることを感じ、それがなぜなのかさえわからないの

です。その人は自由にそのパワーを使うことができ、どのようにも使うことができます。

彼は言葉でそのパワーを使って人を救い、眼でそのパワーを使って人に悟らせ、人のレベルを少し引き上げ、加持することにより、衆生を救うことができます。どのようにも使うことができるのです。たくさんの人がその人の加持を受けたことがあり、眼を見たことがあり、講義を聞いたことがあります。自分がすでに救われているということがわからないのです。ですから、金剛経で「衆生を救っても、救われた衆生はいない」と言っているのはそういう意味です。釈迦が言っているのは「衆生は自分がどのようにして、その人に救われたか知らない」という意味です。

大修行者は無理に、または過激な方法で人を引っ張ってきて信じさせようとはしません。ただ眼を見さえすれば、人に悟りを開かせることができます。ですから、たくさんの人が「私はマスターにお会いした後、座禅が進歩しました。それどころか座禅しなくても、眼を開けたままでもとても良い体験がありました。何十年も座禅している人よりも、もっと良い体験ができました」と言いますが、これはとても自然なことです。なぜなら、大修行者はその磁場がとても大きく強いので、ここに座っていなければ人を救うことができないというのではなく、外にいても同様にできるのです。意味がわかりますか。

その人は大きなパワーを発することができます。この種のパワーは眼には見えません。光の

形に変わって初めて見る事ができます。しかし、そのような光は限界があります。彼のその見えないパワーこそが本当に無量無辺なのです。従って、私たちは阿弥陀仏は無量光であると賞賛します。その光が無限だからです。釈迦が行った所はどこでもすぐ変わりました。大修行者も同じで、行った所は変わり、必ず以前よりレベルが上がるのです。

もし、ある人がすでにここまで（マスターは手で割合高い所を示す）達していたら、マスターが彼を少し引っ張り上げさえすれば、もっと高い所に到達します。もし、その人が元々低い所にいたら、マスターたちがいくら引っ張り上げても、やや高い所に上がるのが精一杯で、継続して何回も引っ張り上げて、やつのことで屋根まで達することができなのです。従って、時にはマスターたちが何も言わなくても、その眼を見さえすればすぐ悟りを開く人がいるのはそういうわけです。

ですから、修行は大変役に立ちます。人の体験を聞く必要はありません。自分の修行が一番役に立つのです。みなさんが聞きたいと言っても、私は何を話してよいかわかりません。このようなことは話しようがないのです。そのようなパワーはどんな言葉を使えば言い表せるのでしょうか。もし感じとれるなら、それは私たちが非常に敏感で、前世ですでに修行して比較的高いレベルにあったことを示しています。もし感じとれないなら、私たちはまだ石ころで、レベルが非常に低いことを示しています。実際、感じとれないようなら、私が話しても役に立ち

ません。その人は「このマスターは何を言っているのか。人を引きつけるパワーなどどこにあるのか。自分はどのようにして感じないのだろう」と思うでしょう。しかし、すでに感じとった人は何も言わなくてもわかります。

私を見たら泣く人はここにしかないのではなく、台北にもいます。今回私について澎湖に来た在家弟子の一人は（マスターはある修行仲間を指す）泣く仲間に入れていいと思います。

彼女たちは本当にどうしようもありません。私は強硬手段で、彼女たちの執着を断ち切らなければなりません。さもないと、彼女たちはこの私の肉体をつかまえて、この肉体が私だと思うのです。そう思うから、私を見ると甘えるのです。しかし、私は彼女たちがあまりに執着しすぎているのを見たら、かなり強硬な手段でこの肉体に執着しないようにします。あまり執着すると、自分のマスターが見つからなくなります。

ある人は私が大変好きなのですが、私に何回か叱られたら、そんなに私に執着しなくなりました。あなたはまだ私に執着していますか。（マスターはある修行者に聞くと、答える…もう、そんなことはありません）何ヶ月か前、彼女は私を見ると印心しようと決めました。彼女は家庭の主婦で、夫、子どもがあり、子どもはまだ小さいのですが、印心を受けてから、ひたすら私について出家したいとばかり思っていました。夫や子どもをすべてほったらかしにして、人が何と言おうと聞き入れませんでした。釈迦の存命中、たくさんの方が家庭を離れて釈迦に

ついて出家したがったと聞いていますが、それもこういうわけだったのです。釈迦が故意に人を引きつけようとしたわけではありません。釈迦はとても高い所まで修行して、パワーがとても強かったので、多くの人が、釈迦を見ると家庭を離れて釈迦と一緒にいたがったのです。

莊子という書物に次のような物語があります。ある日、孔子の弟子が孔子に「先生、ある所に一人の人がいます。彼は醜い男でしかも身体障害者で、片足は歩行が不自由で、背が低く小さいのです。彼が何か特別の道理を教えているのを見たことがなく、彼は歩いても、立っても、横になっても、とても醜く、少しも莊嚴なところがありません。しかし、誰でも彼に会った後はみんなすべて彼と一緒にいたがります。男性は彼に会うと彼の兄弟になって、家にいたがらなくなり、女性は彼に会ってから、家に帰って両親に懇願して『私はこの人の愛人になっても、他の人の正妻にはなりたくない』と言います。彼の弟子は先生の弟子と大体同じくらい多いのです。国全体の約半分が彼の弟子になっているでしょう。どうしてでしょうか」と尋ねたところ、孔子は「もう十分だ。その人はすでに『道』を得ているのだ」と答ました。

ですから、決して外見がハンサムだとか、莊嚴だとか、きれいとかで人に好かれるのではありません。ある人の奥さんはとても私が好きで、しょっちゅう私の所にやって来ます。私に会えないと泣き出し、毎日私の写真を見て涙を流します。その人が奥さんに「いいだろう。そんなにお前のマスターが大切なら、マスターと一緒に暮らせばいい」と言いました。二人は何回



もけんかしましたが、ご主人は奥さんを変えることはできませんでした。彼はかんかんになって、そのマスターとは一体どんな代物なのか見てやろうと思って、私にかみついたためにやって来たのですが、その結果、逆に自分も私について学ぶようになったのです。

私は別に故意に彼を変えようとしたわけではありません。これは修行したパワーが影響した結果なのです。もしみなさんが体験を聞きたいなら、私はみなさんにできれば印心するよう勧めます。印心後は自分がそのような体験ができますから、私が話す必要はありません。事実、私にはどうしてそうなるのか話しようがないのです。これは私たちが自分で自分を変えた結果です。あの歯医者とは、以前も今も、ずっと太っているのに、なぜ今でもたくさんの人が彼を訪ねてやって来るのはなぜでしょうか。

それは、彼が歯医者で歯を治療できるということ、みんなが知っているから、やって来るわけです。医学を勉強していない時は、誰も治して欲しいと言って来ません。しかし、彼はもう以前とは違います。六、七年学んでやると医者になりました。あなたが彼に「今あなたはどうしてそんなにものすごく変わったのですか。以前とはまったく違いますね」と聞いても、六年間の体験や学んだものを一度に全部話すことはできません。たとえあなたに教えようとしても、あなたが長い間勉強して初めて理解できるのです。ただ口先で言えばそれで十分というものではありません。修行も同じです。体験や内在の境界を知らないなら、自分で修行しなければ

ばなりません。

印心した人はすでに磁場が違います。印心するとすぐに磁場が変わります。修行を始めたばかりではまだパワーがありませんが、偉大なマスターのパワーは非常に大きく、それを少し分けてもらえるのです。

金持ちは、もし私たちが大変貧しかったら、まず少しお金をくれて、その後、私たちは自分で一生懸命働いてお金を稼ぐようなものです。貧乏人が別の貧乏人を見ても、二人ともお金がありませんから、まったくどうしようもありません。しかし、金持ちに会えば、少しお金を分けてもらえます。彼にとつてはわずかでも、私たちにとつては大変多いのです。従って、印心した人はすぐ体験があります。それはマスターの体験を分けてもらい、マスターの磁場のパワーを分けてもらうからです。

一人の偉大なマスターのパワーは人の心に影響を与えるだけでなく、動物にも影響を与えますし、石や木でさえ影響を受けます。私のマスターのマスターのマスターが存命中、ある日私のマスターのマスターに会いに来ました。マスターのマスターは部屋の中で座禅していました。その小さな部屋は、おおよそ私たちの道場と同じくらいの大きさですが、もともと何も特別なものはなかったのですが、私のマスターのマスターのマスターがそこに来たら音楽があり、音があるようになりました。誰がそこへ行っても聞こえました。私のマスターのマス

ターだけが聞こえたものではありません。私のマスターのマスターがその木造の部屋を加持して、木を生きている神の力に変えたのです。

私たち人間も同じです。マスターを探す目的は、その人にパワーがあるからです。わかりますか。その人は私たちの磁場に影響を与え、磁場を変え、私たちにパワーを持たせ、レベルを上げます。ですから、私たちは少し、仏陀や菩薩の体験をすることができます。そうでなければ、私たちは凡人にすぎず、何も体験できませんし、ハイレベルの状態や状況を体得することもできません。ですから、マスターを探さなければなりません。その人は大変。パワーがあり、私たちがもつと修行すればその人と同じようになって、私たちのパワーを他人に少し分け与えることもできるようになります。金持ちが貧しい人にお金をあげるようなものです。

私が故意に人を救ったり、故意に神通力を使って人を引きつけたり、何か特別なことをするのはありません。このような状況はまったく自然に起きたものです。もし故意にするなら、まだ「道」ではありません。もし私がまだ水を持っていくか、探して来てあなたに飲ませなければならぬのなら、私がまだ水ではないことを表しています。もし私が水なら、あなたが来ればすぐわかります。意味がわかりますか。水はまったく何も言わなくても、それに触れれば体はすぐ濡れて涼しく感じますし、すぐにすくいと上げて飲むこともできます。水のない砂漠で、水を見つけると何も使わずに、直接口をつけ飲むことができます。

私たちの修行も同じです。最終目的はこの「道」になること、この大パワーになることです。ですから、金剛経に「たくさんの衆生を救っているが、実際はどんな衆生をも救っていない」とあります。仏陀にとっては、どんな衆生も救っていないし、衆生から言えば、自分がどのようにして救われたのかわからないのです。しかし、また彼に引きつけられるように、見ると気持ちよく感じ、見えないととてもつらくなって思い募うわけです。私たちはこれぐらいのことしかわかりません。人間の感情では、せいぜいこのような感覚しか感じられないのです。もしそれすらなければ、私たちは仏陀がどのようにして私たちを救ったのか少しもわかりません。仏陀にとっては、例えば、釈迦は自分が衆生を救ったなどと少しも感じていません。講義に行ったり、眼で人を見たりしたかもしれないませんが、彼にとっては特に何をしたというわけでもなく、水と同じように自然です。水は何も考えず、あなたのを潤してくれまます。

太陽も同じです。毎日大地を照らし、多くの衆生や世界に利益をもたらしますが、太陽自身は今まで考えたことなどありません。「私はこんなに素晴らしい。私は巨大なエネルギーを衆生に発している。私なしには何も育たない」などと思うはずがありません。照らすのは自然なことです。従って、そのようなことは私には話せません。もし境界のことを話すというのなら、無理に話せますが、境界（きょうがい）のことを話しても奥深い境界の話にはなりません。奥深い境界は完全に言語を超越したものです。

釈迦の弟子は体験をすべて書き記しました。私たちの体験や境界は楞嚴經、法華經とほぼ同じです。華嚴經ともほぼ同じです。もしみなさんが私たちの体験を見たいなら、華嚴經、楞嚴經、阿彌陀經、東方藥師經あるいは楞伽經などを読めばよいのです。私たちの智慧を知りたいなら、禪宗の經典を見てください。私たちの智慧はそれとほぼ同じです。ですから、私は必ずしもそのような体験を話さなくてもよいのです。まだ体験のあるうちは深い境界ではありません。自分が体験そのものになって初めて究極と言えるのです。意味がわかりますか。

境界は私で、私は境界です。その時は何も言うことはないし、救うべき衆生もいません。しかし、聞きたいという人がいるので、私は無理に講義をしているのです。無理に言葉を探して言うので、話してもそんなに深く話すことができません。奥深いことを話しても、本当に深いわけではありません。およそ言葉で言い表せるようなことはどれも深い境界ではないのです。

奥深い境界は、私もみなさんに話しようがないし、言葉で言い表すことができないのです。たとえ話せてもみなさんにはわかりません。私にできるのは、ただみなさんに修行し、早く印心して、たくさん座禅をして、指示通りやるように言い聞かせるだけです。みなさんが高い修行を積んだ後は、何も言うことはないし、私に会わなくてもよいのです。なぜなら、自分がすでに体験しているので自分でわかるからです。

ですから、どこへ行っても、私は人に印心して、座禅し、菜食し、早く修行することを勧め

ます。私はこういうふうに言うしかありません。他には何も話せません。本当に残念ですが、でも私もどうしようありません。例えば、カエルは両生動物で、カメと同じように、水中でも陸地でもすむことができますが、オタマジャクシはあちこち泳ぐだけで、陸に上がって生活することはできません。成長してカエルになってから、陸に上がることができるのです。

陸に上がったことのあるカエルが故郷に戻って、他のオタマジャクシに「君たち、知っているかね。俺はたった今、陸から戻って来たばかりだ。あっちは本当に面白いぜ。人が大勢いて、車がたくさんあって、にぎやかなこと。それに子どもが走り回っているし、爆竹を鳴らし、ピスケットを食べて、牛乳飲んで、あめをなめて、こことは全然違うぜ」と言いました。でもオタマジャクシは少しもわからず、「陸地ってどういう意味だい。陸地なんか見たことないよ。そこにはどうして人がいたり、車があったり、にぎやかなのだい」と言うので、大カエルは「わかった。お前のしつぽがなくなったら、見に連れて行ってやろう。今はどうにも言いようがないからな」と言いました。

カメも同じです。あるカメが帰ってから、魚に「知ってるかい。陸地の風景はとてきれいだよ。そこには風があり、太陽もあるのさ」と言っても、魚はきくとわからないでしょう。魚の世界や辞書には「陸地」という文字がなく、「人」という文字もなく、もちろん風景、自動車、飛行機などありません。何もないのです。彼らの言葉にはこれらの名詞がないのです。

意味がわかりますか。

同様に高い境界については、私たちの世界の言語では言い表しようがありません。私たち人類の辞書にはそのような文字がないので、私たちの頭脳では想像しようがないのです。あのオタマジヤクシや魚と同じです。私が少し深いことを話そうとしても、やはりそんなにたくさん話することができないのです。私がどんなに話したくても話せないのです。でも私はあまり話したくないのです。すでに理解している人にはまったく話す必要はありません。自分で体験しているからです。まだ体験していない人は、聞いてもまったくわかりませんし、たとえちよつとぐらいわかつて、すべてわかるわけではありません。

内在の体験を話そうとすると高慢になりますので、私は好きではありません。私たちが修行するシステムは、自分のレベルを人に知らせてはいけません。自分が知っているだけで、誇張してはいけません。

誰かが人に話しても、それは何も体験にも、内在のレベルにもならないし、ただ小さなことにすぎないのです。例えば宗教刊行物の中には時々「某氏は病気を治せる、某氏は過去、現在、未来を予知できる、某氏は天国、地獄を行ったり来たりして帰ってから報告することができると」などと記載してありますが、これらはみな子どもの遊びにすぎず、何も奥深い体験などというものではありません。

私はそうした小さいことは書いたことがありません。ですから、みなさんは私が何も奥深い道理を話したことがないと思うでしょうが、実はこうしたことは本当に何でもないので。私の弟子にとつても何も大したことではなく、ただ一つの始めたばかりのレベルにすぎないので。

実際、私たちが大変高い修行を積んだ後は、そのような状況を見ても何とも思いません。神通力を使ったり、過去未来を予知したりすることはすべてとても低いレベルなのです。大変高い修行を積んだ人にはまったく必要はありません。彼は行くが如く来るが如く、どこでも知っている、人の人相、手相を見なくてもその人がどんな人かわかります。アメリカにいても、体を動かすことなく、こちらにやって来て、人の病を治すことができます。最大の病気は何でしょうか。それは無明病です。世々代々輪廻の病気で、精神上の病気です。この無明病を治しさえすれば、他の病気は自然に治ります。

私は病気を治すのが好きではありません。そんなことをしたら、病人はみな私の所に駆け込んで来るからです。私は人に知られたくないので、そのようなことは書きません。でも毎日私と一緒にいさえすれば、そのようなことはたくさん体験できます。彼ら自身知っていますから、書いたり話たりしなくてよいのです。私がいろんな所に行つて、このようなことをみんなに話し聞かせることはできません。実際、私はあまり話したくないのです。もし、みなさんが知り



たければ、できるだけ私と一緒にいてください。

例えば、魔を追い払う、病気を治すなどということは、私にとっては意味がありません。私について学べば、こういうことは自然に良くなります。私がここへ来た目的は病気を治したり、魔を追い払ったりすることではありません。それで、私は何も書きません。わかりますか。

多くの人が新聞紙上に、自分は病気を治せるとか、神通力があるとか宣伝したが、とても有名になっています。しかし私にとってはこういったことは子どもの遊びにすぎません。みなさんが奥深い道理を聞きたいなら、たぶん私は話すでしょう。しかし私が病気を治せるかとか、人の過去や未来を見通せるかどうか、神通力があるかどうかを知りたいのなら、私はたぶん何も話さないでしょう。

知りたい人は、私について学んだ後わかります。私は故意に誇張しません。また、そのようなことが好きではありません。もしみなさんが外で私が病気を治せるのだと吹聴したら、人々はみな病気を治すためだけにやって来るでしょう。生死の苦痛から解脱するために来るのではないのです。

私の仕事は病気を治すことではありませんが、病気を治すと言ってもいいのです。なぜなら、私が治しているのは最大の病気、すなわち人を三界内に縛りつけている病気なのです。私は人々の無明病を治し、彼らを永遠に自由自在にさせます。衣服を脱ぐのと同じで、一枚一枚脱いで

いった後、初めて究極の解脱ができるのです。これこそが私が治そうとしている病気です。無明病を根治すれば、他の病気も当然よくなります。

みなさんが私に必ず奥深いものを話させようというなら、私は何を話したらよいのか本当にわかりません。金剛経や心経のように話したらよいのでしょうか。実は心経の境界（きょうがい）は私の弟子が印心する時にも体験できるのです。従って、眼、耳、鼻、舌、身、意のない境界は何も奥深いレベルではありません。

みなさんが本当に奥深い道理を聞きたいのなら、内面の化身のマスターが話します。私はこの肉体だけではないからです。みなさんがどの境界に行こうと、マスターに会うことができます。その時私はみなさんに奥深いものを教えます。みなさんがその境界に行った時は、レベルがすでに比較的高くなっていて、私が教える道理を初めて受け入れることができますからです。

先ほどオタマジヤクシはカエルになって初めて陸地に上がることができると言いましたが、上陸すると、あの大カエルが「これが人間、あれが老人、あれが僧、あれが尼さん、あの二人が夫婦だ。わかるかね」と紹介してくれます。

オタマジヤクシはカエルになるまでは、大カエルが何を言ってもわかりませんでした。大カエルが老人のことを言った時は、「老人」とはどんな様子かわからず、子どものことを言った時も、子どもとはどんな様子か想像できませんでした。オタマジヤクシはオタマジヤクシで、

人間がどんなものか想像しようがありませんでした。オタマジヤクシの世界には人間も、子どもも、夫婦もないし、車も、アイスクリームも、コーヒーなどもないからです。そんな状態ではカエルはどのように言えばわかってもらえるでしょう。

オタマジヤクシはカエルの境界（きょうがい）になるまで必ず待たなければならず、その時はじめて大カエルは「これがコーヒー、あれが毒薬、あれは毒草……」と言えるのです。その時オタマジヤクシは実際の状況にぶつかりますから。オタマジヤクシがそのような食べ物に出会った時に初めて大カエルは説明できるのです。その前はまったく説明のしようがありません。カエルだけでなく、私たち人間も同じです。この世界にはたくさんさんの国があります。例えば、アフリカはまだ大分遅れており、文明が発達してないところがあります。飛行機、電灯、テレビ、ラジオなどありません。彼らにラジオと言ってもきつとわからず、心の中で「どうして人がここで話したのが、ずっと遠い所にいる人に聞こえるということがあるのだろうか」と思っています。

彼らの所には電話もないので、あなたが「私は自分の国にいます。あなたに会いに行かなくても数字をダイヤルすれば、あなたと話ができます」と言っても、信じないでしょう。彼らの所では互いの連絡はすべて太鼓をたたくからです。太鼓の音で彼らの言葉を伝えるのです。何かニュースがあれば、すぐ太鼓をたたき、付近に住む人に知らせます。遠くへ知らせるには、

この村でたつき終わったら、次の村でリレーしてたいいて、隣の村にニュースを伝えるのです。昔の人はみなそうしていました。電話は近代になってやっと発明されたものです。百年前に誰かが電話のことを言っても誰も信用しなかったでしょう。

以前オウラック（ベトナム）に一人の賢明な国王がいました。彼は詩を作るのが大変うまく、まるで漢詩のようでした。非常に文化を好み、親孝行で、大変良い国王でした。しかし、一度も国を出たことがなく、外国に何か学ぶべきものがあるかどうかもわかりませんでした。そこである大変聡明な一番優秀な人材をフランスに勉強に行かせました。これは今から百年前のことです。当時オウラックは君主制でした。現在は共産党に支配されていますが、私も国を離れて数十年になりますので、現状がどうなっているのかはわかりません。

当時の国王は大臣をフランスに勉強に行かせ、その大臣が卒業後オウラックに戻って来ました。彼は自分の智慧を国家に捧げ、国がより栄え、より自由で、人民の生活がより快適になるようにしようと思いました。

彼は国王に「私たちは灯油で明かりをつけるのをやめましょう。フランスでは明かりはすべて逆さまに吊っています。しかも油を使いません。毎日洗わないのにとてもきれいです。明かりをつけたい時はボタンを押せば、すぐ明るくなります」と言っても、国王は信じないので、彼はまた、「フランスの車は馬が引つ張らずに、走ることができます」と言っても、国王はま

だ信じないばかりか、ますます疑い深くなったので、続けて「フランス人は私たちのように苦勞して井戸に行つて水をくんで、かついでこなくても、一つのシステムを使えば、水は壁から出て来るのです」と言いました。

国王はそれを聞いて本当に我慢できなくなり、「まだ言い終わらないのか。お前はすでに君主欺まん罪を犯しているのだぞ」と言いました。昔は君主をだますことは最大の罪であり、三代に渡つてすべて殺されたのです。この国王が愚かだったため一人の天才を殺し、その家族まですべて殺したのです。この国王は外国に行ったことがなく、国外の状況がわからなかったの、大臣の言うことを信用せず、その大臣が卒業して帰国し、本来善意で国を立派に建設したと思つたのが、逆に殺されてしまったのは実に惜しいことです。

一人の在世のマスターも同じです。仏陀や菩薩の化身がこの娑婆世界にやつて来るのは、本来善意で人々の無明をきれいに洗つて、彼らにこの宇宙にはもつと良い境界があることをわからせ、本当の楽しい状況とは何なのかをはっきりわからせ、自己をもつと認識させて、自分にはまだたくさん發揮していかないパワーがあることをわからせるためです。

しかし、多くの人は信用しません。そのため、イエス・キリストは十字架にかけられ、孔子は人に迫害され、釈迦も同様に人から石を投げられて殺されそうになったり、訴えられたりしました。ですから、人々を救うのは本当に大変なことなのです。先ほど言ったカエルの話と同

じで、人々は教えにくいものです。

印心は大カエルが小カエルを連れて道に上がるようなもので、小カエルは大カエルについて行かなければなりません。歩きながら、大カエルは「これが木、これが草、これは人、あれは老人だよ」と紹介します。マスターと弟子の関係のようです。

実際は大カエルと小カエルは何ら違いません。ただ大カエルはすでに陸地を何回も行ったり来たりしていますので、経験がより豊富で、陸地にどんな所があつて、何があるということすべて知っているのです。小カエルに法を伝えることができるのです。小カエルは大カエルについて学んでからは、陸地の状況がますますわかるようになり、大カエルになった時は戻つて他の小カエルに教えて、彼らを連れて道に上がることができます。

同様に、印心した弟子はしつぽが切れたばかりの小カエルのように道に上がり始めます。従つて、私について奥深いものを学びたければ、内面のマスターについて学ばなければなりません。奥深いものは外面的な言葉では言い表しようがなく、外面的には教えられるものがないからです。例えば、大海のものは陸地のものとも違います。深海には人はいません。

従つて奥深い道理を話すのは大変です。私はすでに多くの講義をしましたが、時には比較的深いものも話します。しかし、いわゆる「深い」というのも理論が奥深いだけです。みなさんは実際に体得することができません。けれども、言葉で表現できるものであれば、私はできる

だけ話します。でも大部分の状況は言葉では言い表しようがないのです。

言葉で十分言い表せるものなら、私はみなさんに本かプリントを渡して読んでもらえばよいのですが、なぜみなさんは私に会いたがるのでしょうか。私はこの本でもないし、このプリントでもなく、私がいる時は雰囲気が違うからです。わかりますか。例えば、あなたの奥さん本人と写真では当然違うでしょう。さもなければ、あなたは奥さんの写真と結婚すればいいのです。何でまた本人でなければならぬのでしょうか。

みなさんは私の写真をたくさん持っています。時には私が写真から歩いて出て来るのを見ることがあるのに、それでもやはり私に会いたがります。写真だけでは不十分で、写真と本人はやはり違います。もちろん私がない時は写真を見るのもいいです。ないよりはましです。

ですから、釈迦の弟子は自分たちのマスターの姿を絵に描いて、マスターを思ったり、マスターがいらない時に取り出して見たりしていました。彼らが釈迦の絵を見たり、毎日拝んだりするのはもちろん役に立ちました。彼らは釈迦の弟子でしたから、たぶん釈迦が絵から出て来て不思議なことがたくさん実現するのを見たことでしょう。ですから、当然マスターを拝んだのです。

釈迦について学んだことがない人たちや、釈迦に会ったことがない人たちも弟子たちが絵を拝んで大変幸せそうな様子を見て、同じように拝みだしたのです。そういうわけで、徐々に現

在私たちが毎日木彫りの仏像を拝む習慣に変わってきたのです。

私が往生したら、弟子たちは私のことを思って、いつも私の写真を拝むことでしょう。他の人たちもその様子を見て、同じように拝むかもしれません。拝むことを専門にする宗教に変わるのではないのでしょうか。(笑い) 実際はマスターがこの世にしなければ、写真も役に立たず、パワーもせいぜい三百年しか保持できません。もしマスターがこの世を去って三百年過ぎていゝるなら、磁場は破壊されています。マスターが自分の磁場を持って行くからです。しかし、少しだけ磁場が残るでしょう。マスターが行った場所は、少しパワーが残っています。それでそこは他の場所とは違って、特殊な加持力があるのです。

釈迦に会えないので、聖地に参拝した人たちは、少しばかりの感応があります。なぜでしょう。一人のマスターが亡くなっても、彼に加持された場所は違うからです。そこは特別で、その振動力は少し高く引き上げられて、彼に浄化されていますので、私たちがそこへ行くと、大変気持ち良く感じるのです。もし私たちのレベルが高いと、おそらく少し感応があるでしょうが、これは大したことではありません。

一人のマスターが亡くなると、その磁場もなくなり、私たちは死んだ人の写真を見ているわけです、生きている人の写真を見るのとは違います。現在科学者たちはすでに機械で写真の本人が死亡しているか生きているか調べる事ができるようになっています。



ですから、在世のマスターの写真を拝むのなら、当然役に立ちます。まだ印心してない人も真心さえあれば感応があります。マスターはまだ生きていますから、その写真を加持するのです。彼の磁場はどこにでもあり、彼は如来ですから、あなたが彼のことを思えば、写真がなくても感応があるのです。しかし私たちの頭はよくいろいろなことを忘れるので、写真があったほうが、比較的その人のことを容易に思い出すことができ、思えば思うほど感応が強くなります。

しかし、写真に頼るだけではあなたは解脱できません。非常に誠心誠意であるか、大変大きな福報があるか、またはすでにマスターから認められて初めて、マスターはあなたを救うのです。そうでなければ、やはり自分で修行しなければなりません。マスターがあなたを救いたいと思っても、あなた本人だけを救うのです。しかし、印心を受けた人なら五代に渡って救い、みな超生することができます。これは大変違う点です。ですから、印心した人は最も親孝行で、最も智慧のある人であり、一番良い友達です。なぜなら、印心した人は、友達もその影響で利益を受け、どんな人でもあなたがかわいがったり、愛したりすればマスターは必ず面倒見ます。

これからちよつとした体験をみなさんにお話ししましょう。台北に一人の弟子がいました。私について学び始めて何ヶ月もしないうちに、ある日彼が座禅をしている時、内面のマスター

が彼を連れて、五代の祖先に会いに行きました。彼らはみな超生していました。内面のマスターは彼に「今、私が絶対にあなたをだましていないことがわかったでしょう」と言いました。本当です。彼の五代の祖先はみな超生していたのです。彼は自分の眼で見、自ら体験したのです。その後一つの骨壺を見かけました。それは彼の遠い親戚のおばさんの骨でしたので、彼はマスターに「ここに一人漏れています。私の遠い親戚です」と言うと、マスターは「わかりました。問題ありません」と答えました。彼はマスターがうそをつかないのを見て大変感動し、思わず、涙を流してしまいました。

その男性は工場を経営している社長で、七日間座禅をするたびに、工場を休みにするので、従業員はみなとても喜びます。社長が修行に行くと、従業員は自由になり、しかもお金がもらえ、休めるので、彼らはみな私が大好きで、私の写真を工場に置いて、しかも全員禁煙しています。彼らはまだ私本人に会ったことはなく、写真で見ただけですが、彼らもみな禁煙しています。誰も強制したわけではありません。彼らは体験があるので、このパワーを信用しているのです。

このようなことは自分で体得するしかありません。私も特に何も言うことはありません。このようなことを話しても、誇張しているようですから、私はあまり話したくないのです。でもみなさんがぜひ聞きたいと言うので、少しばかりお話ししました。みなさんはまだ足りないとい

思うでしょうが、これだけ話せたので、もう十分でしょう。本来少しも洩らしてはいけないのですが、みなさん顔見知りの方ばかりで、大多数は何回も私の講義を聞いていて、しかも半分以上は私の弟子だからです。まだそうでない方が一、二名いますが、将来きつと私について学ばれるでしょうから、あえて洩らしたわけです。他のことはお話しすることはできません。

境界は話しようがないのです。私たちの言葉にはそのような状態を言い表す文字がなく、そのような意味を表現しようがないからです。これは先ほど例えに出したアフリカ人のように、彼らは今までラジオやテレビを見たことがないので、まったく何も言いようがありません。

このような状況は先ほど述べたあの愚かな国王と同じです。彼自身、水が壁から出て来るのを見たことがないので、そのようなことが信じられず、開国の功労者を殺してしまったのです。その功労者は素晴らしい天才でした。文章が非常にうまく、フランス語を話した最初のオウラック人で、パリでフランス人に論理の話をすることができました。彼はとても良い人間だったので、国王に殺されたのです。国王が何もわからず、自分が逆さに吊るされた電灯を見たこともなければ、馬に引かせずに走る自動車を見たこともなく、ましてや水が壁から出てくるのを見たことがなかったからです。

これらは今では誰でも知っていることです。今私たちはフォルモサで使っている水はすべて壁から出て来るでしょう。でも、国王自身はわからなかったので、人を殺してしまいました。

イエス・キリストは当時、いつも石頭に講義を聞かせていたからこそ、それらにはりつけにされたのです。意味がわかりますか。釈迦が講義した時もたくさんの人から誹謗され、外道と言われました。ひどい時には誹謗のあまり、誰も食べ物を恵んでくれなくなり、まるまる三ヶ月馬のえさを食べるしかありませんでした。その地方全体の人が彼を誹謗し、外道と批判し、彼がこんなにも悪い、と言ったので誰も食べ物恵んでくれなくなり、馬のえさを食べるしかなかったのです。

マスターになるということはこういうことです。みなさんなりたいですか。仏陀になりたいですか。なりたい人はすぐ手を挙げてください。仏陀になろうとすれば馬のえさを食べなければならぬし、おそらく人にはりつけにされるか、石を投げられるか、人から誹謗されるでしょう。みなさんなりたいですか。

マスターになっても良いことはありません。私たちは仏陀になるのはとても良い、栄光に輝き、高貴で、どんな人にもひざまずかれ、天上からは花が落ちてくると思うでしょうが、本当に仏陀になったら、花が落ちてくるどころではなく、石を投げられます。ですから、仏陀になるのは面白いことではないです。私も仏陀になりたくないのです。もともとここには印心した人が少なくありませんが、私を誹謗する人がいて、今はたくさんの方が来なくなりました。でもこれは些細なことにすぎません。私がまだ仏陀になっていないのに、状況はすでにこんな

にひどいのです。どこへ行っても誹謗する人がいて、みんなが私を外道と言います。

実際は、私はとてもうれしく思います。というのは、内道にはそのような人たちであふれていて、私はそこに行く必要はありません。「外道」に立っていて、割合快適です。(笑い) 言い争う人もいないし、誹謗する人もいないので、私は「外道」になるのが大好きです。(笑い) 今後おそらく私たちは外道の宗派に変わるでしょう。この名称は長い間聞いていて習慣になっています。ですから、私はどこへ行っても、「私は外道のマスターです。みなさん学びたいですか」と自己紹介するのです。(笑い)

どの時代でも同じで、一人の在世のマスターに対しては、いつも誹謗したり、石を投げたりする人がいます。時には彼らの言うことは石より硬く、石よりひどいのです。石は一カ所に当たるだけです。誹謗する人が言ったことは、人そのものや、人の精神、または人の心に当たるからです。

従って、私たちは話をする時は慎重にしなければいけません。身・口・意ともに慎重にしなければなりません。修行者は衆生に利益を与えなければいけないので、柔和でなければなりません。修行すると人とけんかしくなりました。けんかすると心地よくありません。自分は君子としての風格がないと感じるからです。

印心後、私たちは真の君子、真の人間に変わり、パワーがあり、魂があり、智慧があり、柔

和な雰囲気で、光があります。そうして初めて真の人間と言えるのです。人は生まれつき暗いわけではありません。修行すべきです。修行はとても面白いですよ。でも仏陀になったら面白くありません。

みなさんは仏陀になるのはとても良いことだと思っただけですが、この世界ではそんなに良くありません。この世界の人にとっては、仏陀は外国人と同じで、住んでも大変居心地が悪く、たぐさんの人から攻撃されるので、半分近くの弟子が逃げ出してしまいます。たぶん逆に仏陀を攻撃する弟子たちもいて、ひどい時には外部の人よりもっと激しく攻撃する人もいます。ですから、時々、印心していない人は私に対して良いのに、印心した弟子の方がかえって私にあまり良くないことがあります。これは彼らの過去の因果と関係があります。

彼らは前世でもそのようにしていたのです。長い間地獄に落ちていて、その後、機会があつてもう一度人になつても、やはり同じことをしているのです。まだ勉強できていないので、もう一度再来するしかありませんが、今回また同じことをすると厄介です。自分が厄介なだけでなく、私にも厄介をかけます。なぜなら、今回うまく教えられないと、次回私はまた来て教えなければならぬので、彼らと輪廻生死を共にすることになります。しかし、彼らと同じということでもありません。私の内面のパワーは依然として同じですが、外側の衣服は着替えます。

みなさんは今なぜあんなにたくさんの宗派になったか知っていますか。毎回大マスターが来ると、みなまったく同じ真理を教えているのですが、もう長い間そのような真理を教える人がいなかったか、あるいはその人が以前にそのような良い教理に接していないからです。そのため「このマスターはどうしてこんな変な教理を教えるのだろうか」と思うからです。実際はそのマスターが変な教理を教えているわけではありません。私たちがわからないからです。私たちは今までそのような教理に接したことがないからです。仏教の経典は非常に多く、阿弥陀経を読んだだけでは阿含経はわかりません。阿含経を読んでも楞嚴経はわかりません。従って、あんなに多くの宗派ができたのです。

禅宗だけでもすでに曹洞宗、臨済宗などあんなに多くの宗派があります。禅宗以外にも華嚴宗、天台宗等あって、日本に伝わった後日蓮宗に変わったり、または武士道精神の入り交じった宗派になったりしました。

念仏だけでもたくさんの宗派に分かれます。ある人は阿弥陀仏の名前を唱えさえすれば十分だと思ふし、ある人は観無量寿経が言っているのと同じでなければならぬと思っています。念仏にしても多くの論争があるわけです。法華宗にもたくさんの支派があり、法華経を拜む人もいれば、それを語る人もいて、みな互いに論争しています。誰もが自分の意見だけが正しい、他の人の意見は間違っていると思っているのです、ますますややこしくなり、多くの宗派になる

わけです。

毎回一人の教主が出て来た時、その教える教理は他の人は往々にして受け入れられません。長い間真理が伝わらなかつたので、後世の人は人の言うことを聞くだけで、自分は体験していませんから、違うことを教えられたと思つて誹謗するのです。

例えば、臨済宗の教主が出てきた時、曹洞宗の人たちは自分たちの道理になれていましたから、彼は外道だと批判したのです。彼は「よろしい。みなさんが学ばないというなら、私が臨済宗になろう。そうすれば割合たやすく真偽がわかるでしょうから」と言うしかなかつたのです。あの頃は大マスターがまだ生存していたので、彼が教えるものは人に体験させることができなかつたのです。この点は他の人が口先だけで言うのと違います。ということ、別の一宗派になつたのです。

私の状況も同じです。ですから、今後おそらくチンハイ宗に変わるでしょう。(笑い) ごくわずかの人しか私の教理を受け入れてくれず、念仏宗派も喜びません。

現在の曹洞宗もただ座つていればそれでよいと教えています。臨済宗は私たちに一、二、三、四、五と数えて呼吸するか、あるいは「私は誰か」と禅問答することなど教えていますが、ただそれだけです。当然私たちとは異なります。私が教える教理は昔の臨済宗が教えたのとまったく同じですが、現在の臨済宗とは違うので、彼らは私が違う教理を教えていると思つたわけ



す。たとえ私が臨済宗教主の化身の再来であっても、彼らには知りようがないのです。わかりますか。

今、私が「私の前世は六祖慧能です」と言ってもみなさん信用しますか。きっと信用しないでしょう。現在六祖慧能の信徒ですら私を誹謗するのですから、みなさんはどうして私が六祖慧能の化身であることが信じられるでしょうか。イエス・キリストがこの世に人を救うために現れた時、「私は誰々の過去の人です」と言いました。その意味は彼の前世は某大師で、今彼は再度化身して戻って来たということです。実は、彼こそ彼らが崇拜していたあの古代の大師だったのです。

彼の意味するところは明らかで、つまり輪廻があると言っているのですが、もし今カトリック教徒と輪廻の話をして、その人はきつとわからず、「この人は外道だ。私たちカトリック教徒は輪廻の話なんかしないし、因果の話もしません」と言うでしょう。

実は、聖書にも因果のことが、しかもはっきり書いてあるのです。聖書には「汝がまいた種は自ら刈り取らなければならない」とあります。イエス・キリスト自身も自分の前世は誰それであると言っています。私はその名前を中国語に訳すことできませんが、みなさん帰ってから自分で聖書を見てもらえばわかります。イエス・キリストは必ず自分が誰その生まれ変わりであることを、しかもはっきりと言っています。しかし、後世の人は見てもわからなかったの

で、今日のように変わってしまったのです。

例えば、ある人が座禅している時、私が六祖慧能であるのを見ることはあっても、もし私が人にそのように言っても、誰が信じるでしょうか。私が「六祖慧能が帰って来ました」と広告するわけにはいきません。(笑い) 弟子が信じるだけです。弟子は自分で体験していますから。

一人の大師はこの世にいる間だけが大師なのではありません。世々代々いつも大師なのです。彼は世々代々、娑婆世界に再来して人を救い、涅槃には行かないという大きな願をかけました。

ある人は仏陀になった後、人を救いに戻って来たくない、上に上って静かな世界を享受したいと思いますが、ある人は仏陀になった後、人々の苦しんでいるのを見るに忍びず、戻って来て彼らを上りたいと思うので、世々代々大師になるのです。

みなさんは「なぜ六祖慧能は八ヶ月修行しただけで卒業できたのに、神秀は三十何年学んで毎日マスターと一緒にいても役に立たないのか、慧能よりレベルが低いのだろうか」と疑問に思わないでください。六祖慧能はすでに世々代々修行しているのです。彼こそは達磨であり、釈迦でもあるのです。



## 印心—観音法門

スプリームマスターチンハイは真理を知りたいと心から望む誠実な人々に、印心を通して観音法門を伝授しています。中国語の「観音」とは音の振動を観るという意味で、この法門には内在の「光」と「音」の双方を観ることが含まれています。こうした内なる体験は、古代より世界中のさまざまな宗教的文献やスピリチュアルな文献に何度も述べられてきました。

聖書には「初めに言(ことば)があつた。言(ことば)は神と共にあつた。言(ことば)は神であつた」(ヨハネ1:1)と記されています。この言(ことば)が内在の音であり、ロゴス、シャブド、タオ、音流、ナム、あるいは天上の音楽などとも呼ばれています。マスターチンハイは「それはすべての命あるものの中で振動し、宇宙全体を支えているものです。この内なる旋律はあらゆる傷を癒し、あらゆる望みを満たし、あらゆる世俗の渇きを癒すことができます。それは非常に全能であり、愛そのものです。なぜなら、私たちはこの音から創られているので、交流すると心に平安と満足感がもたらされるのです。この音を聞くと、私たち個人のすべてが変わり、人生観が大きく変わります」と述べています。

内在の光と神の光とは、「悟り」という言葉で呼ばれる同じ光を指しています。その光の強さ

は、かすかな光から何百万個の太陽の輝きにも及ぶものです。内在の光と音を通して、私たちは神を認識するのです。

観音法門の印心は秘密の儀式とか、新しい宗教に入るための式典といったものではありません。印心の間に内在の光と内在の音のメデイテーション（座禅）について特別な注意事項が指示されません。そしてマスターチンハイがスピリチュアルな伝達をします。この最初の神聖な体験は沈黙の内に行われます。あなたのためにこのドアを開けるのにマスターチンハイがその場にいる必要はありません。このスピリチュアルな伝達は法門にとって欠くことのできない重要な部分です。マスターの恩恵なくして、方法それ自体何ら利益をもたらすものではありません。

印心の最中に即座に内在の音を聞くことができたり、内在の光を見ることができたりするため、「即刻開悟」と呼ばれます。

マスターチンハイは、さまざまな背景や宗教を持つ人の印心も受け入れます。現在信じている宗教を変える必要もなければ、信仰を変える必要もありません。組織に入ることを要請されることも、現在の生活にそぐわない方法で活動するよう求められることもありません。

しかしながら、ビーガン（完全菜食）になることが求められます。生涯を通してビーガンを貫くことが、印心を受けるために必要な条件なのです。

印心は無料で提供されます。

印心を受けたあとで課せられることは、毎日観音法門のメデイトーション（座禪）をするこ  
とと五つの指針を守ることだけです。指針とは、あなた自身と他のあらゆる生き物も傷つけない  
ようにするための指標となるものです。こうした実行が最初の悟りの体験をより深く、より  
強くしていくことでしょう。そして、結局は、あなた自身が最も高い悟りのレベルに、また神  
性に達するのです。日々の修行を怠ると、悟ったことをまったく忘れてしまい、普通の意識レ  
ベルに戻ってしまいます。

マスターチンハイの目的は、私たちに自力で成し遂げることを教えることです。ですから、  
私たち誰もが自分でできる法門を教えているのです。何の小道具も、装置もありません。マス  
ターチンハイは追隨者や崇拜者、弟子を求めているわけではありません。会費制の組織でもあ  
りません。お金や贈り物を受け取らず、礼拝されることも望みません。そうしたことをする必  
要はまったくありません。

マスターチンハイはあなたの日々の生活においての誠実さと、聖人へと向上したいというメ  
デイトーション（座禪）の修行の誠実さだけを受け入れるのです。

## 五つの指針

- 一 殺生をしない  
ビーガン（完全菜食）を守ること。肉類、乳製品、魚介類、家禽類
- 二 嘘をつかない  
卵（有精卵、無精卵も）は食べてはいけない。
- 三 盗みをしない
- 四 邪淫をしない
- 五 酒を飲まない  
酒類、麻薬、タバコ、ギャンブル、ポルノ、過度の暴力映画や書物、  
テレビゲームなど、心身に悪影響を与えるものは用いないこと。

## 出版物の紹介

日々の生活において、私たちの霊性の上昇と靈感を得るために、スプリームマスター チンハイの教理の貴重な出版物を、書籍、ビデオテープ、音楽カセット、DVD、MP3、CDとして入手できます。

出版されている書籍、テープに加えて、インターネットで多種多様なマスターの教理に、無料でアクセスできます。例えば、いくつかのウェブサイトでは、頻繁に発行されているニュースマガジンを紹介しています。(下記の「観音ウェブサイト」をご覧ください) 他のオンライン出版物はマスターの詩、霊性を鼓舞させる甘露法語、ビデオ、オーディオの講義もあります。

更に広く、出版物が供給されていて、現在インターネットから入手できます。マスターの紹介の小冊子「即刻開悟の鍵」(80カ国語以上)です。どうぞ、下記のウェブサイトアクセスしてください。

<http://sb.godsdirectcontact.net/> (Formosa) (U.S.A.)

<http://www.direkter-kontakt-mit-gott.org/download>(Austria)

## 書 籍

### 即刻開悟の鍵 スプリームマスター チンハイの講演集

オウラック語 (1~15巻) 中国語 (1~10巻) 韓国語 (1~11巻) タイ語 (1~6巻)  
英語 (1~5巻) インドネシア語 (1~5巻) 日本語 (1~4巻) スペイン語 (1~3巻)  
モンゴル語 (1,6巻) ドイツ語 ポルトガル語 ポーランド語 フランス語 (1~2巻)  
ハンガリー語 チベット語 スウェーデン語 フィンランド語 (各1巻)

### 即刻開悟の鍵 問答集 スプリームマスター チンハイの問答による講演集

オウラック語 韓国語 (1~4巻) 中国語 インドネシア語 (1~3巻)  
英語 (1~2巻) 日本語 フランス語 ドイツ語 ポルトガル語 ポーランド語  
ロシア語 ブルガリア語 チェコ語 ハンガリー語 (各1巻)



**即刻開悟の鍵 特別編 1993年 世界講演ツアー**

1993年スプリームマスター チンハイ世界講演ツアーの講演集 全6巻

英語 中国語 (各1~6巻)

**即刻開悟の鍵 特別編 禅七 1992年フォルモサ三地門、禅七での講演集**

英語 オウラック語

**即刻開悟の鍵 マスターと弟子の往復書簡**

中国語 (1~3巻) オウラック語 (1~2巻) 英語 スペイン語 (各1巻)

**即刻開悟の鍵 神奇感應 中国語 オウラック語 (1~2巻)**

**マスターが話す「物語」**

中国語 英語 オウラック語 日本語 韓国語 スペイン語 タイ語

**生命を彩るために 霊性の教理精選集**

中国語 英語 オウラック語

**神はすべての面倒を見る スプリームマスターチンハイによる智慧の漫画集**

オウラック語 中国語 英語 日本語 フランス語 韓国語

**光輪がきつすぎる！ スプリームマスターチンハイ 悟りの笑い話集 CD付**

中国語/英語

**気軽に修行する秘訣 中国語 英語 オウラック語**

**平和への道 神と直接つながる**

1999年スプリームマスター チンハイ ヨーロッパ講演ツアー講演集 英語中国語

**神と人間と 聖書物語からの洞察**

この特別な選集は、様々な機会にマスターが話された13話の聖書物語が含まれている

中国語 英語

**健康を理解するー自然な正しい生き方に戻る**

英語 中国語

**I Have Come To Take You Home マスターの特別な講義の引用集**

英語 ドイツ語 ポーランド語 韓国語 オウラック語 イタリア語 ハンガリー語  
インドネシア語 ブルガリア語 フランス語 チェコ語 トルコ語 スペイン語 中国語  
ギリシャ語 アラビア語 ルーマニア語 ロシア語 モンゴル語

### 甘露法語 1 マスターによる永遠の智慧の宝石

中国語／英語 韓国語／英語 日本語／英語 ドイツ語／フランス語  
スペイン語／ポルトガル語

### 甘露法語 2 マスターによる永遠の智慧の宝石

中国語／英語

### スプリームキッチン 1 世界のベジタリアン料理集

英語／中国語 日本語訳 (別冊) オウラック語

### スプリームキッチン 2 家庭料理集 英語／中国語

### 音楽を通して、平和な一つの世界を ロサンゼルスでの慈善コンサートの

インタビューとミュージカル作品集 中国語／英語／オウラック語

### スプリームマスター チンハイ 芸術創作集 中国語／英語

### セレスチャルクローズ集 (6) 英語／中国語(1~6 巻)

### ドッグ イン マイライフ 1, 2

マスターが彼女の犬の仲間について愉快的な実生活を出版 2冊の本は500ページ  
オウラック語 英語 中国語 日本語 韓国語 スペイン語 ポーランド語 ドイツ語

### バード イン マイライフ

美しいイラスト集 マスターは動物の霊性世界を開かせる秘密を示す

英語 中国語 オウラック語 フランス語 ドイツ語 韓国語 モンゴル語 ロシア語  
インドネシア語 アラビア語

### 気高い野生動物

マスター自ら愛情込めて撮影した写真によって構成 美しい詩、素晴らしい写真が  
満載 奥深い記録物語の中で彼女の湖畔探索を話し、動物の友が生まれ持つ気高  
い品性について啓示

英語 中国語 オウラック語 フランス語 ドイツ語 韓国語 モンゴル語

### セレスチャルアート

セレスチャルアートは作者が真実と徳、天上の美を反映するため、スピリチュア  
ルな視点から芸術創作を解き明した卓越した作品集です 読者はスプリームマ  
スターチンハイによるアートの無限の世界へと招待され、神の共鳴を通して引き上

げられます詩人としての奥深い感情、画家としての精妙な筆使い、デザイナーとしての独自のアイディア、そして音楽家としてのロマンチックな心に、深い感銘を受けます。何にもまして靈性の師としての智慧と慈悲心とを祝福と共に知るでしょう 中国語／英語

## 危機から平和へ

オウラック語 中国語 英語 オランダ語 韓国語 フランス語 ハンガリー語 インドネシア語 日本語 ノールウェイ語 スペイン語 スウェーデン語 タイ語 ポルトガル語ポーランド語 ロシア語 ルーマニア語

## Thoughts on Life and Consciousness

Dr. Janez 著 中国語

## The Real Love

英語／中国語

# 詩 集

## <書 籍>

### 沈黙の涙 マスター著作の詩集

ドイツ語／フランス語 中国語／英語 オウラック語 英語 スペイン語 ポルトガル語 韓国語 フィリピン語

無子詩 マスター著作の詩集 オウラック語 中国語 英語

胡蝶の夢 マスター著作の詩集 オウラック語 中国語 英語

過去の足跡 マスター著作の詩集 オウラック語 中国語 英語

懐かしき日々 マスター著作の詩集 オウラック語 中国語 英語

Pebble and Gold マスター著作の詩集 オウラック語 中国語 英語

失われた思い出 マスター著作の詩集 オウラック語 中国語 英語

### 世紀を超えた愛の人 マスター著作の詩集

オウラック語 中国語 英語 フランス語 ドイツ語 韓国語 モンゴル語 スペイン語

真実の愛 中国語 英語 MP3

沈黙の涙・珍重版 中国語 英語 MP3 MP4

### <CD&DVD>

時空を超えて(オウラック語の歌唱) MP3 MP4

A Touch of Fragrance (著名な歌手によるオウラック語の歌唱) MP3

That and This Day(オウラック語の朗読) MP3

夜の夢(オウラック語の歌唱) MP3 MP4

T-C-L Please(オウラック語の歌唱) MP3

Please keep Forever(オウラック語の朗読) MP3

スプリームマスターチンハイ 歌曲集 英語 オウラック語 中国語 MP3

愛の歌 (名曲を英語で歌唱 オウラック語創作歌曲を歌唱) MP4

珠玉の詩 (著名なオウラック語の詩から オウラック語の朗読) MP3 MP4(1&2)

黄金の蓮 (オウラック語の朗読) MP3 MP4

スプリームマスター チンハイの美声を通して、Thich Man Giacの美しい詩の世界に誘う 黄金の蓮、さよならの2曲を朗読

Ancient Love (オウラック語の朗読) MP3 MP4

過去の足跡 (オウラック語の朗読) MP3(1,2 &3) MP4 DVD (17 カ国語字幕)

A Path to Love Legends (著名なオウラックの詩 オウラック語の朗読)  
MP3 (1, 2 &3)

\*A Path to Love Legends、Ancient Love、時空を超えて、夜の夢、Please keep Forever、That and This Day、過去の足跡、珠玉の詩、黄金の蓮、T-C-L Pleaseは、彼女自身曲をつけ、歌唱している

### 音楽カセットテープ&CD

マスターから私たちへの音楽の贈り物は、琴、琵琶などの伝統楽器で演奏された、仏讃、詩、オリジナル曲が含まれます。多くの音楽曲や講義はカセットテープやCD共に入手できます

仏讃 CD1、2、3(メディテーション 仏讃)

Holy Chanting Hallelujah

マスターの作曲による作品集 CD1 -9 オリジナル曲はdulcimer ハープ、  
ピアノ、中国琴、電子ピアノなどで演奏されています

## 私たちへの連絡方法

スプリームマスター チンハイ インターナショナルアソシエーション

中華民国 36899 苗栗西湖郵政九號信箱

P.O.Box730247, San Jose, CA95173-0247, U.S.A

スプリームマスターテレビジョン

E メール: [Peace@SupremeMasterTV.com](mailto:Peace@SupremeMasterTV.com)

Tel: 1-626-444-4385 / Fax: 1-626-444-4386

書籍部

E メール: [divine@Godsdirectcontact.org](mailto:divine@Godsdirectcontact.org)

マスターの出版物を各国言語に翻訳してくださる方を大歓迎いたします

ニュースグループ

E メール: [lovenews@Godsdirectcontact.org](mailto:lovenews@Godsdirectcontact.org)

S.M. セレスチャル社

E メール: [smclothes123@gmail.com](mailto:smclothes123@gmail.com); [vegan999@hotmail.com](mailto:vegan999@hotmail.com)

Tel: 886-3-4601391 / Fax: 886-3-4602857

<http://www.smcelestial.com> <http://www.sm-celestial.com>

スピリチュアルインフォメーションデスク

E メール: [lovewish@Godsdirectcontact.org](mailto:lovewish@Godsdirectcontact.org) Fax: 886-946-730699

スプリームマスター チンハイ インターナショナルアソシエーション出版社

フォルモサ・台北

E メール: [smchbooks@Godsdirectcontact.org](mailto:smchbooks@Godsdirectcontact.org)

Tel: 886-2-23759688 / Fax: 886-2-23757689

<http://www.smchbooks.com>

## オンラインショップ

Celestial Shop: <http://www.theCelestialShop.com> (English)

Eden Rules: <http://www.EdenRules.com> (Chinese)

## ラビングハット インターナショナルカンパニー

Tel: 886-2-2239-4556 / Fax: 886-2-2239-5210

E メール: [info@lovinghut.com](mailto:info@lovinghut.com)

<http://www.lovinghut.com/tw/>

## 観音Webサイト

神と直接繋がる…スプリームマスター チンハイ I. A. の観音Webサイトにリンクしてください

<http://www.godsdirectcontact.org.tw/eng/links.htm>

こちらから各国語の観音Webサイトにアクセスできます。また24時間放送のネットTV「SMTV」「芸術と霊性」などの番組をご覧いただけます。各国語の「即刻開悟の鍵」小冊子のダウンロード、「ニュースマガジン」の購読、電子版をダウンロードができます。ライン上で閲覧もできます。

## スプリームマスターテレビジョン

スプリームマスターTVは主にポジティブな番組を放映するチャンネルで、新しい霊的視野を提供し、あなたの人生を充実させます。24時間放送の「スプリームマスターTV」は次のWEBサイトをご覧ください。

<http://www.suprememastertv.com>

## 《即刻開悟の鍵》各国語の小冊子 無料ダウンロードサイト (80カ国語)

<http://sb.Godsdirectcontact.net>

<http://www.direkter-kontakt-mit-gott.org/booklet>

## 即刻開悟の鍵 3

作 者 スプリームマスター チンハイ  
翻 訳 日本翻訳グループ  
出 版 社 スプリームマスター チンハイ  
          インターナショナル アソシエーション出版社  
住 所 福爾摩沙台北市中正區忠孝路一段 72 號 8 樓 16 (郵便  
      番号 100)  
初 版 2001 年 11 月  
第 2 版 2016 年 7 月 (ebook)

**The Supreme Master Ching Hai ©2007~2016**

著作権者 スプリームマスター チンハイ

\* 出版社の同意の上、本書の内容の転載は歓迎します

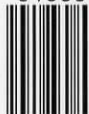


私たち The Supreme Master Ching Hai に学ぶ者は、究極の真理を探究するなかで、苦難を経験してきました。ですから、私たちはもともと内在している智慧を目覚めさせ、この真理を認識させる最高の法門を教えてくれる、完全に開悟した在位のマスターを見つけることが、どれほど困難でまれなことを理解しています。そして、この法門は古代よりあらゆる真のマスターたちによって教えられてきたのです。この法門を実行することで、深い利益が得られることを体験してきた私たちは、一世での魂の永遠の解脱を心から望んでいる真の探究者や、人生や生死、精神修行や真理に関するさまざまな疑問に答えを見いだそうとしている人々の手助けとなるよう、The Supreme Master Ching Hai が世界各国で行った講演集をここに贈ります。

ISBN 957-30561-6-X



01800



9 789573 056164